

第43卷

ISSN 1348—5261

Vol. 43

帯広畜産大学
学術研究報告

RESEARCH BULLETIN

OF

OBIHIRO UNIVERSITY

令和4年11月

November 2022

国立大学法人 帯広畜産大学

NATIONAL UNIVERSITY CORPORATION
OBIHIRO UNIVERSITY OF
AGRICULTURE AND VETERINARY MEDICINE
OBIHIRO, HOKKAIDO, JAPAN

帯広畜産大学学術研究報告 第43巻

目 次

自然科学分野

畜産学

- ホルスタイン種育成牛の血漿中代謝ホルモン濃度に及ぼす
血管作動性腸管ポリペプチド (VIP) の影響
富宿博暉, 松長延吉 1

理学

- ヒメネズミ *Apodemus argenteus* の繁殖準備行動：営巣用巣材の搬入と繁殖活動との関係
佐々木乃梨, 田辺結葉, 本馬維子, 矢野呼春, 村上 董, 照内 歩, 菊池隼人, 押田龍夫 ... 8
- エゾタヌキ *Nyctereutes viverrinus albus* の溜め糞場の存在は他の動物種の行動に影響を及ぼすか？
矢野呼春, 本馬維子, 佐々木乃梨, 田辺結葉, 照内 歩, 村上 董, 菊池隼人, 内海泰弘,
押田龍夫 22
- 北海道の標津町におけるアカギツネのエキノコックス感染率の季節変化
櫻井祐奈, 和田直人, 長田雅裕, 大手優裕, 赤坂卓美, 孝口裕一, 浦口宏二, 押田龍夫 ... 34

人文・社会科学分野

文学

- 関東大震災はいかに回想されたか（七）
——自伝に描かれた関東大震災——
柴口順一 41
- ドイツ詩の文法（2）
杉田聡 76

教育学

- CLIL教室での健康的なライフスタイル教育（内容言語統合型学習）
スミスマーシャル 175

言語学

- アタヤル語群において冷感を表す語の再建
落合いずみ 184

健康スポーツ科学

6ヶ月間の「ちくだいKIP体操プログラム」がコロナ禍の児童の身体形態と体力に及ぼす影響

村田浩一郎, 川口亜佑子, 高橋克麿, 田中義朗 203

英語

大学1年の英語クラスでの20%タイムプロジェクト

寺内麻紀 209

令和3年度帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士学位論文題目 217

令和3年度帯広畜産大学大学院畜産学研究科博士学位論文題目 222

RESEARCH BULLETIN OF OBIHIRO UNIVERSITY

CONTENTS

Natural Science

Animal science

- Effects of vasoactive intestinal polypeptide (VIP) injection on plasma metabolic hormones in Holstein calves
Hiroki FUSHUKU, Nobuyoshi MATSUNAGA 1

Physical Science

Pre-reproductive behavior in the small Japanese field mouse: The relationship between nest-building behavior and reproductive condition

- Nori SASAKI, Yuiha TANABE, Yukiko HONMA, Koharu YANO, Sumire MURAKAMI,
Ayumu TERUUCHI, Hayato KIKUCHI, Tatsuo OSHIDA 8

Effects of Japanese raccoon dog (*Nyctereutes viverrinus albus*) latrines on the behaviors of other animals in their ecosystem

- Koharu YANO, Yukiko HONMA, Nori SASAKI, Yuiha TANABE, Ayumu TERUUCHI,
Sumire MURAKAMI, Hayato KIKUCHI, Yasuhiro UTSUMI, Tatsuo OSHIDA 22

Seasonal change of the infectious rate of alveolar echinococcosis in red foxes in Shibetsu, Hokkaido, Japan

- Yuna SAKURAI, Naoto WADA, Masahiro OSADA, Masahiro OHTE, Takumi AKASAKA,
Hirokazu KOUGUCHI, Kohji URAGUCHI, Tatsuo OSHIDA 34

Humanities

Literature

How was the Great Kanto Earthquake recollected?(7): The Great Kanto Earthquake described in an autobiography

- Jun'ichi SHIBAGUCHI 41

Des deutschen Gedichtes Grammatik (2)

- SUGITA Satoshi 76

Pedagogy

Healthy lifestyle education in the CLIL classroom

- Marshall SMITH 175

Linguistics

Reconstruction of the words for coldness in Atayalic languages

Izumi OCHIAI 184

Health and sports science

Effect of the 6-month "Chikudai KIP exercise Program" on children's physical morphology and fitness with the COVID-19 pandemic.

Koichiro MURATA, Ayuko KAWAGUCHI, Katsuma TAKAHASHI, Yoshiro TANAKA 203

English language

20% Time Project in a First-Year University English Language Class

Maki Terauchi HO 209

ホルスタイン種育成牛の血漿中代謝ホルモン濃度に及ぼす 血管作動性腸管ポリペプチド (VIP) の影響

富宿博暉・松長延吉

(受付 : 2022 年 4 月 27 日, 受理 : 2022 年 7 月 25 日)

Effects of vasoactive intestinal polypeptide (VIP) injection on plasma metabolic hormones in Holstein calves

Hiroki FUSHUKU¹, Nobuyoshi MATSUNAGA¹

摘 要

血管作動性腸管ポリペプチド (VIP) は, 1902 年にブタの血管から単離され発見された消化管ホルモンである。しかしながら, VIP の投与が副腎皮質系のエネルギー代謝に与える影響を調べた研究は *in vitro* を除いてほとんど行われていない。そのため, 本研究では育成牛への VIP 投与が血中グルコース, 遊離脂肪酸 (NEFA), インスリン, およびコルチゾール濃度に与える影響を調べた。VIP は各育成牛に頸静脈カテーテルから 10 μ g/kg BW を投与した。血中グルコースおよび NEFA 濃度はほぼ一定の濃度で推移しており, 対照区と比較して有意差は認められなかった。血中インスリン濃度は投与後 15 ~ 30 分にかけて対照区と比較して僅かに高い値を示したものの, 有意差は観察されなかった。しかしながら, 血中コルチゾール濃度は対照区と比較して投与後 10, 20 (P<0.01) および 30 (P<0.05) 分において有意な上昇が観察された。グルコースおよび NEFA の変化を伴わないコルチゾール濃度の上昇が認められたことから, VIP 投与による血中グルコースおよび NEFA 濃度の増加に副腎皮質系経路のエネルギー代謝作用が関与していないことが判明した。

キーワード : 血管作動性腸管ペプチド (VIP) 代謝ホルモン ホルスタイン種育成牛

帯広畜産大学生命・食料科学研究部門

Department of Life and Food Science, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

連絡先 : 松長延吉, matsuna@obihiro.ac.jp

Address Correspondence : Nobuyoshi Matsunaga, matsuna@obihiro.ac.jp

緒 論

血管作動性腸管ポリペプチド (VIP) は、人体内の多くの場所で生成される 28 のアミノ酸残基からなり、C 末端がアミド化されているポリペプチドである(宮田と三浦, 2010)。ブタの血管から初めて単離されて命名され、動物の生体内では消化器系において膵液や胆汁の分泌を促進させる働きを持つ他、脳においては概日リズムの構成に立っている。VIP は消化管ホルモンの一つに数えられ、この他にはガストリンや胃酸分泌抑制ペプチド (GIP) 等が知られている。

一方、下垂体アデニル酸シクラーゼ活性化ポリペプチド (PACAP) は内在性の神経ポリペプチドで、細胞応答を引き起こすことから末梢および中枢で多様な生理的役割を持つ。代謝制御やストレス反応においても重要な役割を持ち、いずれも G タンパク質共役型の PAC1, VPAC1, VPAC2 の各受容体が確認されている。このうち PAC1 は PACAP に選択的であり、VPAC1, VPAC2 の 2 つは VIP と PACAP 両方に選択的である。VIP は主に末梢組織に多く分布し (Kato et al, 1996), 消化機能の調節に対して重要な役割を担っているが、PACAP は主に中枢神経系に局在しており神経伝達物質としての役割を担っている。内分泌系ではマウスへの腹腔内投与によるインスリン分泌の促進 (Filipsson et al. 1998) やイヌへの静脈投与によるコルチゾールやグルコース, NEFA の上昇が報告されている (Kawai et al. 1994)。

しかしながら、VIP においては神経系・内分泌系に与える影響の報告が少ないため (Beker et al, 2000), 本研究では VIP の投与が副腎皮質系のエネルギー代謝に与える影響を調査することを目的とし、血中グルコース, NEFA, およびコルチゾール濃度を測定した。

材料および方法

供試動物

実験動物の取り扱いには帯広畜産大学動物実験委員会の動物実験計画書 (21-184) の承認を得て行った。2021 年

9 月 8 日～9 日、帯広畜産大学畜産フィールド科学センターで飼育されているホルスタイン種育成牛 4 頭 (14～20 週齢, 113～147kg) を用いて試験を行った。この 4 頭には、投与試験前日にリドカイン塩酸塩ゼリー 2% (日新製薬株式会社, 山形県) による局所麻酔下で頸静脈カテーテルを装着した。カテーテル挿入から試験終了まで水および飼料の自由摂取が可能な状態にした。

試薬調整

投与した VIP 試薬は帯広畜産大学の桑山秀人名誉教授が作製したものを使用した。実験前日に実験室にて、使用する仔牛の体重データから VIP を各育成牛に 10 μ g/kg BW 投与できるように計算し、生理食塩水で希釈した。その後シリンジに注入し、さらに生理食塩水で全量 5mL となるように注入し、投与試験当日まで冷蔵庫で保管した。

頸静脈カテーテルの挿入

投与試験前日に頸静脈カテーテルの挿入を行った。育成牛を頭絡で固定した後、頸静脈付近の毛をバリカンで刈り取り、80% のエタノールを染み込ませた酒精綿で拭いた後に動物用イソジン (Meiji Seika ファルマ株式会社, 東京都) を塗り消毒した。その後リドカイン塩酸塩を用いて局所麻酔をし、カテーテルを挿入した。カテーテル挿入後にはシリンジを用いて採血の可否を確認し、カテーテルにヘパリン加生理食塩水 (10Unit/mL) を投与することで血液凝固を防止した。カテーテルが外れないように縫合糸で固定した後再度採血の確認を行い、ヘパリン加生理食塩水を投与した。最後にカテーテル挿入箇所と縫合箇所を動物用イソジンおよびテラマイシン軟膏 (陽進堂, 富山県) で消毒した。

投与実験

試験当日に 4 頭を頭絡で固定し動物用イソジンでカテーテルを消毒した後、採血可能かを確認してヘパリン加生理食塩水を投与して VIP 投与試験を行った。VIP 投与時間を 0 分として、0 (投与直前), 10, 20, 30, 40 分後に 4mL ずつ計 5 回採血を行った。採血の際は、最初

にシリンジで 2mL の吸引を行った後それを持参したポリバケツに廃棄し、別のシリンジで 4mL の採血を行った。採血終了後には、ヘパリン加生理食塩水 10mL を投与した。血液サンプルは容量 2mL のチューブ（ヘパリン 10Unit/mL を加えたもの EDTA-2Na を加えたものの 2 つのグループに分けてある）に分注し、軽く手で攪拌した後アイスボックス内で氷冷した。対照区として、同量の生理食塩水を投与し同様に採血を行った。試験終了後は速やかにカテーテルを抜き、牛舎の清掃と濃厚飼料の給餌を行った。その後実験室に戻り、血液サンプルを 12000rpm, 4°C で 10 分間遠心分離し、血漿と血球がきちんと分かっているか確認した後、予め用意していた容量 1.5mL のチューブに分注し、測定まで -30°C で冷凍保存した。

血漿中の代謝ホルモン濃度測定

グルコース（グルコース C- II テストワコー, 富士フィルム和光純薬株式会社, 大阪府）、NEFA（NEFA-C テストワコー, 富士フィルム和光純薬株式会社, 大阪府）濃度は酵素法、コルチゾール濃度は酵素免疫測定法（EIA）の競合法、インスリン濃度は EIA のサンドイッチ法を用いて測定を行った。

グルコース測定では、まずスタンダード液を 200, 100, 50, 25mg/dL になるように蒸留水で希釈した。その後、血漿を蒸留水 6 倍に希釈してサンプルとし、マイクロプレートの各ウェルにスタンダード、サンプルの両方を 50 μ L ずつ分注した。さらに、発色試薬 200 μ L を各ウェルに分注し、37°C で 10 分間恒温器に入れた後、反応終了後 1 時間以内に主波長 505nm, 副波長 600nm で吸光度を測定し、濃度の計算を行った。

NEFA 測定では、スタンダード液を 1.0, 0.5, 0.25, 0.125, 0.0625mEq/L になるように蒸留水で希釈した。その後、血漿を 6 倍になるように希釈してサンプルとし、マイクロプレートの各ウェルにスタンダード、サンプルの両方を 50 μ L ずつ分注した。その上から発色試液 A を各ウェルに 50 μ L 分注し、37°C の恒温器で 10 分間正確に加温した後、発色試液 B を各ウェルに 100 μ L 加え、再度 37°C の

恒温器で 10 分間加温した。反応終了後 30 分以内に主波長 546nm, 副波長 660nm で吸光度を測定し、濃度の測定を行った。

コルチゾールは市販の EIA キット（DetectX Cortisol Enzyme Immuno Assay Kit, Arbor Assays, USA, Lot.18C174b）を用いて濃度測定を行った。キットの試薬は予め解離を促すため室温で温めておいた。5 μ L の血漿に 5 μ L の分離試薬と 140 μ L のアッセイバッファーを加えて 30 倍に希釈し、これをサンプルとした。スタンダードは 3200, 1600, 800, 400, 200, 100pg/mL になるように希釈し、作成したサンプルとスタンダードを 50 μ L ずつプレートの各ウェルに分注した。さらに NSB ウェルには 75 μ L のアッセイバッファーを加え、50 μ L のアッセイバッファーを各ウェルに加えた。その後、連続分注器を使用してすべてのウェルに DetectX コルチゾール複合体を 25 μ L 加え、NSB ウェルを除く各ウェルに DetectX コルチゾール抗体を 25 μ L 加えた。試薬を十分に混合するためプレートの側面を軽く叩き、シーラーで蓋をしてプレートを覆い、1 時間攪拌した。その後、各ウェルを 300 μ L のウォッシュバッファーで 4 回洗浄し、キッチンタオルで水分を落とし、連続分注器を使用して TMB 基質を 100 μ L 加えた。そして暗所で 30 分間保存した後に各ウェルに反応停止液を 50 μ L 加え、450nm, 単波長で吸光度を測定した。ED₅₀ は約 600ng/mL, 測定内変動は 5.04% であった。

インスリンは市販の測定キット（Mercodia Bovine Insulin ELISA, Mercodia, Sweden, Lot.29781）を用いて濃度測定を行った。血漿サンプルを室温で解凍しウォッシュバッファーを 20 倍に希釈した。加えて酵素を専用のバッファーに全量溶解した。スタンダードは 3.0, 1.5, 0.5, 0.15, 0.05 μ g/L になるように希釈した。プレートに各サンプルを 25 μ L ずつ分注し、青色の第一抗体を各ウェルに 100 μ L ずつ分注し、室温、500rpm で 120 分間震盪した。その後プレート中の液体を廃棄し、ウォッシュバッファーで 5 回洗浄した後に TMB 基質を 200 μ L ずつ分注し、15 分間室温で保存して反応を促した。その後、反応停止液を 50 μ L ずつ加え、450nm, 単

波長で吸光度を測定した。ED₅₀ は約 1.5ng/mL, 測定内変動は 9.92% であった。

結果

血中グルコース濃度は約 90mg/dL で推移しており, 生理食塩水のみを投与した対照区と比較して大きな差は見られず, 有意差は見られなかった (図 1)。血中 NEFA 濃度は対照区と比較して投与後 20 分までは僅かに高い値が観察されたものの, それ以降は約 0.05mEq/L で推移しておりほとんど差の見られない結果となった (図 2)。

血中インスリン濃度は投与後 15 ~ 30 分にかけて対照区と比較して約 0.1 μ g/L の開きが見られたものの, それ以外の時間帯での濃度差はほとんど見られず有意差は確認されない結果となった (図 3)。血中コルチゾール濃度は投与後 10 ~ 30 分にわたりかなりの上昇が確認でき, 投与後 10 分での最高値 22.07 \pm 1.85ng/mL および投与後 20 分での値 21.36 \pm 1.72ng/mL は投与後 0 分での最低値 11.03 \pm 2.24ng/mL と比較して約 2 倍の有意な上昇 (P<0.01), 投与後 30 分での値 15.53 \pm 3.07ng/mL は 0 分の値と比較して約 1.5 倍の有意な上昇 (P<0.05) を示した (図 4)。

図 1 VIP 投与による血中グルコース濃度の変化
平均値 \pm SE で示した

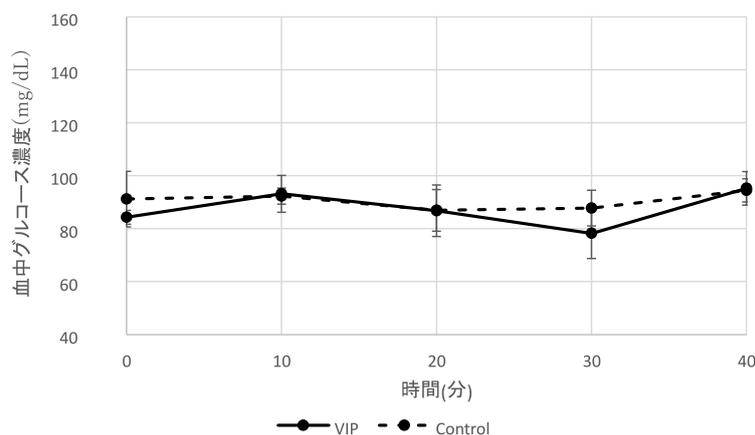


図 2 VIP 投与による血中 NEFA 濃度の変化
平均値 \pm SE で示した。

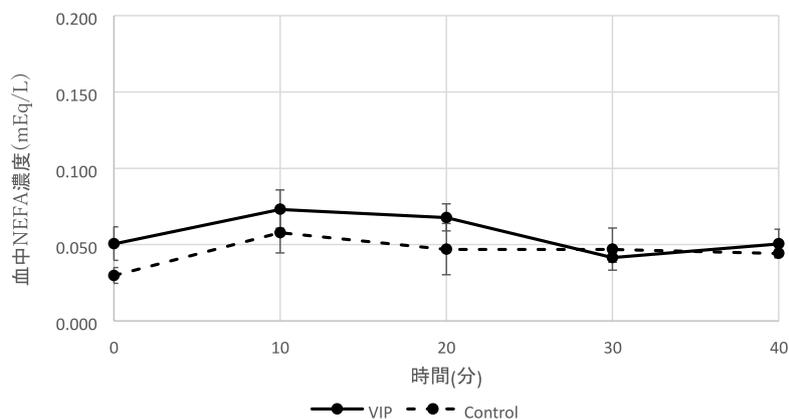


図 3 VIP 投与による血中インスリン濃度の変化
 平均値±SE で示した。

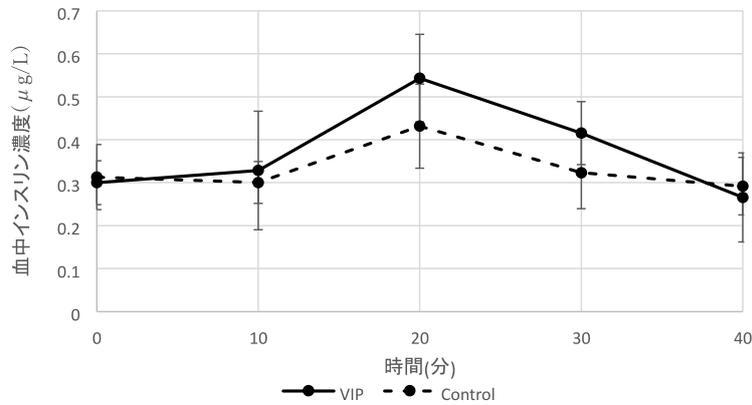
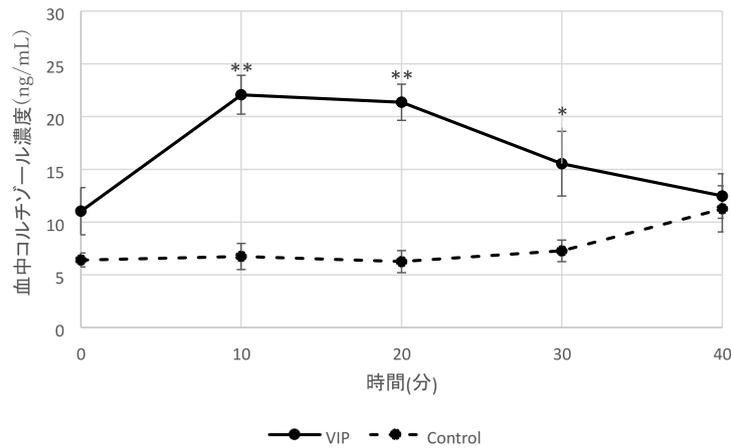


図 4 VIP 投与による血中コルチゾール濃度の変化
 平均値±SE で示した。



* : 対照区と比較して有意差 (P<0.05) があることを示す。
 ** : 対照区と比較して有意差 (P<0.01) があることを示す。

考 察

今回の研究では、VIP 投与により血中グルコースおよび NEFA 濃度はほとんど変化が見られなかった一方、血中コルチゾール濃度が大きく上昇した。これは過去の *in vitro* で行った報告と一致した (Nicol et al, 2004)。血中コルチゾール濃度の上昇が見られたことから、副腎皮質ホルモンの分泌調節方式から推察して副腎皮質刺激

ホルモン (ACTH) や副腎皮質ホルモン刺激ホルモン放出ホルモン (CRH) の濃度が上昇していることも考えられる (加藤ら 2015)。血中 NEFA 濃度がほとんど変化していないことから、体内の脂肪動員はほとんど行われていない、即ちアドレナリンまたはホルモン感受性リパーゼ (HSL) によって中性脂肪から脂肪酸への分解が成されていないことが分かる (Wurtman, 2002)。そのため、脂肪酸による NEFA 濃度の上昇も見られない。この他コルチゾール

濃度の上昇は見られたものの、ストレスによって NEFA 濃度は大きく上昇するため、ほとんど変化の見られない本研究ではストレスはかかっていることが分かる (加藤ら 2015)。

血中インスリン濃度については有意差が見られず、グルコースを肝臓や脂肪細胞に取り込ませる同化作用が働いていないことが分かる。そのため、グルコースが体内に取り込まれず濃度が変化していないと解釈出来る。インスリンは 80 ~ 90mg/dL の血糖値でよく働き、これは代謝ホルモンの中では最も高い部類に入る。これより低い値で働く代謝ホルモンはグルカゴンやアドレナリン等が存在する。一方で、コルチゾールが属する糖質コルチコイドは 40mg/dL の極めて低い血糖値でよく働いている。このため、血中グルコース濃度がほとんど変化の見られなかった最大の要因はコルチゾールではなくインスリンであることが考えられた (岡田ら, 2006)。

このことより、VIP 投与による血中グルコースおよび NEFA 濃度の増加に副腎皮質系経路におけるエネルギー代謝が作用していない、即ち血中コルチゾール濃度が関係していないことが示唆された。

参考文献

- Beker A R, Izadyar F, Colenbrander B, Bevers M M. 2000. Effect of growth hormone releasing hormone (GHRH) and vasoactive intestinal peptide (VIP) on in vitro bovine oocyte maturation. *Theriogenology an International Journal of Animal Reproduction* 53:1771-1782.
- Filipsson K, Pacini G, Anton Scheurink JW, Ahrén B. 1998. PACAP stimulates insulin secretion but inhibits insulin sensitivity in mice. *American Journal of Physiology* 274:E834-E842
- Kato I, Suzuki Y, Akabane A, Yonekura H, Tanaka O, Kondo H, Takasawa S, Yoshimoto T, Okamoto H. 1996. Enhancement of glucose-induced insulin secretion in transgenic mice overexpressing human VIP gene in pancreatic beta cells. *Annals of the New York Academy of Sciences* 805:232-243.
- Kawai K, Yokota C, Ohashi S, Isobe K, Suzuki S, Nakai T, Yamashita K. 1994. Pituitary adenylate cyclase-activating polypeptide: Effects on pancreatic-adrenal hormone secretion and glucose-lipid metabolism in normal conscious dogs. *Metabolism* 43:739-744
- 加藤和雄, 古瀬充宏, 盧尚建. 2015, 新編 家畜生理学, p. p. 74-76, 養賢堂, 東京
- Nicol M R, Cobb V J, Williams B C, Morley S D, Walker S W, Mason J I 2004. Vasoactive intestinal peptide (VIP) stimulates cortisol secretion from the H295 human adrenocortical tumour cell line via VPAC1 receptors. *Journal of Molecular Endocrinology* 32:869-877.
- 宮田篤郎, 三浦綾子. 2010. PACAP・VIP 受容体の構造と機能の多様性, *医学のあゆみ* 233:928-933.
- 岡田泰伸, 赤須崇, 上田陽一. 岡田幸雄, 河原克雅, 菅野富雄, 倉智嘉久, 黒澤美枝子, 桑木共之, 小西真人, 佐久間康夫, 鈴木裕一, 泰羅雅登, 多久和陽, 照井直人, 福田康一郎, 前田信治, 宮本賢一, 八尾寛, 矢田俊彦, 山本哲朗, 渡辺修一. 2006, *ギャノン生理学*, 原書 22 版, p. p. 365-366, 丸善株式会社, 東京
- Wurtman RJ. 2002. Stress and the adrenocortical control of epinephrine synthesis. *Metabolism* 51:11-14.

Abstract

Vasoactive intestinal polypeptide (VIP) is a gastrointestinal hormone isolated and discovered in pig blood vessels in 1902. However, few studies have investigated the effects of VIP administration on energy metabolism in the adrenocortical system, except in vitro. Therefore, in this study, we investigated the effect of VIP administration to calves on plasma glucose, NEFA, insulin, and cortisol concentrations. VIP administered 10 μg / kg BW to each calf via a jugular vein catheter. Plasma glucose and NEFA concentrations remained almost constant, and no significant difference was observed compared to the control group. The plasma insulin concentration was slightly higher than that of the control group from 15 to 30 minutes after administration, but no significant difference was observed. However, a significant increase in plasma cortisol concentration was observed at 10, 20 ($P < 0.01$) and 30 ($P < 0.05$) minutes after administration compared to the control group. An increase in cortisol concentration without changes in glucose and NEFA was observed, indicating that the energy metabolism of the adrenocortical pathway is not involved in the increase in blood glucose and NEFA concentration due to VIP administration.

Keywords: Vasoactive intestinal polypeptide (VIP), Metabolic Hormones, Holstein Calves

ヒメネズミ *Apodemus argenteus* の繁殖準備行動： 営巣用巣材の搬入と繁殖活動との関係

佐々木乃梨・田辺結葉・本馬維子・矢野呼春・村上 堇・照内 歩・菊池隼人・押田龍夫

(受付：2022年3月28日，受理：2022年7月25日)

Pre-reproductive behavior in the small Japanese field mouse:
The relationship between nest-building behavior and reproductive condition

Nori SASAKI, Yuiha TANABE, Yukiko HONMA, Koharu YANO, Sumire MURAKAMI,
Ayumu TERUUCHI, Hayato KIKUCHI, Tatsuo OSHIDA

摘 要

ある種の野生哺乳類では、出産や育仔のために巣を作る行動が見られるが、このような繁殖巣を調べることにより、その種の繁殖状況などを間接的に把握することが可能であると考えられる。北海道に生息するヒメネズミ個体群は、4月から10月にかけて年1山型の繁殖パターンを示し、繁殖期には樹上での活動が活発となる。巣箱を用いた観察結果から、繁殖時のメスは巣箱内に巣材を短期間に多く運び込むことが示されており、巣箱内の巣材量が急増する時期は、繁殖期と同様に年1山型を示すことが予測される。そこで本研究では、“巣箱内の巣材量の変化(急増)”が“ヒメネズミの繁殖活動の指標”となり得るのかを明らかにするため、両者の関連性について検証を試みた。加えて、個体数および気温の変動と巣材量との関係についても検討を行なった。北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林内のトドマツ優占天然針広混交林に調査区(5.4ha)を設けて60～120個の巣箱を架設し、2012年～2019年、および2021年の非積雪期(5月～10月)に巣箱を利用する本種の観察を行なった結果、調査期間を通して計122個の巣箱で巣材の急増が確認された。このような巣箱の数は年ごとに異なったが、より多くの巣材急増巣箱が確認された調査年において、その出現パターンは繁殖期と同様に年一山型を示した。また、巣材急増巣箱数と捕獲個体数から予測された当該年の繁殖個体数との間には正の関係が見られたが、夏季において巣材急増巣箱の出現数は気温と負の関係を示した。これらの結果から、夏季の高温下においては検討が必要であるが、巣材量の増加は本種の繁殖活動の指標となり得ることが示された。

キーワード：営巣資源、繁殖期、トドマツ優占天然針広混交林

帯広畜産大学野生動物学研究室

Laboratory of Wildlife Biology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

連絡先：押田龍夫，oshidata@obihiro.ac.jp

Address correspondence: Tatsuo OSHIDA, oshidata@obihiro.ac.jp

緒 論

ある種の野生哺乳類にとって、出産や育仔のために巣を準備することは重要である。例えば、イノシシ *Sus scrofa* は、出産のために草本植物等を材料として、屋根のある巣を造る（今泉ら 1977）。また、ニホンヤマネ *Glirulus japonicus* は、蘚苔類と樹皮を用いて樹上に球形または楕円形の巣を造ることが知られている（響場ら 2016）。このように、繁殖のために野生哺乳類が準備する巣を調べることにより、その繁殖状況などを間接的に把握することが可能であると考えられるが、野生哺乳類の繁殖巣はそもそも発見されにくい場所に造られる傾向があり（例えば、響場ら 2016）、野外における観察調査で繁殖のために準備中の巣を定量的に評価することは困難である。しかしながら、ヒメネズミ *Apodemus argenteus* をモデルとして利用することによって、繁殖のための巣の準備を定量的に評価することが出来るかもしれない。

ヒメネズミは日本の森林環境に広く生息し（Nakata et al. 2015）、地表と樹上の両方のニッチを利用することが知られている（瀬戸口 1981; 信太 1989; 関島 1997）。本種の繁殖期は生息する環境によって変化し、本州の低地や低山帯においては、1月～4月および9月～12月の年2回で（吉田 1972; 西方 1979; 立石 2002; Higashi et al. 2012）、北海道や本州中部の亜高山地帯においては、4月～10月の年1回である（木下ら 1961; 宮尾ら 1963 a, b; 藤巻 1969a; Nakata 1998）。繁殖期になると樹上での活動が活発となり、しばしば樹洞を利用するが（Sekijima 2001）、その代替として人為的に設置された‘巣箱’も利用することが知られている（Hayaishi et al. 2008; Higashi et al. 2012; Nakamura-Kojo et al. 2016）。本種が巣箱を利用する場合、巣材（枯葉・緑葉等）を巣箱の中へと運び込むため（安藤 2005）、利用中の（あるいは利用された）巣箱内でこれらを確認することができる（Sekijima 2001; Higashi et al. 2012; Nakamura-Kojo et al. 2016）。特に、ヒメネズミのメスが繁殖（出産および育仔）を目的として

巣箱を利用する際は、巣箱に内部空間が占有される程多くの巣材を短期間で運び込むことが北海道帯広市における観察結果から示唆されている（照内ら 2021）。巣箱内の巣材の量の変化（急増）がヒメネズミの繁殖活動の一環（繁殖のための準備）であるならば、北海道において、巣箱内の巣材の量が急増する時期は、夏季の間の特定の期間に集中し、年1山型のピークを示すことが予測される。また、亜寒帯域に生息するキタハタネズミ *Microtus agrestis* 等のネズミ類では、2～3年ごとに個体数の増減が繰り返される周期的なサイクルの存在が知られている（Hansson et al. 1988）。ヒメネズミについてはこのような周期性に関する報告はないが、本種の北海道個体群では個体数の年変動が知られている（藤巻 1969b）。従って、個体数減少時には繁殖個体の絶対数も少なくなり、逆に増加時には、多くの個体が繁殖活動を行うことが推測される。すなわち個体数増加時には、多くの巣箱において、それらの内部空間を占有する程大量の巣材が搬入される現象を捉えることができるかもしれない。

一方、巣材の運搬行動は気温による影響を受ける可能性が考えられる。ラット *Rattus norvegicus* やマウス *Mus musculus domesticus* を用いた行動実験において、巣内に巣材が多く運び込まれることで、巣内の温度が高まることが示唆されている（Rajendram et al. 1987）。従って、ヒメネズミは巣箱内へ巣材を運び込むことにより、その内部温度を上昇させ、繁殖に適した温度環境を準備していると考えられるかもしれない。しかしながら、マウスを用いた実験において、2ヵ月齢の個体における最適な外気温は27℃程度と報告されており（Gordon et al. 1998）、外気温が20℃～26℃の場合と比べると、28℃以上では、1～2ヵ月齢個体の体重が軽くなることが示されている（Yamauchi et al. 1983）。ヒメネズミが出産・育仔を目的として巣箱を利用する場合においても適温が存在するのであれば、外気温が一定の値を超えると、巣箱内へ運び込まれる巣材量は減少する可能性が考えられる。

巣箱における巣材の量の増加は、ヒメネズミが繁殖のために運び込んだ結果であり、その増加の程度は、個体

群密度の増大および外気温の低さなど複数の要因に影響を受けると考えられる。しかしながら、巣箱内の巣材の量の増加をヒメネズミの繁殖行動の一環として捉えた研究はこれまでに行われておらず、巣材量の変化（急増）が個体の繁殖活動と直接的に関連するかは不明である。そこで本研究では、“巣箱内の巣材の量の変化（急増）”がヒメネズミの繁殖活動の指標となり得るのかを明らかにするため、2012年から2021年までの長期間の観察データに基づき、両者の関連性について検証を試みた。

方法

調査地および調査期間

北海道富良野市に位置する東京大学北海道演習林内（面積約22,717ha：北緯43°10′～20′、東経142°18′～40′）の調査区（面積約5.4haのトマツ *Abies sachalinensis* が優占する天然針広混交林）において調査を行った。

調査期間は2012年～2019年および2021年の非積雪期（5月～10月）としたが、天候の影響等のため、

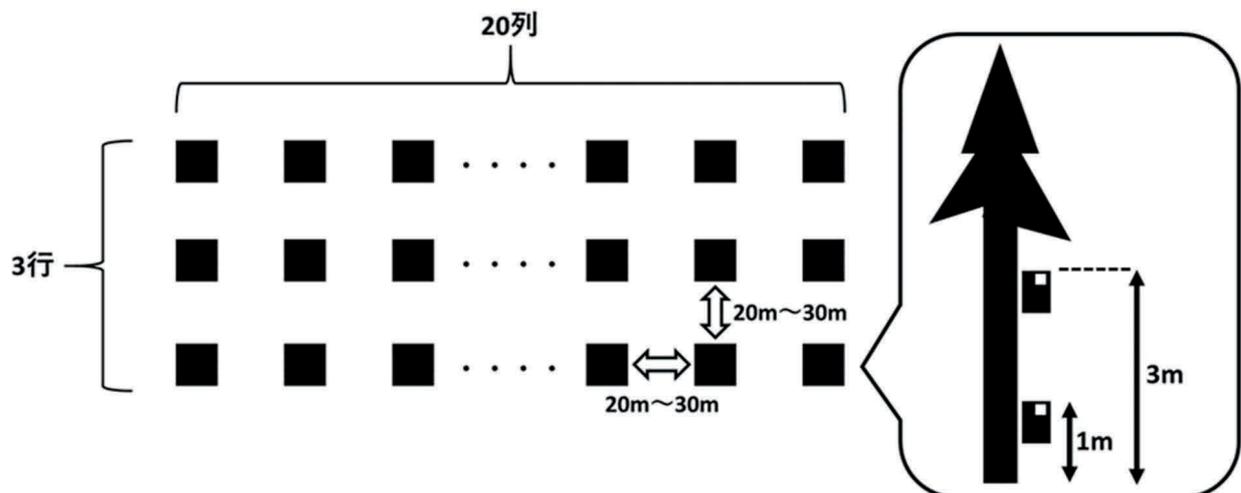
2013年では10月、2016年では9月、2021年では6月に調査を実施できなかった。なお、2020年については、Covid-19感染拡大による緊急事態宣言等のため、通年で調査を実施できなかった。

巣箱の架設

調査には木製の巣箱を使用した。その規格は、柳川（1994）を参考に、高さ24cm、幅15cm、奥行き20cmとし、入り口を4cm×4cmとした。また、内部を観察するために天板の開閉を可能にした。

調査区内において、20～30mの間隔で樹種を定めず60本の生立木を巣箱架設木として選定した（架設木の配置は20行×3列とした）。2011年5月に、計60個の巣箱をこれらの幹に架設した。架設高は地上約2.5～3.0mとし（以下、「高所」）、方角は定めなかった。また2015年5月において、同架設木に巣箱を1個ずつ追加架設した。架設高さは地上約1.0mとし（以下、「低所」）、方角は高所巣箱と同方向とした。架設した高所および低所の巣箱それぞれにNo.1～60までの番号を付けた。架設デザインを図1に示した。

図1. 調査区内に架設した巣箱の配置模式図.



巣箱調査

調査期間中は、原則として月1回の頻度（各月の上旬もしくは中旬）で日中に巣箱内部の観察を行った。しかしながら、2012年7月、2016年5月および6月については月2回の観察を実施した。また2012年7月の2回目の調査、および2012年8月は月の下旬に調査を行った。調査期間を通して、高所の巣箱各々に対して45回ずつのべ2,700回、低所の巣箱各々に対して30回ずつのべ1,800回の計4,500回の観察を行った。

巣箱内でヒメネズミ個体を確認した場合はこれを捕獲し、性別、体重、および齢を記録した後、速やかに放獣した。なお、齢区分は立石（2016）を参考に、14.1g以上を成獣、10.1g～14.0gを亜成獣、10.0g以下を幼獣とした。巣箱内部を観察する際は、巣材の量を目測により4つのカテゴリー（多量：巣箱容積の7割以上、中量：4割以上7割未満、少量：1割以上4割未満、極めて少量：

1割未満）で記録した（図2）。

繁殖指標となる巣箱の判定

当該年における前回の巣箱調査時と比較して、巣箱内のヒメネズミの巣材の量が、「巣材が無い場合」、「極めて少量」、「少量」、および「中量」から、「多量」へと変化した場合、それらの巣箱を、繁殖指標（以下‘増加巣箱’）とみなした。また、前回の巣箱調査時に巣箱内の巣材がヒメネズミ以外のもの（エゾモモンガ *Pteromys volans orii* により集められた樹皮を細く裂いた巣材、および鳥類により集められた蘚苔類の巣材等）と同定されたにもかかわらず、その上にヒメネズミが巣材を重積させた結果、巣材量が「多量」となった場合、それらの巣箱についても増加巣箱とみなした。なお、調査開始月である5月については、前月の状況と比較ができないため、本判定に用いた巣箱は6月～10月までのものと定めた。

図2. ヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) によって巣箱内へ搬入された巣材の写真。
巣材が占める空間割合に基づき、A: 多量（巣箱容積の7割以上）、B: 中量（4割以上7割未満）、
C: 少量（1割以上4割未満）、D: 極めて少量（1割未満）に区別した。



ヒメネズミの個体数データ

北海道における「野ネズミ発生予察調査」の一環として、東京大学北海道演習林内で2011年から2021年の間に実施された地表トラップによるネズミ類捕獲調査の結果より、ヒメネズミに関する情報を抽出し、本種の個体数データとして利用した。本調査は演習林内の4地点において、毎年6月および9月に、3日間連続して実施されており、各調査地点につき、50個のパンチュートラップが設置されている。本データについては、東京大学北海道演習林より提供頂いた。

調査期間中の気温データ

調査期間中の富良野市の気温データについては気象庁から入手した [http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php?prec_no=12&block_no=0021&year=&month=&day=&view=pl (2021年11月15日確認)]。年ごとに、各調査月の平均気温および平均最高気温を算出し解析に用いた。なお、調査月の平均気温および平均最高気温は、それぞれ、‘前月の調査日の翌日から当月の調査日までの期間’の日平均気温の平均値および最高気温の平均値とした。ただし、前月に2回の調査を行った場合は、‘前月の1回目の調査日の翌日から当月の調査日までの期間’の日平均気温の平均値および最高気温の平均値とした。また、前月に調査を行っていない場合は、‘当月の調査日以前の過去30日間’の日平均気温の平均値および最高気温の平均値とした。

統計解析

月別の増加巣箱数の比較

年間の増加巣箱数が著しく少ない(5個以下)年を除いて、調査年ごとに、増加巣箱数を月間で比較した。月間の比較を行う際はR ver. 4.0.3 (R Core Team 2020)を使用し、カイ二乗検定を行った。また、分割表において期待度数が5未満のものが現れた場合は、Fisherの正確確立検定を行った。有意水準は両側検定5%とした。

増加巣箱数と捕獲個体数との関係

年内における増加巣箱数の変化とヒメネズミの個体数との関係について、本種の繁殖活動を考慮した上で解析を行った。捕獲調査は6月および9月に行われたものの、9月に捕獲されるヒメネズミの大半は当年個体であり(藤巻 1969a)、繁殖を行う個体の数が正しく反映されていない可能性がある。このため、両捕獲数データは区別して扱った。また、当年個体は翌年には繁殖活動を開始するため(藤巻 1969b)、前年9月の捕獲数は翌年の繁殖個体数を反映している可能性がある。従って、目的変数として年間の増加巣箱数、説明変数として当年6月の捕獲数および前年9月の捕獲数を使用し、一般化線形モデル(GLM)を用いて解析を行った(目的変数の確率分布はポアソン分布、リンク関数は対数とし、尤度比検定を行った)。また、解析の前に両説明変数の分散拡大係数(VIF値)を計算し、これが3以上であった場合は相関を考慮して一方を解析から除外することとした(Zuur et al. 2010)。しかしながら、VIF値は1.025であったため、両者を説明変数として解析に使用した。なお、有意水準は両側検定5%とし、これらの統計解析にはR ver. 4.0.3 (R Core Team 2020)を使用した。

増加巣箱数と気温の関係

月別の増加巣箱数と平均気温との関係を調べるため、目的変数を各調査年の同月の増加巣箱数、説明変数をその調査月の平均気温として、GLMを用いて解析を行った。また、月別の増加巣箱数と最高気温との関係を調べるため、目的変数を各調査年の同月の増加巣箱数、説明変数をその調査月の平均最高気温として、GLMを用いて解析を行った。両解析において、目的変数の確率分布はポアソン分布、リンク関数は対数とし、尤度比検定を行った。有意水準は両側検定5%とし、R ver. 4.0.3を使用した(R Core Team 2020)。

結果

年別および月別の増加巣箱数

全調査期間を通して、計 122 個の増加巣箱が観察された。また、増加巣箱数は調査年ごとに違いが見られ、1～28 個の間で変動した (図 3)。増加巣箱数が急増する時期、およびそのパターンは調査年ごとに異なり、増加巣箱数が少なかった年 (増加巣箱数が 5 個以下) を除いて比べると、2012 年においては、増加巣箱数は 7 月に増加し (図 4(a))、6 月の増加巣箱数と 7 月および 8 月の増加巣箱数とでは有意差がみられた (Fisher の正確確率検定、 $P < 0.05$)。なお、7 月から 10 月までの増加巣箱数については月間での有意差はみられなかった (Fisher の正確確率検定、 $P > 0.05$)。また、2014 年においては、増加巣箱数は 8 月に急激に増加し、9 月にピークを示したが、その後は急に減少した (図 4(c))。8 月および 9 月の増加巣箱数は、それ以外の月の増加巣箱数と有意差

がみられた (Fisher の正確確率検定、 $P < 0.01$)。2015 年においては、増加巣箱は 6 月から観察され、8 月および 9 月にその数が増加し、その後は減少したものの (図 4(d))、月間での増加巣箱数の有意差は 8 月～10 月の間でのみ見られた (Fisher の正確確率検定、 $P < 0.05$)。そして 2018 年においては、増加巣箱数は 9 月に急激に増え、その後は急に減少した (図 4(g))。なお、9 月の増加巣箱数は、それ以外の月の増加巣箱数と有意差が見られた (Fisher の正確確率検定、 $P < 0.001$)。最後に、2019 年においては、増加巣箱数は 6 月に増加したものの、7 月に一度減少し、その後、8 月～10 月の間において、一定数が各月に現れた (図 4(h))。ただし、全ての月間において増加巣箱数に有意差は見られなかった (Fisher の正確確率検定 ; $P > 0.05$)。

図 3. ヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の増加巣箱数および地表トラップによる捕獲個体数 (増加巣箱数の定義については本文を参照のこと)。
 ライトグレーおよびダークグレーのバーは各々 6 月および 9 月の捕獲個体数をあらわす。
 実線は増加巣箱数の変動を示す。

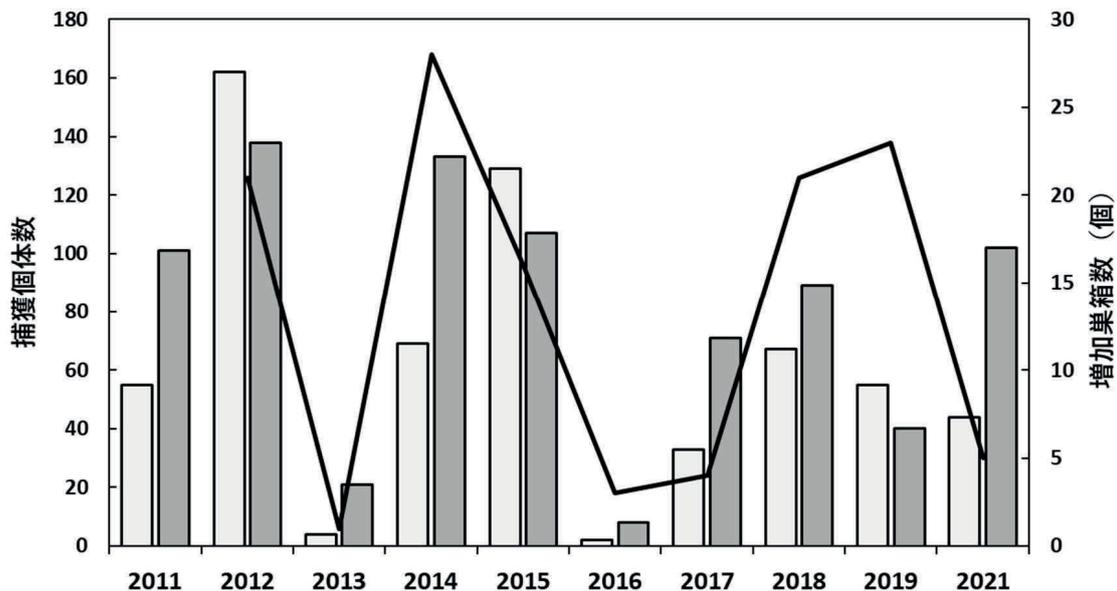
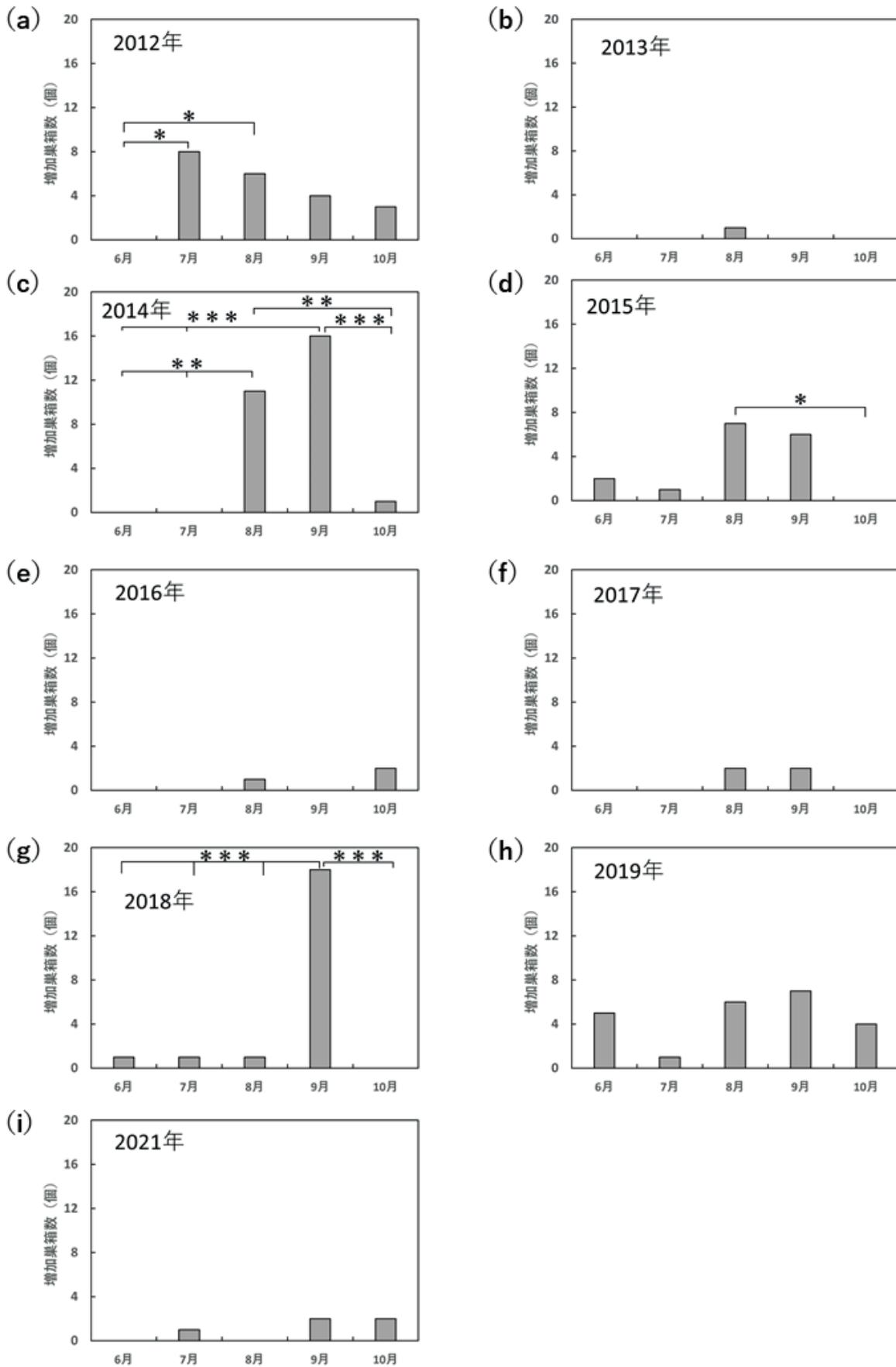


図4. 2012年～2019年および2021年におけるヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の月別増加巣箱 (増加巣箱数の定義については本文を参照のこと).



年間の増加巣箱数と捕獲個体数との関係

解析の結果、2012年～2019年および2021年における年間の増加巣箱数は、当年6月の捕獲個体数と正の関係を示し (GLM: β (回帰係数) = 0.01、 $P < 0.001$ 、図5 (A))、前年9月の捕獲個体数と負の関係を示した (GLM: $\beta = -0.005$ 、 $P = 0.02$ 、図5 (B))。

月別の増加巣箱数と気温との関係

各調査月の平均気温と増加巣箱数との関係を図6に示した。解析の結果、調査月の平均気温は、8月および9月の増加巣箱数と負の関係を示した (GLM: 8月、 $\beta = -0.653$ 、 $P < 0.05$; 9月、 $\beta = -0.442$ 、 $P < 0.05$ 、表3)。6月、7月および10月の増加巣箱数では調査月の気温との関係性は見られなかった (GLM: $P > 0.05$ 、表1)。また、各調査月の平均最高気温と増加巣箱数との関係を図7に示した。調査月の平均最高気温も8月および9月の増加巣箱数と負の関係を示した (GLM: 8月、 $\beta = -0.912$ 、 $P < 0.001$; 9月、 $\beta = -0.466$ 、 $P < 0.01$ 、表2)。6月、7

月および10月の増加巣箱数では調査月の気温との関係性はみられなかった (GLM: $P > 0.05$ 、表2)。

増加巣箱において捕獲された個体

122個の増加巣箱のうち56個の増加巣箱で計178個体のヒメネズミが捕獲された。また、捕獲されたヒメネズミを年齢(および性別)ごとに分類すると、成獣が47個体(オス17個体、メス30個体)、亜成獣が79個体(オス22個体、メス57個体)、幼獣が26個体(オス6個体、メス20個体)であり、残りの26個体は捕獲時に逃げたため年齢および性別は不明である(表3)。

捕獲時に巣箱内の全ての個体の年齢および性別を記録できた増加巣箱について、各増加巣箱における捕獲個体の構成をみると、「メス成獣と幼獣」が4例、「メス成獣と亜成獣」が8例、「メス成獣および亜成獣と幼獣」が1例、「メス成獣のみ」が4例、「亜成獣のみ」が11例(このうち「メスのみ」が4例、「オスのみ」が1例、「オスメス混合」が6例)、「その他(オス成獣が含まれたもの)」が10例であった(表4)。

図5. 調査期間中の増加巣箱数および (A) 当年6月と (B) 前年9月のヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の捕獲個体数の関係 (増加巣箱数の定義については本文を参照のこと)。

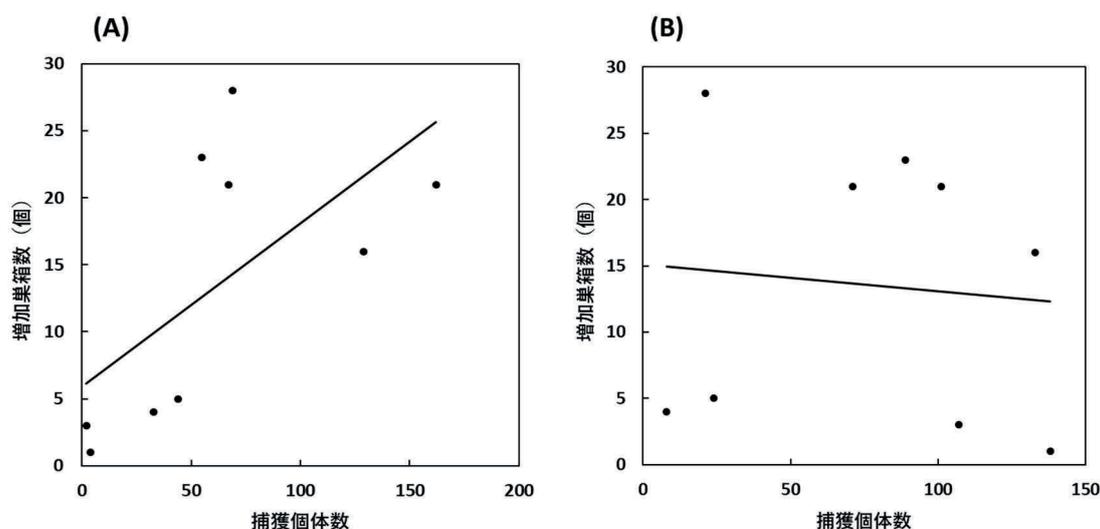


図6. 年別に示した各月の平均気温およびヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の増加巣箱数の関係 (増加巣箱数の定義については本文を参照のこと).

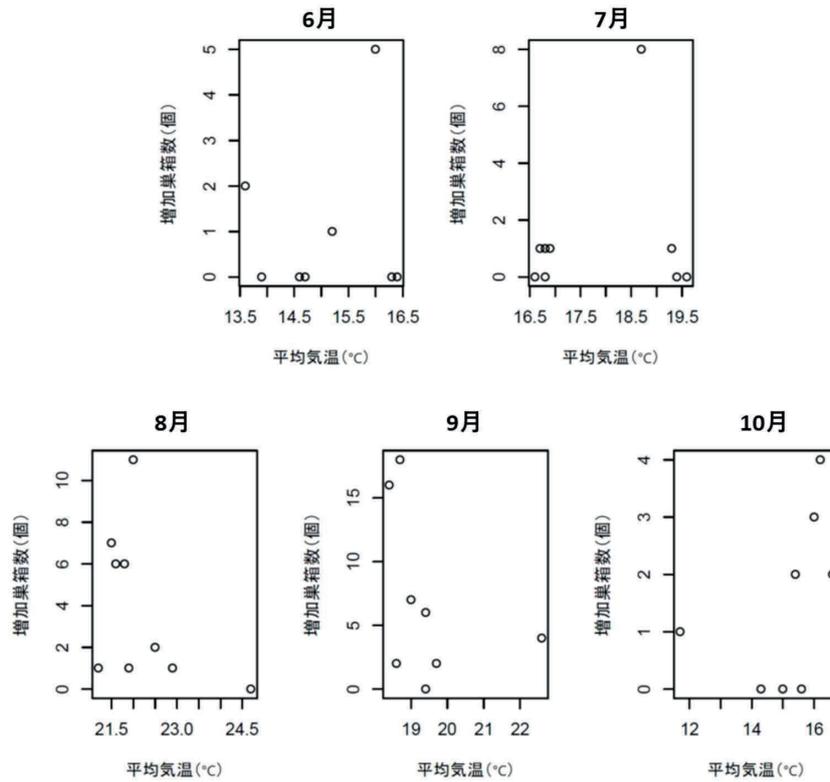


図7. 年別に示した各月の平均最高気温およびヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) 増加巣箱数の関係 (増加巣箱数の定義については本文を参照のこと).

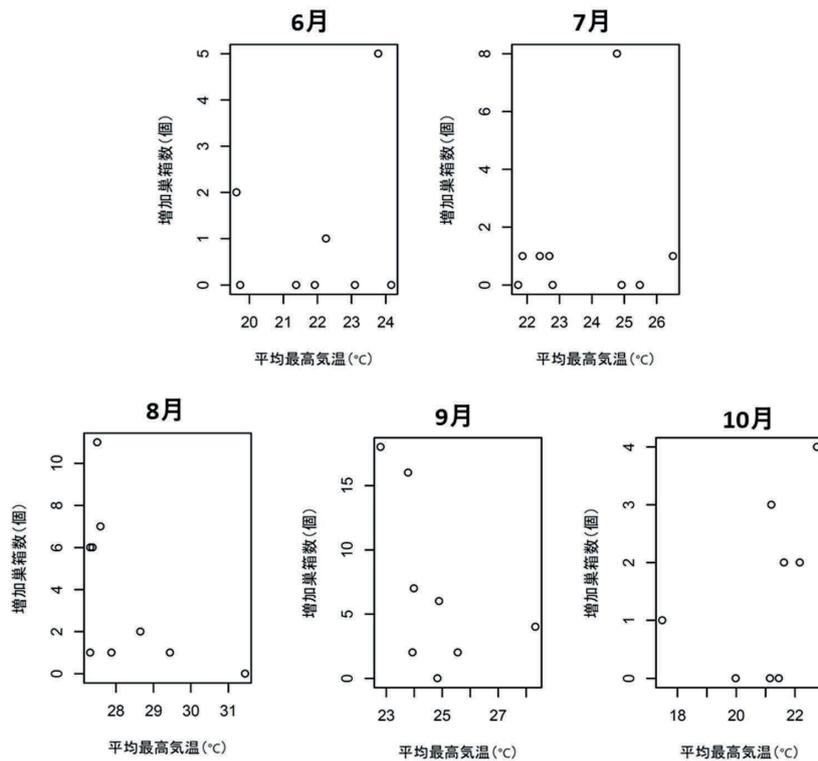


表 1. 月別のヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の増加巣箱数と平均気温との関係
(増加巣箱数の定義については本文を参照のこと).

Month	Temperature (mean ± SD)	Estimate (β)	P
Jun.	15.1 ± 1.0	0.215	0.551
Jul.	17.9 ± 1.3	0.254	0.269
Aug.	22.2 ± 1.0	-0.653	0.020
Sept.	19.5 ± 1.3	-0.442	0.015
Oct.	15.1 ± 1.4	0.453	0.160

表 2. 月別のヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の増加巣箱数と平均最高気温との関係
(増加巣箱数の定義については本文を参照のこと).

Month	Temperature (mean ± SD)	Estimate (β)	P
Jun.	22.0 ± 1.6	0.236	0.329
Jul.	23.7 ± 1.6	0.222	0.199
Aug.	28.3 ± 1.3	-0.912	0.004
Sept.	24.8 ± 1.6	-0.466	<0.001
Oct.	21.0 ± 1.5	0.429	0.140

表 3. 増加巣箱において捕獲されたヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の個体数
(増加巣箱数の定義については本文を参照のこと). 括弧内の数字はメスの個体数をあらわす.

Year	Age			
	adult	subadult	pup	unidentified
2012	16(11)	21(15)	5(4)	12
2013	0(0)	0(0)	0(0)	0
2014	9(6)	25(14)	13(10)	5
2015	10(6)	16(13)	3(2)	3
2016	1(0)	0(0)	0(0)	0
2017	1(1)	0(0)	4(3)	0
2018	5(3)	11(10)	0(0)	5
2019	5(3)	6(5)	1(1)	1
2021	0(0)	0(0)	0(0)	0

表 4. 増加巣箱において同時に捕獲された複数個体のヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の齢および性別構成の例数
(増加巣箱数の定義については本文を参照のこと).

F はメス, M はオスを示す. 出産および育仔と無関係なオス成獣のみ等については, others としてまとめた.

Year	Number of cases							
	adult (F) / pup	adult (F) / subadult	adult (F) / subadult / pup	adult (F)	subadult (F)	subadult (M)	subadult (F & M)	others
2012	0	4	0	2	1	0	1	2
2013	0	0	0	0	0	0	0	0
2014	2	0	0	0	0	1	4	3
2015	1	2	0	1	2	0	0	1
2016	0	0	0	0	0	0	0	1
2017	1	0	0	0	0	0	0	0
2018	0	1	0	1	1	0	0	1
2019	0	1	1	0	0	0	1	2
2021	0	0	0	0	0	0	0	0
Total	4	8	1	4	4	1	6	10

考 察

増加巣箱と個体の繁殖活動との関係

本研究の結果から、2012年、2014年、2015年、および2018年においては、ピークとなる月およびピーク時の数は異なるものの、月別の増加巣箱数は、夏季を中心として年1山型の形を示すことが示された。北海道に生息するヒメネズミの繁殖期は夏季を中心して年1山型となることが知られており（木下ら 1961；宮尾ら 1963a, b；藤巻 1969a；Nakata 1998）、巣箱内の巣材の量の増加は、照内ら（2021）に示唆されたように、本種の繁殖活動と関連するのかもしれない。

また、年間の増加巣箱数と当年6月における捕獲個体数との関係を見ると、両者には正の関係性が見られた。ヒメネズミにおいて、6月の捕獲個体数は前年以前に生まれた当年に繁殖を行う個体のみを反映していると考えられるため（藤巻 1969a）、この結果からも「増加巣箱が個体の繁殖と関連する」という推測が支持されるであろう。一方、年間の増加巣箱数と前年9月における捕獲個体数との間には負の関係性が見られた。ヒメネズミにおいて、9月の捕獲個体数は当年生まれの個体を多く反映していると考えられるため（藤巻 1969a）、これらの個体が翌年に繁殖活動を開始した場合、翌年の増加巣箱数は前年9月の捕獲個体数と正の関係性を示すと予測される。しかしながら、本研究においてそのような結果は見られなかった。9月の捕獲個体の中に当年個体だけではなく、前年以前に生まれた老齢個体も含まれており（藤巻 1969a）、これが今回の結果に影響したのかもしれない。

増加巣箱で捕獲された個体について見てみると、雌雄の成獣・亜成獣・幼獣が含まれていたものの、オスの成獣が捕獲される傾向は低く、一方、メスの成獣・亜成獣・幼獣が捕獲される傾向が高かった。この結果は、増加巣箱が出産・育仔を目的として利用されていたことと関係するのかもしれない。ヒメネズミではメスが育仔を担当する（Hayashi et al. 2008）。仔は20日齢に達すると成

長が速まり、30日齢を過ぎると成獣と同程度の体サイズとなるものの、24日齢を過ぎるまでは母親の後を追う（小山 1994）。加えて、仔は生後1ヵ月～4ヵ月の時点では、自分の生まれた場所に対して執着性をみせることが知られている（瀬戸口 1981）。さらに、本種では出生地からの分散はオスに偏ることが報告されている（Ohnishi et al. 2000）。従って、増加巣箱内で捕獲される個体が、オス成獣よりもメス成獣・亜成獣・幼獣に偏っていたのは、増加巣箱が出産・育仔を目的として利用されており、また、増加巣箱で生まれた仔（特にメス個体）は、亜成獣となった後も巣箱を継続的に利用していたことが要因であるかもしれない。

本研究において、月別の増加巣箱数は本種の繁殖期のピークと思われる8月および9月の平均気温および平均最高気温と負の関係性を示した。解析に用いたデータには個体数が減少した年のものも含まれているため結論を述べることはできないが、外気温が高い時にヒメネズミは巣箱内に巣材を搬入しない、あるいは少量の巣材を搬入するのかもしれない。今後増加巣箱と気温との関係性を明らかにするためには、巣箱内の巣材量をより詳細に評価する必要があるだろう。

本研究で得られた、増加巣箱と捕獲数との正の関係性および増加巣箱内で捕獲された個体の特徴から鑑みて、増加巣箱が個体の繁殖活動の指標となる可能性は高いと考えられる。しかしながら、ヒメネズミの個体数は年ごとに変動を示すことから、本結論を示すためには、さらに長期的なデータの収集が必要であるだろう。

謝 辞

本研究を行うにあたりお世話になった算用子麻美氏をはじめとする東京大学北海道演習林の職員の皆様方に心よりお礼を申し上げたい。そして、終始御指導を賜った帯広畜産大学野生動物管理学研究室の柳川久教授、浅利裕伸准教授、同大保全生態学研究室の赤坂卓美助教に心から感謝したい。また、上記各研究室の皆様、さらには同大野生動物学研究室の皆様には多くの支援や助言、激

励を頂いた。この場を借りて深く感謝の意を表したい。
そして、本研究で解析に用いたヒメネズミの巣箱利用に関するデータは、2021年を除き、佐藤大介氏、定梶さくら、鈴木野々花氏、山下聡子氏、高瀬かえで氏により収集されたものである。皆様に心より感謝したい。

引用文献

- ・饗場葉留果, 湊秋作, 岩渕真奈美, 湊ちせ, 小山泰弘, 若林千賀子, 森田哲夫. 2016. ニホンヤマネにおける繁殖巣の巣材・構造および繁殖事例の報告. 日本環境動物昆虫学会誌 27: 1-7.
- ・安藤元一. 2005. 樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査法の検討. 哺乳類科学 45: 65-176.
- ・藤巻裕蔵. 1969a. ヒメネズミの繁殖活動. 哺乳動物学雑誌 4: 74-80.
- ・藤巻裕蔵. 1969b. 天然林におけるネズミ類の生息密度と個体群構成の変動. 北海道林試研報 7: 62-77.
- ・Gordon CJ, Becker P, Ali JS. 1998. Behavioral thermoregulatory responses of single- and group-housed mice. *Physiology and Behavior* 65: 255-262.
- ・Hayaishi S, Shibata F, Kwamichi T. 2008. Uniparental care and activity of nursing females of *Apodemus argenteus* during the lactation period on Mt. Asama, Central Japan. *Mammal Study* 33: 111-114.
- ・Hansson L, Henttonen H 1988. Rodent dynamics as community processes. *Trend in Ecology and Evolution* 3: 195-200.
- ・Higashi K, Tanaka H, Hosoi E. 2012. Reproductive activity of the small Japanese field mouse. (*Apodemus argenteus*) in Yamaguchi Prefecture, Japan. *Mammal Study* 37: 349-352.
- ・今泉忠明, 茶畑哲夫. 1977. リュウキュウイノシシの繁殖用の巣について. 哺乳動物学雑誌 7: 111-113.
- ・木下栄次郎, 前田満. 1961. 天然林伐採跡の造林地とその周辺における野ネズミの生態に関する研究. 林業試験場研究報告 127: 61-98.
- ・小山幸子. 1994. 飼育下におけるヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) 幼体の成長について. 哺乳類科学 33: 109-122.
- ・宮尾嶽雄, 両角徹郎, 両角源美, 花岡肇, 赤羽啓栄, 酒井秋男. 1963 a. 本州八ヶ岳のネズミおよび食虫類 第1報 亜高山森林帯のネズミおよび食虫類. 動物学雑誌 72: 187-193.
- ・宮尾嶽雄, 両角徹郎, 両角源美, 花岡肇, 赤羽啓栄, 酒井秋男. 1963 b. 本州八ヶ岳のネズミおよび食虫類 第2報 亜高山森林帯におけるヒメネズミおよびヤチネズミの性比, 体重組成および繁殖活動. 動物学雑誌 72: 187-193.
- ・Nakamura-Kojo Y, Kojo N, Tamate HB. 2016. Spatial differences in arboreal activity of two rodents, the Japanese dormouse (*Glirulus japonicus*) and the small Japanese field mouse (*Apodemus argenteus*). *Annales Zoologici Fennici* 53: 81-90.
- ・Nakata K. 1998. Regulation of reproduction in a natural population of the small Japanese field mouse, *Apodemus argenteus*. *Mammal Study* 23: 19-30.
- ・Nakata K, Saitoh T, Iwasa MA. 2015. *Apodemus argenteus* (Temminck, 1844). Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Fukui D, Saitoh T. (eds). *The Wild Mammals of Japan 2nd ed.*, pp. 178-179, Shokado Book Seller, Kyoto.
- ・南木大祐, 久保田勝義, 井上幸子, 中村琢磨, 大崎繁, 鍛冶清弘, 扇大輔, 壁村勇二, 長慶一郎, 山内康平, 緒方健人, 田代直明, 久米篤. 2015. 野ネズミ発生予察調査の結果と野ネズミ類モニタリング調査への移行. 第17回九州大学演習林研究発表会 17: 19-20.
- ・西方幸子. 1979. 清澄山におけるヒメネズミ個体群の生態学的研究 I. 生活史と個体数の変動. 哺乳動物

- 学雑誌 7: 240-253.
- Ohnishi N, Saitoh T, Ishibashi Y. 2000. Spatial genetic relationships in a population of the Japanese wood mouse *Apodemus argenteus*. Ecological Research 15: 285-292.
 - Rajendram EA, Brain PF, Parmigiani S, Mainardi, M. 1987. Effects of ambient temperature on nest construction in four species of laboratory rodents. Bolletino di Zoologia 54: 75-81.
 - R Core Team. 2020. R: A language and environment for statistical computing. Vienna, Austria: R Foundation for Statistical Computing.
 - 関島恒夫. 1997. 足跡法によるヒメネズミとアカネズミの垂直的ハビタット利用の評価. 日本生態学会誌 47: 151-158.
 - Sekijima T. 2001. Seasonal change in the nesting sites of *Apodemus argenteus*. Journal of Zoology, London 254: 321-323.
 - 瀬戸口美恵子. 1981. ヒメネズミの巣穴利用とホームレンジ. 日本生態学会誌 31: 385-394.
 - 信太照夫. 1989. ヒメネズミ (*Apodemus argenteus*) の立体的環境利用と大径木との関わり. 哺乳類科学 29: 89-99.
 - 立石隆. 2002. 秩父山地雲取山におけるヒメネズミの繁殖活動. 哺乳類科学 1: 63-69.
 - 照内歩, 菊池隼人, 押田龍夫. 2021. ヒメネズミ *Apodemus argenteus* における営巣用資源運搬行動の解明. 帯広畜産大学学術研究報告 42: 69-76.
 - 柳川久. 1994. 小鳥用巣箱を用いたエゾモモンガの野外研究. 森林保護 241: 20-22.
 - Yamauchi C, Tooru S, Ueda T. 1983. Effects of room temperature on reproduction, body and organ weights, food and water intakes, and hematology in mice. Experimental Animals 32: 1-11.
 - 吉田博一. 1972. 福岡県清水山の哺乳類 4. ヒメネズミの繁殖. 哺乳動物学雑誌 5: 170-177.
 - Zhang L, Liu PF, Wang ZK. 2012. Thermoregulatory

development in pups of chevrier's field mouse (*Apodemus chevrieri*) in hengduan mountain region. Pakistan Journal of Zoology 44: 1539-1544.

- Zuur AF, Ieno EN, Elphick CS. 2010. A protocol for data exploration to avoid common statistical problems. Methods in Ecology and Evolution 1: 3-14.

Pre-reproductive behavior in the small Japanese field mouse: The relationship between nest-building behavior and reproductive condition

Some wild mammal species build nests when breeding, and investigating such breeding nests in the field may help us indirectly understand their reproductive status. In Hokkaido, Japan, the small Japanese field mouse (*Apodemus argenteus*) has a unimodal reproductive period between April and October. During this period, females become active on trees, and are known to construct breeding nests. A previous study using artificial nest boxes has revealed that female *A. argenteus* would carry many nesting materials (leaves) into nest boxes in a short time frame. Therefore, we hypothesized that a substantial increase in nesting materials within nest boxes could be a sign of active breeding within population. To test this hypothesis, we investigated the relationship between the rate of increase in nesting materials and the reproductive period in an *A. argenteus* population. Additionally, we examined whether the rate of increase in nesting materials is related to the number of reproductive individuals and the ambient temperature. We conducted this study at the University of Tokyo Hokkaido Forest, the University of Tokyo, Furano, Japan. We observed 60–120 nest boxes installed on tree trunks from May to October from 2012 to 2019 and in 2021. During the study period, we made 122 observations of sudden increases in nesting

materials. Although the number of nests varied from year to year, we observed a unimodal pattern of the increase in nests. Additionally, the number of nests was positively correlated with the number of reproductive individuals, but negatively correlated with the ambient temperature during summer. Therefore, the rate of increase in nesting materials could be indicative of the *A. argenteus* population's reproductive condition, although summer ambient temperature should also be considered.

エゾタヌキ *Nyctereutes viverrinus albus* の溜め糞場の存在は 他の動物種の行動に影響を及ぼすか？

矢野呼春¹・本馬維子¹・佐々木乃梨¹・田辺結葉¹・照内 歩¹

村上 堇¹・菊池隼人¹・内海泰弘²・押田龍夫¹

(受付：2022年3月28日，受理：2022年7月25日)

Effects of Japanese raccoon dog (*Nyctereutes viverrinus albus*) latrines on the behaviors of other animals
in their ecosystem

Koharu YANO¹, Yukiko HONMA¹, Nori SASAKI¹, Yuiha TANABE¹, Ayumu TERUUCHI¹

Sumire MURAKAMI¹, Hayato KIKUCHI¹, Yasuhiro UTSUMI², Tatsuo OSHIDA¹

摘 要

生態系の群集構造が維持される機構を理解する上で、様々な生物種間の複雑な関係性を明らかにすることは重要であり、これには直接的なものだけではなく、動物の行動によって形成された副産物がもたらす間接的なものが存在する。タヌキは、複数個体が特定の場所に排糞をする溜め糞行動を行い、これによって溜め糞場と呼ばれる糞塊が形成される。溜め糞場の存在がシカの行動に影響を与えることが先行研究で示唆されているものの、他の様々な動物種へ与える影響は明らかではなく、溜め糞場を介したタヌキと他動物種との関係性は不明である。そこで本研究では、タヌキの溜め糞場が他動物種に与える影響を明らかにするため、2021年5月11日～10月18日の期間において、北海道足寄町の九州大学北海道演習林内に自動撮影カメラを設置し、溜め糞場における動物の行動観察を行った。その結果、タヌキを除く5種および4グループの動物が撮影され、このうち、シカ、キツネ、ヒグマ、ヤマシギ、カラ類、カラス類において溜め糞場における行動が観察された。シカ、キツネ、ヒグマでは臭い嗅ぎ行動が観察され、3種が溜め糞場に対して関心を持つことが示された。また、シカ、キツネ、ヤマシギ、カラ類、カラス類においては摂食行動が観察され、シカは溜め糞場に生育した草本植物を、キツネおよび鳥類では糞中に発生した昆虫類を摂食していることが示された。さらに、キツネが溜め糞場においてマーキングする様子が確認でき、キツネとタヌキが溜め糞場を介して情報を共有していることが示唆された。本研究の結果から、タヌキの溜め糞場は、タヌキ以外の動物に適宜利用されており、生物の種間関係に間接的に影響を及ぼすことが明らかになった。

キーワード：エゾシカ、ヒグマ、カラ類、キタキツネ

¹帯広畜産大学野生動物学研究室

¹Laboratory of Wildlife Biology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

²九州大学大学院農学研究院森林生産制御学分野

²Graduate School of Agriculture, Kyushu University

連絡先：押田龍夫， oshidata@obihiro.ac.jp

Address correspondence: Tatsuo OSHIDA, oshidata@obihiro.ac.jp

緒 論

生態系において、すべての生物は他種の生物と何らかの関係性を築きながら生きており、生物種間関係性を明らかにすることは、個体群あるいは群集構造が生態系において維持される機構を理解するために重要である(辻ら 2013)。しかしながら、生物種間関係性は複雑であり、捕食-被食のように直接的な関係が見られることもあれば、何かを介して間接的に関係している場合もある。例えば、オオアルマジロ *Priodontes maximus* は、ねぐらや休息場所として利用する穴を掘るが、この穴はオオアルマジロを除く 24 種の脊椎動物によって休息や採食の場所として利用される(Desbiez et al. 2013)。この時、オオアルマジロは穴を掘ることによって他動物種に新たな資源を提供しており(Di Blanco 2020)、オオアルマジロとその巣穴を利用する他動物種との間には、複雑な種間関係が間接的に成り立っている。このように、動物種の行動およびその副産物がもたらす間接的な種間関係についても検討することによって、複雑な生態系の実態を理解することができるであろう。

‘溜め糞行動’とは、動物がある特定の場所で排泄(主に排糞)行動を行うことであり、嗅覚を用いたコミュニケーション(Stewart et al. 2002)の一種である。形成される糞塊は‘溜め糞場’と呼ばれ、これを複数個体が共有することによって、情報交換の場としての機能が生じる(Ikeda 1984)。排泄される糞や尿には、種や性、齢、そして個体に特有な臭いなどの情報が含まれており(宮崎 2016)、長期間放置されるこれらの情報は他種によっても収集可能である(Swihart 1991)。例えば、被食者は糞の臭いによって捕食者の存在を認識し、捕食者の溜め糞場を含む領域を回避することが可能である(Swihart 1991)。すなわち、溜め糞場の存在やその臭いが、同種の他個体のみならず、他種の行動にも影響を与えることが示唆されている(Lumkes 2019)。

ホンダタヌキ *Nyctereutes viverrinus viverrinus* およびエゾタヌキ *N. viverrinus albus* (以下、タヌキ) もまた溜め糞行動を行い、溜め糞場を形成することで他個体との

情報を共有している(Yamamoto 1984; Ikeda 1984)。先行研究において、タヌキの溜め糞場が同種に対する縄張り維持の機能を殆ど持たない(Ikeda 1984)ことが明らかになっているが、他動物種に対する縄張り維持等の機能については不明である。また、タヌキの溜め糞場が種子分散において重要な役割を果たす(Osugi et al. 2020)など、生態系における多様な機能が明らかになっているものの、そのような機能を他動物種がどのように利用しているのかは不明である。タヌキの溜め糞場の臭いおよび存在が他動物種に与える影響を明らかにすることによって、タヌキと他動物種の間接的なかかわりを示すことができるかもしれない。したがって本研究では、ある動物種によって提供された行動学的副産物が、動物種間関係にどのような間接的影響を及ぼすのかを解明することを目的として、溜め糞場を介したタヌキと他動物種のかかわりについて検討を行う。自動撮影カメラを用いた観察によって、溜め糞場が他動物種に利用されるか否かについて調べ、利用が見られた場合、その利用目的について議論する。

方 法

調査地および調査期間

北海道足寄町に位置する九州大学北海道演習林を調査地とし、林道沿いに形成された 3 地点の溜め糞場を用いて調査を行った。調査地点はそれぞれ、地点 A (北緯 43° 15' 43", 東経 143° 29' 56")、地点 B (北緯 43° 15' 47", 東経 143° 29' 56")、地点 C (北緯 43° 15' 55", 東経 143° 29' 58") とした。

調査方法

各地点において、赤外線センサー付き自動撮影カメラ(SG562-D, BMC 社; 以下、カメラ)を 1 台ずつ、計 3 台設置した。カメラは溜め糞場が画角の中心に映るように留意し、約 3m の距離に位置する立木(樹種は問わない)の幹、もしくは木杭を立ててこれに設置した。カメラの設置高は約 1m とした。動画の撮影時間は白井(2017)

を参考に 30 秒に設定したが、撮影漏れを防ぐためインターバルは 0 秒に設定した。カメラ設置期間は、非積雪期である 2021 年 5 月 11 日から同年 10 月 18 日までの約 5 か月間であった。5 月および 6 月は月に 1 度カメラの電池の交換を行ったが、電池残量不足によるデータの欠測があったため、7 月以降は月に 2 度の頻度でデータの回収および電池の交換を行った。

データの整理および解析

動画データの記録

撮影された動画データから、野生動物が映っているものだけを選び、それぞれの動画が撮影された月日および時刻、撮影された動物種ならびにその個体数、溜め糞場で観察された行動を記録した。撮影された動物種について記録する際、分類群レベルでは識別可能であるが、種の同定が困難であったものについては、その平易な分類群名である‘類’として記録した。

設定した 30 秒以内に溜め糞場で確認することができた全ての行動をデータとして扱った。また、前後の動画を比較し、欠測時間における動物の行動が推定可能なものについては、溜め糞場での行動として記録した（例えば、タヌキの溜め糞場訪問を撮影した映像データの一部が欠測していたが、前後の動画を比較して明らかな糞の増加があれば“タヌキの排泄行動”として記録した）。そして、5 分以内に同一個体と想定される同一種が撮影された動画は重複イベントとみなし解析から除外した。

高頻度で撮影された動物種について、溜め糞場における行動を種ごとにカテゴリーに分けて記録した。カテゴリーの詳細については、撮影結果と併せて‘結果’で述べることにする。

撮影頻度指標 (RAI) の算出

撮影継続期間において、カメラの電池残量不足によるデータの欠測期間があったため、1 台のカメラを 100 日間作動させた場合の撮影回数である撮影頻度指標 (RAI : Relative Abundance Index) を算出し、これをデータの

比較時に用いた (福田ら 2008 ; 水谷ら 2018)。

撮影頻度指標 $RAI = (\text{撮影回数 [回]} / \text{カメラ稼働日数 [日]}) \times 100 \text{ [日]}$

撮影された動物種ごとに算出した RAI を用いて、季節間の比較を行った。また、タヌキを含む動物種の溜め糞場における行動カテゴリー (後述) についても、RAI を算出して季節間の比較を行った。本研究では、5 月および 6 月を春期、7 月および 8 月を夏期、9 月および 10 月を秋期とした。

溜め糞場を利用するタヌキ個体数の推定

溜め糞場は複数のタヌキ個体によって共有されており (Ikeda 1984)、溜め糞場の規模の大きさやそこに堆積される糞の数は、その溜め糞場を利用する個体数によって変化すると予測される。溜め糞場がタヌキを含む動物種に何らかの影響を与えるとすると、その影響の大きさは、溜め糞場の規模の大きさに関係しているかもしれない。そこで本研究では、溜め糞場に関する基礎情報としてそれぞれの溜め糞場を利用するタヌキ個体数を推定するため、各地点の溜め糞場において撮影されたタヌキ個体の個体識別を試みた。

データ解析

動物の撮影回数について、季節間で差があるかを検討するために、カイ 2 乗検定を行った。解析には R ver. 4.0.3 (R development core team 2020) を使用し、有意水準を両側検定 5% とした。

結 果

撮影された動物

調査期間全体の延べ撮影日数は計 466 日で、地点 A および地点 B が 162 日、地点 C が 142 日であった。動画の総撮影回数は 9,751 回で、そのうち野生動物の記録が得られた有効撮影回数は 1,369 回 (約 14%) であった。撮影された動物は、哺乳類ではエゾシカ *Cervus*

nippon yesoensis (以下、シカ)、キタキツネ *Vulpes vulpes schrencki* (以下、キツネ)、タヌキ、ヒグマ *Ursus arctos*、エゾユキウサギ *Lepus timidus ainu*、ネズミ類であり、鳥類ではヤマシギ *Scolopax rusticola*、ハト類、カラ類、カラス類であった (表1、表2)。撮影回数が多かったのはシカ、キツネ、タヌキで、これら3種で有効撮影回数のおよそ95%を占めていた。中でもシカの撮影回数が多く、有効撮影回数のおよそ65%を占めた。撮影回数の多かったシカは、特に地点Bにおいて多く撮影された (表1)。撮影回数の少なかったエゾユキウサギは地点A・Bでのみ、またネズミ類は地点Cでのみ撮影された (表1)。鳥類については、ヤマシギおよびハト類が全ての季節で撮影されたのに対し、カラス類およびカラ類は春期のみ見られた (表2)。

撮影回数の多かったタヌキ、シカ、キツネについて、先行研究を参考に種ごとに行動カテゴリーを設定した。まずタヌキについては、手塚ら (2005) に基づいて、排泄 (排尿および排便)、臭い嗅ぎ (溜め糞に鼻を近づける)、その他の行動の3つのカテゴリーに分類した。シカについては、臭い嗅ぎ (溜め糞に鼻を近づける) と摂食 (溜

め糞場に生育する植物を採食する) の2つのカテゴリーに分類した。キツネについては、浦口ら (1997) を参考に、臭い嗅ぎ (溜め糞に鼻を近づける)、マーキング (溜め糞場に向けて片足を上げる)、摂食 (地面から何かをくわえあげ採食する)、探餌 (鼻先で地面を掘る行動) の4つのカテゴリーに分類した。その他の動物については、観察された行動を簡潔に記録した。

撮影頻度指標 (RAI) の比較

季節ごとに算出した動物のRAIを表2に示した。撮影頻度の高かった3種 (シカ、キツネ、タヌキ) の哺乳類において、シカのRAIは春期に最も高かったが、他の2種については夏期および秋期に高かった。春期と夏期の間には有意な変動が見られたが ($P < 0.001$)、夏期と秋期の間には見られなかった ($P > 0.05$)。鳥類については、いずれの種およびグループも春期に値が高くなった。哺乳類と同様、春期と夏期の間には有意な変動が見られたが ($P < 0.001$)、夏期と秋期の間には見られなかった ($P > 0.05$)。

表1. 各調査地点における動物種 (或いはグループ) の撮影回数およびRAI

Animal	A			B			C		
	frequency	%*	RAI	frequency	%*	RAI	frequency	%*	RAI
Mammals									
sika deer	81	29.9	50.0	727	77.0	448.8	76	49.4	46.9
red fox	92	33.9	56.8	160	16.9	98.8	19	12.3	11.7
raccoon dog	79	29.2	48.8	51	5.4	31.5	25	16.2	15.4
brown bear	2	0.7	1.2	3	0.3	1.9	2	1.3	1.2
mountain hare	4	1.5	2.5	1	0.1	0.6	0	0	0
murids	0	0	0	0	0	0	1	0.6	0.6
Birds									
Eurasian woodcock	2	0.7	1.2	0	0	0	6	3.9	3.7
Colunbidae	11	4.1	6.8	1	0.1	0.6	3	1.9	1.9
Paridae	0	0	0	0	0	0	19	12.3	11.7
Corvidae	0	0	0	1	0.1	0.6	3	1.9	1.9

*%は各地点ごとの撮影回数において当該種 (或いはグループ) が占める割合を示す。

表 2. 各季節における動物種（或いはグループ）の撮影回数およびRAI

Animal	Spring			Summer			Autumun		
	frequency	%*	RAI	frequency	%*	RAI	frequency	%*	RAI
Mammals									
sika deer	477	77.1	329.0	201	52.5	113.6	206	56.1	143.1
red fox	70	11.3	48.3	108	28.2	61.0	93	25.3	64.6
raccoon dog	37	6.0	25.5	63	16.4	35.6	55	15.0	38.2
brown bear	1	0.2	0.7	3	0.8	1.7	3	0.8	2.1
mountain hare	1	0.2	0.7	1	0.3	0.6	3	0.8	2.1
murids	1	0.2	0.7	0	0	0	0	0	0
Birds									
Eurasian woodcock	3	0.5	2.1	2	0.5	1.1	3	0.8	2.1
Columbidae	6	1.0	4.1	5	1.3	2.8	4	1.1	2.8
Paridae	19	3.1	13.1	0	0	0	0	0	0
Corvidae	4	0.6	2.8	0	0	0	0	0	0

*%は各季節ごとの撮影回数において当該種（或いはグループ）が占める割合を示す。

タヌキを除く動物の溜め糞場における行動

エゾシカ

シカが撮影された 884 回のうち、溜め糞場における行動が観察できたものは 32 回（約 4%）であった。観察された行動は、臭い嗅ぎ、および溜め糞場におけるタデ類およびハコベ類の摂食であった（図 1）。それぞれの行動を RAI 値で季節ごとに比較すると、臭い嗅ぎ行動は、春期に地点 B において最も多く見られ、夏期以降は少なかった（図 2）。摂食行動は、植物の高さが低かった A 地点では見られず、春期および秋期では地点 B、夏期では地点 C において多く見られた（図 2）。

キタキツネ

キツネが撮影された 271 回のうち、溜め糞場における行動が観察できたものは 20 回（約 7.4%）であった。観察された行動は、臭い嗅ぎ、摂食行動、探餌行動、マーキングであった（図 1）。

それぞれの行動を RAI 値で季節ごとに比較すると、臭い嗅ぎ行動は、春期に地点 C において最も多く見られたが、夏期にはどの地点においても見られず、秋期にも少なかった（図 2）。マーキングは地点 B において多く行われ、特に夏期に多かった（図 3）。撮影された動画の中には、タヌキが排糞をしたおよそ 8 分後に溜め糞場を訪れたキツネが臭いを嗅ぎ、マーキングする様子も観察すること

ができた。また地点 B では、1 回ずつではあったものの、溜め糞場における探餌および摂食（図 1、図 2）を観察することができた。

ヒグマ

本研究では、ヒグマが 7 回撮影された。そのうち 1 回ではあったものの、地点 C においてヒグマがタヌキの糞の臭いを嗅ぐ様子を観察することができた（図 2）。ヒグマは臭いを嗅いだ後、すぐに鼻を遠ざけ、進行方向を変えていた。

鳥類

鳥類では、ヤマシギ、ハト類、カラ類、カラス類の 4 者が計 46 回撮影された。このうちハト類を除く 3 者において、嘴で糞をつつき摂食する様子（図 1 にカラス類の例を示した）を計 22 回観察することができた。本行動の多くは、地点 C において春期に観察された（図 2）。特に、カラ類およびカラス類による摂食行動が多く、撮影された鳥類による摂食行動の約 91% を占めた。ヤマシギによる採食は、夏期において 1 回のみ観察された。

タヌキの溜め糞場利用

溜め糞場を利用するタヌキ個体数

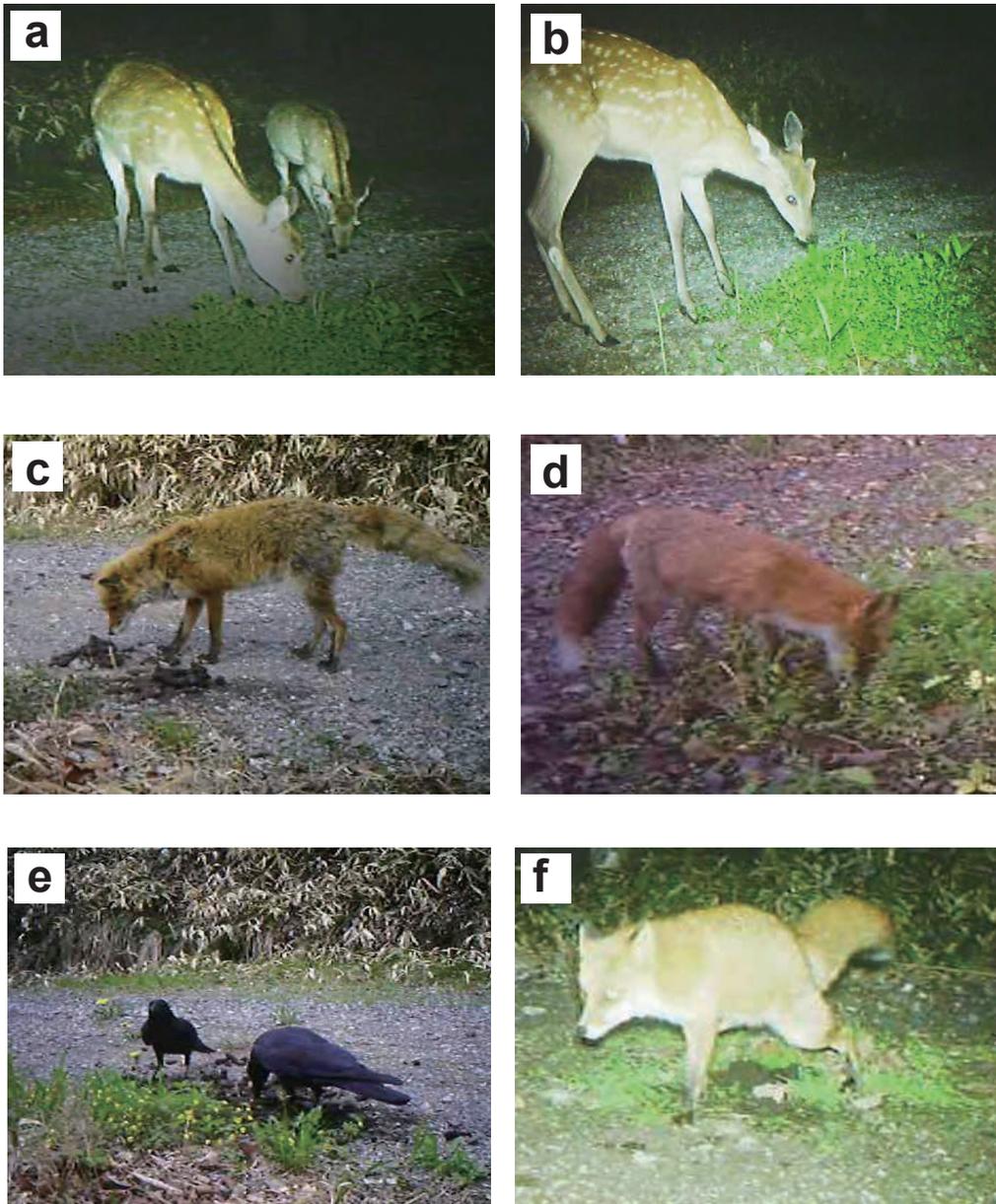
本研究では、各々の溜め糞場を利用するタヌキ個体数

を推定するため、タヌキの出現状況（同時に撮影された個体数等）、体サイズ、換毛の特徴等から個体識別を行った。地点Aでは、夏毛への換毛が見られるペア個体が撮影された2時間後に、冬毛が多く残った1個体が撮影された。またこの1個体とは別に、後頭部（耳介の後方部分）に傷跡のある個体が確認でき、これらを併せて少なくとも4個体による利用が推測された。地点Bでは、ペア個体が撮影された翌日に体サイズの一回り小さい3個体が撮影され、合計5個体による利用が推測された。地点C

では、ペア個体および1個体による利用が複数回撮影されたものの、排泄頻度が少なく個体識別は困難であったため、‘同時に撮影された最大個体数’として、少なくとも2個体による利用が推測された。

それぞれの溜め糞場において、タヌキは毎日排泄を行うわけではなく、同一個体と推定されるタヌキ個体が2日連続で撮影されることもあれば、数日間タヌキの訪問が撮影されないこともあり、タヌキによる溜め糞場利用は不規則であった。

図1. エゾタヌキの溜め糞場において撮影された動物の行動。a. エゾシカの臭い嗅ぎ行動, b. エゾシカの摂食行動, c. キタキツネの臭い嗅ぎ行動, d. キタキツネの摂食行動, e. カラス類の摂食行動, f. キタキツネのマーキング行動。



タヌキ溜糞場における他動物種の行動

図 2. エゾタヌキの溜め糞場において撮影されたエゾタヌキ以外の動物の臭い嗅ぎ行動 (a) および摂食行動 (b) の頻度. 撮影頻度はRAI (本文を参照) で示した. A, B, Cは各調査地点を意味する.

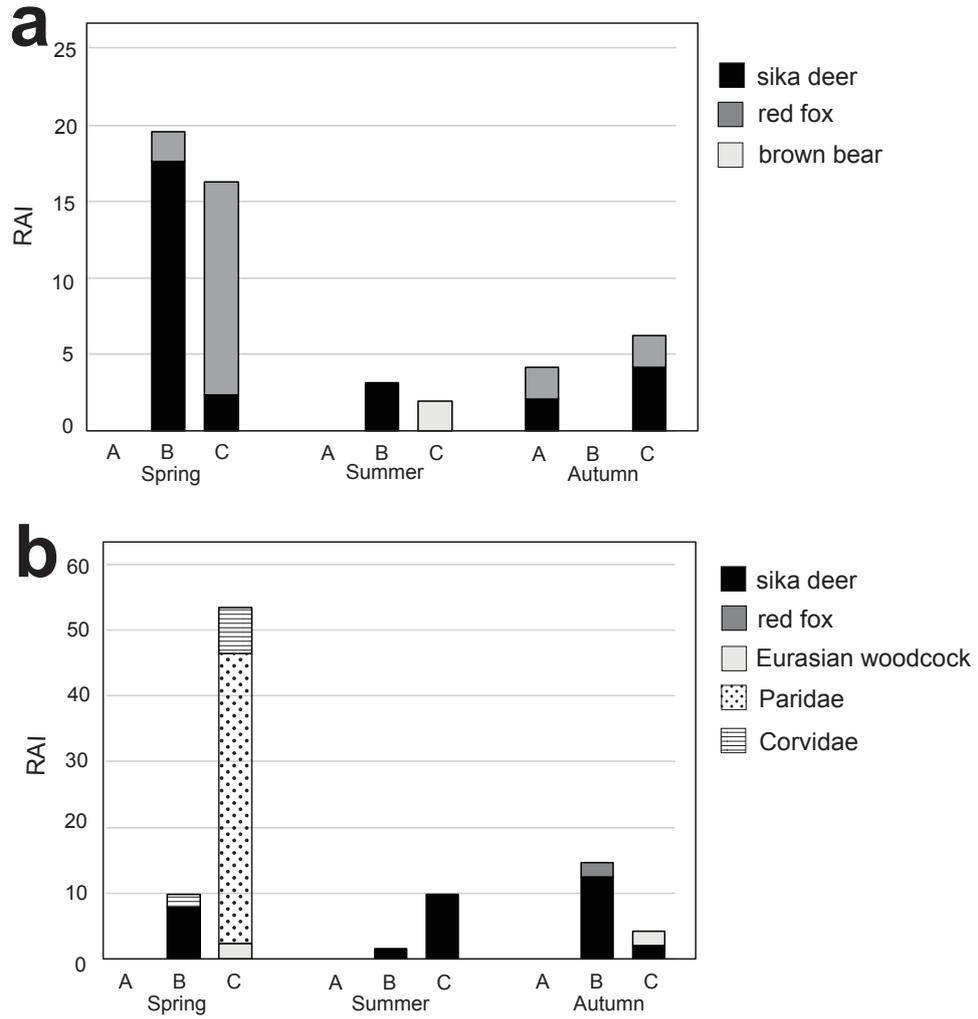


図 3. エゾタヌキの溜め糞場において撮影されたキタキツネのマーキング行動の頻度. 観察頻度はRAI (本文を参照) で示した. A, B, Cは各調査地点を意味する.

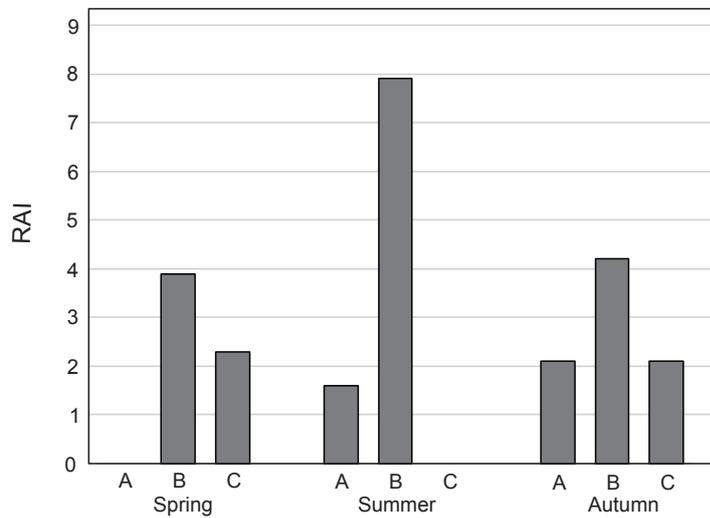
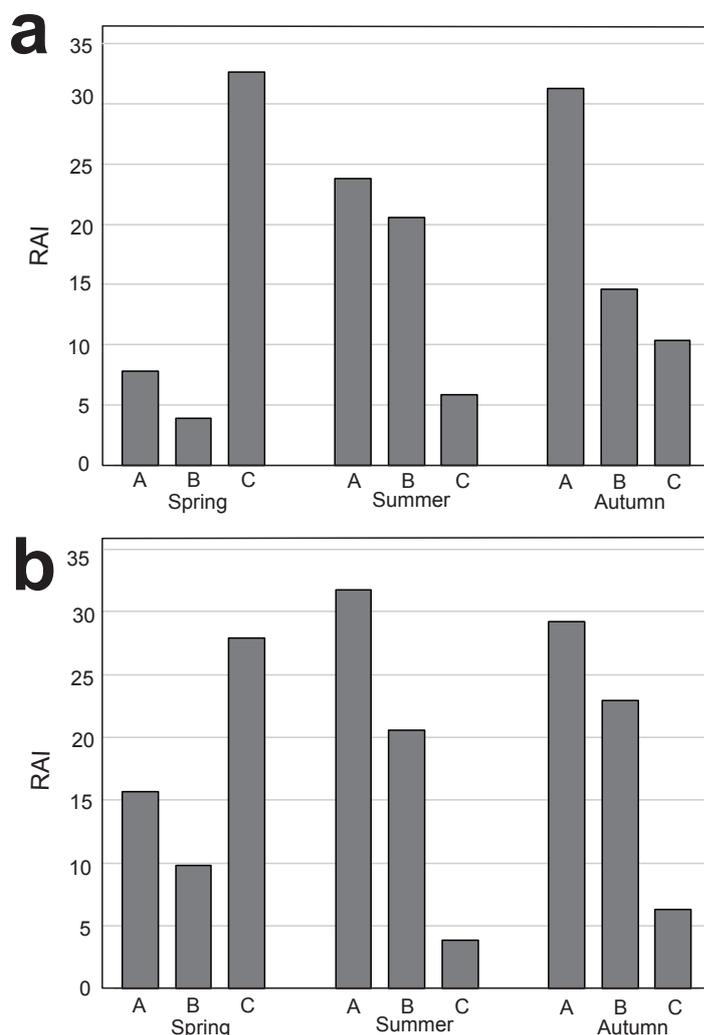


図4. エゾタヌキの溜め糞場において撮影されたエゾタヌキ排泄行動 (a) および臭い嗅ぎ行動 (b) の頻度. 撮影頻度はRAI (本文を参照) で示した. A, B, Cは各調査地点を意味する.



溜め糞場におけるタヌキの行動

本研究において、タヌキは155回撮影され、そのうち溜め糞場における行動が確認できたものは129回(約83%)であった。観察された行動は、排泄、臭い嗅ぎ、およびその他の行動であった。

各々の行動をRAI値で季節ごとに比較すると、溜め糞場におけるタヌキの排泄頻度は、地点Aでは春期において低かったが、夏期および秋期には高くなった(図4)。反対に、地点Cでは春期に排泄頻度が高かったが、夏期および秋期には低くなった(図4)。地点Bでは、夏期に

排泄頻度が高くなったものの、秋期には低下した(図4)。タヌキの臭い嗅ぎ行動は排泄行動と併せて行われることが多く、春期から夏期にかけては排泄頻度の増減に伴って変動したものの、夏期から秋期にかけて地点Aではわずかに減少し、地点Bでは増加した(図4)。

3地点を合計した排泄行動のRAI値は、春期では44.3、夏期では50.3、秋期では56.3であり、秋期の値が高くなった。臭い嗅ぎ行動についても、春期では53.4、夏期では56.2、秋期では58.3であり、排泄行動と同様、秋期の値が高くなった。

考 察

エゾタヌキを除く動物種の溜め糞場における行動

本研究では、タヌキを除く4種および2グループの溜め糞場における行動を観察することができた。溜め糞場における行動は各々の種やグループで異なり、溜め糞場が様々な動物によって多様に利用されていることが明らかとなった。

溜め糞場におけるエゾシカ、キタキツネ、ヒグマの臭い嗅ぎ行動

春期におけるシカの臭い嗅ぎ行動は地点Bにおいて、またキツネの臭い嗅ぎ行動は地点Cにおいて多く見られた(図2)。地点Cでは春期においてタヌキの排泄行動が多く観察されていたため、キツネの臭い嗅ぎ行動は新鮮な糞の臭いに誘引された結果であるかもしれない。しかしながら、シカの臭い嗅ぎ行動が多く見られた地点Bではタヌキの排泄頻度が低かった。また、地点Aおよび地点Bにおいてタヌキの排泄頻度が高くなった夏期および秋期には両種の臭い嗅ぎ行動が少なく、新鮮な糞の臭いが必ずしも他種の臭い嗅ぎ行動を引き起こすものではないと考えられる。他動物種の臭い嗅ぎ行動を引き起こす要因として、新鮮な糞であることの他に、タヌキの糞に含まれる物質の季節的な変化が関係しているのかもしれない。例えば、Nolte et al. (1994) は、捕食者の尿に対する齧歯類の嫌悪感、捕食者の摂食資源の変化に伴って変化することを報告している。タヌキの摂食資源も季節によって変化し(高槻 2016)、これに伴って排泄物に含まれる臭いに関連する物質も変化すると考えられる。そしてその結果、他動物種に対する糞の影響も変化するのかもしれない。

夏期において、地点Bでヒグマが溜め糞場の臭いを嗅ぐ行動を確認することができた。ヒグマは臭いを嗅いだ後、鼻を遠ざけ進行方向を変更させたがその行動学的な意味は不明であった。しかしながら、中型の食肉類であるキツネ等のみならず、大型食肉類のヒグマがタヌキの溜め糞場に関心を示すことが本研究で明らかになった。

溜め糞場におけるエゾシカ、キタキツネ、鳥類の摂食行動

本研究では、シカが溜め糞場においてタデ類およびハコベ類を摂食する様子を観察することができた。長野ら(2014)では、シカがタヌキの溜め糞場を避けて行動・採食することや、その結果として溜め糞場にシカ可食植物が残存する可能性が示唆されたが、本研究ではこのような忌避行動は見られず、反対に溜め糞場に生育する植物の摂食行動が認められた。二宮ら(2007)は、オオカミ *Canis lupus* の糞にはシカを含む草食獣に忌避効果をもたらす何らかの物質が含まれることを示唆している。今回はシカによる忌避行動は見られなかったが、長野ら(2014)でシカの忌避行動が示唆されたことから、タヌキの糞にもシカが嫌悪感を抱く何らかの物質が含まれているのかもしれない。これについては今後の検討課題であろう。

キツネでは、溜め糞場において探餌および摂食の様子を各1回確認することができた。明確な個体識別は出来ていないが、これらの行動は同日に地点Bで撮影されており、同一個体によるものであると考えられ、摂食が行われた約4時間後に探餌の様子が見られた。映像データから、キツネが何を摂食したかを特定することは困難であったが、咀嚼の様子からおそらく昆虫類であったと考えられる。地点Bではタヌキによる探餌行動も見られており、他の地点に比べて甲虫や糞虫などが糞塊に多く存在していたことが考えられる。溜め糞場を訪れたキツネがその存在に気づき、学習をした結果、再び同じ地点で探餌行動を行ったのかもしれない。

鳥類の溜め糞場における摂食行動は、春期に多く見られた(図4)。摂食行動が見られた鳥類(ヤマシギ、カラ類、カラス類)はいずれも雑食性であり(叶内 2014)、最も多く摂食行動が見られたカラ類については、鱗翅目の幼虫、双翅目の幼虫、および半翅目を採食資源として多く利用することが知られている(中村 1970)。また、動物の糞が多くの双翅目の発生源となる(Nishijima et al. 1979; Iwasa 2007)ことから、おそらくタヌキの糞中に存在していた双翅目の幼虫等をカラ類は摂食していたと

考えられる。また、鳥類による摂食行動のほとんどが春期に地点Cにおいて見られた要因として、春期は地点AおよびBにおいてタヌキの明確な排便行動が見られず、昆虫類の発生源である糞が十分に堆積していなかったためであると考えられる。

溜め糞場におけるキツネのマーキング行動

本研究では、キツネがタヌキの溜め糞でマーキングを行う様子を観察することができた。キツネのマーキング行動は地点Bにおいて多く見られ、特に夏期に多かった(図3)。キツネは警戒心が強く、移動しながら、切り株や岩の上など目立つ場所に頻繁にマーキングを行う(中園ら1989)。キツネの撮影回数は地点Bで夏期に最も多かった(表1、表2)ことから、キツネは地点Bを主要な移動経路として利用しており、移動途中で溜め糞場に対してマーキングを行っていたことが考えられる。

キツネがタヌキの溜め糞場にマーキングを行う理由は不明であるが、タヌキを含む他動物種に対して自身の存在を示すためであるかもしれない。マーキングには、生息地を共有する他個体に対して縄張りを示す役割(Buesching et al. 2019)や、個体間の優劣関係を維持する役割(正高1989)がある。キツネとタヌキでは、時として餌資源が重複する(増田ら2009)ことから、キツネはタヌキを競争相手として認識し、マーキングを行うことで、自身の存在および縄張りを示しているのかもしれない。すなわち、タヌキとキツネは溜め糞場を介して互いの存在を認識していると考えられる。

エゾタヌキの溜め糞場利用

タヌキの溜め糞場における排泄行動(情報を発信する頻度)および臭い嗅ぎ行動(情報を受信する頻度)の頻度は、季節によって変化し、また、地点ごとでも大きく異なる傾向を示したが、両者では類似したパターンが認められた(図4)。各地点を利用する個体数は異なっており、これが本研究の結果としてあらわれたのかもしれない。また、タヌキは行動圏の中に約10地点の溜め糞場を持っており、頻繁に利用される溜め糞場とそうでない

ものが存在する(Ikeda 1984)。そのため、溜め糞場ごとに個体の訪問頻度が不規則になる。今回の結果もこの不規則な溜め糞場利用を反映しているのかもしれない。両行動について、3地点でのRAI値を合計し、季節間で比較した結果、その値は秋期に最も高くなった。小泉ら(2017)では、秋期に溜め糞場における臭い嗅ぎ行動が増加し、情報交換が活発になることが報告されており、今回の結果はこれと一致していた。今回の研究では観察地点等が少なく一般傾向についてこれ以上の考察はできないが、季節による排泄行動および臭い嗅ぎ行動の変化は興味深い研究課題であろう。

結 論

本研究では、タヌキの溜め糞場において、シカ、キツネ、鳥類の摂食行動が確認され、これらの動物が溜め糞場を採餌の場として利用していることが明らかとなった。シカは溜め糞場に生育した草本植物を、また、キツネおよび鳥類ではタヌキの糞中に発生した昆虫類を摂食していることが示された。またキツネ、シカ、そしてヒグマの3種において、溜め糞場での臭い嗅ぎ行動が見られ、溜め糞場に対して関心があることが示唆された。キツネでは、溜め糞場における排尿行動が観察され、これはマーキングであると考えられた。シカおよびヒグマでは排泄行動が見られなかったため、タヌキの情報が一方的に収集されただけであったが、キツネとタヌキは溜め糞場を介して情報を共有していることが示唆された。溜め糞場におけるタヌキの排泄頻度は利用するタヌキの個体数、季節、地点などによって変化し、それによって溜め糞場の規模も変化すると考えられる。タヌキ以外の動物たちは、そのような溜め糞場の状況の変化を汲み取りながら、適宜利用しているのかもしれない。

謝 辞

本研究を行うにあたり、お世話になった九州大学北海道演習林のスタッフの皆様へ深く感謝する。そして、暖

かい御指導を頂いた帯広畜産大学野生動物管理学研究室の柳川久教授、浅利裕伸准教授、および同大保全科学研究室の赤坂卓美助教、さらに各研究室の皆様深く感謝したい。

引用文献

- Buesching CD, Newman C, Katrina S, Macdonald DW, Riordan P. 2016. Latrine marking patterns of badgers (*Meles meles*) with respect to population density and range size. *Ecosphere* 7(5) : e01328.
- Desbiez ALJ, Kluyber D. 2013. The role of giant armadillos (*Prionomys maximus*) as physical ecosystem. *Biotropica* 45: 537-540.
- Di Blanco YE, Desbiez ALJ, di Francescantonio D, Di Bitetti MS. 2020. Excavations of giant armadillos alter environmental conditions and provide new resources for a range of animals. *Journal of Zoology* 311: 227-238.
- 福田秀志, 高山元, 井口雅史, 柴田叡弼. 2008. カメラトラップ法で明らかにされた大台ヶ原の哺乳類相とその特徴. *保全生態学研究* 13: 265-274.
- Ikeda H. 1984. Raccoon dog scent marking by scats and its significance in social behaviour. *Journal of Ethology* 2 : 77-84.
- Iwasa M. 2007. Review of the flies (Diptera) associated with animal dung and human feces in Japan. *Medical Entomology and Zoology* 58: 155-166.
- 叶内拓哉. 2014. 日本の野鳥新版(山溪ハンディ図鑑)(安部直哉編). 671 pp. 山と溪谷社, 東京.
- 小泉璃々子, 酒向貴子, 手塚牧人, 小堀 睦, 斎藤昌幸, 金子弥生. 2017. 東京都心部の赤坂御用地におけるタヌキの溜め糞場における個体間関係. *フィールドサイエンス* 15: 7-13.
- Lumkes RA, Day CC, Zollner PA. 2019. Behavioral response of the mammalian community to river otter latrine activity. *American Midland Naturalist* 182: 75-88.
- 正高信男. 1989. 霊長類の臭いによるコミュニケーションについて. *霊長類研究* 5: 121-128.
- 増田隆一, 福江佑子, 谷地森秀二, 浦口宏二. 2009. タヌキとキツネの多様性科学. *哺乳類科学* 49: 137-141.
- 宮崎雅雄. 2016. 哺乳動物の嗅覚コミュニケーション. *におい・かおり環境学会誌* 47: 25-33.
- 水谷瑞希, 三ツ橋士郎. 2018. 志賀高原ガイド組合による自動撮影カメラを用いた中・大型哺乳類相調査. *志賀自然教育研究施設研究業績* 55: 17-23.
- 長野 秀美, 福本 繁, 高柳 敦. 2014. シカ可食植物のレフュージアとして機能するタヌキのため糞場. 第125回日本森林学会大会講演要旨集: 118.
- 中村登流. 1970. 日本におけるカラ類群集構造の研究, II 採食場所, 食物の季節的変動および生態的分離. *山科鳥類研究所研究報告* 6: 141-169.
- 中園敏之・土肥昭夫. 1989. 哺乳類の捕獲法. *哺乳類科学* 29: 43-51.
- 二宮茂, 金田菜美, 安部直重, 佐藤衆介. 2007. ニホンジカ・ウシ・ヒツジにおけるオオカミ糞による摂食忌避効果. *日本家畜管理学会・応用動物行動学会誌* 43: 36-37.
- Nishijima Y, Iwasa M. 1979. Flies occurring from wild brown bear dungs in Hokkaido. *Medical Entomology and Zoology* 30: 355-359.
- Nolte DL, Mason JR, Epple G, Aronov E, Campbell DL. 1994. Why are predator urines aversive to prey? *Journal of Chemical Ecology* 20: 1505-1516.
- Osugi S, Trentin BE., Koike S. 2020 What determines the seedling viability of different tree species in raccoon dog latrines? *Acta Oecologica* 106: 103604.
- R Core Team. 2020. R : A language and environment

- for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. DOI : <https://www.R-project.org/>.
- ・白井亮久. 2017. 武蔵学園構内におけるホンダヌキの生息状況～“守衛さん”の巡回による目撃情報と痕跡調査に基づく2016年度の記録と過去の聞き取り調査～. 武蔵高等学校中学校紀要 2: 33-80.
 - ・Stewart PD, Macdonald DW, Newman C, Tattersall FH. 2002. Behavioural mechanisms of information transmission and reception by badgers, *Meles meles*, at latrines. *Animal Behaviour* 63: 999-1007.
 - ・Swihart RK. 1991. Modifying scent-marking behavior to reduce woodchuck damage to fruit trees. *Ecological Applications* 1: 98-103.
 - ・高槻成紀. 2016. タヌキ学入門 : かちかち山から 3.11 まで身近な野生動物の意外な素顔. 239 pp. 誠文堂新光社, 東京.
 - ・手塚牧人, 遠藤秀紀. 2005. 赤坂御用地に生息するタヌキの溜め糞場利用と食性について. 国立科学博物館専報 39: 35-46.
 - ・辻大和, 布施未恵子. 2013. 霊長類を巡る種間関係 : 特集記事の趣旨説明. *霊長類研究* 29: 83-86.
 - ・浦口宏二, 高橋健一. 1997. 養豚場の畜産廃棄物に対するキタキツネの摂食行動. *日本家畜管理学会誌* 32: 75-82.
 - ・Yamamoto I. 1984. Latrine utilization and feces recognition in the raccoon dog. *Journal of Ethology* 2 : 47-54.
- between various organisms must be elucidated. In ecosystems, there are often indirect interspecific interactions between organisms, which occur without direct contact. For instance, it is suspected that the latrines (fecal masses) of Japanese raccoon dogs, which are frequently found in the forests of Hokkaido, Japan, are avoided by sika deer would have avoided the latrines (fecal masses). To clarify the effects of these latrines on the ecosystem, automatic video cameras were used to observe the behaviors of wild animals at the latrines from May 5 to October 18, 2021, in the Hokkaido Research Forest of Kyushu University, Ashoro, Hokkaido, Japan. We successfully recorded the behaviors of sika deer, red fox, brown bear, mountain hare, murids, Eurasian woodcock, Columbidae, Paridae, and Corvidae. Of them, we successfully recorded the behaviors of sika deer, red fox, brown bear, Eurasian woodcock, Paridae, and Corvidae. The sika deer, red fox, and brown bear smelled the latrine, showing their interests in the Japanese raccoon dog fecal information. The latrines also provided food resources for other animals, as the sika deer fed on the grasses growing in the latrine, and the red fox, Eurasian woodcock, Paridae, and Corvidae consumed insects in the fecal masses. Moreover, the red fox showed ‘marking behavior’ for the latrine, suggesting that the Japanese raccoon dog and red fox may use them to share information. The results indicate that the latrines of Japanese raccoon dogs are useful to other animals and indirectly affect their behaviors.

Effects of Japanese raccoon dog (*Nyctereutes viverrinus albus*) latrines on the behaviors of other animals in their ecosystem

To understand how the community structures are maintained within ecosystems, the complicated relationships

北海道の標津町における アカギツネのエキノコックス感染率の季節変化

櫻井祐奈¹・和田直人²・長田雅裕²・大手優裕²

赤坂卓美³・孝口裕一⁴・浦口宏二⁴・押田龍夫¹

(受付：2022年3月28日，受理：2022年7月25日)

Seasonal change of the infectious rate of alveolar echinococcosis in red foxes in Shibetsu, Hokkaido, Japan

Yuna SAKURAI¹, Naoto WADA², Masahiro OSADA², Masahiro OHTE²

Takumi AKASAKA³, Hirokazu KOUGUCHI⁴, Kohji URAGUCHI⁴, Tatsuo OSHIDA¹

摘 要

エキノコックス症は、エキノコックス属条虫の幼虫がヒトの肝臓等に寄生することにより引き起こされる人獣共通感染症である。北海道では、駆虫薬（プラジカンテル）を含有したベイトを野外に散布し、これを終宿主であるアカギツネへ摂食させることでその感染率を低減させる試みが行われており、効率的なベイト散布計画の立案は重要な課題である。感染率低減のためには、まずベイト散布予定地域のアカギツネの感染状況を把握することが重要である。これによって、ベイトを散布する場所や量などの決定に役立つ情報を得ることができ、また、ベイト散布後の効果を明らかにすることも可能であると期待される。また先行研究において、終宿主へのエキノコックス感染は、季節および成育段階等によって変化することが示唆されているが、北海道におけるその実態は不明である。そこで本研究では、アカギツネの生活史を考慮したエキノコックス感染率の季節変化を明らかにすることを試みた。標津町を調査地とし、2020年において、アカギツネの育仔期（5～7月）と独立分散期（9～10月）に糞の採集を行った。糞サンプルからDNAを抽出し、PCR法を用いてエキノコックス感染の有無を判断した。その結果、68サンプル中5サンプルがエキノコックス陽性であった。感染率は、育仔期で0%であったが、独立分散期で23.8%となり、

¹帯広畜産大学野生動物学研究室

¹Laboratory of Wildlife Biology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

²標津町役場

²Shibetsu Town

³帯広畜産大学保全生態学研究室

³Laboratory of Conservation Ecology, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

⁴北海道立衛生研究所感染症部

⁴Department of Infectious Disease, Hokkaido Institute of Public Health

連絡先：押田龍夫，oshidata@obihiro.ac.jp

Address correspondence: Tatsuo OSHIDA, oshidata@obihiro.ac.jp

キツネの感染に季節変化があることが示唆された。また、陽性糞の採集場所が標津町北部に偏っていたことから、独立分散期において、この地域へ感染個体が一時的に移入した影響である可能性も示された。若齢のキツネはエキノコックスの分散において重要な役割を持つと言われており、若齢個体の移動が多くなる独立分散期におけるベイト散布は、感染予防上効果的であるかもしれない。そして、地域的な感染率を正確に判断するためには、長期的なモニタリングを継続して実施することが必要であろう。

キーワード：駆虫薬（ブラジカンテル）、多包条虫、生活史

緒 論

エキノコックス症は、日本では感染症法4類に区分される人獣共通感染症であり、エキノコックス属 *Echinococcus* 条虫の幼虫がヒトの肝臓等に寄生することにより引き起こされる（国立感染症研究所 2001；高橋 2007）。北海道では、多包条虫 *E. multilocularis* の感染による発症が多く見られ、主にアカギツネ *Vulpes vulpes*（以下、キツネ）を介してヒトへ感染する（山下ら 1997；浦口 2008）。エキノコックスの嚢胞は、ヒトの肝臓等において緩慢に増大するため、自覚症状が現れるまで通常10年以上を要し、放置すると死に至る（神谷 2004）。

北海道におけるキツネのエキノコックス感染率は、平成28年において34.7%と報告されており（谷口ら 2019）、ヒトへの感染予防が重要な課題となっている。しかしながら、野外におけるエキノコックスの感染環は、終宿主であるキツネと中間宿主であるネズミ類との間で維持されており（塚田 2005；高橋 2007）、これらの宿主の駆除や管理によって本条虫を根絶することは困難である（北海道保健福祉部 2007）。そこで北海道では、駆虫薬（ブラジカンテル）を含有したベイトを散布し、媒介動物となるキツネに摂取させる試みが行われている（高橋ら 2010；八木 2017）。キツネのエキノコックス感染率を低減させることができれば、ヒトへの感染の機会も減少させることができると期待され、キツネへの効率的なベイト散布計画を立案することは重要な課題である。

このためには、まずベイト散布予定地域のキツネの感染状況を把握することが重要であろう。感染状況を事前に調べることにより、ベイトの散布場所や散布量などを決定する情報としてこれを活用でき、また、ベイト散布後の効果を明らかにすることもできると期待される。キツネの感染率を調べるためには、糞便中に排出されたエキノコックスの虫卵（以下、虫卵）を抗原としたELISA法、および虫卵からそのDNAを抽出し、PCR法によって感染の有無を検出する方法がある（Mathis et al. 1996）。前者の方法を用いて行われた北海道の小清水町でのキツネの研究では、冬期から春期にかけて、および夏期において感染率が高くなることが報告されている（Morishima et al. 1999）。さらに、後者の方法を用いた北米のコヨーテ *Canis latrans*（Liccioli et al. 2014）や中国のチベット地方の飼イヌ *Canis lupus familiaris*（Wang et al. 2016）を対象とした研究においても、冬期から春期にかけて感染率が高くなる傾向が見られている。また、捕殺したキツネの消化管から直接エキノコックス虫体を検出する方法を用いた研究では、1歳未満の若齢個体の方が成獣個体と比べて感染率が高いこと、および感染するエキノコックスの虫体量が多いことが報告されている（Hofer et al. 2000；Comte et al. 2017）。

このように終宿主におけるエキノコックス感染には、季節および終宿主の成育段階といった時間的な変化との関連性が示唆されているものの、北海道におけるその実態については明らかになっていない。キツネは季節に応

じてその生活史を変化させ、1月～3月は交尾期、3月～5月は出産期、5月～8月は育仔期、9月～10月は独立分散期、そして11月～12月は越冬準備期となる（鈴木ら 1983；塚田 1994；）。従って、キツネの生活史の変化に伴いエキノコックスの感染状況も大きく変化する可能性が考えられるかもしれない。例えば、移動が少ないと予測される育仔期には感染の拡大は起こらず、一方、若齢個体の独立分散期には、感染が急速に拡大する傾向が見られるかもしれない。また、感染の拡大には、虫卵が野外環境において生残することが必須であるが、北海道における夏期の高温はエキノコックスの虫卵に壊滅的な作用を及ぼすことが報告されている（石下ら 1993）。Morishima et al. (1999) では、夏期に高い感染率が見られたと報告されているが、夏期平均気温が変化（上昇）した場合、虫卵が死滅することで夏期における陽性率は低下し、一方、秋期以降は陽性率が相対的に上昇する傾向が見られるかもしれない。

そこで本研究では、キツネおよびエキノコックス虫卵に影響を与える季節性を考慮して、“夏期を中心としたキツネ育仔期”と“秋期におけるキツネの独立分散期”にキツネの糞を採集し、エキノコックス感染率の季節変化を分子糞便学的に明らかにすることを試みた。キツネの生活史の変化に基づいた効率的なペイトの散布について議論する。

方法

1. 調査地

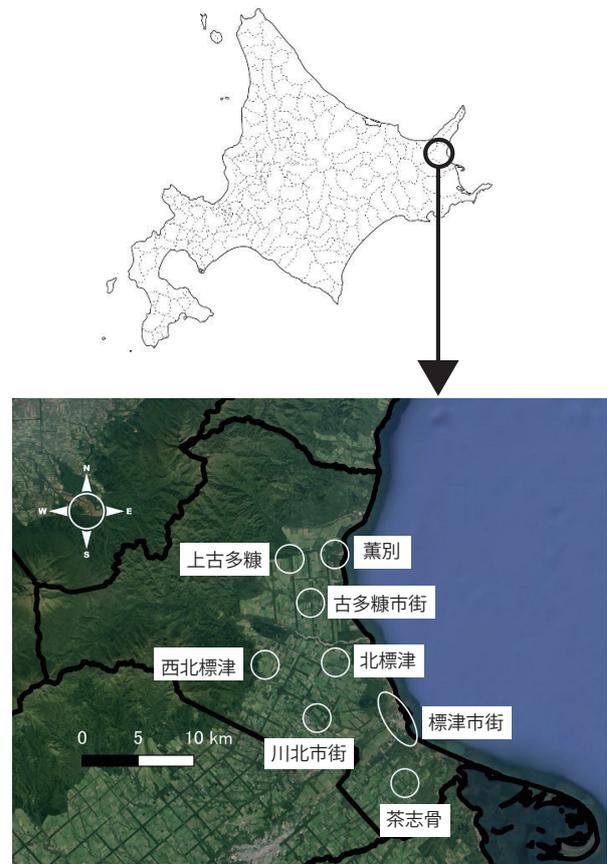
北海道標津郡標津町を本研究の調査地と定めた。標津町では、これまでにペイト散布が実施されておらず、過去の人為的な感染率低減の影響を考慮せずにキツネの感染率を把握することが可能である。このため、本研究の調査地として格好の場所であると判断した。

2. 糞の採集

糞の採集は、2020年において、キツネの育仔期である5月～7月、および独立分散期である9月～10月の2期

に分けて行った。採集場所は市街地を一部含む標津町の農地であり、4km×4kmの採集区を8ヶ所（上古多糠、薫別、古多糠市街、西北標津、北標津、川北市街、標津市街、茶志骨）設けた（図1）。目視により糞を探し、発見した糞はチャック付きポリ袋へ入れ密閉した後-30℃にて約3ヶ月間保存した。

図1. 調査地およびアカギツネ *Vulpes vulpes* の糞サンプルの採集場所（北海道標津町）



3. 糞からの DNA 解析

キツネの消化管粘膜に定着したエキノコックスの成虫は、受胎片節に産卵し、この受胎片節が消化管内に脱落することで糞便中に虫卵が出現する（奥 2010）。このため、消化管粘膜部位と接触する糞の外表部位をサンプルとして使用した。DNA 抽出キット（QIAamp Fast DNA Stool Mini Kit, QIAGEN）を用いて糞から DNA を抽出し、4℃にて保存した。抽出方法については本キットのプロトコールに従った。

外観のみからキツネの糞をイヌやエゾタヌキ *Nyctereutes viverrinus albus* 等の糞と区別することは困難である。そこで、キツネの糞を識別するために、Shimatani et al. (2008) によって報告されたキツネのミトコンドリア DNA コントロール領域塩基配列を特異的に増幅するプライマーセット (以下) を用いて PCR 法による同定を行った。

fox-F1 : 5' -TGCATTACTGCTATGCCCCATA-3'

fox-R1 : 5' -TGATAGAAACCCACGTTG-3'

PCR 反応液 (50 μ l) は、滅菌蒸留水 (38.5 μ l)、10 \times PCR Buffer (5 μ l)、dNTP mixture (4 μ l)、DNA 抽出産物 (100ng)、各プライマー (0.25 μ M)、*rTaq* (2.5 ユニット) (Takara, Tokyo) とし、これに 0.008% ウシ血清アルブミン (BSA, ロシユ・ダイアグノスティクス株式会社) を 0.3 μ l を加えた。反応条件は、熱変性を 94 $^{\circ}$ C で 1 分間、アニーリングを 60 $^{\circ}$ C で 1 分間、伸長を 72 $^{\circ}$ C で 1 分間とし、反応回数は 45 回とした。2% アガロースゲルにて電気泳動を行い、増幅が認められた場合、キツネの糞であると判断した。キツネの糞であると特定された糞から抽出した DNA を用いて、Nonaka et al. (2008) および Irie et al. (2017) に従い、エキノコックスのチトクロム C オキシターゼ・サブユニット I (COX1) 遺伝子の塩基配列を特異的に増幅するプライマーセット (以下) を用いて、PCR 法による感染の有無の判定を試みた。また、PCR 実施時には、コントロールとしてエキノコックス成虫から抽出された DNA を用いた。

EmSP1-A' : 5' -GTCATATTGTTAAGTATAAGTGG-3'

EmSP1-B' : 5' -CACTCTATTACTAGAAATTAAG-3'

PCR の反応液組成については前述のキツネ識別時のものと同様であった。反応条件は、熱変性を 94 $^{\circ}$ C で 1 分間、アニーリングを 45 $^{\circ}$ C で 1 分 30 秒間、伸長を 72 $^{\circ}$ C で 1 分間とし、反応回数は 50 回とした。反応終了後、2% アガロースゲルにて電気泳動を行い、増幅が見られた糞を陽性、見られなかった糞を陰性と判断した。

4. 分析方法

全サンプル数に対する全陽性サンプル数の割合 (調査

期間全体における感染率) を算出した。そして、育仔期と独立分散期の各々において、採集したサンプル数に対する陽性サンプルの割合を感染率として算出した。また、両期の間におけるエキノコックス陽性サンプル数の変化について、Fisher の正確確率検定を用いて比較した。

結 果

育仔期において 55 サンプル、独立分散期において 21 サンプルの糞を採集することができた。PCR 法による解析の結果、育仔期で 47 サンプル、独立分散期で 21 サンプル全てがキツネの糞であった。このうちエキノコックス陽性の糞は、育仔期で 0 サンプル、独立分散期で 5 サンプルであり、各々の感染率は 0% および 23.8% となった。感染率については、育仔期と独立分散期との間に有意な差が認められた ($P < 0.01$)。

両期間を合わせた全体の感染率は 7.4% だった。採集された場所については、陽性と判断された糞は 8ヶ所のうち、上古多糠と薫別からのみ確認され、標津町北部に偏っていた。

考 察

本研究において採集した計 68 サンプルのキツネの糞のうち、5 サンプルの糞からエキノコックスの DNA が検出されたことから、標津町には本寄生虫が存在することが明らかになった。また、育仔期と独立分散期とで感染率に差が見られたことから、先行研究で報告 (Morishima et al. 1999; Liccioli et al. 2014; Wang et al. 2016) されているように、終宿主のエキノコックス感染には季節的な変化があることが改めて示唆された。従って、キツネの感染率が高くなる 9 月~10 月の独立分散期にベイトを散布することで、より高い感染率低減効果を期待することができるかもしれない。加えて、成獣のキツネと比較した場合、感染率が高く、感染虫体量も多い若齢のキツネは、エキノコックスの分散において重要な役割を担うことが示唆されている (Hofer et al.

2000; Comte et al. 2017)。このため、感染拡大能が高い若齢個体を標的とした独立分散期におけるベイト散布は、よりその実施効果を向上させるかもしれない。

本研究において、育仔期の感染率は0%、独立分散期の感染率は23.8%という結果になった。そして、感染率の高くなった独立分散期において、陽性と判断された糞の採集場所は、上古多糠と薫別のみであり、標津町の北部に偏っていた(図1)。これらのことをあわせて考えると、標津町におけるキツネのエキノコックス感染は地域全体で流行しているわけではなく、独立分散期というキツネの移動が盛んな時期に、エキノコックス感染個体が標津町北部へ移入して来た結果を反映しているだけであるかもしれない。しかしながら、キツネの分散距離は地域により数km～数百kmと変異に富んでいるため(増田ら2009)、感染個体が標津町でエキノコックスに感染したのか、もしくはその他の地域で感染したのかは不明である。従って、キツネの感染率が低い状況にあっても、感染キツネ個体の存在および侵入を想定し、ベイト散布などの対策は実施するべきであろう。そして、感染率を正確に把握するためには、一時的な移入個体の出現可能性も含め、長期的なモニタリングが必要であろう。

本研究において、育仔期における感染率は0%であったが、これまでに北海道の道東地域で実施されたキツネの感染調査では、常に感染個体が検出されている(Morishima et al. 1999; Tsukada et al. 2002)。このことから、本研究の結果はキツネの生活史とは異なった要因により影響を受けている可能性も考えられる。一つの可能性として、糞中DNAの劣化を挙げることができるかもしれない。育仔期の初めにあたる5月は春の雪解け直後であり、この時期に採集された糞は、当年のものではない古い糞が混入していた可能性があるかもしれない。また、夏季において採集された糞では、高温のため、虫卵が死滅し、DNAも分解されていた可能性が考えられる。実際に、育仔期と独立分散期に採集された糞のキツネ識別成功率は、それぞれ85%と100%であり、育仔期の方が低く、これに関してもDNAの劣化が原因である可能性が考えられる。今後分子糞便学的な手法を用いたキ

ツネの感染率調査を行う際には、新鮮な糞を厳選して採集する必要があるだろう。

謝 辞

本研究を行うにあたり、お世話になった標津町および北海道立衛生研究所の皆様にご心より御礼申し上げます。終始御指導を承った、野生動物管理学研究室の柳川久教授、浅利裕伸准教授にご心から感謝したい。また、同大学野生動物研究室の学生の皆様、その他学生の皆様には、多くのサポートや助言、激励を頂いた。この場を借りて深く感謝申し上げます。

引用文献

- Comte S, Umhang G, Raton V, Raoul F, Giraudoux P, Combes B, Boue F. 2017. *Echinococcus multilocularis* management by fox culling: An inappropriate paradigm. Preventive Veterinary Medicine 147: 178-185.
- Hofer S, Gloor S, Muller U, Mathis A, Hegglin D, Deplazes P. 2000. High prevalence of *Echinococcus multilocularis* in urban red foxes (*Vulpes vulpes*) and voles (*Arvicola terrestris*) in the city of Zurich, Switzerland. Parasitology 120: 135-142.
- 北海道保健福祉部 2007. キツネの駆虫に関するガイドラインーエキノコックス症対策ー. <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/kth/kak/grp/02/ech-gl-honbun.pdf>
- Irie T, Ito T, Kouguchi H, Yamano K, Uruguchi K, Yagi K, Nonaka N. 2017. Diagnosis of canine *Echinococcus multilocularis* infections by copro-DNA tests: comparison of DNA extraction techniques and evaluation of diagnostic deworming. Parasitology Research 116: 2139-2144.
- 石下真道, 伊東拓也, 八木欣平. 1993. 多包条虫卵

- の寿命とその温度条件. 北海道衛生研究所報. 43: 49-51.
- ・神谷正男. 2004. エキノコックス症の危機管理へ向けてー現状と対策ー. 日本獣医師会雑誌 57: 605-611.
 - ・国立感染症研究所. 2001. エキノコックス症とは. IDWR: 48 <https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansenohanashi/338-echinococcus-intro.html>
 - ・Liccioli S, Kutz SJ, Ruckstuhl KE, Massolo A. 2014. Spatial heterogeneity and temporal variations in *Echinococcus multilocularis* infections in wild hosts in a North American urban setting. *International Journal for Parasitology* 44: 457-465.
 - ・増田隆一, 福江佑子, 谷地森秀二, 浦口宏二. 2009. タヌキとキツネの多様性化学. 哺乳類科学 49: 137-141.
 - ・Mathis A, Deplazes P, Eckert J. 1996. An improved test system for PCR-based specific detection of *Echinococcus multilocularis* eggs. *Journal of Helminthology* 70: 219-222.
 - ・Morishima Y, Tsukada H, Nonaka N, Oku Y, Kamiya M. 1999. Coproantigen survey for *Echinococcus multilocularis* prevalence of red foxes in Hokkaido, Japan. *Parasitology International* 48: 121-134.
 - ・Nonaka N, Hirokawa H, Inoue T, Nakano R, Ganzorig S, Kobayashi F, Inagaki M, Egoshi K, Kamiya M, Oku Y. 2008. The first instance of a cat excreting *Echinococcus multilocularis* eggs in Japan. *Parasitology International* 57: 519-520.
 - ・奥 祐三郎. 2010. 人獣共通寄生虫のエキノコックス症. 19 pp. 社団法人中央畜産会, 東京.
 - ・Shimatani Y, Takeshita T, Tatsuzawa S, Ikeda T, Masuda R. 2008. Genetic identification of mammalian carnivore species in the Kushiro Wetland, Eastern Hokkaido, Japan, by analysis of fecal DNA. *Zoological Science* 25: 714-720.
 - ・鈴木延夫, 池田透, 岡野美佐夫. 1983. キタキツネの繁殖形態における多様化. 哺乳類科学 47: 1-12.
 - ・高橋健一. 2007. 野生哺乳類におけるエキノコックス流行の現状と対策. 哺乳類科学 47: 168-170.
 - ・高橋健一, 浦口宏二, 阿部茂, 平川浩文. 2010. キツネ用試作ベイトとその摂食に関する検討. 北海道立衛生研究所所報 60: 81-82.
 - ・谷口萌, 澁谷辰生, 浅川満彦. 2019. 北海道道東の厚岸湖・別寒辺牛湿原内および周辺域に生息する肉食獣の寄生虫保有状況. 北海道獣医師会誌 63: 175-177.
 - ・塚田英晴. 1994. 知床国立公園におけるキタキツネの生態およびその自然教育への活用に関する調査報告書. 知床博物館研究報告 15: 63-82.
 - ・塚田英晴. 2005. キツネの摂取行動とエキノコックス症. 哺乳類科学 45: 91-98.
 - ・Tsukada H, Hamazaki K, Ganzorig S, Iwaki I, Konno K, Lagapa JT, Matsuo K, Ono A, Shimizu M, Sakai H, Morishima Y, Nonaka N, Oku Y, Kamiya M. 2002. Potential remedy against *Echinococcus multilocularis* in wild red foxes using baits with anthelmintic distributed around fox breeding dens in Hokkaido, Japan. *Parasitology*, 125: 119-129.
 - ・浦口宏二. 2008. 病気と生態ーキタキツネー. 高槻成紀, 山極寿一, 濱田穰, 金子弥生, 藤田志歩, 南正人, 浦口宏二, 落合啓二, 鈴木滋, 川本芳, 半谷吾郎, 岡田あゆみ, 岡村麻生, 佐伯緑, 間野勉, 池田透, 江口祐輔, 室山泰之編, 日本の哺乳類学②ー中大型哺乳類・霊長類, pp. 149-171. 東京大学出版会, 東京.
 - ・Wang Q, Yu WJ, Zhong B, Shang JY, Huang L, Renqingpengcuo, AM, Huang Y, Zhang GJ, He W, Giraudoux P, Wu WP, Craig PS. 2016. Seasonal pattern of *Echinococcus* re-infection in owned dogs in Tibetan communities of Sichuan, China and its implications for control. *Infectious*

Diseases of Poverty 5:60

DOI: 10.1186/s40249-016-0155-4.

- ・八木欣平. 2017. 北海道のエキノコックス症対策一行政の取り組みについて－. 北海道立衛生研究所所報 67: 1-7.
- ・山下次郎, 神谷正男. 1997. 増補版エキノコックス－その正体と対策. 274 pp. 北海道大学図書刊行会, 札幌.

Seasonal changes in echinococcosis infection rates in red foxes in Shibetsu, Hokkaido, Japan

Echinococcosis is a zoonotic disease caused by the metacestode stage of *Echinococcus multilocularis*, which is usually parasitic on liver in human body. In Hokkaido, Japan, its main definitive host is the red fox (*Vulpes vulpes*). To decrease the prevalence of *E. multilocularis* infection in red foxes, one effective strategy is to provide them with fox bait infused with anthelmintic praziquantel; the establishment of a more effective baiting method may therefore prove useful. Previous studies have suggested that infectious rates of the definitive host vary with its growth stages and seasons; however, in Hokkaido, the situation has not yet been clearly resolved.

A baiting campaign was carried out in Hokkaido. The infectious situation of red foxes in the targeted area before the initiation of the baiting campaign was determined. Based on the data acquired, the ideal localities for baiting and the appropriate amount of the bait could be determined with precision. Moreover, by comparing infectious rates between before and after baiting campaigns, the efficacy of the campaign could be evaluated.

Thus, considering red fox bionomics, we examined the changes in *E. multilocularis* infection rates in this species. We collected fecal samples of red foxes in Shibetsu, Hokkaido in 2020. To detect positive infections, we analyzed DNA

extracted from fecal samples using PCR. Of the 68 samples collected, 5 tested positive for echinococcosis. We established two life stages in red fox: growth (May to July) and dispersal (September to October) and compared the infection rates between the two stages. The infection rate was 0 % in growth stage, but, 23.8 % in the dispersal stage, suggesting that it varied seasonally. In addition, as the collecting points of positive samples were biased to the northern part of Shibetsu, newly immigrated individuals might have affected our results during the dispersal stage. A previous study suggested that young red foxes could play an important role in echinococcosis spread. Therefore, a baiting campaign during dispersal stage may more effectively decrease the prevalence of *E. multilocularis*. Additionally, to precisely identify the regional infection rate, its variation should be monitored for a long time.

関東大震災はいかに回想されたか (七)

——自伝に描かれた関東大震災——

柴 口 順 一

(帯広畜産大学人間科学研究部門)

二〇二二年四月二十八日受付

二〇二二年七月二五日受理

How was the Great Kanto Earthquake recollected? (7):
The Great Kanto Earthquake described in an autobiography
Junichi SHIBAGUCHI

はじめに

前稿では、東京中心部の港区と中央区の証言を見てきた。本稿では、最後に東京西部における記述を見ていくことにする。現行の二十三区の区分、名称にしたがうことはこれまでと同様である。町名も同じである。

なお、前稿までの目次を記しておく。

- (一)
- 1 海外——ヨーロッパ
- ドイツ——ベルリン・ハイデルベルク
- フランス——パリ
- 2 海外——アメリカ
- イギリス——ロンドン・オックスフォード
- スイス——リュシユロン
- アメリカ——ニューヨーク・シカゴ・ポコノ
- メキシコ——メキシコシティ
- 3 海外——アジア
- ロシア——ウラジオストク・ユジノサハリンスク
- 韓国——釜山・ソウル
- 台湾——台北・基隆
- 中国——錦州・上海
- シンガポール
- 4 海上

(二)

九州

熊本県——熊本市

大分県——大分市

福岡県——北九州市

鹿児島県——鹿児島市

中国・四国

山口県

広島県——広島市・呉市

岡山県——岡山市

愛媛県——宇和島市

7 近畿

兵庫県——神戸市

大阪府——大阪市・豊中市

京都府——京都市・宮津市

滋賀県——彦根市

奈良県——奈良市

和歌山県——新宮市

三重県——伊勢市

8 中部

愛知県——名古屋

静岡県——静岡市

長野県——軽井沢町・松本市

富山県——高岡市

9 東北・北海道

福島県——福島市・会津若松市

宮城県——仙台市

山形県——米沢市・鶴岡市

(三)

10 関東

群馬県——高崎市・渋川市

栃木県——宇都宮市・那須烏山市

千葉県——市川市・千葉市・九十九里町・山武市・南房総市

埼玉県——さいたま市・川越市・所沢市

神奈川県——箱根町・小田原市・大磯町・鎌倉市・横須賀市・横浜市

(四)

11 東京——西部

大田区——大森北・大森

品川区——北品川・上大崎

世田谷区——新町・世田谷・三軒茶屋・下馬・三宿

杉並区——堀ノ内

中野区——中央・東中野

渋谷区——広尾・円山町・神泉町・松濤・代々木・千駄ヶ谷

豊島区——雑司が谷・池袋

北区——滝野川・田端

12 東京——中心部 I

新宿区——須賀町・大京町・新宿・西新宿・北新宿・大久保・富久町・

余丁町・原町・市谷本村町・市谷砂土原町・北町・神楽坂・

赤城元町・早稲田南町・早稲田鶴巻町・高田馬場

(五)

13 東京——中心部 II

文京区——千石・本駒込・小日向・小石川・後楽・本郷

14 東京——中心部 III

千代田区——飯田橋・神田神保町・一ツ橋・神田小川町・猿樂町・

(六)

神田駿河台・外神田・大手町・丸の内・有楽町・内幸町
日比谷公園・霞が関・平河町・麴町・三番町

15 東京——中心部 IV

港区——北青山・南青山・赤坂・六本木・元麻布・南麻布・虎ノ門・

新橋・東新橋・芝大門・芝・三田・高輪

16 東京——中心部 V

中央区——銀座・築地・明石町・八丁堀・京橋・日本橋・日本橋兜町・

日本橋堀留町・日本橋本石町

17 東京——東部

江東区

山崎謙(注1)は木場にある叔父の家にいた。山崎は明治大学予科に席を置いていたが、入営を延期するための「もぐりの学籍」であったといっている。肺病を患い湯河原での療養から叔父の家に戻ったのが、八月三十一日の夜であった。明けて九月一日、「久しぶりでみんな顔をそろえて昼の卓をかこんでいると、突然あの驚天動地の大揺れである。」と記している。続けて、「そばに居あわせた幼い従妹を抱きあげて大いそぎで街頭へ飛びだして見ると、おもて通りの店舗は軒なみ将棋だおしである。上下動がつづくので立っていることができない。」と記されている。叔父の家は大きな燃料問屋で、川に沿って何棟もの倉庫が並び商品の輸送船が幾隻もつながれていた。女性と子供、そして山崎もその船に避難した。他の男たちは別の場所に移ったといっているが、なぜそうしたのは記されていない。山崎は肺病を患っていたからであるか。あるいは、女性と子供を守るために一人男性を残すということだったのかもしれない。だが、安全と思われた船に悲劇が襲った。「まもなく諸方から火災がおきた。地震はだんだん落ちついてきたが、夕刻になるとすさまじい旋風が巻きおこって、またたく間に船は火だる

まと化し、僕の必死の努力にもかかわらず、義叔母と従妹とは猛火の犠牲になってしまった。」と記されている。

だが、その時の状況はよく分らない。「業火に包まれていよいよ永久の別れを告げあわねばならなくなったいまわの際に義叔母が残した言葉、「とりかえしのつかない巻きぞえをゆるして頂戴ね」という辞世と、たつた三歳になったばかりの従妹の「熱いのよ、お母ちゃん！」と泣きさげんだ声とが耳について、僕をさいなんだ。」という記述からは、叔母と従妹が何らかの理由で動けなくなったと判断できる。そこに火が迫ってきたのでやむなく別れを告げ、山崎一人がそこを去ったのであろうか。しかし、叔母と従妹はその後焼死したということでもなさそうなのである。あとのことであらうが、「つめたくなつた義叔母と従妹との遺骸を前にした」山崎は、「一刻もすみやかに埋葬の礼をとらずにはいられない情念に駆り立てられた。」といっているからである。煙に巻かれて死に、遺骸は焼けなかったと解釈することもできるが、その辺の事情がはっきりしないのである。それはさておき、叔母と従妹に別れを告げた後の行動が記されている。

一旦は橋のうえまでのがれてみたが、火にとりまかれて五尺のからだの置きどころに窮してしまった。死を決して火中に身を投じたところ、焼け落ちる橋桁と共に水中へ転落した。泳ぎのできる者は水中では死にくいものである。水面を舐るように流れる焰を避けて川底へ沈んでも、苦しいから再びすぐに浮きあがってしまいます。こんなことを繰り返しているうちに、ようやく火勢も峠を越し、朝がやってきました。気がついてみると、あたりは死骸の海である。そうした阿鼻叫喚の巷に立たされた僕は、かぐわしい義叔母といたいけな従妹とを守りとおせず空手で生きのびた自分の腑甲斐なさに、胸の張り裂ける痛恨の遣り場を失い、しばし立ちすくんだまま身うごきもできなかった。

従妹は三歳になったばかりと記されていたが、叔母も三十三歳の若さであった。三瓶康子(注2)は新大橋にあった山村病院にいた。派出の看護婦をしていた三瓶は、八月三十一日の午後山村病院にやって来た。翌九月一日、昼食のベル

が鳴ったので食事を二階の病室へ運んだ。「急に夕立でも来る様な空模様で、大粒の雨がパラパラ降って来た。」とその時の天候が記されている。やがて眠っていた患者が目覚まし、「看護婦さん雨ですか」といったので廊下に出てみたら、「中庭の池の緋鯉がびんびんはねる様に泳いで、雨は直ぐ止んだ。」という。患者が食事をはじめた時である。「ゴー？ゴー？（はつきり覚えて居ない）異様な音がしたと思った瞬間、体を持ち上げられた様な大きな地震が来て、ガタガタ大きく揺れた。」と記されている。揺れはだんだんとひどくなり、壁がバラバラと崩れ落ちてきた。三瓶は食膳に新聞紙をかけ、患者を促し押入れの柱の側に移動した。「其の時、キシキシと家のきしむ音、物の転げ落ちる音、何やらがやがやと色々の音が耳に入った。窓から見える裏の長屋の瓦屋根が舟の様に揺れ、其の中に中央部が、落ち込む様にへこんで行」つたと記している。やや揺れがおさまった頃から、水道が出なくなった、ガスが止った、家が倒れたといった人々の声が聞えてきた。「まるで此の世の終りかと思う様な恐怖の音が、心臓を突刺す様に聞えて、足も手も震えが止まらない。各病室の戸が開いて、血の気の失せた人達が、どうなる事かと不安に満ちた顔を見合っただけだった。」と記している。そうしているうちに、また大きな揺れがきた。誰かが「旧館は危いから、新館へ移る様に」といつているのを聞き、患者を伴い新館へと向かった。「新館へ渡る渡り廊下は、巾一間位の板橋の様で、下が池のある中庭になって、ぐらぐら揺れて居るので、はう様にびくびくしながら、やつと新館に渡った。」と記されている。

それから地震はひっきりなしに続き、やがて本所、深川あたりから火の手が上がっているのが見えた。太陽が傾きはじめた頃には火事が広がり、隅田川の川縁にどんだん人が集まって来る。夕方には火の手が迫ってきたので、隅田川を上って千住方面へ避難することにした。幸い大きな川舟に乗ることができたが、蔵前橋の近くで舟は止った。その先の吾妻橋に火が付いて危険だということで、その場で待機することになった。「重傷者を優先に、軽症患者、医者看護婦、職員達と車座に座り、誰一人喋る人も無く、恐怖に黙して居たが、重症患者や手術をしたばかりの患者の呻き声や「痛いよう、痛いよう」と云う声が耳にこびり着く様で

落着けなかつた。」と記されている。一時間以上も待たされ再度出発。吾妻橋付近も何とか通過でき、無事千住に到着。その日は舟のなかで夜を明かした。「翌日の太陽の光を浴びた時は「助かった」と死の恐怖から醒めた心地だった。」と記している。そこで二晩を過し、三日の午後になって再び舟で病院のある新大橋に向かったが、その間の記憶が全然ないの不思議だといっている。「廻りの風景も全く覚えが無く、草原と雑木と百姓家らしいのが夢の中の取止めもない景色の様に浮かぶだけ。」と記されている。だが、新大橋までの舟から見た光景は詳しく記されている。

暫く行くと、家財道具がぶかぶか浮いて、浅草に近くなると川水も見えない位、箆筒や箱や板切れや色々の浮遊物を分けて舟は進んで居た。浮遊物の中に時々犬猫の死体、人間の土左衛門等も見た。なかでも哀れに思ったのは、若い母親らしい女が幼児をおぶって、仰向きに浮いて居る姿、子供の顔は良く見えないが、母親の首の横から可愛い手が二本突出て、舟の横を流れて居た。舟に乗った人達は船縁りに掴まって「あっちにも、こっちにも」と死体を見つけて声を上げて居た。

隅田川は水も見えない位色々の物を浮かべて、兩岸の建物は消え、大火の残りの煙が空をうす暗くして、なおいぶつて居た。本所側の岸を見ると、人間の死体が八百物市場に積上げた大根の様に積重なって居る。もう死人を見ても何の感じも無く、只あんな沢山の人がどうして、あんなに死んだのかと思つた位だった。

舟は無事病院前の岸につき、そこで自警団や婦人会の人たちからお握りと生卵をもらった。だが、派出の看護婦たちはそこで解散になったという。来たばかりで地理に不案内だった三瓶だったが、隅田川沿いに川上に向かえばわが家のある橋場まで行けると考え、大橋を渡って右に歩き出した。「見渡す限り焼野原、目標になる何ものも無い。道の両側には燃える物は皆燃え尽くし、石の土台や瓦礫

ばかりが無惨に残され、道路には蛇がうねりくねった様に、電車の線路が不気味に続き、半焼けや黒焦の電車が所々に止って居る。」と記されている。その日は太陽がかんかん照りつける暑い日であったという。「熱さと灰塵で喉がひりひりする程乾いて、水が飲み度い、でも水らしい物はない、水道管も融けてしまつたらしい。」と記されている。それでも駒形を通り吾妻橋の近くにまで来たところで、電話ボックスが目についた。そこで一休みしようと近づくと、「ひからびた様な男女の別も解らない死体が、うづくまつた様な姿で箱の壁に持たせかけてあった。」「死体はいくらも見たいが思いがけず、目の前にあったのにはぞつとした。」と記している。今戸まで来ると、今はなき山谷堀にたくさん死体を見た。「堀の中は水が有るか無いかわからない位死体で満たされて居た。埃やごみを被って汚れた男女の死体、雑魚の様に重り合つて堀を埋めて居る。此の堀は此の界限の下水や池の水等が集まつて、隅田川へ続いて居るので、此の死体は吉原の池あたりからも流れて集まつたものか、右を見ても左を見ても切目なしに死体を敷詰めた様に見えた。」と記されている。ようやく橋場までたどり着いたが、そこも焼け野原であった。わが家も焼けていたが、幸い焼け残つた近所の家に仮住まいをすることができた。

「九月末日」とあるから三十日であろう。三瓶は故郷の沖縄に帰ることになった。鹿児島まで汽車で二十三時間。そこで一泊し、四日目に那覇港に到着した。三年前に突然飛び出し東京にやつて来て以来、三年ぶりであった。その間、手紙を出すこともなく、今回の帰郷の際も連絡することをしなかつたという。家族の驚きと喜びはいまでもない。近所の人々も毎日やつて来て、震災の話を聞きたがつたといっている。二十日ほど滞在して三瓶は那覇港をあとにし、東京に戻つた。

翌大正十三年一月十五日に余震があつたことも記されている。朝の五時頃、「暁の夢を破つてがたがたと大きな地震が来た。」「寒さと驚きで歯の根も合わず、がたがたふるえながら」当たりの様子を見回したという。なお三瓶の自伝は、これまでもたびたびあつたが、三人称の自伝である。三瓶は「球子」という名前で登場する。

高井としを(注3)は亀戸の自宅にいた。高井は紡績工として働き、細井和喜

蔵と同棲していたが、高井は「友情結婚」といつている。震災の翌年に細井が書いた『女工哀史』は、高井の女工体験を元にしたものである。前日からの深夜業で、「十二時間眠らずに働き通した」といつているので、九月一日の朝に帰つて来たのであろう。それにもかかわらず、暑苦しくて眠られずにごろごろしていたという。細井が「こう暑くてはめしも食いたくないから、冷たい物を買ってくる」といつてアイスクリームを二つ買つてきた。それを二人で食べはじめた時であった。「突然ぐらぐらとゆれはじめたので、早く戸外へでようと思つても、立つて歩くこともできなくて、ころがりながら階段を下り、ようやく外へでた時には、隣り近所の古い家が軒なみつぶれていました。」と記されている。続けて、「家の下敷きになつた人びとの「助けてくれ」といつ声もきいて、間断なくゆり返しがきて立つていられんで、どうすることもできなかったのです。」と記している。高井らが住んでいたアパートは新築のためか倒れもせず、火事にもならなかつた。そのうちに本所の方から火の手があがつたので、働いていた工場の裏手の方へ逃げた。普段は五分ほどで行けるところだが、長い時間かかつたといつているので、避難者が多かつたのであろう。「着のみのまま工場裏のハス池のほとりへたどり着いた時には、川むこうの東京の街は火の海でした。その間にもゆり返しはひどく、立つていられず、私は船酔いのようになりました。」と記されている。夕方になって、細井は「書きかけの原稿をとってくる」といつて家に戻り、少しばかりのお金や、タオル、万年筆等を持ってきたという。

翌二日の夕方には一旦家に帰つた。お米も残つていたのでご飯を炊きお握りを作つた。それを持つて元のハス池のところに戻り野宿をしたといつているので、前日もそこで過ごしたのであろう。三日か四日のことである。「朝鮮の人をつかまえて小松川の方へ連れていく」のを見、「朝鮮人が井戸へ毒を入れたなどといつている」のを聞いた。「在郷軍人だか右翼だか警官だか、その時はわかりませんでした。多い時には朝鮮の人を二十人、三十人ぐらいつつ麻のひもでじゅずつなぎにして、木刀や竹刀でなぐりながら、小松川の方へ連れて行くのを見ました。」と記している。なかには、池のなかにもぐり込んでハスの葉に隠れている人もいた。「見かねてにぎりめしと水を少しあげたら、手をあわせておがんでおられま

した」といつているが、人に咎められなかったのであろうか。

五日目あたりに、細井と一緒に本所まで焼跡を見に行った。「そこで見たものはこの世の地獄でした。電車が焼けている。馬が死んでいる。道ばたで死んでいる女の人のお腹から赤ちゃんの頭がでていたり、重傷の人が虫の息で水、水といながら倒れていたたり、本所から浅草へ渡る橋が焼け落ちて、隅田川には死人のいかだ。それはそれは、かぞえきれない悲惨な光景ばかりで、不思議なことに救護班の姿は見つけられませんでした。」と記されている。七日目くらいになると余震も少し落ち着き、アパートへ帰ろうかと思っていた時である。細井の友人が現れた。「君たち、こんなところでなにしていたのか、早く逃げないと殺されるぞ。南葛労働組合の執行部は全員殺された。僕も今から田舎へ行く。とにかく早く逃げろ。アパートへ荷物をとりに行ったらつかまるぞ」というので、着のみ着のまま上野駅に向かった。

上野駅からまずは新潟へ向かった。東海道線が不通だったためであろう。「汽車は超満員で、列車の屋根の上にもいっぱい乗っていました。汽車のなかにいたなんんかの青年が、どうしても押しもどされて泣きべそをかいている私を、むりやり引っぱりあげてくれました。細井は汽車の屋根へ上がりました。こぼれそうな人をつめこんで、のろのろ列車はようやく東京駅をはなれました。」と記している。田舎へ行くと止まる駅々でお百姓さんやお握りやジャガイモやお茶を窓から差し入れてくれたが、屋根の上にいる細井はひもじい思いをしたであろうといっている。新潟からは信越線で名古屋へ向かった。長い時間をかけ名古屋へ着いた高井は、そこで日赤の救護班の医者に注射してもらい、足の裏に薬をつけてもらったという。おそらくは長時間列車で立っていたため、疲労と足の痛みがあつたのであろう。名古屋から岐阜へ行き、姉の家にたどり着いたのは上野駅を出発してから二日目の夕方であった。そこで三日休養し、さらには近くの祖父母の家に行き一週間滞在した。

丹野セツ(注4)は亀戸の路上にいた。丹野は精工舎の工場に勤め、南葛労働組合の一員でもあつた。震災の翌年に結婚することになる渡辺政之輔の母親の家へ行く途中であつた。「ひどい揺れかたで、亀戸のドブの水が打ち寄せるほどです。

私の立っていたすぐ前のうちが倒れ、その上を乗り越えて、渡辺の母のところに着きました。」と記している。行ってみると、熱のある母親は氷枕を抱えて外に出ており、近所の人たちもみな外に出て、「南無妙法蓮華経」を唱えている人もあつた。「うちへ入って食事をしようとしても、壁は落ち、ご飯の蓋もとんでしまつて、壁士が入つて、食べられ」ない。そこでパンを買いに行つたがすでに売り切れであつた。だが、あちこちと様子を見て帰つて来たところに、友人が大きなパンを一本抱えて見舞にやつて来た。「ほんとにうれしくて、これでやつとみんなは昼食にありつくことができました。」と記している。そのうちに地震もだんだんひどくなり、やがて火の手があがつた。丹野は渡辺の母親、それに川合義虎の母親と妹を連れて葛西橋を渡つて対岸に逃げたというが、川合の母親と妹も連れた経緯ははっきりしない。南葛労働組合の事務所が川合の家の二階にあつたので、そこに寄つて一緒に逃げることになつたのではなからうか。「そのうち葛西橋のほうからは津波が来るというし、朝鮮人についての流言も出てきましたし、私たちは一晩中寝ないでいました。」と記されている。

翌二日は、案じていた川合義虎が帰つてきたこと以外の記述はない。三日には知人宅の整理の手伝いに行き、組合の事務所、すなわち川合の家に泊まつた。自警団に人を出して欲しいというので男たちを二組に分け、十二時交代ということにして三人が出て行つた。十二時になり、次の番の人たちを起こそうとした時である。いきなり三人の憲兵が上がり込んで来た。「一人ずつ名前をきかれたので、私はそのとき「坂上きよ」という名前を使つていたので「坂上きよ」といいますと、「どうしてここへ来ているんだ?」というので、「避難先で一緒になつたけれど、ゆくとくろがないから、ここへおいてもらつてくれるんです」といつてすみませした。」と記している。そのあとへ私服の特高がやつて来た。だが、「私は私服には顔を知られているので、さあ大変と、二階の窓へ急いで出て障子をしめ、小さくなつて隠れたので、助かつたんです。」と記している。男の人たちは全部連れて行かれた。川合義虎、北島吉蔵、近藤弘造、山岸実司、加藤高寿、鈴木直一の六人の名前が記されている。翌四日、情報を得るために出かけたが途中で引き返して来た。「両国橋まで来ましたが、橋は焼け落ちています。横川橋は焼け落ちたが板

を渡してあるというので、行って見ましたが、川の中には死んだ人が一ぱい浮いていて、恐ろしくて、とても渡れません。仕方なく被服廠のほうを回って来ますと、ここは死人が山になって焼けています。それをみて、気もちがわるくなり、やっとの想いで事務所へ帰りました。」と記されている。職場の精工舎から「解散手当をだすから、集まれ」という張り紙が出されていたので行くと、十何円かを与えられ一時解散ということになった。これで当分は食べられると思いい、五日に弁当を持って出かけた。知人のところへ行きその晩はそこに泊まり、翌日に亀戸に戻って来た。

いわゆる亀戸事件で川合義虎らが殺されたことを知ったのは、十月十日の新聞によってであった。丹野の自伝は質問者に答えるという形で記されているのだが、「初めから殺すつもりで来たんですね。」という質問に対して丹野は、「そうですね。最初から殺すつもりで来たんですね。それで憲兵が先に来たんですね。その晩のうち処理されたらしいですね。」と答えている。また、「それまでに亀戸の特高は南葛の組合につきつきりで、川合には「常時尾行」がついていました。」とも述べていた。翌年の大正十三年二月十七日には、青山斎場で亀戸事件の合同追悼会をしたことも記されている。大杉栄の場合は遺体が返されたが、亀戸事件は遺体もなしであったと付け加えられている。

墨田区

河竹繁俊(注5)は亀沢の自宅にいた。早稲田大学の講師で帝国劇場の嘱託でもあった河竹は、午後から帝劇の九月興行初日に出かける予定であった。ある出し物の脚本に手を入れている時であった。「ド、ド、ド、ド、ドーン——と地響きをして、明らかにわれわれにも分かる上下動の地震が来た。」「立ち上がるや否や激しくなったので、ヒョイと跣足のまま書斎から庭へ飛び下りた。あたりは嵐のような凄じい物音と共に大揺れ、池の水は五、六尺も高く躍り上がり、石燈籠は倒れ、屋根瓦は落ち、ガタガタドタンと物の倒れる音が、ここでもかしこでもした。」と記している。すぐに母親のことが心配になり、隠宅まで走って行って外に連れ出し庭の木の下へ避難させた。その間も絶えず揺れていたという。母屋へ引き返

すと、大した被害はないように見えた。茶の間へ行ってみると、妻と二人の子供が女中と一緒に仏壇の前に座っていた。よく見ると家のなかはかなりの被害を受けていたので、すぐに母親のいるところに避難させた。

「大地震の後は大火事になるものだ」と常に母親がいつていたので、火事には十全の注意をした。「いつも一纏めにしてある火事具の包みを取出し」、「シャツや股引を着け印半纏を着た」というのだから用意周到である。ただ、半纏は暑いで脱いでしまったといっている。地震は絶えず揺り返していたが、危険を冒して河竹は書生を連れて土蔵のなかへ入って行くことにした。貴重な品々を持ち出すためである。「バタバタ倒れている本箱を乗り越え、黙阿弥手稿の脚本即ち「横書き」と称する原本だけでも、万一の場合助けたいと思っただけで、その本箱を六箱ほど取り出し、庭の一隅へ積んだ。土蔵は地震の為に瓦をふるい落とされ、火が来たらとても保つことはできなかったのだ。」と記している。続けて、「是真の描いたものの中では、特に黙阿弥の請に応じて描いたという二枚折の猪小屋を画いた屏風だけを取り出した。そうして屋敷内に住まっていた鳶の者と相談の上、イザといえ隣(トナリ)の明地(アキラ)へ持ち出そうということに手筈をきめた。」と記されている。「是真」とは日本画家の柴田是真である。

それからどれくらいたってからのことかは記されていないが、二丁ばかりしか離れていない本所区役所から煙が立ちのぼっているのが見えた。そこで母親を再度避難させることにした。「母を抱えるようにして歩かせ、水のある所は負って越し、四町ほど行った堅川の岸」まで連れて行った。取って返した河竹は、次に「各劇場で使用する脚本の箱を取り出し、同じく庭のなるべく遠い、木立の中に入れてさせた。」といっている。これまた土蔵から持ち出したものであるが、先の黙阿弥の手稿や是真の屏風等も同じく庭の木立のなかに置いたものと思われる。作業を終えた河竹は母親の避難場所へ向かったといっているが、妻や子供のことは言及がない。「外へ出て後を振り返ると、区役所から出た火は、そろそろ烈しくなりかかっていた風に煽られてどしどし燃えひろがり、背後の家の屋根を越えて此方へ、凄じい黒煙が流れ込んでいた。この模様ではとても吾が家も助かりようはない、これが見おさめかと思わざるを得なかった。」と記されている。避難場

所へ行ったが、そこに母親はいなかった。あちこちを探し回ったが見つかからない。「本所深川の火は、烈風と変わり、四方八方へ燃えひろがり、濃くなり行く夕闇の空を真赤に彩り始めた。足弱な母と女子供、到底ここまで一里余もある路を来ようわけがない、もう一度及ばないまでも捜して見ようと思つて引き返したが、三丁ばかり彼方の曲り角の炎々と燃えているのを見ては、もうどう仕様もないと運を天に任せるのほかはずなくなった。」と記されている。妻と子供も母親と一緒に避難させていたことが分かる。河竹は火を避け、越中島の原へと逃がれた。「豆腐屋で豆腐をつけておく槽の水を貰つて有難く飲んだり、鯉節を二本買つて食糧にしようとしたのもその時であった。」と記している。人に時間を尋ねたところ、「九時二十分」だという。地震からすでに九時間を過ぎ夜になっていたのである。「草原の上で寝て空を仰いで見たら、北へ北へと流れて行く黒煙の間から星がきらめいていた。」と記されている。だが、そこも安全な場所ではなかった。

この原へ落ちつく間もなく、烈しい風に火の手は見る見る中に燃えさかつて来たので、われわれは原のずつと奥へ逃げこみ、水溜りを前に控えた草の中に陣取った。青い草は窒息を猶予してくれそうに頼もしく思われた。

——と、右手の方の古石場街(?)から牡丹町(?)方面の十丁位の町並が、見る見る中に、それはほんの一、二分間の中に、一面の火となった。焼けたトタン板が木の葉のようにピューピューうなつて飛ぶのが見える、聞こえる、右の頬がかあつと熱くほてる。と正面の陸軍糧秣廠に火がついて、煉瓦の倉庫を片端から焼き始めた。

その中に左側の商船学校、水産講習所の建物が始めて三方が火の海となった。火の子は雨のように降りかかり、咽せ返る黒煙はムウツと暑く顔に当り、息苦しくさせた。水溜りの水は若い男や女の手によって、そのあたりの人々の上にザツザツと灑ぎかけられた。

明け方の三時頃になって火はようやくおさまってくると、あちこちから名を呼ぶ声が聞えてきたという。「まだ明けきらぬ薄暗の中を提灯が走り、男の声、若

い女の声、泣き叫ぶ子供の声やが錯綜して、その凄惨さといったら、まったく筆舌の尽し得ない所であった。」と記している。

明け二日。本所方面へと向かったが、橋が落ちていて渡れないと分かったのもとの原へ戻った。「燃え残った火はまだ燃えていて熱く、呼吸も苦しく、路傍に焼死している黒焦げの死骸を、始めて見て足もすくんだ。」と記されている。午後になって工兵隊の渡船で渡れることになった。永代に着き、そこから丸の内のお堀端にたどり着いたのは四時頃であった。「始めてふすぶれた顔を洗い、炊き出しの握り飯にありついた時には、嬉しいというよりも、いよいよ焼け出される焼け残りという感が胸に迫つてなまけなくなった。」と記している。

三日の午前九時頃、自宅を見に行つた。「宅の前へ立つて焼野原を見わたした時には、涙どころでなく太い歎息をついたまま足がすくんでしまった。」と記している。

焼き倒された電柱の残骸以外には、木屑炭のカケさえないくらいに、吹きまくり焼けまわつた今度の火事には、ほとんど何物も、カケラなりとも存在することを許されなかったのである。いくら、あきらめてもあきらめきれないが、黙阿弥の草稿である脚本の原本をはじめとして、近世の文人、画家、名優、芸人の筆になつたもの、珍本といわれたもの、愛蔵していた張交物のような小芸術品、さては唐棧やテセラのような織物まで灰になってしまった。いや、その灰さえも強風に吹きさらされて、壁土の焼けたのと、瀬戸物のこわれと、屋根瓦の焼け砕けたのばかりになっていた。「焦土と化す」という言葉がピッタリと胸にこたえた。

河竹は、何もいえず身動きさえなし得なかつたという。母親と妻、子供二人の安否はいまだ不明である。焼け跡に行けば何か手がかりがあると思つてやつて来たが、そこは焼け野原になっていたのだから無理もない。おそらくはそれから少し後のことであろう、通りを歩いていると子供二人に女二人、男一人という五人連れの焼死体を見つけた。河竹はてっきりそれを家族だと思い、翌日、それぞれ

の名前を書いた封筒を持って再度現場に行った。遺物として歯を採るためだったというが、なぜ翌日にしたのかは不明である。「妻と思われるのを先ず取り、次に長女と思われるのの歯を取ろうとすると、味噌ツ歯になっていた歯がチャンと生えているので、これは違ったと知り、呆然としたといっている。焼死体から、しかも家族と確証があるわけでもない死体から歯を抜き取るという行動はやや常軌を逸しているが、それほど感乱していたのである。「夢に、焼跡へたずねて来たを見て、涙を流したり、うなされたりしたこともあった。郷里へ向けて「ワレノミタスカリアトミナシス」と電報も打った。」という記述もあった。

だが、六日の午後になって幸い母親が無事であることが分かった。「無事に亀戸の親戚の立退先にいることが分かった時には、奇蹟と考えるよりほかなかった。」といっているが、どのような経緯で知ったのか、またすぐに再会できたのかは記されていない。母親は川に落ちたところを船に引き揚げられ、船のなかには四日間を過ごし無事だったという。「船へ乗った者の多くは、船火事を起こして、悉く溺死したのであるのに、母の乗っていた舟だけが助かったということは奇蹟以上といつてよい。」と記されている。妻と子供の無事を知ったのも同じ日であった。「妻の方も、やはり六日目になって長女と共に助かった報に接した。」といっているが、これまたどのように知ったのか、またすぐに再会したのかは不明である。それよりも注意すべきは、「長女と共に」と記されていることである。後に妻から聞いたものであろう、妻たちの動向が詳しく記されている。

妻は東元橋で押し返された時、母達に別れたので、止むを得ず火のない方へ火のない方へと足を運ぶ中、隅田川の川岸へ出た。そこで女中と共に二人の子供を抱き水を掛け合つて、迫り来る火の熱さを凌いでいた。が、いよいよ二、三間の近くまで燃えて来たので、あとからあとからと逃げて来た人の為に川中へ押し落とされた。所がそこは水が深くて足が届かず、腐朽した杭につかまつてからも溺死するのを免れ、三十分も荒い波に漂わされている中に、水上署のボートに助けられて一旦築地の水上署に運ばれたが、本願寺が燃え出したというので又引き出され、月島の三号地へ避難させられ、そこで鉄管の中だの、

製鉄工場の中で雨露を凌いだのであった。

泳ぎもたいして知らないのに、これも助けてくれる人があって、不思議に命を拾ったのであった。二才になる長男と一人の女中は川岸のドサクサまぎれに行方不明になった。六才の長女は、側にいたおかみさんが可愛そうだからと杭へ縛りつけてくれてあったので、妻がそれを見つけ、ボートへ一緒に乗せる事が出来たのだという。子供は両足と左手へ火傷を受けたが、生命には別条なかった。

妻とともに無事だったのは長女だけで、長男は行方不明になったのである。後に何ら記述がないので、長男は死亡したのであろう。「わたしの家の近所で一家無事という家は殆どないといつてよい。焼死か溺死で行方不明というのが家族の大部分を占めているのである。」「一家全滅、行方不明という家も沢山にあった。」と最後に記されている。

井上貞治郎(注6)は太平にある聯合紙器の東京本社にいた。段ボールの発明で知られる現レンゴウの前身だが、井上は筆頭常務を務めていた。重役会議を開いているところに、「ドカンとばかりに大地震が襲って来た」という。「ぐらぐらと来た第一震で、第一工場の倉庫の屋根はどさりと落ちてしまった。第二震のときには、はやくも近所に火災が発生。水道はとまる。消防は来ない。あれよあれよと打ちさわぐうちに、猛火はみるみるわが工場をめぐりおそいかかって来た。」と記されている。続けて「千坪以上だった新工場がたちまちのうちに灰燼に帰してしまったのである。これが正午から三時までのアツケない間の出来事であった。」と記している。井上らは工場前の空き地に避難し、工場が焼け落ちるさまをただ眺めているしかなかった。「阿鼻叫喚の地獄絵に十数年来の刻苦精励の結晶を一瞬にうしない、身の危険も打ち忘れて、そこにわたしは立ちつくした。」と記されている。

木村義雄(注7)は自宅にいた。太平か横川かはつきりしないが、隣り合ったいずれかの町と思われる。木村は棋士であった。その日は休みで前夜も遅かったので常よりも寝坊をした。「残暑の厳しい折柄だつたけれど、夜来の驟雨がから

りと晴れて、涼しい川風が吹き込む」という天氣に良い心持になり、二度寝をしたという。やっと起き出して階下へ下り、台所で顔を洗ったあと茶の間へ行った。

『しめ、(末妹)は』

『向うのねえちやんと、どこかそこらへ遊びにいったよ』

『さう』といつて、茶呑茶碗に手をかけた途端に、ぐら／＼と来た。例の十一時五十八分だ。呑気な私は、

『おや、地震だな』と思つた位だが、

『あつ』といつて、弟が一番に飛出した。父も続いて出た。震動が益々激しくなるので、

『義、出る／＼』と呼ばれたのと、ぐら／＼と大きく揺れたのと、無意識に私が飛出したのと、ほとんど瞬息であつた。同時に家の一角が崩れた。

そのあとすぐに家は崩壊し、井上は肩に怪我を負つた。「一二秒遅れたら、どんなことになつたか知れず、死なないまでも大怪我位は、恐らく免れなかつたと思ふ、まつたく危機一髪のところであつた。」と記している。とりあえず近くの水門の側に避難したが、妹の姿が見当たらない。「余震は引切りなしに来る、兎角してゐる中に煙が見える、火事だといふ騒ぎで、およそ一時間位は、そこらの中のものが右往左往で、すつかり度を失つてゐた。黒煙りはあつちにもこつちにも渦巻く。」と記されている。そのうちに警察から浅草駅の方へ逃げろという指示があつた。だが、妹の姿が見つからない。火はしだいに近づいてきて進退窮まつた時である。幸い妹が見つかった。近所の娘さんに助けてもらったという。それからみんなで浅草駅方面へと向かつたが、途中、浅草から銀座へかけては一面の火だという流言が聞こえてきた。そのとき、たまたま顔見知りの百姓に出くわし、船を貸してくれるよう頼んだという。それで避難しようというのである。なぜ百姓が舟を持っているのかは記されていないが、たぶん汚穢船であろう。汚穢船とは、都市部の糞尿を運び農家に提供し、帰りに農作物を積んで戻る船のことだが、それを農家が兼業していたこともあつたのであろう。すると、近所の人々も集まっ

て来て大勢の人が乗り込むことになつた。「その上よそには荷物がある、蒲団だの何だのと持出したのを、積める限り積まうとするから、船の中は一杯になつた。何一つ持つてゐないのは、私の一家だけだつた。」と記されている。船が出たのは三時頃であつた。人と荷物で満杯の船は水面すれすれに進む。

行く中に、川幅がだん／＼／＼／＼と広がるから、随つて浪の当りも強く、舷側からしぶぎの散込むことなどあつて、揺れる度にはら／＼／＼／＼させられる。

『兼ちやん、何とかならないかね』

『大丈夫ですよ、なるべく動かないでゐて下さい』

『大人はい／＼けれど、子供が大勢ゐるんだ、船脚を軽くするために、桶の奴を流してくれるわけには行くまいか』

『そんなことをしたら大変だ、罰金を取られますよ』

『平素ならそうかも知れないけれど、若し水でもかぶつたら、人命にかゝはることなんだから、警察の方は引受ける』

『引受けるたつて、罰金を食ふのは私ですよ』

『いや、無理に頼むのはこつちだから、叱られるのだつたら僕が叱られる、罰金だつて何だつて、君の責任にはしないよ』

「桶の奴」といつているのは糞尿のことであろう。糞尿の桶を載せたまま人や荷物を乗せていたのである。川に流すと罰金を取られる規則があつたことも分かる。それはさておき、船は夕方に無事平井にたどり着いた。ときどき余震が起ることになつた。この「親方」は船の持ち主でもあつた。木村らは二日、三日とそこにいたという。「若しこの船がなかつたら、そしてぐ／＼／＼してゐたら、たへ家財を持出したにしても、どんなことになつたか知れたものではない。浅草駅の方面では、もとからヤワだつた押上橋が、地震でぐ／＼／＼ついたりして、大勢一時に殺到したため、人を乗せたまゝ半分落ちて、おぼれた者もあると聞き、父も私も膽を冷した。」と振り返っている。

たぶん四日目だといっているが、父親が被害状況を見るために出かけた。家は丸焼けであったという。「牛込から四谷、麻布、本郷と小石川の一半、芝も三田から先は焼け残り、新宿も助かった」ということであった。衝撃だったのは被服廠跡の出来事であった。「それよも驚いたぜ、被服廠跡が大変で、何万といふ死人だらう、吉原も見えたが、とても話にはできない」といふ、酸鼻を極めた実見談に、同じ焼出されとはいへ、いづれも無事でゐる喜びに、今更の如く顔を見合わせた。」と記している。

五日目になり、世話になった家を出ることになった。一緒に避難していた親戚の家に行くことになったのである。みず知らずの家に大勢で厄介になるのは躊躇されたが、先はお寺だというのでお世話になることにしたという。安楽寺というその寺は埼玉県の蕨市にあった。まだあちこちに余燼がくすぶっていたので、陸行を避け船を頼んだといっているが、例の船かどうかは分からない。「朝の暗い中に乗船し、綾瀬から鐘ヶ淵へ出て、今度は大川を遡航」した。目的地に着いたのは午後の七、八時頃であった。「汗と煙と埃とに、幾日か塗れ果てた体を、さつぱりと洗ひ流した時は、初めて本統に救はれたやうな気がした。」「膳につくと白い飯だ。昔の寺領といふのか、寺の所有地から上るのださうで、すこぶる米の質がよい、それを少し硬目に炊いた加減のうまさ、副食おかずの野菜も新鮮な為だらう、そのうまさといふものを、今も忘れない」と記されている。

十日を過ぎた頃、はじめて東京に出た。「悲惨な焼跡を見た時は、およそ想像してゐた身にも、あつと驚嘆したまゝで、開いた口が塞がらなかつた。新聞で棋士の避難所はわかつたが、地方へ通れた者が多い。新聞社も大部分焼けたが、幸ひに報知と日日とが、向ひ合つて無事だつたので、まあよかつたと思つた。」と記している。以前から付き合ひがあつたのであろう、早速見舞いに行つた。あり合わせの棋譜を新聞に掲載すると、慰安に飢えた読者の間で評判になつたので、棋譜を提供して欲しいという。それで収入の途が開け、帰る時には土産を持って帰ることができたといっている。それから木村は将棋をさしにしばしば東京に出ることになった。やがて焼け跡に小さなバラックを建てそこに移つたのは、一ヵ月ほどがたつた頃であった。

清水幾太郎(注8)は横川の自宅にいた。中学三年生であつた清水は、二学期の始業式を終え十一時過ぎには家に帰つたという。ひどく暑い日で、半袖のシャツとパンツだけという恰好で昼食を食べた。初物の里芋が食卓の上ののつていたと詳しいが、食べ終わりお茶を飲んでいる時に猛烈な震動がきた。「震動と一緒に、頭がポーンとしてしまいました。どうしてよいか判らぬうちに、眼の前で、床の間の柱がミリミリと折れる、というより、粉々に砕けて、天井がドシンと頭の上に落ちて来て、真暗になつてしまいました。」と記されている。死を免れたのは、落ちて来た天井が食卓を支えられ、その高さだけの隙間ができたためであつたという。食卓といつても卓袱台なので僅かな高さしかない。「暫くの間、私たちは、真暗な中で、食卓の下に首を突つ込んでいました。屋根の土と壁土とが崩れたためでしょう、噓むせるような息苦しさです。私は、夢中になつて、頭の上の天井板を毀し始めました。上へ上へと、手に触るものを毀して行きました。一生懸命、毀して行くうちに、乾いた土がザーンと顔にかかりました。それと同時に、手が瓦に触りました。カ一杯、瓦を押し除けたら、日光がガラガラと射し込み、嘘のような青空が見えました。私は屋根へ這い出しました。」と記している。それから清水は、一人ずつ家族を引つ張り出した。親に妹と弟二人、それと叔母、幸い誰も怪我らしい怪我はなかつた。周りを見渡すと多くの家が潰れており、道路も潰れた家で完全に塞がれていた。あちこちから火の手も上がっていた。避難しなければならぬと思つたが、外出中の父親がまだ帰って来ない。勝手に逃げ出すわけにもいかないとヤキモキしているところへ巡査がやって来た。子供はみな小学校へ避難させろというので、妹と上の弟を避難させた。やがて父親が帰つてきたので避難することにした。火事はかなり大きくなつてきたので妹や弟を学校から連れ戻すこともできず、火のない方へただ逃げるしかなかつたという。あちこちと逃げ回るうちに亀戸まで来て、天神川に面した空き地で休むことができた。そこには多くの避難民が集まつていた。

「ああ、紙だ。」と誰かが言いました。なるほど、見上げると、空一面の紙片です。灰色の小さい紙が空中一杯に舞つています。眺めているうちに、紙片は次第に

地上に近づいて来ました。しかし、近づいて来ると、それは紙などではありません。何千、何万というトタン板なのです。本所や深川にはトタン屋根の家が多く、それが火炎の勢いで空中に舞い上り、今、それが降つて来るのです。空地にも落ち始めました。右へ、左へ、風を切つて、大変な景気で落ちて来ます。ぶつかつたら、首の一つや腕の一本ぐらいは、簡単に切り落されるでしょう。あちらへも、こちらへも、文字通り、雨のように降つて来ます。空き地へ避難した人たちは、私たち一家を含めて、怯えた叫び声を挙げながら、右往左往します。高いところから眺めたら、私たちは虫の群れのように見えたでしょう。

ここも危険だと思い、また当てもなく歩きはじめた。多くの避難民も同様に歩きただした。そのころはあたりが暗くなっていた。清水はときどき妹や弟の名前を呼んだという。むろん何の反応もなかったが、その声に誘われてか、群衆のなかからも同じように肉親を呼ぶ声がひとしきり起こった。それも無駄だと分かると再び沈黙が戻ってきた。続けて、「沈黙が暫く続くと、どこからともなく、ウオーという呻くような声が群衆の流れから出て来ます。この声を聞くと、私も、思わず、ウオーと言つてしまうのです。言うまいとしても、身体の奥から出てしまうのです。言語を知らぬ野獣が、こうして、その苦しみを現わしているのです。私たちは、ウオーという呻きを発しながら、ノロノロと、暗い街を進んで行きました。」と記されている。それからのことは詳しく記されていないが、その夜は東武線の線路で寝たという。「寝たというより、真赤な東京の空を眺めて夜を明かしたというべきでしょう。」といつているが、「その間にも、頻繁に揺り返しが来ます。揺り返しの度に、線路に寝ている人たちの間から、悲しみと恐れとに満ちた叫びが出て来ます。」という状態であったので当然であろう。

翌二日。警察の指示で千葉県の市川にある兵営へ移ることになり、平井駅まで行った。そこで異常な光景を目撃する。「東京の空はまだ一面の煙です。煙の底に真赤な太陽が見えます。正午頃でしょうか、空を見上げた途端に、私は真蒼になりました。あれは何でしょう。私たちの頭の上の空高く、黒い大きな輪が浮んでいるではありませんか。黒い帯のようなものが完全な輪の形をして、太陽より

遥かに大きく、空中に浮んでいるのです。私ばかりではありません。避難民の群は一様にこれに気づいて、そして、一様に色を失いました。みな声が出なくなりました。」と記している。五分ばかりたつと次第に薄くなり、やがて消えてしまつたといっているが、それが何であったのかは記されていない。列車は超満員でなかなか乗ることが出来なかった。やつとのことで市川に着いたのは日が暮れる頃であった。

その夜から一週間、兵営での生活が続いたという。「兵営生活といつても、夜は芝生や馬小屋に眠り、起きれば行列して握飯を貰うというだけのことです」、「人間の生活というより、動物の生活に近かつた」といつている。夜に芝生や馬小屋で寝ていると、大勢の兵隊が隊伍を組んで帰つて来る。ある夜、清水は兵隊に尋ねた。東京の焼け跡から帰つて来たという兵隊が、洗面所のようなところで銃剣の血を洗っていたからである。

誰を殺したのか、と聞いてみると、得意気に、朝鮮人さ、と言います。私は腰が抜けるほど驚きました。朝鮮人騒ぎは噂に聞いていましたが、兵隊が大威張りで朝鮮人を殺すとは夢にも思つていませんでした。なぜか、私には朝鮮人の友だちが多く、あの一学期足らずしか在学しなかつた神田の商業学校でも、一番親しくつきあつたのは、二人の朝鮮人でした。朝鮮人がいかに血迷つたにしても、軍隊の出勤を必要とするような事態は想像出来ないことです。軍隊とは、一体、何をやるものなのか。何のために存在するのか。そういう疑問の前に立たされた私は、今度は、大杉栄一家が甘粕という軍人の手で殺されたことを知りました。

大杉栄の死を知つたのは少々後のことであろうが、清水は大杉を「先生」と呼んでいた。もちろん、直接に指導を受けていた訳ではなく、その著書を読んでいただけである。だが、「彼が深く人間を愛し正義を貴んできたことは知つていました。」「細かいことが判らなくても、私には、それだけでよかつたのです。」と述べ、「日本の軍隊は私の先生を殺したのです。軍隊とは何であるか。それは、

私の先生を殺すものである。」と結論づけていた。それだけではない、清水はさらに敷衍して、「もし私が勉強して先生のようになつたら、軍隊は私も殺すであろう。軍隊は、私を殺すものである。」と述べていた。このような認識は、今日の若い人たちなら何も驚きはしないであろうと清水は付け加えている。「しかし、戦前の教育を受けていた私にとつて、このことは、一生に一度か二度しか遭遇しないような事件でした。」と述べるのである。

兵営に在る間、父親は毎日東京の焼け跡へ出かけた。むろん、妹と弟を探すが、父親は徒歩で東京との間を往復していたという。「疲れた足を引きずつて東京から帰つて来た父は、まだ妹や弟の行方が知れぬことを嘆き、更に、若干の預金があつた銀行が、帳簿が焼け行員が死んだため、一文も払つてくれないことを嘆き、火災保険も駄目だと嘆きました。」と記されている。だが、何日のことかは記されていないが、妹と弟は無事であることが分かつた。どのように知つたのかも記されていないが、友だちの親戚の家で案外不自由のない生活をしてたという。

一週間がたった八日に、清水らは兵営を出て小松川にある親戚の嫁入り先へ移ることになった。これまたどのような経緯であつたのかは記されていない。「私たち七人の家族が押しかけた」といつているので、妹と弟も一緒だつたことが分かる。このときに合流したのか、兵営に在る間にすでに合流していたのかは不明である。それから毎日、清水は父親と一緒に横川の焼け跡に通ふことになる。バラックを建てるためである。「勿論、小松川との往復は徒歩です。徒歩で往復して、焼跡で働いているうちに、父も私も、とりめになつてしまいました。少し薄暗くなると、何も見えないのです。日が暮れると、電燈一つない焼野原のことゆえ、身動きが出来なくなりです。父子二人が手探りで小松川まで歩いて帰るので、す。」と記されている。その間、清水はゴム足袋を売ることにしたといつている。自分一人でしたように書かれているが、中学生一人で行なえるものなのか疑問が残る。それはともかく、ゴム足袋は飛ぶように売れたという。「以前から知つていた業者に無理に頼み込んで品物を分けて貰つたので、品不足という背景の下で、非常に繁昌したのです。」と記されている。やがて品物が間に合わなくなり、足

袋にゴム底を縫いつける作業もしたといつている。

バラックが出来上がったのがいつのことかはやはり記されていない。次に記されているのは二期の始業式の日のことである。だが、これも十月一日のことか十一月一日のことかは忘れてしまったといつている。「級長であつた私は、校庭にみんなを整列させ、号令をかけました。整列してみても驚いたのは、一人残らず、キチンとした制服制帽で登校していることでした。私はといえば、泥沼を渡つて逃げた時と同様の、夏シャツとパンツ、それに、馬方が被るような大きい麦藁帽子、ゴム足袋。私の姿を見て、みんなはドツと笑いました。山の手の子弟が多いので、私のような目に遇つたものは、殆んどいないのです。」と記されている。だが、学校ではイギリスが救援物資として送つてくれた上着とズボンをもつた。「上着は、日本では見慣れぬ色合の、ボタンが無闇と多い、軍隊隊風のもの、ズボンは、派手な水色で、股引のように細いもの」だったので、一層笑われると思つて着用はしなかつたという。

一時間目は終身の授業であつた。先生は教室に入つて来て、黙つて黒板に向かい「天譴」と大書し、また「天物暴殄」と大書した。先生はそれらの言葉の意味を説明し、「今度の大地震は、「テンケン」、即ち、天のお叱り、天罰である、天罰が下されたのは、「テンブツボウテン」のゆえである、即ち、人間が自然の賜を浪費したため、贅沢をしたためである」と述べた。清水はすぐに立ち上がつて質問した。「若し天譴であるならば、本当に贅沢をした人間が罰を受けるべきではないでしょうか、浪費も贅沢も身に覚えのない人間が、どうして、天罰を受けるのでしょうか、同じ東京でも、下町だけがひどい目に遭い、山の手が殆んど何の被害も受けなかつたのは、どう解釈したらよいのでしょうか」という質問である。先生がそれにどう答えたのかは記されていないが、「勿論、私の心の底にあつたのは、焼けない山の手へのひがみだつたのでしよう。」と述べていた。だが、清水にはもうひとつのわだかまりがあつた。先生の家は潰れもせず、焼けもしないかつたことである。もし先生自身が焼け出されていたら、私も黙つて承つていたであろうと述べていた。

宇野信次郎(注9)の自宅は向島にあつた。自宅で被災したとはつきりは記さ

れていないが、ここで取り上げておく。宇野は日本車輛東京支社に機械修理工として勤めていた。発生のことについても記されていないが、直接に被害はまぬがれたといっている。「九月一日の夜から燃え始めた江東地区から、火煙をくぐって避難民がどんどん流れ込んできた。これを何とか救わなければいけないという考えが、むらむらと私の頭にのぼって来た。会社の前に丁度空地があった。組合と会社の幹部と相談をして、あり合わせの材木で、ほんの雨露をしのげるだけの、屋根しかないバラックを建てて収容所を作った。」と記されている。食糧も、「大儀に名を借りた体のよい徴発のようなことまでやってのけた。」といっているが、具体的なことは記されていない。

一日、二日と過ぎるうちに、様々なデマが飛び込んで来た。「一つは共産主義者や無政府主義者が混乱に乗じて革命を起そうとしているということ、もう一つは朝鮮人がこの機に暴動を企んでいるということ」であった。労働運動に熱心だった宇野は危険分子の一人として常に監視されており、ちょうど一週間前には大杉栄と自宅で会っていたので危険を感じたという。ある時、多くの人に囲まれて追いつめられた「朝鮮人」を見かねることができなくなった。

「やめろ、こんなとき朝鮮人に何ができるか」

と怒鳴った。群衆は一しゅん手を止めた。ところが、後ろにいた野次馬から

「奴も鮮人の仲間だ！」

「主義者だ！」やっつけてしまえ」

の声が帰って来た。

私は更に声を張りあげて叫んだ。

「俺は労技会の宇野だ！ 労技会の宇野を知らねえか」

こんなとき弱音をはいたら一ころだ。

「労技会」とは組合の名称である。この騒ぎがどうなったのかは記されていないが、警察や組合の仲間が仲裁に入り、ことなきを得たようである。

先の大杉栄についてはむろんその殺害に触れ、「まことに惜しいことをした。

いまも目をつむると、きつぷのよい男らしい大杉の偉容が私の眼底に浮んでくるのである。」と述べていた。宇野はもう一人の人物にも触れていた。やはり親交のあった平沢計七である。「いまでもその亀戸事件のことをおもうとき『平沢、残念だったろうな』とうめきたくなるのである。」と述べていた。

安谷屋正量注10は文花にあった東京モスリン紡績吾婦工場にいた。主任であった安谷屋は、一人の工員を呼んで説諭をしているところであった。「突如起った地鳴りと激震に驚く間もなく、隣りにある大きな水タンクがドシンと大きな地ひびきを立てて落ちると同時に蒸気パイプが破裂して高熱蒸気が吹き出し、濛々たる湯気で視界がさえぎられた。」と記されている。無我夢中で外へ飛び出す余裕もなく、第一震がおさまってから外へ出た。工場の被害は甚大であった。「長い煉瓦塀がまるで練達の剣士の手にかけた刀きずのように真一文字に切れ、その上の鋸屋根は或いは傾き或いは倒れて、完全に立っているのは一つもない。長い廊下は、屋根も低い壁も規則正しい波形に彎曲わんまがしている。工場内をのぞくと、機械の長いフレームやシャフトが同様に波打っているのに驚いた。」と記されている。倒れた屋根や柱に押し潰された同僚が助けを求める声が聞える。ひっきりなしにやってくる余震のなかでの救出は容易でなかったが、一人の女性工員の行方不明以外は全員救出することができた。行方不明の工員は何日か後に見つかった。「食堂の柱が一本折れて地上に突きささり、そこが凹んで水溜りになっていたが、その柱の下敷になって死んでいた」という。

工員の救出後、安谷屋は恐る恐る事務所の二階に上ってみた。「全市が火の海になって、ムクムクと湧き上る黒煙が空をおおい、その中にあちこちに赤い火の柱というより火のうず巻を吹き上げている。」と記している。さらには、「真昼の太陽が光輝を失ったまま、真赤な血の玉になったまま中空にかかり、凄惨な景観になっていた。こういう大火になると風を呼んで火の粉というには余りにも大きい黒い板が、その本体は何であるか知らないが、ヒラヒラと飛び散っているのが望見された。」と記されている。建物や機械の破損や汚染、あるいは水浸しになった原材料や製品の処理に数日間かかったという。留守宅のことが気になったが自分分は帰れないので、翌日に部下を田端の自宅にやった。だが、どの道も通ること

ができずに戻って来た。数日後、工場の後片付けも一応済んだので自宅へ帰ると、幸い火災もなくみな無事であった。家に帰る際のことであろう。「焼死体が未だ片づけられていない時なので、至る所で死体の腐臭に悩まされた。本体は見えなくなってもどこからもしれぬ腐臭に鼻を突かれると、鼻をおおいつつ通り過ぎた。隅田川の川幅はかなり広いが、その中に浮いている船の中に焼死体が横たわり、長い浅草橋の真中に焼死体が引っかかっている。中には子供連れの婦人の焼死体を見た」と記されている。

地震当日の夕方からはじまった「朝鮮人騒ぎ」にも触れている。「最初は「朝鮮人三十人が〇〇を襲撃している」というデマであったが、次々に流されるデマは人数が段々増えて、三百人、三千人になって来るので、市民はこれを本気にして殺気立ち、鮮人を見たら有無を言わず殺傷するようになった。同胞の中にも言語や挙動の故に鮮人と間違えられた者もひとりやふたりではなかったようである。」と記している。「東京モスリン会社の工員のひとりも間違えられて、血みどろになって出勤した者がいた」と加えられている。

はっきり記憶してないといっているが、その後何カ月に渡って徒歩で田端の自宅から工場まで通ったという。「作業服に地下足袋たひをはき、首に手拭いを巻き、護身の杖を携えて出勤」したが、その際にもたびたび「朝鮮人騒ぎ」に出くわした。「中には伝家の宝刀をぶら下げて町を闊歩するする奴もある。うっかり朝鮮人に間違えられたら大変である。こういう状態だから下らない一寸したことに動揺した。例えば民家の塀や壁などに△または○印が押されているのを見て、これは朝鮮人が井戸に毒を入れる印であるといつて騒いだこともあるが、後になってそれは下肥取りが汲み取った印であることがわかって大笑いになった。」と記している。

台東区

沢村貞子(注11)は浅草の自宅にいた。女学校の三年であった沢村は二学期の始業式を終えて家に帰り、お昼ご飯の支度をしていた。「毎月、朔日つひ、十五日には、小豆あずきご飯を炊くのが芝居ものの家の習慣」だったそうで、その日は小豆ご飯であっ

た。沢村の父親は狂言作家で、兄は歌舞伎役者であった。「でき上がったご飯をお櫃にうつし、お豆腐のおつゆの味をみようと小皿を口にもって行ったとき、突然、ゴーツといううなり声とともに家がぐらぐらとゆれ、あわててガスの火を消した私は足がもつれて尻餅をついた。まわりじゅうの壁がバラバラと落ちて、鍋の中が白くにごった。」と記されている。「二階で掃除をしていた母親が階段を駆け落ちながら「早く火を……、ガスを消して……」と叫んだ。火は消したが元栓は閉めていなかったのであろう。「また、激しくゆれて、やっとガスの元栓を閉めた私の足元に鍋が引っくりかえった。」と記している。新聞を読んでいた父親は敷いていた座布団を頭にのせ、「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」と唱えるだけであったという。家はゆがんだだけで潰れなかったが、あつという間に八方から火の手が上がった。「みようにシンとした異常な空気のなかに、激しい叫び声、泣き声が鋭く耳を破った。余震は絶え間なくつづいた。」と記されている。「私と父さんはもう少し様子を見るから、あんたたちは、とにかく先きへ逃げなさい」と母親にいわれ、沢村は小豆ご飯の入ったお櫃と鯉節を、弟は鉄瓶を持たされた。吾妻橋を渡って向島で落ち合う約束をしているところに、父親の妹とその養女になっていた姉がころがり込んで来た。さらに、母親の姉も駆け込んで来た。そこで、三人と一緒に家を出た。母親は「五銭白銅」が入った財布を持たせてくれたという。

だが、約束した向島へは行く事ができなかった。吾妻橋の上で、向島から逃げて来る人の波に押し返されてしまったという。川の向こうもあちこちに火の手が上がっていたので、上野の山へ向かい、その夜はそこで過すごした。「西郷さんの銅像の傍へ、やっと坐れるだけの席をとった。あたりはいっぱいの人だった。その人たちが、夜ふけとともにものを言わなくなった。無気味な静けさのなかで、動物園のライオンや虎のうなり声だけが、ときどき大きくこだました。上野の山から見おろす下町には、何十本もの真っ赤な太い火柱が、空を焦がすように傲然と立っていた。」と記されている。

翌朝早く、沢村らは、見知らずのおじさんにもなわれて巢鴨へ向かって歩き出した。六十すぎのこの男は巢鴨で車宿をしていた。本所にいる娘の安否を気づかってここまで来たという。「……この様子じゃ、この先き、とても行かれねえ。

あいつももう生きてはいまい。娘の供養だ。親の安否がわかるまで、俺の家に泊まるといいや」といわれ、ついて行くことになったのである。

道々、あちこちで棒切れや竹槍、日本刀をもって武装した自警団の人たちにさえぎられた。その人たちは、興奮しきったカン高い声でいきなり避難してくる人たちの足をとめ、

「おい、本籍地はどこだ。名前をいってみろ」

と怒鳴り上げる、疲れ切った人達はおどろいて、気の弱い人など、つい、どもったり口ごもったり、自分の住所をまちがえたりする。二度も三度もまちがえると、

「こいつ、あやしいぞ」

と列からはずされて、テントの中へつれてゆかれた。車宿のおじさんは、「朝鮮人が、この騒ぎにまぎれて、井戸の中へ毒をいれて歩いたそうだ。だから、この人達が調べているのさ。おまえたちも家につくまで水をのむな」と、小さい声でいった。

やつのことで巢鴨にたどり着いたが、おかみさんに会ったとたんにつくりにしたといっている。娘の生死も見きわめず、素性も知れない人々を連れて来たことにひどく怒りだしたからだというが、もつともなことではある。だが、お握りを一個ずつ与えられ、裏庭に荒むしろを敷いて一夜を過ごすことを許された。「叔母は、「いったい、私たちをだれだと思ってるんだろ」と、プリプリ小声でいっていたが、また、ひどいゆりかえしがあつたので、あわてて口をつぐみ、たがいに身を寄せあつた。夜気が冷たかつた。私は鯉節をながめながら、泣き疲れて寝入った弟の蚊を追っていた。」と記されている。

夜が明けのを待つて沢村は付近の家探しをした。ひどく汚いが、安い家が見つかった。大家さんに一生懸命頼んで承知してくれたというが、「畳の上に五銭白銅を前家賃として並べる十四歳の少女の顔を、あきれたように見つめていた。」と記している。「五銭白銅」は母親が持たせてくれたものであつたが、「お米に味噌、

鍋とふとんの借り賃を払っても、白銅はまだ何枚か残った。」という。それから沢村は、二人の叔母と弟を残し、姉と一緒に父母を探しに浅草へ向かつた。「道々、また何べんも自警団にとめられて本籍姓名をいわされた。恐ろしい噂は、ますます拡がっていた。焼けあとは、まだブスブスとくすぶっていた。こわれた蛇口からチョロチョロと流れでる水で、草鞋わらじをしめさなければ歩けなかつた。地熱で足の裏がやけどしそうだった。」と記されている。浅草の観音堂にたどり着いたのは夕方近かつた。境内は人々であふれている。沢村は姉と一緒に声をからして父母の名前を呼び歩いた。やがて、ボロ切れで作られたテントから母親が「ここだよー、ここにいるよー」といって這い出してきた。父親も無事であつた。母親の話によると、「私たちが家を逃げ出すと間もなく、三方から火の手がせまり、「つづら一個を背負つて逃げるのがやつとだった。」とのこと。また、母親は「命からがらここへ逃げこんだ人たちが叱咤激励して、本堂に火のうつるのをふせ」ぎ、「どうやら火が消えて、やつと落ちつく」と、味噌屋の焼けあとは焼け味噌を、肉屋の店からは、焼き肉を掘り出して、まわりの人たちに公平にわけ、飢えをしたのがせた」ということであつた。だが、ここでも自警団が組織され、焼け残つた刀や包丁をふりかざしていたという。「地べたを引きずる音や、耳をさくような悲鳴が一晩じゅうきこえて、私たちは、まんじりともしなかつた。」と記されている。

橘家円蔵(注12)は浅草にあつた宮戸座にいた。落語家七代目円蔵は、この時は桂文雀を名のつていた。宮戸座での出し物は『四谷怪談』で、「かみすき場」の幕があき場内は静まり返っていた。「そこへガラガラツときたんです。びつくりして外へ出ようとする、出口に縄を張つちやつて出ちやいけない、外へ出るとあぶないと案内人がどなつている。と、二度目にまたガラガラが来た。今度は縄を解いてくれた。あたくしは夢中で外へとび出し、今の観音裏の広い道から、駒形へ出る通りまで出たんです。」と記されている。だが、円蔵は「丸札」をもらうことを思いつき宮戸座に引き返したという。「丸札」とは、「事故やなにかで芝居が全部見られなかつたときは翌日見直せる札」の由。「馬鹿だつたと後になつて思いましたが」と振り返っている。「丸札を貰いに戻つたつて、そんなことの

できるような地震じゃない。」と語っている。私はもらえなかったであろう。それから円蔵は公園方向へと歩いて行った。「まだ余震がグラグラやってくる。なんの気なしに上の方を見たら、十二階（マツ）が半分に折れちゃって煙突みたいになって、そこから火を吹いている」。それから瓢箪池の脇の築山に登り、そこにある松の木につかまって様子をうかがっていたという。「芝居の役者が、お姫様の姿でたんかを担いでくる。池の鯉は死んで浮いてくる。そのうちに「花屋敷（遊園地）が危なくなってきた、「花屋敷」の「一銭亭」の横丁から裏にあった」十二階下（当時有名だった私娼窟）のちよいとちよいとの白首の人のけだものがとび出してくる。一方、「花屋敷」の中では本物のけだもの虎なんか、ウオーウオーほえている。それを逃げ出すと危ないからって、鉄砲で打ち殺しちゃう。とにかく地獄というか、池の水が赤く変わって見えませんでした。」と、いかにも落語家らしく語っている。しばらくはそこでじっとしていたが、夕方になって上野方面へ向かった。途中、空腹のために歩くのも面倒になり腰掛に休んでいると、通りかかった吉原の花魁がおむすびを三つくれたという。おむすびを食べる元気が出たのでまた歩き出し、師匠の師匠にあたる人の家に行つて見たが、周りが焼けていたので近づけなかった。師匠は八代目桂文楽、その師匠は五代目柳亭左楽である。そこから御徒町の兄弟子の家に行き、そこに泊めてもらった。あくる日、もう一度左楽師匠の所へ行くと、家から道具をどんどん出していた。円蔵も荷物を担いで逃げようとする、呉服屋が役に立つなら反物の束を持って行けという。また、時計屋もどうせ焼けるんだからと時計をたもとに入れてくれた。それから円蔵は上野の西郷さんの銅像の前まで行き、そこに荷物を下した。ちようどその時、松坂屋が焼けはじめたので、荷物を置いて仕方なく日暮里へ逃げたという。翌三日の朝に上野に戻つてみると、荷物は全部灰になっていた。あともなく方々を歩いたが、どこも灰になっていた。結局、日本橋にある文楽師匠の家に行くことにしたといっているが、なぜ今までそうしなかったのか不審である。途中、「焼けないところの人が、ゆであづき、すいとん、足袋だの手拭をくれたりしました。」と記している。また魚河岸が全部焼けており、「鮪の焼けたんだの、鮭の焼けたんだの、いいあんばいにこんがり焼けてる」のを食べた

も記している。師匠の家ももちろん焼けており、立札に「富岳」へ来いと書いてあった。「富岳」とはある講釈師所有の寄席とのこと。そこへ行き師匠に会い、その晩はそこに泊つた。翌日、中野にある師匠の親戚の家へ行った。

加藤宗厚（注13）は浅草にあった玉姫小学校にいた。加藤は教員であった。午前中に二期期の始業式を終え、教員一同が二階の裁縫室に集まり茶話会を開こうとしていた。「もりそばが運ばれ、手をつけようとした途端に第一の強震に見舞われた。そばを口にしたかどうか記憶がない。「早く避難を！」という何人かの声、私は直ちに飛び出して階段に向つたが、振動が激しくて歩けない。手摺につかまって舟を漕ぐような姿勢で、振動のおさまるのを待った。その間一、二分、窓の方に眼を向けると前方の民家からは土煙りがあがっている。廊下に吊されていた地図や掛図類が、ばたばたと音を立てながら落ちる。校舎全体が波打つように揺れている。」と記されている。震動がややおさまったので階段を駆け下り職員室に駆け込んだが、そのまま何も持たずに室外に飛び出した。「校舎全体は依然として波打っている。空は晴れ上っているが、何となく頭をおさえつけられるような気分が襲われる。」と記している。

急いで電車通りに出てみたが、電車は停車したままで人通りも少なかった。この分では電車は動かないと思つたので、渋谷の自宅まで歩く覚悟でいったん南千住駅方面に向かった。「線路上上つて見るとかなり多くの民家が倒壊しており、倒壊に瀕しているものも見える。避難民が続々線路上上つて来る。中にはぐったりとなつた人を背負いながら線路上上つて来るものもある。」と記されている。三河島駅の手前まで来たときにひときわ強い地震があつた。足を取られて倒れそうになりながらも上野公園目ざして歩く。日暮里駅から上野の森に入ると、大勢の避難民がひしめき合っていた。それから谷中の墓地を通りぬけ、美術学校から動物園前を通つて山下に向かった。「公園の入口で眼を左に転ずると松坂屋のはるか左手に数か所から火の手が上っているし、右方では東大付近が黒煙に覆われている。」と記されている。加藤は上野の山を目指して殺到する人々とは反対に、松坂屋の前を通り万世橋方面に向かった。その時、中心部に向かう貨物自動車があり乗せてもらうことができた。有楽町駅のそばで降り、日比谷公園、虎の門を

通り六本木方面へ向かった。「この辺一带は倒壊家屋も、火災もなく人々の動きもあまり多くはなかった。」と記している。食料を求め菓子屋らしき店をのぞいたが、「ひとときのパンもなければせんべいも、果物も缶詰も全然見当らない」。仕方なくそのまま渋谷駅に向かって歩き続け、午後四時過ぎにわが家にたどり着いた。家族も付近一帯も無事であった。だが、余震がひっきりなしにくるので妻と子供二人を連れて鍋島松濤園に避難した。若干の食料と、毛布、蚊帳などを持って行き、その夜はそこで野宿をした。

三日目あたりから色々な流言が飛び、「二重橋上に赤旗が翻る日も遠くはない」という言葉を聞いた時には「来るべきものが遂に来たかというショックを受けた。」といっている。「その直後、道玄坂方面から〇〇人來襲の流言が飛び、たえず爆竹のごとき音が聞えて来る。松濤園に避難していた人々が一斉に騒めき立った」。加藤らは他の人々とともに移動を開始したが、夜半には平静をとり戻したので、再び松濤園に帰り夜明けを待ったという。

勤め先の小学校に顔を出したのは七日頃だったといっている。渋谷から池袋までわりで鶯谷駅で降り、そこから吉原の遊郭の中を通りぬけて学校へ向かった。「吉原の池の周辺の空地には遊女の黒焦げ屍体が何の覆いもなく並べられ、悪臭を放っているの顔そむけて通る。この辺一帯から小学校にかけては一面の焼野原である。」と記されている。小学校の焼け跡には小さなテントが張られ、「一、三の教員がいた。担当していた二年生の四十五人中十名が犠牲者になったようだが、はつきりと確認するすべがなかった。「集まった子供には玄米の握り飯とアメリカからの救援の鮭缶を与えて飢渴をしのいだ。焼けただれたトタンや寄せ集めの板切れでの仮住居で、やっと雨露をしのぐ状況なので、何時授業の再開が出来るのか全く見当がつかない。」と記されている。

石田天海(注14)は浅草にあった常盤座にいた。石田は、奇術師の松旭斎天勝一座の一員であった。八月三十一日からはじまった公演は、二日目も超満員の盛況であったという。「開幕間もなく、例の大地震がガラガラと襲来した。」とあり、続けて「それからは、続く激震によるめきながら、女子座員たちを誘導して、一瞬にして瓦解した浅草六区を右往左往しながら、たがいになまえを呼び続け、火

の下、人の波をかくぐって、ようやく上野の山へ命からがら逃げのびたしだいであった。」と簡潔に記されている。座員は六十名を超えていたので、全員の無事を確認するまで三日間を要したという。一座の衣裳や道具類は跡形もなく失われ、予定をしていたアメリカ巡業は無期延期となった。だが、四か月足らずのうちに準備は整い、翌年には渡米が実現した。

守随憲治(注15)は寿の兄の家に行った。守随はその年東京帝国大学を卒業し、大学の副手として勤めていた。発生時のことについては日記が引用されている。昼食には婆やが「冬瓜の薄葛」を作ってくれた。「出来上がった汁を吸おうとして箸をとった。午のポーが何処からか聞こえて来た。とグラグラと来た。地震だと直感した。ドカンと振るい落とされた様な気がした。」というのが日記の記述である。日記には、その日の九時頃に電車で兄の家に向かったことも記されている。「記憶をたどると、とにかく長い地震だった。」と守随は改めて回想する。続けて、「一度止んだが、また揺り返しが来た。地震そのものを、それ程おつかないとは思わなかった。割に平気だった。ただ棚の物が、どしどし落ちて来るには閉口した。第一、芥が落ちて弱った。地震が一応止んだら、家の周囲から、ほこりが濛々と立ち籠め出した。」と記されている。そのうちに、どこからか爆発音が聞こえてきた。音は断続的に聞こえてくる。後で分かったことだが、それは蔵前の高等工業での薬品が爆発した音であった。やがて、火の手が上がり煙が見えた。様子を見ようと電車通りに出ると、駆けつけた消防車が鎮火した様子であった。

数丁離れたところに伯父がいたので行ってみた。近所の見舞客が大勢いたが、やがて去った後に二階に上がってみた。「書斎の硝子窓から物干へ上がって眺めて驚いた。坂本から浅草寺の裏を通った大通りに向かって、北の方から一列の炎が、こちらに向けて寄せて来る」のが見えた。すぐに下に降りて伯父に避難を促す。先に見舞いに来ていた若い衆も飛んで来て、「吉原の方に上がった火が拡がって、こちらへ寄せて来ますから、早く支度をなさい」という。伯父から逃げ支度の命令が下った。すぐに、「裏に大きな穴を二つ位掘り初めた。ここには簞笥が二棹か三棹其の儘埋められた。」というのは驚きである。家には居候がいて、みなしつ

かりした若衆だったので力業は得意だったといっている。次に大八車を調達してきて、夜具に食料、釜、鍋、それに仏壇を積んだ。近くの家を見ると、「火の玉の様なものが飛んで来て」、「門跡の大屋根の真ん中に落ちたか」と見ると直ぐ瞬間的に屋根全部が大きな日の玉になった。そしてこちら向き石垣の石に重なり目から火炎を噴き出した」。それは「生まれて始めて見た凄じい光景だった。」と記している。そのうちに「家にも火がついて来て、下の茶の間の桁をメラメラと嘗め出した」ので逃げた。「何しろ火の足が早くて、広い往来の真ん中を逃げて行くのだが両側の火が次々と先に進む。その方が人の足よりも早くてぐずぐずしてはいられない。」と記されている。

やっと上野までたどり着いたが、車坂あたりはすでに焼け野原となり山の上の方まで避難民でいっぱいであった。そこで三ノ輪の方へ向かい、近くの火の気のないところで一応落ち着くことができた。「落ちつくど皆腹がへったのを感じた。持ち出した伯父のビスケットの缶をあけ、これも伯父の飲料の葡萄酒をガブガブやって、一時をしのいだ。その中きつと雨が来た。濡れても平気だ。嬉しい位だった。」と記されている。続けて、「この時は翌日即ち九月二日になる筈だ。二日の夜明けだったろう。」と記している。明るくなってみると、上野の山を背に向こう一帯が焼け野原であった。その日のうちに伯父の家に戻ったが、何もかも焼けていた。だが、すぐに方々から焼けトタンを集めてきてバラックを建てた。昨日土に埋めた簞笥を掘り起こしてみたがみな蒸し焼きになっていたという。

中村翫右衛門(注16)は台東の自宅にいた。歌舞伎役者三代目翫右衛門は、役者仲間の翫太郎と兄の三人で一杯やろうとしていた。兄は三代目仲助である。奥の四畳半に膳を出し、一口飲みはじめた時であった。「ゴウー!! というひびきがしたと思うと、ぐらぐら……と、地ひびきとともに、家が上下左右に物凄い音をたててゆれはじめた。」と記されている。続けて、「益をほうり出すと、翫太郎氏は、よろめきながら、天地全土の尊……と金光教をはじめた。兄は、エイツ、と言って九字を切ると、御嶽山を祈りはじめた。私は、ノウマクサンマードバサラダ……と不動を祈った。」と記している。揺れは続き、「ゴウー ゴー と、うすきみ悪い音をたてて家はゆれる」。「また、一しきり(ごうごう)と音がする、空は、

なんともいえない、赤土のような色になって」いた。表へ出ると菓子屋が潰れ掛かっているのが見えた。翫右衛門は家に戻り、ワイシャツを着てズボンを手早くはき、兄が止めるのも聞かずに家を飛び出した。「仲御徒町から人形町の方へ向ってかけた。絶えず地鳴りが物凄くひびき、電車通りは電車はうごかない。そこ、家は倒れ、瓦はとび、右往左往する人々をかきわけて、ときどきゆれる地震の中を、私は一生懸命にかけつづけた。松永町・和泉橋・小伝馬町・人形町と、自分ながら実によく呼吸がつづくと思うほどかけた。」と記している。それほど急いで行こうとしていたのは、芸妓をしていた女性の家であった。「私は、はあはあいいながら走った。あたりを見るとという気持はしない。ただ、満佐子のことばかり考えてかけた。呼吸がはずんで苦しくなると、少し歩度をゆるめては、またかけた。水天宮・鎧橋・八丁堀・桜橋、私はとうとう新富町までかけ通した。」と続けている。満佐子というのがその本名だが、彼女はいわゆる旦那も子供もいる女性であった。満佐子は幸い無事であった。そこには満佐子の姉と妹もいた。

日が暮れてきたが電気はこない。「ごうごう……という地鳴りの音」がたえず聞こえる。「津浪がくるかもしれないぞ」という声も聞こえてきた。そこへ、満佐子の妹の旦那が自動車でやって来た。妹も芸妓であった。みんなで、麴町の家に来なさいということであったが、満佐子は嫌がった。むろん、自分ものこのついでに行くわけにはいかないと思ったが、結局は好意に甘えることになった。「真暗ななかに、光をおとした自動車のライトが、無気味な街路を、にぶい色に照らし出して、本の少しずつ走って行」った。だが、麴町まで行けそうにもないので、日比谷公園で車を止め車内で夜を明かすことにした。「ライトを消した自動車は、樹の影に包まれ、他からは見えないし、また、こつちからも暗くて外はみえない」。そこに物騒な物音が聞こえてきた。

しんとしている空気を破って、ガチャッ! ガチャッ! と音がして、靴音とともに、兵隊が剣つき鉄砲を持ってまわってくるのだ。しばらく静かになると、突如、バタバタと足音がしたかと思うと、
「そつちへ逃げたぞ、鮮人はそつちだぞ! 逃すな!」

帯剣のぶつかりあう音、靴音の乱れる音。

それが静寂を破って、なんともいえない無気味な雰囲気漂うのだ。

私は、なにがなんだかわからなかった。いったい、何を追いかけて、何が逃げてるか、見当がつかない。警備の兵隊が、どなってくる。「いま、不逞鮮人が暴動を起し、井戸に毒を入れ、公園内に逃げこんだ、注意されたし」というのだ。それでもなんだかわからない。なぜそんなことをするのか見当がつかないのだが、なにしろ、不安はますますつのるばかりなのだ。

ここも危険なので、丸の内の電信隊のところへ逃げようということになった。電信隊に着き、自動車から出て草の上に座った。すぐ近くに天幕を張って電信隊の兵士がたむろしていたが、その前に二、三人の縛られた男たちがいた。「一言わんか……」と兵隊がどなっている意味は、そうだろうと察するが、ガワンカーときこえて、ただどなりつけ、おどかしているとしたか感じられないのだ。」と記し、続けて「つかまつている人たちは、舌がもつれ加減の日本語だが、朝鮮人も見えるし、日本人がオドオドして舌がもつれているとも見えるのだった。ひっきりなしに、おどかし、追求するので、私もなにか気がわるくなってきた。」と記されている。ここも不安に感じたので宮城の方へ行ったらどうかと提案し、一同宮城へ向かった。「広場は、人と荷物で埋められていた。まだどんどん逃げてくる。私たちは早いほうなので助かった。」と記している。妹の旦那は家の様子を見に一旦帰った。もらった握り飯を食べようとしたが喉を通らない。もったいないからと隣の人にあげたらとても喜んでくれたという。旣右衛門は満佐子と一緒に堀の土手に上がってみた。

遠くを見まわすと、周囲は全く火に包まれていると見られる。天をこがすような火焰は、ほとんど全市を蔽っている。そのために、そこらは夜と思えぬ明るさなのだ。そこに、ぼんやりと月があるのだ。

「だだあん！」と、どこかで爆発の音が、広場の樹々に響いてくる。強い西風にまじって、ごうーと地鳴りがすると、余震がある。そのたびに、キヤッ！

という人の声をする。

あの火が、この強い風にあおられたら、どうなる、ここは、火の真中にとじこめられて逃げ場がない……、そういう不安が襲ってくる。しかし、ここからいまもう逃げるところもない……、もう駄目だ……、そういう絶望感が、ひしひしと私の弱い面に襲いかかってくるのだ。

その夜は毛布にくるまって横になったが眠れなかった。夜が明けて起きてみると、「空の色は、にごったように、赤茶けていた。ぐるりと見廻すと、煙はたえず立ちのぼり、また、広がっている」。喉が渴いていたので水くみの列に並んだ。長い時間をかけやつと水がありつき、持参の「御飯むし」に水をくんで帰り、みんなに飲ませた。翌三日に、妹の旦那が自動車で迎えに来て、麴町の家に厄介になった。

四日。日暮里から列車が出るという情報があったので、那須へ向かうことにした。那須には満佐子の子供がいた。妹は旦那の家に残り、満佐子と姉と女中の四人で日暮里駅に向かった。往來は列車に乗ろうとする人や避難者で埋まっていた。喉が渴いて水をもらおうとしてももらえない。井戸には張り札がしてあり、「不逞鮮人が毒を投げこんであるから、のんではいけない」と記してある。「私たちはわけはわからないが、不逞鮮人を憎いと思った。こんな苦しいときに、こういう惨虐なことをやる、ちくしょう！ どうしてやるか見ろ！ こういう怒りが、時が時、自分が苦しんでいるときだけに、いつそう強くこみあげてくるのだった。」と記されている。だが、続けて「私は後にこのときの真相を知ったとき、身ぶるいした。」と記されてもいた。何とか列車に乗り込むことができたが、超満員で屋根の上から機関車まで人で埋っていた。四時発車予定の列車が動き出したのは夜の十一時であった。川口駅近くの鉄橋にさしかかった時である。破損した鉄橋を修復したばかりだというので、汽車はゆっくりゆっくりと進んだ。

グウン！ と、列車の重みが鉄橋にかかって、鉄橋に、レールに、列車がめりこむように、ギンと、レールがしなっている感じを受けると、いままでも飲

声をあげていた土堤の人々も、列車の人々も、全く静寂そのものに凍ってしまったようになった。

ガタン！ ギュウン！ 列車がゆるい歩みを一步進めれば、しなうよう感じた鉄橋の動きは、強さをましてくるのだった。

かたずを呑むとよくいうが、乗っている人びとは、呼吸もつまるいきぐるしさをだれも感じていたのだった。真中ごろへ来たとき、ぐうんと、強くしなう。私は満員で押しつぶされそうな列車の中で、満佐子の手を固くにぎった。私はここで死ぬと思った。列車ごと墜落すると感じた。

列車は何とか鉄橋を渡り切った。「この瞬間の気持は、言いあらわせない。土堤にいる人々も、列車に乗っている人も、誰一人もない真暗なやみのような静寂が一度に破れて、「ウワア……」どつちからともなく歓声があがると、それが、天にとどろけと叫んでいるようにこだまするのだ。」と記されている。やがて大宮駅に到着すると、鉄道の人々や土地の人々が握り飯や水をふるまってくれた。黒磯駅に着いた時は「朝鮮人」が列車の後ろに乗ったというので大騒ぎになったが、何とか那須までたどり着いた。子どもも他の人々みな無事であった。

そこで四、五日を過ぎたが、わが家が気になるので東京へ行くことにした。列車は相変わらずの混みようだったが、窓から飛び乗った。日暮里に到着し、わが家へ向かった。「びこを歩いて、ほこりくさい、そしてこげくさい。なにしろ、きけば、百四五十か所火災がおこり、本所の被服廠跡だけでも焼死した人の数は約四万人といわれた。」と記している。家は全て焼け、柳の木が一本焼けたまま立っていた。その木に小さな板切れが打ちつけてあり、立退き先が記されていた。だが、甞右衛門は木切れのはしで土を掘り返してみた。「ちよつと掘ったところに、ピカリと光ったものがあった。私の三井と彫つてある金の印台の指輪だった。だが、「方々ほじくつたが、時計などはガラスが粉になって、がわは焼けてとけたのだろうか、見えなかった。」と記している。立退き先が埼玉県の杉戸町という遠方だったためであろうか、そこへは向かわず目黒にある中車師匠の家へ行ったという。七代目市川中車である。どこで聞いたのかは記憶にないがそこに猿之助がい

ると聞いたからだといっている。二代目市川猿之助である。はたして猿之助はいだが、中車については言及がない。本稿の(二)で見たように、中車はこの時北海道かあるいは青森かのいずれかにいて不在だったはずである。その後、様々なところを訪ね歩いているが割愛する。家族がいる杉戸町へ行ったことは記されているが、いつのことかは記されていない。家族はみな無事であった

宮崎甚左衛門(注17)は上野にある店舗兼自宅にいた。店舗とは菓子店の文明堂東京支店で、震災の前年に長崎から東京へと進出したばかりであった。昼食を済ませたらガス釜のことでガス会社に行こうと思いつきながら食べていた時である。「そこへ、あの大地震である。とっさに、四つの次男を抱いて路地へ飛び出した。裏は丹羽さんという石屋さんで、立てかけてある石材が物凄い勢いで倒れかかってくる。これはいけないと、ちよつとの小止みを見て、表通りに飛出してみると、土埃が濛々と立ち上り、新設中の電車のレールが飴のように曲り、五分前とはうって変わったもの凄く様相である。」と記されている。やがて、神田方面から火の手が上がり、上野の山へ向かつて避難する人が列をなしていた。夕方になると、いよいよこの辺も危ないから避難しろという伝達があった。裏の石屋さんには土蔵があり、大切なものは入れるようにいってくれたので着物類を入れさせてもらった。だが、もっと大切なものがあった。「ナショナル・キャッシュ・レジスターである。価格は千六百五十円だったが、月百三十円の月賦払いで、まだ払いきつていなかった」。これだけは焼いてはならぬと思い、重いレジスターを担いで池之端まで避難したという。なぜそれも土蔵に入れてもらわなかったのかは不明である。むろん、家族と店員も引き連れてであるが、その夜はそこで夜を明かした。「東南の空が一面に真っ赤になっているので、店もとうとう焼けてしまうのか——と、さすがに一睡もできなかった。」と記している。

夜が明けると、とりあえず五升の米を炊いたといっている。食料や鍋釜も持つて避難したのである。それから宮崎は店の様子を見に行ったが、無事に残っていた。早速みんなを引き連れて戻った。近所に食べ物がなくて困っている人がいたので、さつき炊いたご飯で握り飯を作って持ってきたという。夜になると、浅草の方から猛烈な火の手が襲ってきた。「上野広小路にあった仁丹の広告塔の

トタンが炎の中にヒラヒラと焼け落ちる」のが見えた。いよいよ危ないと思ひ、上野の山へ避難しそこで第二夜を明かした。翌朝、店に行つてみると、今度は何もかも灰燼に帰していたという。仕方なく再び上野の山に帰つたが、夕方に烈しい夕立がやつてきた。

店を再開する目途がたたないので、六日の夕方、日暮里から汽車が出ているというので長崎に帰ることにした。万一家族がはぐれた時の用意に、一人一人に十五円ずつお金を持たせ、米一斗と水を数本の一升瓶に詰めて出発した。日暮里駅は込み合つて乗ることができず、あてもなく田端まで行くと首尾よく乗り込むことができた。だが、高崎に着いた途端にみんな降ろされ、今度は石炭用の無蓋貨車に乗せられた。その頃は次の日の日中になつていたのであろう。「そのときの私の姿たるや、浴衣一枚にカンカン帽。みんなも似たりよつたりの格好である。日がジリジリ照りつけるので、新聞紙をかぶつて貨車の堅い床にすわっている――実に哀れな姿であつた。」と記されている。夕方に長野に到着。そこで旅館に泊まり、一週間ぶりに風呂に入ることができた。次の日に名古屋まで行き、寝台車に乗つて九日の夕方に長崎に着いた。

無事故郷に帰つて来たがやはり東京のことが気にかかる。じつとしていられなくなり、九月二十七日に東京へ向け出発した。二十八日に大阪に着き、三越に社員を訪ねた。文明堂は三越にも店が入つていた。東京へ着いたのは三十日であつた。東京の三越にも行つてみたが、内部はすっかり焼け落ちていた。焼け跡の地下室で三越の人に会い従来通りのお付き合いを約束し、金百円の見舞金を差し出した。宿泊先の神楽坂へ帰ろうとしてタクシーで六本木あたりに来た時、貸家札が目飛び込んできた。すぐに車を下りて聞いてみると、主人が自殺した家で借り手がつかないという。ただ、自殺したといつてもその家でやつたのではないのでいわゆる事故物件ではない。その日のうちに契約を済ませた。「間口三間、奥行七間半、権利三千五百円、家賃が百五十円であつた」。

再建の基礎ができたので、また一度長崎に戻つて家族を連れて来ることにした。横浜から船で清水港まで行き、静岡から汽車で長崎まで行つたと記しているが、帰りのコースは書かれていない。東京に着いたのは十月十日で、月末には開店に

こぎつけたといつている。

鹿島孝二(注18)は東上野の自宅にいた。早稲田大学の学生であつた鹿島は、夏休み中で寝転んで雑誌を読んでいた。「私は、跳ね起きるなり父の傍に行き、掩いかぶさつた。狭い家なので父は箆筒のすぐ下に病臥していた。箆筒の上の物が父に落下しては危いと突差に思つたのである。いい塩梅に落下はしなかつたが、家そのものがきしんで壊れそうに揺れた。」と記されている。物干し台で洗濯物を干していた母親があわてて下りてきて一緒に父親を掩つた。何分間かたつて一旦静かになつたが、またすぐ揺り返しがきた。それがまたしずまったところで外へ出ようとしたが、また大揺れに揺れた。「台所の方で何か落ちて碎ける音がした。頭上の電灯の笠は、右ひだりの天井を狙つてハネ上がった。それがおさまつてすぐに、母親と二人で父親を支え表の道路に出ると、すでに沢山の人たちが出ている。「屋根瓦が落ちかけていた。軒端に近い瓦が全部落下しそうにぶら下がっているのである。もう一と揺れ来たら落ちるだろう。あぶないから、物干竿を持つて来て払い落とした。自分の家だけでなく、隣家のもそうした。」と記している。しばらくすると、「火事だ!」という叫び声が聞こえた。「その指す方角を見て愕いた。一カ所や二カ所ではない。灰色の空に黒煙がまっすぐに三本、四本、五本も立ち昇つていた」。さらに見回してみると、「上野公園の方角だけを除いて、ぐるりの方角に黒煙りなのだった。かぞえると、全部で三十五カ所もあつた。」と記されている。父親は道路の上に戸板を置いて布団を敷いて寝かせたが、このままでは不安なので上野公園へ避難することにした。日は暮れかけていた。近くの牛乳屋へ行き牛乳瓶五本を分けてもらひ、母親と二人で父親の両脇を支えて歩き出した。「市電の通りへ出ると、洪水のような人の流れだった。浅草方面へ向う者は居ない。緑の山の上野公園めがけて人々は、あるいは荷物を背負ひ、荷車を所有している者はそれに荷を積んで引き、ただただ急ぐのだった。」と記されている。やつとのことで上野駅にたどり着き、貨物専用のプラットホームが空いていたのでそこで休むことにした。父親がもう歩けそうにないので、その夜はそこに寝ることにした。鹿島はそこから一人で家に帰り布団を背負つて来た。三回往復して何とか寝支度ができたという。

明けて二日。昨日買った牛乳を父親に飲ませ、上野の山を目指した。西郷像への昇り坂の方が足場はいいものの遠回りになるので線路から直接登ろうとしたが、父親には無理だった。だが、上からロープをたらしてくれた人があり無事にたどり着くことができた。だが、ホツとする暇はなかった。

人々が空を仰いで、アーツ、アーツ、と怯え、連れ同士が抱き合っているの、何事かと私も空を仰ぐと、浅草紙(あそうがみ)(鼻紙、又はトイレト用の紙)ほどの大きさのものがたくさん空に舞って居り、それがやがて落ちて来るのだが、落下するに従ってその物は大きくなり、浅草紙などと見たのは全く見誤りで、じつは長さ二メートル弱、幅一メートルのトタン板であったのである。屋根に葺いてあった物が、大火から起るつむじ風によって空高く吹き上げられ、浅草紙と見えるほどの高さまで持っていかれ、フワフワと舞い飛んでいたものであった。地に落ちてくると焼けトタンだから、ドサツと音をたてて地面に突きささる。頭に当たったら、その頭は無惨に打ち割られてしまうだろう。人々が怯え、抱き合うのが当然だった。

鹿島も父親と母親を両腕の中に入れた。「群衆の間から、ナムアミダブツと唱える声が起り、ひろがった」。だが、しばらくするとつむじ風は止み、トタン板の落下もなくなつたという。父親と母親を腕から放し見回してみたが、見える限りが黒煙を上げている。だが、家のあたりはまだ火が及んでいない様子であった。そこで偶然友人に出くわした。まだ焼けていないので家の物をあらかた運んだというので、それに習うことにした。四往復をしてバテてしまったが、道路ももう通行困難になっていた。道路という道路が置き去りにされた荷車で埋まってしまっていたからである。その間に「不快な体験」をしたという。三回目に戻った時にわが家に見知らぬ人が入り込み、引き出しの中をかき回していたのである。「何してるんだい！」と声をかけると、「どうせ焼けちまうんで、もったいないから、お貰い申そうと思って」と答えたというが、その後どうなったかについては記されていない。

夕方になると上野の山にも火の手が迫ってきたので、また父親を支えて奥の博物館の方へ向かって歩きだした。せつかく運び出した荷物はまとめて縛り、目印を立てて置き去りにするほかはなかった。途中で父親が歩けなくなったので、桜の木の下に座り込んだ。「頭上まで空が赤くなり、そこから絶え間なしに火の粉が落ちて来はじめた。バカなことだが、父の肩に落ちた火の粉を指でつまんで、やけどをしてしまった。火の粉とは熱いものだ、と初めて知ったのだから愚かだった。人々は桜の枝を折って、降りかかる火の粉を払いながら、又してもナムアミダブツと唱えるのだった。」と記されている。

三日の朝がきた。「空は、薄墨色だった。赤みが無い。火事は下火になったのかな? 下町を見下ろす山の端の方へ走って行ってみると、見える限りが、白煙もうもうの焦土であった。真つ正面に十二階があつたが、八階あたりから折れて、焦土に孤立しているさまは、泣いているかのようにであった。」と記されている。父親に食事をさせなければならぬので、飯盒でお粥を作り三人で食べた。その後、わが家を見に行った。途中、荷物を置いておいた場所に寄ってみると白煙を上げていた。飛び火で燃えてしまったのであろう、無残な姿になっていた。西郷像のところへ来て見下ろすと、下谷神社の大銀杏が燃えがらになって立っていた。石段を降りて電車道へ出る。「地震で立ち往生した電車だろう、線路の上で焼けて、鉄骨の部分だけが残っている。上野停車場も形なしだ。浅草方面を眺めても、眼につくのは大きな樹の燃えがらだけで、建物が一つも無い。ところどころ土蔵だけが見えた。」と記されている。わが家は灰になっていた。「焼け跡の小さいこと。こんな狭いわが家だったかと、不思議な気がするほどのものであった。台所の米櫃の跡だろう、米が黒こげになってあった。やかんの焼けたのへ、その黒こげの米を、手でしゃくって入れた」。食糧の足しになると思ったからであることはいうまでもない。やがて雨が降り出し、かなりの大降りになってきた。母親が杖わりに持っていた蝙蝠傘を父親に差しかけ、桜の木の下に入った。ふと見ると、桜の木から木へとロープを渡し、その上にトタン板をのせ、地面には蓆を敷きつめている人がいた。父親をその下に入れてやりたく思い頼んだが、「人を入れるために作ったんじゃない。」とにべもなく断られたという。そうこうしているう

ちに、いい塩梅に雨は止んだ。「雨が空の煙りを流し落としてくれたのか、空はまだ灰色だが、煙りが全然含まれていないようだった。火事は完全に止まったらしい。下町を焼くだけ焼いてしまったのだろう。」と記されている。

夕刻近くになって、デマがささやかれ出した。「博物館の井戸へ朝鮮人が毒を入れた。あそこの水を飲むと、死ぬぞ!」というのだった。その水を父母に飲ませまた自分も飲んでいたので、それからは飲めなくなったという。近くの別の井戸に行ってみると、行列ができていた。だが、そこには日本刀を持った若者が見張っており、「毒を入れる奴はたつ斬るぞ!」と叫んでいた。しばらくすると、腕章を巻いた自警団の男たちが、「朝鮮人らしい者を見つけたらすぐ知らせてください」と触れ回った。夜になりうとうとと眠りかかると、「鮮人だ!」という叫び声で目を覚まされた。「飛び起きて見ると、声のした方角へサーチライトが向けられていて、その光芒の中に、逃げまどう人間とそれを追う群衆の姿が浮かぶのであった。血を見ることもあった。一と晩中に、何十回もくり返されたのである。」と記している。鹿島は、大学で同級生だった京城出身の友人のことが心配であった。夏休みだから帰郷していればいいのだがと思つたといっている。

四日の朝には炊出しがあつた。「乞食になつたみたいなのが、おやじに食べさせたいからだ」と自分に弁解した。」と述べている。白い西洋紙に包まれた白米の大きな握り飯二個だった。母親も一包もらつてきて、それを三人で分けて食べた。その後には飲み物の配給があつた。トラックに四斗樽を積んで、そこからくみ出して与えていた。飲み物はカルピスだったという。突然、名前を呼ぶ者がいた。近くに住む知り合いだった、ソースをいらないかという。その頃まで、家ではほとんどソースを使ったことがなかつたのでとまどつたが、一瓶もらつた。「もし何も食う物が無くなつたら、その辺の草でも茹でて、こいつをかけて食うつもりだ」とその知人はいつた。彼は被服廠跡で大勢の人が亡くなつたことも教えてくれた。西郷像の近くでパンを売つてつといるという噂が伝わつてきたので行つてみた。「博物館前の大通りに出、左へ、山下の方へ向つて急いだ。右手に小松宮の銅像があり、その手前のすり鉢山の樹々の葉が黒く焦げているので、ここまで火の粉が飛んだのかと思つたり、いや、その向うの大仏像の首が無くなつてい

るので、地震が大きかったことに改めて恐怖を感じた。」と記されている。清水観音堂の近くまで来た時、母親の郷里の住所を記した旗が眼に飛び込んできた。はたして、その旗竿をもつていたのは伯父であつた。伯父は自分たちを探し歩いていたのである。千葉に住む伯父の家は被害がなかつたので避難することになり、翌朝出発することにした。その夜も「朝鮮人狩り」が行なわれた。伯父が立ち上がつて眺めているので、「伯父さん、立つてないで坐つてください。大きいから鮮人と間違えられますから」といつて止めたという。

翌五日の早朝、伯父持参の握り飯で腹ごしらえをして出発した。汽車は亀戸から出るの、長い道を歩かなければならないが、幸いに父親の足どりもしっかりしていた。西郷像のところまで来て一休みしようとしたが、父親は大丈夫だから行こうという。「石段をくだつて、電車道へ出た。街路樹は焼け棒杭になつていり、市電の架線が切れて蜘蛛の巣のように路上へぶら下がつていり。焼け残りの電柱には、西郷銅像と同じに上から下まで、べた一面に尋ね人の貼紙だつた。」と記されている。途中、わが家の焼け跡まで行き、避難先を書いた札を立てておいた。「佐竹へ出、三味線堀のそばを通り、鳥越神社から蔵前へ、そして両国橋へかかった。」とその足取りが記されている。隅田川には「死体が二十体も三十体も浮いて」いた。また、汽車の高架堤の斜面には「累々と焼死体が見えた。なんとか亀戸までたどり着き、千葉市郊外の伯父の家に着したのは夕方であつた。翌日、父親は元氣であつたが、鹿島は起きることができなかった。上野の山の野宿のせいか腰が立たなくなり、肋膜炎を併発し三ヶ月間寝込んだという。

添田啞蟬坊(注19)は北上野の自宅にいた。添田は、今日でいえばシンガー・ソングライターというべき「演歌師」であつた。雑誌『民衆娯楽』の九月号が製本屋から届いたのが九時頃であつた。前年に『演歌』を解題した添田主宰の雑誌である。発送の担当者が来るのを待つていたがなかなか来ない。そのうちに腹がへつてきたので朝飯兼昼飯を食べることにした。「冷飯と副食物の残り物を机の上に並べて将に箸を取らんとした」時である。「地鳴り震動、瓦落々々バツタン棚の物が落ちる棚板が落ちる。頭の上にも肩にも、飯も食器もメチャク、続いて更に凄まじい響きミリク、ド、ドーン、家が半倒れになつた。」という小気

味よい文体で記されている。身動きもせずにその光景を見ていたが、やがて立ち上がって傾斜した裏の窓から首を出した。すると、裏の下宿屋が家の方に傾いて倒れていた。添田は雑誌の束を積み、それを足がかりにして窓から外へ抜け出し、下宿屋の屋根から自宅の屋根へ上がったという。どの家でもみんな屋根に上がっていた。そこに、雑誌發送担当の二人もやって来た。間もなく浅草、神田、本所方面の七、八箇所から煙が上がった。だんだん燃え広がり、風も強くなってくる。午後の二、三時になると新たな場所から煙が上がるのが見えた。「頭の無い十二階の燃えるのが一番よくみえた。」と記しているが、崩れ落ちた浅草の凌雲閣のことであることはいうまでもない。五、六時になると赤黒い炎の渦巻きが夜空にはつきりと見える。だが、添田はまだ避難する決断をできず大通りに出てみた。「驚くべき避難者の数荷車の数、ぞろ／＼／＼病者を背負ふ者、子を負ひ子を引く者、壮者老人重荷を背負ふ者担ぐ者ヤカン鉄瓶を下げる者負傷者、上野へ上野へと堪える事なき列が続く。」と記されている。

添田は家に再び屋根に上ったが、いよいよ避難しなければならぬことを悟り、發送担当の二人とともに家を後にした。「上野に向つて進む。進むのではなく押し出されるのであつた。辛うじて下車坂停留所までは出たがこゝで行詰つてしまつた。立ち往生だ。而も後から／＼押しつゝ来ると、押しつゝぶされて苦しうたまらないが前へも後へも身動きが出来ぬ。」「俺は更に勇気を加へて人の中に割込み車の下を潜り荷の上の上を這つて六七間進んだ。汽車道と電車道の間だ。少し空いてゐるが此処も安全な場所ではない。どの顔も／＼不安の雲に充たされてゐる。」と記されている。それから線路伝いに鶯谷近くまで行つたといつてゐるが、その夜をどこで過ごしたかは記されていない。

翌二日。「やがて白々と夜が明けかゝる、火燄の中から太陽がのぼる」。添田は「あゝ五十年の文化は脆くも破壊された。みそぼらしい科学よ。人間の力の弱さよ小さい自己よ。」といったことを考えながら、真つ赤な朝日をじつと見つめていたという。上野の山を見ると人の山だつた。「崖端からコボレ落ちるばかりの人だ、崖にも人がへバリ付いてゐる。崖下一帯の汽車道には、或は荷物に倚りかゝつて、呆然としてゐるもの、泣いてゐるもの、沈黙を続けるもの、「これからど

うしやう」「どうなるのだ」と独語するもの、満ち充ちてゐる。其の群から抜けて更に日暮里田端方面へ移動する数もおびた／＼しい。」と記されている。その後、發送担当の二人は日暮里駅近くの弟の家へ、添田は谷中にある友人宅に行つたという。友人宅に着いたのは朝の七時。井戸端で顔と手足を洗い、朝食を食べ少量だが酒も飲んだという。「多数の焼け出されの中で、此日此時刻に酒を飲んだりあつた／＼かい飯にありついたりした幸福者は恐らく俺位のものであらうなどと思う。」と述懐している。その後二時間ほど眠り昼を過ぎた頃、弟の一家族と發送担当の二人も避難して来た。

友人の家も危なくなつてきたのであろう、夕方になり避難することにした。弟夫婦と子供二人に發送担当の二人、合わせて七人である。「狭い道路を、絶間なき、馬力、荷車を避けながら進む。……一行は尾久の町はづれ王子電車線路の脇の空地を選んで陣取る。」と記している。「寝ようとしても蚊に攻められて眠れない。おまけに此土地の青年団みたいな者が「ゆうべ泥棒を捕へて二十円貰つた」とか〇人が来たとか、行つたとか、とりとめもない事を言つてガヤ／＼騒ぎ廻つてゐる。野宿も容易ではない。……夜もだんだん／＼更ける頃、青年等が来て「〇人が来ると危険だ、二三人入ると安全な場所がある」とて俺達一行を裏手の畑に案内する。」と記されている。

いつのことかは記されていないが、一行は金町から出る汽車に乗つて我孫子まで行つた。尾久から金町のある葛飾区への移動については記されていない。そこから知人のいる柏市に行つた。そこに家族らを残し単身水戸へ向かつたというが、なぜそうしたのかは記されていない。「水戸に降りると、駅前避難民の休憩所が設けられてゐて、大勢立ち働いてゐた。私は疲れ抜いてゐたので、何処でもいゝ、体を横たへて休めるところを心配して貰へないだらうかといふと、水戸公園の中の黄門公が勉強されたといふ館へ案内された。眺めはよい、閑寂であつた。大広間にぼつんと坐つてゐると、今風呂を焚いてゐますと働いてゐる学生の一人が言つて呉れた。これはまるで別荘に避暑をしてゐるやうなものだと思つた。」と記されている。

翌日は汽車で青森へ向かつた。「駅々で窓から慰問の食料其他が差し入れられ

た。」と記している。青森から弘前へ行き、知人の家に足を止めた。そこから大鰐町、十和田町、さらに仙台、会津若松へと移動し、「演歌をやった」という。各地で演歌を演奏して回るのが目的だったのである。家族を残して単身で行ったのはそのためであろう。家族へは居場所の連絡をしていたのである。会津若松に息子の智道がやって来た。別れてから三ヶ月目であったというから、十一月あたりであろう。焼け跡にバラックを建てる骨組みができたので戻ったらどうかということであった。だが、その後もしばしの間東北をさすらったといっている。その間に、「震災小唄」と「大震災の歌」を書いたというので、前者を引用しておく。後者は大部なので割愛する。なお、本文中には「震災小唄」と記しているが、引用の際は「地震小唄」となっている。

地震小唄

俺は東京の 焼け出され
 同じお前も 焼け出され
 どうせ二人は 家もない
 何も持たない 焼け出され

○

焼け出されても ねえお前
 生きたい心に 何変ろ
 俺もお前も さすらひの
 旅で苦労して 生きようよ

○

武蔵野の原 照らしてる
 昔ながらの お月さん
 わたしやこれから さすらひの
 旅で苦労して 暮すのよ

津田青楓(注20)は上野公園で開催されていた二科展と院展の会場にいた。「上

野竹の台で、その日は開会初日で招待日だった。同じ屋根の下では日本美術院も同じやうに招待日だった。」と記している。「竹の台」とは当時竹の台陳列館と呼ばれていた建物である。画家の津田は寺田虎彦を案内しながら見て回った後、休憩室でおしゃべりをしていた。その時である。「突然ガタンガタンといふ音がした。一瞬、バネ仕掛けのやうに亀吉は立ち上がった。建物全体がゆらゆらと動いた。これは地震だと感じた。寺田さんはすぐに立ち上がらず、あたりを一応見まはしてから静かに立たれた。すると段々ゆれ方がはげしく、それも何度かやってきた。」と記されている。津田の自伝は三人称で書かれており、「亀吉」とは津田本人のことである。寺田虎彦は東京帝国大学の教授であった。建物のなかは危険だと考え、裏の出口から外へ出た。「大学の方の丘に煙が濛々と立ちこめてゐた。そのうちにも相当ゆれて、地割れがしさうにも感じた。」と記している。津田は二人の子供がまだ会場内いることに気づき再び会場に入り、二人を連れて今度は表門の方へ出た。寺田とはすでに別れ別れになっていた。「表門の方からは浅草の方に煙が濛々と広い範囲に立ちこめ、空の色が不気味な黄色にかぶさつてゐた。皆でんでんに家に向かつて歩き出した。上野の山へは界限で焼け出された人々がドンドン避難してきた。」と記されている。

本郷に出ると、東京帝国大学が焼けていた。「堀の横を煙をさけながら通りぬけ、赤門前から春日町に出て江戸川の裏路まで来た」。途中、ところどころに「朝鮮人が暴動を起こして日本人を襲撃にくる。武器のある者は用意しろ」と書いた貼紙を見たという。何とか目白台にある自宅にたどり着くと、家は火事にも遭わず潰れてもいかなかった。ただ、ピアノの上の梁が落ちていたくらいであった。津田は近くの店に行き、売れ残りの罐詰類やパンなどを買い、停電の用意に蠟燭を買い集めるのに忙しかったという。家のなかには不安なので、夕食は庭に箆を敷いて食べた。「夏の真つ盛りのこと故、室内よりも寧ろ外の方が涼風があつて、佗しさの中にも一抹の開放感があつた。」といっている。

翌朝、町に様子を見に出かけた。「路行く人は百鬼百行といふか、身に耐へられるだけのものを肩からぶらさげたり、腰に巻きつけたり、或は歩きながら握り飯をかじつたりしてゐた。利にさとい人間は自宅の前でスイトンと称するメリ

ケン粉をまるめて茹でたものを売るものもあり、旗を立てて自分等の避難の場所を大書し、逃げる時ちりぢりになった親兄弟を捜してゐるものもある。地獄の縮図だった。」と記されている。上野広小路まで行き品川の方を見渡すと、「一軒の家もない茫茫とした焼け野原だった。きのふ迄立派な家々が櫛の目のやうにびつしりつまつてゐたのに一夜の中に野原と化してしまつたのだ。」と記されている。続けて、「須田町辺までゆくと川があつた。川床は高いが、溝水の小さな川に人々の死骸がぎつしりつまつてゐた。着物は焼けてしまつて皆素裸で水面に浮いてゐた。」「死体は皆ブクブクにやけただれてゐた。お腹を上向けに死んでゐるのが女性で、下向きの死体は男だといふことだった。」と記されている。

二科展は急遽大阪で開催されることになり、貨物船で一切の出品を送り出したという。いつのことは記されていないが、津田も京都を根拠地に関西暮らしをする決心で出発した。東海道本線が不通なので、中央線を迂回して名古屋に出、そこから大阪に向かった。「大阪の会場はある橋の袂にある、市の商品陳列場だった。」といい、はつきりしない。近くに宿を取り、翌日から毎日会場へ手伝いにしかけた。「新聞社の応援もあり入場者は相当にあつた。」と記している。

鏑木清方(注21)もまた、上野公園で開催されていた院展と二科展の会場にいた。日本画家の鏑木は、門人二人とともに巡覧していた。「九月一日風雨烈しく、然もその蒸し暑さ嘗て覚えぬ異常なものがあつた。」とその日の天候が記される。出口に近い一室にさしかかつた時である。「想像に絶えぬほどの巨人が金剛力を揮つて、建物を地上から吊り上げて、宛かも杵で臼を搗くやうに上下することふたたび、続いて大地の動搖烈しく小舟の浪に漂ふやうで、四面に建物の軋む音、ものの崩れ壊れる音が入り交つて、騒然、轟然、立つ足も定まらず、手ぢかなテールに凭つて少しく鎮まるのを待つた私たちは戸外へ出る。」と、独特な表現で記している。留守宅のことが気になるので一人の門人を先に帰した。画人にとつてクラブのようになつていた精養軒に寄つて行こうとも思つたが、それはやめて山を下りて観月橋方向へ向かった。「弁財天の境内へ足を踏み入れると池畔にある筈の龍池院の建物が芝居で見る「地震加藤」の玄関前のやうにピツシヤリ押し潰されて、形も崩さず大屋根が地上に在るのにびつくりして事態の容易ならぬを

知つた。」と記されている。

本郷の家に帰ると、母親と次女が隣家の庭に避難していた。妻は内弟子の一人とともに三越へ買い物に行き不在であつた。また、長女も齒科医へ行って不在であつたが、門人の一人が探しに出かけたとのことであつた。やがて、門人が長女を連れて帰つて来た。その後、妻と次女も無事戻つて来たという。「妻と八重とはちやうど時刻が午飯時なので六階の食堂に入つて赤飯を誂へ小憩した時、何ごとと弁へる間もなく恐ろしい音響と共に椅子から放り出され、途端に耀かしく吊り下げられたシャンデリアがけたまゝ美しい響を立てて床の上に飛び散つたといふ。」と説明されている。八重は内弟子の名前である。火がさし迫つてはいなかつたが、精養軒の庭先に避難することにし、門人の一人を家に残し、夜までには全員が精養軒に避難した。「庭からは本郷台と下谷の一部が見渡される。夜に入ると火勢は益々熾んになり、火の気のないのは駒込、谷中の方角を刺すのみである。私たちがこの庭へ通れた時には他に二、三組を見かけたに過ぎなかつたのに、今はもう殆ど人と荷物に埋もれてゐる。藁、敷物も用意したので、夜を明す人に貸してあげることができた。」と記している。夜が明けた頃、妻がわが家を見に行つたといつてゐるが、一人で行つたのは不審である。それはさておき、やがて門人の一人がやつて来て、今ではむしろ家の方が安全ではないかというので精養軒の庭を引き上げた。

翌二日。まだ強い余震が続く、悪臭のする煙に掩われている。家の中に起臥する気にはならないので、帝国大学の構内に避難することにした。「池に臨む高台にある藤棚のほとりで、大樹の陰になるところに場所を選び、わが家から畳を運び、社中の郷土会が展覧会に使うカーキ色の幕を張つて、出品材料に用意する春芳堂の六曲屏風を建て廻した。」と記されている。三日。一旦おさまつた火は再び勢いづき、広小路の松坂屋を焼き、池之端の方へ向かつたという情報が入つた。だが、昼近い頃に大病院の人が来て、構内は心配ないと触れ回つたので安心した。その頃、空が一面に曇つて急雨が来そうな気配になつてきたので、人をつけまづ母親を家に帰した。「待望の雨降りそゞいで急ごしらへの天幕を漏る。盆を覆すといふ形容そのまゝ、誰も彼も濡鼠となつて悦ぶ。」と雨を歓迎しているが、

これで火勢が衰えると思つたのか、あるいは数日來の体の汚れを拭えろと思つたのであろうか。その後、みんなでわが家に帰つた。床の間の壁が落ちたりしてとり乱れていたが、家は一応災厄を免れた。だが、電気、ガス、水道は止まり、食料も欠乏して苦慮をした。

その後は断片的な記述があるだけである。六日には主治医の先生が尋ねて来て、白米を取りに来るよういので取りに行つた。一日以來はじめての白米であつたといっているが、その間何を食べていたのかははっきりしない。七日と八日には門人を連れて焼け跡を見に出かけた。八日にはようやく水道が出るようになったという。絵筆を取り上げたのは九月二十二日であつた。「仲秋の名月は九月二十五日、月光殊に冴え互つて、湯島天神の境内から、下谷、浅草の方を眺めると、そこに甍の波はなく、暗の中に点在する燈火は、さながら沖の漁火を望むやうで、その侘しさ限りない。」という記述で終わっている。

波木井皓三（注22）は上野桜木の家にいた。慶応義塾大学予科の学生であつた波木井は、あまりに暑いので猿股ひとつの裸で昼食を取つていた。「いきなり物凄い震動で、下から烈しく突き上げられて、啞然としている間に、頭上の電燈はゆらゆらと大きくゆらぎ、家全体が動き出したので、仰天して庭に飛び出した。しかし庭の大地とも揺れ動いているので立っていられず、尻持ちをついて、思わず家の二階を見上げると、二階屋の屋根が左右にグラグラと揺れているのを初めて見た。この強烈な自然力の前に、ただただ肝をつぶして、ポカンとして腰を抜かしていた。」と記されている。やつと震動がおさまると、竜泉の実家が心配になつた。波木井は、当時「家庭教師兼用心棒」をしていたという第一高等学校生と一緒に住んでいた。家に着くまでの足取りが詳細に記されている。

私たちはもう食事どころではなく、すぐ服をひっかけると、家を飛び出した。さすがに桜木町一帯は地盤の強固のためか、被害家屋は見当たらなかった。私たちは博物館裏の徳川家のお霊屋の前の道を一散にかけ抜けて、鶯谷の坂を下り、踏切りを渡つて坂本へ出た。坂本二丁目の市電の停車場の手前を左折して、八百物市場前を通り過ぎ、その先きの二股道を右へ行くこうとすると、その細

い路地の両側の軒並の家がつぶれていた。私は初めてこの地震の激しさを知つた。金杉の電車通りに出て、三島神社の角を右折して、すぐ左折、大音寺前から下龍泉寺町へと一挙に走つて行つた。私は江戸町一丁目の非常口から「廊」へ入ると、人つ子一人としていない深閑としたたずまいが、むしろ無気味に感じられた。両側の妓楼の建物はしつかりと聳え立っていて、この大地震の真つ只中という状況とは全く隔絶された感じであつた。

波木井の家は大文字楼という妓楼を営んでいた。家のなかへ入つてみたが誰もいないので裏庭へ行つてみると、店の人たちがいた。家族をはじめほかの人たちは近くの空き地に避難しているというので行つてみた。父母の姿を見てやつと安心したという。上野桜木の家が崩壊を免れていたもので、みんなで移ることにした。だが、東上野にいる姉が心配だと母親がいたので、波木井が行つてみることにした。千束を経て浅草公園へ出る。「観音様の本堂は、この大地震にもビクともせずには聳え立っているのが、むしろ無気味であつた。」と記している。そこからは「頂上から三、四階ばかり陥没した悲惨な姿態を示していた」浅草十二階も見えた。母の妹、すなわち伯母は無事であつた。早速、道具類を荷車に積み込み、従兄と一緒に引いて上野桜木の家にたどり着いた。家は家族や店の人たち、加えて避難して來た親類や知人たちで充満した。

翌二日の昼頃、波木井は上野公園へ行つてみた。「西郷隆盛の銅像のある見晴し台から下町全般をあちこちと眺めていると、恰度あれは三筋町辺かと思われる上空に一陣の物凄い竜巻が捲き起こつた。あつという間もなく、くるくると円形を描きながら、その竜巻の中に捲き込まれた土蔵の屋根が一挙に吹き飛ばされ、周囲の民家の屋根も、それこそ木端微塵とでも言うように吹き上げられて、中天高く屋根が舞い上がつて行く悲惨な状況に、物凄い自然の暴力を感じた。」と記されている。避難民は家の前をひっきりなしに通つて行く。夜になると、「上野駅が焼けたぞ！」という叫び声が聞こえた。「安全地帯と思つた上野公園も、すぐ下の上野駅が焼けて、山の上の方へ吹き上げてくる火の粉で、身の危険を感じた避難者たちは危険をさげようと、この一本道さしてのがれてくるので、異様な

混雑ぶりを示した。」と記している。ここも危ないと思ったので、父親と相談をして飛鳥山方面へ避難することにした。その足取りがまた詳しく記されている。

根津の大通りに出て、さらに正面の坂を登って向ヶ丘の第一高等学校(現東大農学部)と帝大の間の道を通って、やっと本郷の電車通りへ出た。ここまで来ると道は広く、混雑ぶりが多少緩和されてきた。わが家の一隊は先頭の大文字楼の弓張提灯を目標に歩行をつづけて、ひとまず吉祥寺門前で小休止、さらに駒込駅上の陸橋へ到着、人員を点検しながら、さらに避難先きの目的地飛鳥山へと行進しなければならなかった。この飛鳥山までの行進が、女性群にとつて一番困難であった。

ようやく飛鳥山に到着したのは夜中の三時過ぎではないか、といっている。一同疲労困憊の極に達し、山の傾斜面にゴロツと横になった。それからどれくらい過ぎたかは分からないが、突然人々の騒然とした足音に眼を覚まされた。波木井は何事かと思ひあとをついて行つた。飛鳥山の頂上まで行くと、遙か田端、三河島方面が真っ赤に燃えていた。「あれは不逞鮮人が焼き打ちしているんだ。今にこっちの方へも押しかけてくるから、気をつけるよ」と群衆のなかから叫ぶ人がいた。ここも安全ではないのかと思ひ、父母のところに戻り報告した。夜明けが近づいてきた頃、上野桜木の家で留守番をしていた者がやって来た。家は無事だという知らせであった。

上野桜木の家に落ち着いてから数日後のことである。吉原の家の焼け跡に行つてみると、廓全部が焼け野原になっていた。その帰り道、吉原花園公園の池へ娼妓たちの焼死体を見に行つたといっている。それからは、連日焼跡整理のために通つた。

壺井繁治(注23)は谷中の下宿にいた。壺井は詩作をはじめて間もない頃で、震災の年には雑誌『赤と黒』を仲間と創刊した。「その夜は明け方へかけて一切のものを押し流さんばかりの豪雨があり、雨の合い間を縫って上野動物園のライオンの遠吠えが無気味に聞こえてきた。」と記している。「その夜」とは八月

三十一日の夜だが、壺井は原稿書きで徹夜をし、朝食を済ませてから寢床に入つた。

ところが物凄い音で眼を覚ますと、それは思いがけぬ大地震で、すでに部屋の壁はあらかた崩れ落ち、柱はガタガタ揺れ動き、今にも家全体が崩壊するのではないかと思われた。わたしは慌てて飛び起き、揺れ動く柱につかまり、辛うじて身体を支え、地震の静まるのを見計らって一刻も早く外に飛び出そうとあせつたが、地震は容易に止みそうにもなかった。やっといくらか静まったので、三階の部屋から二階へ通ずる階段のところまでゆくと、三階の階段も二階の階段も半分壊われていた。それを危く伝つて戸外へ飛び出すや否や、またも激しい地鳴りがして、眼の前の電柱がまるで箸でも左右に動かすように大きく揺れた。

下宿は何とか倒壊を免れたが、ひっきりなしに余震があるので家のなかにはいられないと思ひ、上野公園へ避難した。夜になると公園はゴツタ返した。「その晩わたしは上野の丘から下谷・浅草・三河島方面の街々を舐め尽くす炎の大群団を眺めながら一夜を明かした。火は数キロも離れたところで燃えていると思われするのに、わたしの頬つべたは火照りを受けた。それほどその夜の火災は大きかったのだ。」と記されている。

翌日、壺井は弁天町にある友人の下宿へ避難した。そこでは、「朝鮮人が家々の井戸に毒物を投げ込みまわっているとか、社会主義者が暴動を起こそうとしているとかという噂でもちきりだった」。次の日の昼頃、友人と連れ立ち江戸川橋の方へ歩いて行つた。橋の手前の戒厳屯所を通り過ぎようとした時、「こらっ！ 待て！」と呼び止められた。剣付鉄砲を持った兵士が、「貴様！ 朝鮮人だらう？」と詰め寄つてきた。壺井はこの時、長髪に水色のルパシカを着ていた。自分が日本人であることを何度も主張し、友人も弁明に努めてくれたので何とか通過することができた。滝野川にいる友人の安否が気になり、また身なりを何とかしなければと思ひ、江戸川橋の袂で別れ護国寺の方へ向かった。途中、ラッパ卒を先頭

に騎兵隊が行進しているのを見た。警察署の前まで来ると、「暴徒アリ放火略奪ヲ逞シウス。市民各位当局ニ協力シテコレガ鎮庄ニ努メラレヨ。」という貼紙がしてあった。滝野川の友人の家は無事であった。壺井は友人から浴衣と黒いソフト帽を借り、その帽子で長髪を隠して、再び弁天町の友人のもとに戻った。「途中富坂辺で野次馬に取り囲まれ、背中から鳶口を打ち込まれている人夫風の男を見た。それは朝鮮人と見られて、そういう惨虐なテロに遭っていたのであろう。」と記されていた。

東京にマゴマゴしていると本当に殺されると思い、五日に田端駅から汽車に乗り郷里に向かった。列車は大変な混みようで、屋根の上にもまで人が乗っていた。埼玉県の熊谷あたりから、駅に着くことに剣付鉄砲を持った憲兵がやってきて車内を覗きまわった。「ここでも社会主義者や朝鮮人に関するデマが盛んに話題に上っていた。中には朝鮮人を何人殺したかを自慢話する者さえあった。こんなかにだって、社会主義者や朝鮮人が潜り込んでいるかもしれないぞ、とあたりを見廻す者もあった。」と記されている。ある駅に着いた時である。例のごとく剣付鉄砲を持った兵隊が車内を覗きに来た。しばらくの間車内をジロジロと見まわしていたが、突然隣にいた印絆天を着た男を指さして、「十五円五十銭いってしろ！」と怒鳴った。その男はボカンとしていたが、「ジユウゴエンゴジュッセン」と答えると、「よし！」といって兵隊はその場を去っていった。壺井は男を横目でみながら「ジユウゴエンゴジュッセン、ジユウゴエンゴジュッセン」と心のなかで繰り返したといっている。正確には「ゴジュッセン」ではなく「ゴジュッセン」だといいたいのか。だが、そのことには触れていない。「もしこの男が朝鮮人なみに十五円五十銭を「チュウコエンコチュッセン」としか発音出来なかったとすれば、早速兵隊に引つ立てられ、どんな悪い運命に見舞われたか知れたものでない。」と記している。さらには、「街の自警団に「座布団」という言葉をいわされ「サフトン」と答えて殺された朝鮮人があったし、またある日本人が自警団に引つかかって、「勅語」を読まされ、すらすらと読めなかつたので、「貴様！朝鮮人だろう！」とその場で虐殺された話も聞いた。」と述べている。

郷里の香川県小豆島に着いたのがいつなのかは記されていない。家とはしばらく

く音信を絶っていたが、突然の帰省はその不和をたちまち解消してしまったという。シベリアに動員され肺病にかかって除隊した黒島伝治が、同じ郷里の小豆島で療養していた。久しぶりで会った彼は、シベリアの話はあまりせず、東京での地震の話や文壇の状況について聞きたがったという。川合義虎や平沢計七が殺され、大杉栄と伊藤野枝、橘宗一が虐殺されたことにも触れている。

小倉朗（注24）は谷中の祖父の家にいた。小倉は小学校の二年生であった。「異様な唸りをきいたと思った瞬間、はね飛ばされて畳の上に打ち倒され、「地球が割れた！」と思い、柱という柱が軋む物凄い響きの中を、祖母と這って玄関わきの書生部屋まで逃げ、机の下にもぐり込むと「わーっ」と泣いた。」と記されている。揺れがおさまると外へ飛び出した。「倒れた家、走っていく消防車、戸板で運ばれていく死体、降りしきる塵埃」などを見ているうちに嘔吐が襲ってきたという。間もなく車で母親が駆けつけて来た。辺りには黒煙が上がっている。夜になると夜空が真赤に焼けていたので、第一高等学校のグラウンドに避難することになった。「谷中の坂をくぐる夥しい人の流れ、藍染橋の四つ角で出会った物凄いい人の渦」にもみくちゃになりながら、やっとグラウンドに到着した。おそらくは母親と二人で逃げたのであろう、後から祖父がやって来てすぐに家に戻った。「東から西に、谷中の墓地、上野の森、不忍池、東大の森に囲まれたこの土地が火災に屈強な場所であることを祖父はよく見極めていたのである。」といっている。

「それからよほどたつてからのこと」としかないのでいつのことかはつきりしないが、一週間ほど期限つきで父の家に帰ることを許された。小倉は生まれて間もなく叔母夫婦の養子に出されるが、なぜか祖父の家で暮らしていたという。ここでいう父親とは実父である。祖父の家の番頭に連れられ、藍染橋の停留所から電車に乗った。「ノロノロ電車は、炎のあともなまなましい神田のガードや、焼けだれた広瀬中佐の銅像、そしてこれまた火をかぶった三越のライオン前を通り、銀座通りを抜け、汚れた新橋のガードをくぐってガタガタと走る。両側はほつたらかしの焼け跡や、焼け出されたときそのままにブリキ小屋や、俄かづくりの商店が並び、大がかりな建築現場の隣りには、一つ一つの窓に吹いた焰をそのま

まに黒く印した焼けビルが残っていた。」と記されている。芝大門の父親の家はバラックで心が痛んだといっている。小倉は、そこから毎日電車に乗って小学校に通った模様である。朝早く起され六時半には停留所に連れて行かれ、「藍染橋までたのみます」と車掌に託され、一人電車に乗った。約束の日がくると、ききわけよく祖父の家に帰ったという。

村上信彦(注25)は根岸の自宅にいた。中学生の村上は学校で始業式を済ませ、昼頃に家に帰り昼食の膳に向った。「箸をとりあげて食べようとしたとたんに、下から衝き上げるような衝撃を立てつづけに五、六回受けた。と、みるまに恐ろしい勢いで横揺れがはじまった。」と記されている。庭を散歩していた父親が大声で「みんな出ろ」「早く出ろ！」と叫んだが、横揺れがひどくて立つことができない。「私も立とうとして四つん這いになった。そして震幅に合わせて畳の上を、まるで雑巾掛けでもやるようにすべって歩いた。その間に柱時計や箆筒の上のものは落ちてくるが、無声映画でも見るようにふしぎに物音を感じなかった。」と記している。揺れが一応おさまったところで家族は庭に集まった。隣近所では倒壊している家もある。昼食を食べそこなったので、握り飯をつくって庭で食べたという。そのうちに、火事だという声が聞えてきた。「さっそく戸外へ出てみると、西の空に煙りがみえる。」と記されているので、その後は家にいたのであろう。続けて、「半鐘も鳴らず、蒸気ポンプも走らないが、まさしく火事にそういかなかった。やがて戸外がやかましくなった。走る人、何か叫び合う人で騒然となった。」と記されている。兄と一緒に門の外に出、電車通りまで行ってみた。「見ると、三ノ輪の方面から、両側の家屋が火に包まれている。そしてみるまに次々と燃え移り、こちらに近づいてくるのであった。」と記されている。「逃げるしかない」と父親がいい、とりあえず田端に行くことにした。そこには姉の嫁ぎ先があった。村上は数年間の日記と、読みかけていた『南総里見八犬伝』教冊を風呂敷に包んで持出したといっている。

家を出ると、往來はすごい人の波であった。「狭い裏通りを通り、いつも中学に通う道順の鶯谷に出、そこから線路伝いに——電車は通らないので——田端まで歩く予定」であったが、鶯谷の手前で人の波で身動きができなくなった。それ

から田端の家にたどり着くまでの細かな記憶はないといっているが、ただ、ひとつだけ鮮やかに刻みこまれた光景があるという。

それは田端駅の構内をみおろす崖沿いの小路をのぼっていったときのことである。前方から背の高い青年が、両手をだらりと垂らして、ふらりふらりと下りてきた。みると額が柘榴ざくろのように割れて、肉がはみ出している。その肉の朱色が凄惨なのと、放心したような眼つきがなんとも無気味で私は恐怖をかんじた。そしてそれ以上に、一緒に連れていた妹が心配になった。小学生のその妹はひどい神経質なので、こんな姿を見せたらひきつけでも起すかもしれない。私は咄嗟にあたりを見まわし、すぐ近くの家の生け垣を破って妹を押し込み、自分ももぐりこんでその男の行き過ぎるのを待った。

田端の家は無事であった。義兄は、東京は灰燼に帰してしまおうだろうといひ、父親も予想外の災害の大きさに食糧危機が起こるのではないかと話し合っていた。そこに、さらに不安をかきたてるような噂が入ってきた。「朝鮮人がこの震災を利用して暴動を企てている」というのである。「品川に朝鮮人が三千人上陸し、こちらに向っているという、まことしやかな情報であった。」と記している。そして、「銃撃戦が起ったとき流れ弾にやられないようにということで、田端の家では蒲団をたくさん積んでバリケードにし、その蔭に寝た。」といっている。村上は、先に見た額の割れた青年をふと思ひ出し、「もしかしたら彼は朝鮮人だったのではあるまいか。朝鮮人であることで傷つけられ、追われていたのではないか」と思ったという。

翌日、焼跡を見るつもりで根岸の家に戻ると、奇跡的に家は焼け残っていた。電車道に出てみると、「ただ一望千里の焼野が原で、品川のお台場まで見通せた。」と記している。近くの映画館の焼け跡には、「両手を針金でうしろ手に縛られた男の焼死体があつて、その前を通るときは息をつめて駆け出さなくてはならないほど臭かった。風向きによつてはその臭気が私の家にまで匂つてきて、飯が食えなかった。」とも記されている。村上は、その男もたぶん「朝鮮人」だったろう

と述べている。

学校がはじまったのはたぶん二十日過ぎてからだだったという。担任の先生が大杉栄の事件について取り上げ、「皆さんは、甘粕大尉のやったことをどう思いますか」と尋ねた。たくさんの手が挙がった。「いいと思う、えらいと思う、という答えが返ってきた。大杉はおそろしい社会主義者だ、国賊だ。国賊を斃したのだから甘粕は愛国者だ。」というのである。それに対して先生は、態度を改めて、「私は、甘粕大尉はわるかったと思います。」といった。「日本には法律と云うものがあります。たとえ大杉栄がわるい人間だったとしても、法律で罰すればよろしい。それをさしおいて、個人が勝手に人を殺すなど、認めることができません。甘粕大尉はゆるすことのできない悪人です」と目を輝かせていった。話しはそれで終わったが、これをきっかけに村上は大杉栄の著書を読むようになったという。

大河内一男(注26)も根岸の自宅にいた。第三高等学校の学生であった大河内は、夏休みで帰省中であつた。そろそろ講義もはじまるので、京都へ帰ろうと思つていた矢先のことであつた。「地底から突きあげられるような衝撃があつたかと思うと、立つていられないほど身体がゆさぶられ、本箱や茶箆筒は倒れる、天井板はメリメリ音をたててさける、壁は崩れ落ちる、庭へ飛び出したものは上から落ちてきた屋根瓦でみんな重傷です。」と記されている。家は半壊状態となつたが、火災は免れたという。大河内は、多分の野次馬根性も手伝つて市内のあちこちを見て回つたという。

吉原の池は、さほど大きなものではありませんでしたが、おそらく火に追われた遊女などが飛び込んだのでしよう、池一杯に屍体が浮いており、人夫が一つの屍体をやつとの思いで引き上げると、底の方から別のふくれあがつた屍体がスツと浮き上がってきて、いくつ屍体を引き揚げても池の表面は屍体で埋まつたままです。あまりの凄惨さに私など長くそこに立ちつくすことができませんでしたが、心ない人たちは、場所が吉原であつただけに、興味本位にわい騒いでのぞき込むようにしていました。ここは私の住んでいた下谷の根岸からそれほど遠くない場所でしたので、私など割合に早く出かけたほうだった

と思つています。それから隅田川を渡つた本所の被服廠跡へも出かけたのですが、ここは噂のとおり黒焦げの屍体の山でした。まだ屍体は、はき気のするような異様な臭いの煙が立ちのぼるままに放置されていましたが、それも大震災の数日あとのことです。何千人もの人間がその広場へ火焰に追われて逃げこんだのですが、家財道具まで引き込んだので、それに火が移つてこの世ながらの焦熱地獄になったそうです。

数々の「流言蜚語」についても記されている。激震があつた直後、交番の巡査が家にやつて来て、「午後三時に第二回目の激震がありますから」といつて急いで帰つて行つたという。「これなどは「流言蜚語」とは申せないとはいませんが、おおかたの飛び交う噂は悪質のものでした。」といい、様々なことが記されている。「主義者」が革命を計画しており、ロシアの「労農政府」が裏で操つていて、政府は社会主義者を一人のこらず逮捕する方針をきめた、とか、いろいろありましたが、余震がまだ完全にはおさまりきらないさなかに、朝鮮人が井戸に毒を投げ込んで回つている、とか、朝鮮人が埼玉県の川口町(鑄物工業の中心地)から大挙して東京市内に押し寄せてくる、などと、まことしやかに喧伝された。そこで早速、町会や隣組やらが中心になつて襲撃に備えることになつた。「町内の要所要所にはテントの小屋がけが出来、家々から若い男手が駆り出されました。私なども駆り出された一人ですが、詰所へ出かけてみて驚きました、トビ口くちを手にした六番組の若い衆が大勢おりますし、夜の闇のせいで異様な雰囲気のなかに、土族あがりの老骨らしいのが槍を手にして立つていたり、太刀を腰にぶち込んだ者もいる有様でした。」と記されている。「六番組」とは、「ま、い、をもつた町の消防団兼私設防衛隊のようなもの」という説明があるが、結局襲撃などもなく、井戸に毒物を投げ込まれたという事実はどこにもなかったといつていい。

もうひとつ「シヨッキングな出来ごと」だったというのが、「甘粕事件」である。大杉栄についてやや詳しく述べた後、事件のあらましを記している。「九月十六日、数名の憲兵が当時淀橋にあつた大杉の仮住居をつきとめて、内妻の伊藤野枝やたまたま伊藤が連れていた六歳の橘宗一少年を捕え、大杉と一緒の日比谷の憲兵屯

所へ連行、待ち受けていた憲兵大尉甘粕正彦「がやがて三人を順次に扼殺し屍体を屯所裏庭の空井戸へ投げ込み、上から石をつめさせた」。また、この事件に先立つ九月四日の「亀戸事件」にも言及している。「亀戸警察の裏庭で、総同盟系の闘士平沢計七、南葛労働会の河合義虎ら九人が、これまた憲兵の銃剣で刺殺されてしまいました。」「屍体は荷車に積んで荒川の土手下まで運び石油をかけて燃したのだそうです。」と記されている。

京都に帰ったのがいつのことか正確な時期は覚えていないというが、北陸線回りで京都へたどり着いたといっている。田端駅から出る列車に乗り、直江津、富山、金沢と通り、米原に出て京都に着くまでには三日かかったという。「乗客はみな無料で、止まる駅々では罹災者扱いですから、地元の人たちが、握り飯やお茶を窓から入れてくれたり、郵便端書マユをくれたり、どの駅でもたいへん親切でした。」と記されている。

剣持銚太郎(注27)は竜泉の下宿にいた。鉄道院の運輸事務所に勤めていた剣持は、昼飯を食べに下宿に帰った。いつものように、福神漬けと味噌豆をおかずにご飯を食べていた時である。「無気味な遠鳴りを先きぶれに、グラグラと来た。」「重みのある、ドシン、ドシン」という震動に驚き、茶碗と箸を持ったまま戸外に飛び出した。「唸りとも、叫びともつかない、悽愴な風が、渦になったと思ったら、すごい音をたてて、今までいた自分の家が、煙りをたてて、横倒しになった。火事ではなかった、煙りは、ほこりであった。」と記されている。近くの機関庫に駆けつけたが、みんな放心状態で声を出す者もいなかったという。「機関車が線路からはみだし、車庫のガラス、詰所のそれも一枚だつて満足のものはなかった。」と記している。そのうちに、あちこちから火の手が上がった。それからのことについては記されていないが、夜になって近くの大きな家の庭に避難することができた。「騎馬の巡查が、大勢で、夜目にもわかる、サーベルを光らせて、飛び廻っていた。」と記し、また「不逞鮮人暴動起す。どこからともなく、そんな噂がたつた。」と記されている。二日目の夜になっても、火は拡がる一方であったという。

五日目頃に、知り合いの奥さんと娘さんが職場に安否を確かめに訪ねて来た。

知人宅は奇跡的に残ったとのことであった。「吉原の瓢箪池には、何百というお女郎衆が、浮いている。本所の被服廠跡には、これはまた何千という焼死体が、累なつて、目も当てられない。神田の今川小路にある専修大学も跡形ない。焼跡にたつと、東京ってこんなにかつたかと思うほど、あたり一面、焼野原だつた。焼けトタンを、かこいにして、道端で水とんを売っている。食うものといつたら、これだけしかない。鉄道では緊急手配として、職員全部に五円の給料前渡があつた。」と記されている。なお剣持の自伝は三人称の自伝である。剣持は「敬太」という名前で登場する。

川合貞吉(注28)は三ノ輪の自宅にいた。明治大学の学生であつた川合は、三越に買い物に出かけるために少し早めの昼食を取ることにした。食卓に向かった時、「突然、軽い震動を全身に感じた。」「地震だ!」と直感したが、「軽い左右動だったので狼狽せずに震動の進行具合を見ていた。」という。しかし、「振幅は段々大きくなって、そのうちどどどど……と海鳴りのような音がして、棚の上のものが落下し始めた。」と記している。川合は階段を駆け上がり、病気で寝ていた妹を引きずり下ろして外へ出た。「その瞬間、大きな震動に打たれて妹を抱えたままどつと倒れた。振り向くと、直ぐ後へ家の廂ひさしが傾いてきた。立ち上がるうとすると、大地が怒濤の中の船の甲板のように上下左右に揺れ動いて足をとられ、私は大地を這い廻つた。」と記されている。そのうちに地震はおさまつたが、すぐに揺り返しがきた。「物凄い地響きと同時に、家が大地に翻弄され、屋根が崩れ、瓦がとび、火の手が上がリ、旋風が捲いた。天地は真黒であつた。私は大地に転がりながらこの光景を見た。」と記している。その後も揺り返しが続き、夕方には家が焼けてしまったという。大杉栄や川合義虎、平沢計七が虐殺されたことにも触れているが、あとは焼け跡にバラックの仮住まいを建てたことが記されているだけである。

荒川区

宮下弘(注29)は荒川の自宅にいた。警察官であつた宮下は非番で、自宅で寝ていたという。「グラグラツときた。眼をあげたら、天井の電灯がぶつかりそう

に揺れていて、棚の上のものがみんな落ちてくる。小学校のときに、地震があったら机の下に入れ、と教えられていたものだから、すぐ三尺の押入れのなかの醤油樽やなんかを放り出して、そこへ入った。」と記されている。揺れが少し静まってきたので外へ出ると、母親が井戸側にしがみついていた。揺れがやんでから、宮下はすぐに制服に着がえて三ノ輪にある派出所へ駆けつけた。「すぐ近くの四つ角の質屋がつぶれていて、家の下に人がいるというので、近所の人を頼んで四人助けました。」と述べているが、それ以後の役目はもっぱら炊出しであったという。「朝鮮人や社会主義者が放火している、井戸に毒を投げこんだ、という噂がパーツと広まった」ことに触れ、九月二日に警視庁から総監指令がきたとして、その「要約」が記されている。

(1) 流言防止と嚴重な取締

(2) 不逞行動の取締

(3) 朝鮮人を迅速に保護收容し、内鮮融和を図る

(4) 自警団の凶器携帯を禁止、断固取締ること

「朝鮮人を收容すると、またこの人たちを食わさなきゃならなくなった。炊き出し係としてはたいへんです。」と少々呑気な感想を述べている。自警団から疑われることもあった。「むこうのほうは数が多いし、威張っていて、巡查は孤立していますから」「おまえ、ほんとうの巡查か？」とやられて、そうとうの恐怖でした」と述べている。さらには、「夜になると酒のんで騒いで、まるで祭りのときのようにはりきっている。連中は土地の人間で、お互いに衆をたのんで強いけれども、こっちは一人、二人で、なかなか取締るところじゃない。」と記されていた。続けて、「吉原の土手の上を、朝鮮人がむざんになぐられて大勢に引きずっていかれるのを見ました。巡查のなかにも興奮状態で、朝鮮人をぶった切つてやる、なんて息まいているのもいました」と記されている。大杉栄と伊藤野枝が殺されたことにも触れているが、当時は何も知らず、新聞が出るようになってから知ったといっている。

注

- (1) 山崎謙『紅き道への標べわが心の生い立ち』(たいまつ社 一九七五)
- (2) 三瓶康子『球子自伝』(ふだん記全国グループ 一九七五)
- (3) 高井としを『わたしの「女工哀史」』(草土社 一九八〇)
- (4) 丹野セツ『丹野セツ 革命運動に生きる』(勁草書房 一九六九)
- (5) 河竹繁俊『牛歩七十年』(新樹社 一九六〇)
- (6) 井上貞治郎『きんとま一本杉 握つたら放すな』(実業之日本社 一九六一)
- (7) 木村義雄『私の三十五年』(新潮社 一九三九)
- (8) 清水幾太郎『私の心の遍歴』(中央公論社 一九五六)
- 同 『わが人生の断片上・下』(文藝春秋 一九七五)
- (9) 宇野信次郎『八十年の人生』(私家版 一九八一)
- (10) 安谷屋正量『激動の時代に生きて』(角川書店 一九七四)
- (11) 沢村貞子『貝のうた』(暮しの手帖社 一九七八)
- (12) 橘家円蔵『てんでん人生』(文理書院 一九五二)
- (13) 加藤宗厚『最後の国立図書館長 ある図書館守の一生』(公論社 一九七六)
- (14) 石田天海『奇術五十年』(朝日新聞社 一九六一)
- (15) 守随憲治『わたしの青年期』(明治書院 一九七六)
- (16) 中村翫右衛門『中村翫右衛門自伝 人生の半分 上巻・下巻』(筑摩書房 一九五九)
- (17) 宮崎甚左衛門『体験を語る』(晴風社 一九五六)
- (18) 鹿島孝二『大正の下谷っ子』(青蛙房 一九七六)
- (19) 添田啞蟬坊『啞蟬坊流生記』(私家版 一九五六)
- (20) 津田青楓『老画家の一生 上巻・下巻』(中央公論美術出版 一九六三)
- 同 『春秋九十五年』(求龍堂 一九七四)
- (21) 鏑木清方『こしかたの記』(中央公論美術出版 一九六一)

- 同 『続こしかたの記』(中央公論美術出版 一九六七)
- (22) 波木井皓三『大正・吉原私記』(青蛙房 一九七八)
- (23) 壺井繁治『激流の魚 壺井繁治自伝』(立風書房 一九七四)
- (24) 小倉朗『自伝 北風と太陽』(新潮社 一九七四)
- (25) 村上信彦『大正・根岸の空』(青蛙房 一九七七)
- (26) 大河内一男『暗い谷間の自伝 追憶と意見』(中央公論社 一九七九)
- (27) 剣持銈太郎『はじっこ人生』(弘文堂 一九六二)
- (28) 川合貞吉『遙かなる青年の日々 私の半生記』(谷沢書房 一九七九)
- (29) 宮下弘『特高の回想 ある時代の証言』(田端書店 一九七八)

付記 本研究は、日本学術振興会科学研究費(挑戦的萌芽研究 課題番号

一三六五二〇四八)の助成を受けた。

ドイツ詩の文法 (2)

杉田 聡 (帯広畜産大学名誉教授)

(受付 : 2022 年 4 月 28 日, 受理 : 2022 年 7 月 25 日)

Des deutschen Gedichtes Grammatik (2)

SUGITA Satosi

目次

- はじめに
- 第1章 ドイツ詩のしらべ (音韻論)
- 第1節 韻律・押韻 第2節 弱音の省略
- 第3節 弱音の付加
- 第2章 ドイツ詩のことばとその成り立ち (形態論・語彙論) ……以下本号
- 第1節 ドイツ詩のことばの成り立ち (形態論)
- 第2節 ドイツ詩のことば (語彙論) ……以下次号
- 第3章 ドイツ詩文の成り立ち (統語論)
- 第4章 ドイツ詩語句・詩文のふくみ (意味論)

本号詳細目次

- 凡例……77 謝辞……78
- 第1節 ドイツ詩のことばの成り立ち (形態論) ……78
- 1, 屈折 (語形変化) **Flexion**……78
- (1) 活用 (動詞変化) **Konjugation**……79
- 1) 独自の不定詞……79
- 2) 独自の現在形 (直説法) ……84
- 3) 独自の過去形 (直説法) ……85
- 4) 独自の過去分詞……89
- 5) 独自の命令法 (付随的に同形の直説法現在形) ……95
- 6) 接続法のように見える直説法過去形……97
- 7) 直説法過去形のように見える接続法……101
- (2) 曲用 (名詞類 **Nomen** 変化) **Deklination**……102
- 1) 独自の格変化……103

2) 複数形の利用 / 独自の複数形……112

2, 派生 Derivation, Ableitung……119

(1) 異品詞間の派生……119

- 1) 動詞の名詞化・形容詞化……120 2) 名詞の動詞化・形容詞化……122
3) 形容詞の名詞化・動詞化……129

(2) 同品詞間の派生……131

- 1) 語の縮小……132
①接頭辞の省略による語の縮小……133 ②接尾辞の省略による語の縮小……142
2) 語の拡大……153
①接頭辞の付加による語の拡大……153 ②接尾辞の付加による語の拡大……156
③縮小辞の付加による語の拡大……160

文献一覧……166

引用詩一覧……168

凡例

- 1、詩の作者、題もしくは簡略化した題を、引用の後に記した（題はイタリック表記とした）。引用・言及した詩は、簡略化した題を含めすべて末尾の「ドイツ詩一覧」に記した。
- 2、詩を引用する際は、次のような工夫をした。
 - a) 改行を示すために「/」を、改詩節を示すために「//」を用いた（本号には音素記号は出ない）。
 - b) 音韻の省略箇所にはアポストロフ「'」を置いた。多くの場合私がつけた。版にもよるが、これが入らないテキストも多い。
 - c) 2006年の「新正書法」には従わず、原詩の綴りを尊重した。ただし、*gibt, Thränen, die Todten* 等の歴史的な綴り（例えば Schiller, *Des Mädchens Klage*）は、現代表記にあらためた（それぞれ *gibt, Tränen, die Toten*）。
 - d) 各詩行の冒頭を大文字で記す習慣には従わなかった。そのために、「,」「;」「:」等で区切られた文を独立文（副文を含めて）とみなすかどうかで難題が生じたが、基本的に原詩に従いつつも時にはそれらを「.」と見なして、次行の冒頭を大文字で引用した。
 - e) 中高ドイツ語では、すべての品詞が小文字で表記されるが、中高ドイツ語の名詞を記す際は、その正書法に合わせて語頭を小文字で記した。
 - f) 主項目として問題にした単語には実線の下線 を、関連して言及した単語には破線の下線 を引いた。例えば Under der linden/ an der heide,/ dâ unser zweier bette was,... (*Vogelweide, Under der linden*) のように。
- 3、ドイツ詩に関心をもつ学生が読めることも重視し、すべての作例に訳（ポイントを2つ下げた活字による）をつけた。訳にも記号「/」「//」を用いたが、これは日独両語の統語法上の違いから便宜にすぎない。
- 4、本文を記すにあたっては、次のような工夫をした。
 - a) 必要に応じて略号を用いた。「*ahd.*」は古高ドイツ語、「*mhd.*」は中高ドイツ語、「*nhd.*」は新高ドイツ語の意である。

- b) 本文でも中高ドイツ語の名詞の語頭は、小文字で記した。ただし誤解・不分明さを避けるため、しばしば新高ドイツ語をその後に () に入れて示した。
- c) グリム辞典 (*Grimm*) では、名詞の語頭も文頭も小文字で、また ß は sz と記されるが、ここから引用する際は、新高ドイツ語の正書法にしたがい、名詞の語頭を大文字化し ß, ss の綴りを採用した。辞典を含む各種文献の略号等は「文献一覧」に記した。

謝辞

本稿執筆の過程で、今回も佐々木洋子氏（帯広畜産大学教授・オーストリア近現代史）から、貴重な資料を提供いただいた。記して感謝の気持ちとしたい。

第2章 ドイツ詩のことばとその成り立ち（形態論・語彙論）

第1節 ドイツ詩のことばの成り立ち（形態論）

第1章ではドイツ詩の音韻を問題にしたが、第2章はドイツ詩のことば（詩語）に着目する。これは、詩文の成り立ちもしくは詩語のつながり（第3章）、詩語（句）・詩文のふくみ（第4章）に先立って、ドイツ詩で用いられることば（詩語）について考察を行う。

本号では第2章として、第1に、詩の中で例外的に見られる言語表現について、屈折（語形変化）および派生の観点から、その事情を論ずる（第1節形態論）。

言うまでもなくここで課題は、言語共同体内における通時的・共時的な語形成であるよりは（もちろんそれを踏まえた上で）、詩人による詩作の際の語利用である。その意味で、「屈折」「派生」は便宜的に用いた概念である。つまり本節の課題は、詩人が用いる詩語・詩句に関する、屈折および派生の観点から見た記述・考察と理解されたい。これによって、Hochdeutsch に対する詩語の特徴を明らかにしたい。（*）

第2に、詩語と、詩語の源泉となる古語、方言、口語、外来語等の言語形態（それ自体が詩語であることが多い）について論ずる（第2節語彙論→次号）。

（*）本稿で Hochdeutsch とは、主に書き言葉を念頭においた、今日の規範的なドイツ語を指す。また詩語とは、Hochdeutsch と異なる特別な語というより（そうした場合も若干あるが）、Hochdeutsch のうち特に詩で用いられる語——Hochdeutsch と同じ意味のこともあれば異なる意味を帯びている場合もある——の意である。

1, 屈折（語形変化）Flexion

意味を持つ最小単位である「形態素」は、それ自体で語になる言葉すなわち語幹と、それ自体では語にならない（具体的な意味内容をもたない）が、語幹に付いて一定の意味を付与する接辞よりな

る。接辞は、時制、法、態を変える働きを有する屈折接辞と、その他の働きをする（品詞を変えるなど）派生接辞とを区別するのが普通である（池上 29）。例えばイギリス語（英語）では、接頭辞は、接尾辞と異なり派生上の機能を有するだけだが、ドイツ語では接頭辞にも屈折上の働きをするものがある（z.B. ge-）。

以下、「1, 屈折」の課題は、前記のように、詩で用いられる独自の語句を、屈折（語形変化）Flexionの観点から論ずることである。その際、下位項目として、（1）活用（動詞変化）Konjugation および（2）曲用（名詞類 Nomen 変化）Deklination に分けて論ずる

（1）活用（動詞変化）Konjugation

活用 Konjugation とは、助動詞を含む動詞類の語形変化である。ドイツ語学ではこれを名詞類 Nomen（名詞・冠詞・形容詞・代名詞・数詞）の語形変化、すなわち曲用 Deklination についての考察とともに、屈折（語形変化）Flexion に関する考察の二大部門の一とするのが通例である。

以下、1）独自の不定詞、2）独自の現在形、3）独自の過去形、4）独自の過去分詞、5）独自の命令法（付随的に同形の直説法現在形）、6）接続法のように見える直説法過去形、7）直説法過去形のように見える接続法、について論ずる。

1）独自の不定詞

詩を読んでいると、Hochdeutsch とは異なる動詞に出会うことがある。たいていの場合、非母語話者には、例えば押韻のために詩人がむりな造語を行ったかのように見えてしまうが、詩人による語の選択は、中高ドイツ語を下にしているのがふつうである。

① **fahn** (=nhd. fassen, fangen)

まずユリウス・モーゼンの印象深い作例をあげる。それは、次のように始まる。

(1) Es grünet ein Nußbaum vor dem Haus./ duftig./ luftig/ breitet er blätt'rig die Äste aus.

(Mosen, *Der Nußbaum*)

家の前のクルミの木が緑の葉をつけている。/ においたつように、/ すがすがしく、/ それは、葉の生い茂った枝を広げている。

時に上拍を置きつつ Daktyrus—◡◡と Trochäus—◡を用い、各詩節 4 行のうち第 2,3 詩行はわずか 2 音節の Trochäus を置いた詩は、かなり印象的である。

◡ | —◡◡ | —◡ | —
 | —◡
 | —◡
 | —◡◡ | —◡◡ | —◡ | —

そしてこの詩は、(1) をふまえて次のように続く。

(2) Viel liebliche Blüten stehen dran;./ linde/ Winde/ kommen, sie herzlich zu umfahn. (ebd.)

そこ [クルミの木] に、かわいい花がたくさん咲いている。/ やわらかい / 風が、/ 花を優しく包み [抱き] に来る。文末の umfahn 「包む」は、見なれないうえに辞書にもものらないが、中高ドイツ語である。基礎

語である *fahn* (=nhd. *fassen* あるいは *fangen*) に、非分離前綴りの *um-* がついている。*fahn* は実際は *van* と綴られたが (ただしこの *a* は長母音であるため、現代の学者は *vân* と表記する)、モーゼンは新高ドイツ語の正書法にしたがって *-fahn* と綴っている。

この語は (2) に見るように、*dran* との押韻のために用いられている。ただし *umfahn* は、意味不明となることを承知で無理に採用されたというより、むしろ一般のドイツ人にもあるていど理解されうる範囲の単語だったと想像される。

後述のように、一般に民謡等には中高ドイツ語形——あるいは中高ドイツ語由来の方言形——が用いられることは少なくない。音楽関係でなじみ深いところでは、この基礎語 *vân* (*fahn*) に非分離前綴りを付した *empfahn* (=nhd. *empfangen* 受け取る) という単語が、例えばヴァーグナーの台本にも出てくる。曲は『トリスタンとイゾルデ』。有名な「愛の二重唱」の一節で、トリスタンが歌うセリフである。

(3) Was dort in keuscher Nacht/ dunkel verschlossen wacht',/ was ohne Wiss' und Wahn/ ich dämmernd dort **empfahn**: (Wagner, *Isolde, Geliebte!*) (*)

神聖な晩にそこで / 暗く閉ざされたまま何が目覚めていただろう / 知りもせず妄想もできないまま / 私はそこでもうろうとなつて何を得る [得た] のか:

だが、この種の単語はふつうの辞典に出てこないもので、注意を要する。ただし *fahn* に関しては、独和大に、見出し語 'fahen'—*vân* には *vâhen* という別形があった (*Duden*) ——として出ている。そこには、今日では用いられないと断りながらも「((ふつう不定詞で)) (*fangen*) 捕らえる。」と書かれている (ただしこれは正確ではない。*vân* は上記のように *fassen* の意味を含んでおり、(2) ではその意味で用いられていた)。

厳密に言えば、(3) に出る *empfahn* は不定詞ではなく、1人称現在単数である。中高ドイツ語では *vân* の1人称単数形は、同じく *vân* である。だが前後から推測すれば、ヴァーグナーはこれを過去の意味で使っているようである。つまりこれは歴史的・物語的現在と位置づけうるが、少々むりがあると感じられる。

(3) では、*empfahn* は *Wahn* と押韻する。これは問題ない。だが (2) のモーゼンの場合は、*umfahn* と押韻するのは短母音の *dran* であるため、少なくともこれは *Hochdeutsch* では不純韻と見なされる。ただしモーゼンはゲーテと同様に (山口 73)、*dran* を長母音と理解していたかもしれない。

なお、*dran* は *daran* の口語形である。後述するように詩にしばしば口語体が用いられるが (→ 本号 9 頁, 第 2 節口語「*•dran*」)、ここでは *dran* の独自の口語的表現 (大 '*dran*') がなされているのではなく、この *dran* はあくまで指示性をもった *da* と、*an* との短縮形である。その意味で *d'ran* と表記すべきだったかもしれない。*da-* はクルミの木を指しており、したがって *Viel liebliche Blüten stehen dran* によって、樹花 *Blüte* がクルミの木に咲いている様子が示されている。

(*) *ohne Wiss' und Wahn* は難題である。一般に音韻が省略されるのは、限られた弱音の場合である。*e* や *i* がそれだが (第 1 章 138, 144 頁)、*en* が省略されることもある (同 148 頁)。それは、不定冠詞や所有代名詞の場合に見られる。例えば *Sie...gab mir ein' Ring dabei*, 「彼女は... その際私に指輪をくれた,」 (*Eichendorff, In einem...*)、*nach mein' hoh'n Verstand* 「私の高い知性にしたがって」 (*Volkslied, Lob des...*) のように。ここで *ein'* は *einen* であり、*mein'* は *meinen* であろう。名詞でも *en* が略される場合がある。典型例は *mit Fried' und Freud'* 「平和と喜びを感じつつ」で

あろうか (anonym, *O Welt...*)。ここでも Fried' はひとまず Freiden と判断してよかろう。ヴァーグナー自身も、(3) と同じ *Tristan und Isolde* で、mit **Bitt'** und Dräuen 「頼みと脅しで」という表現を用いているが (Wagner, *Der öde Tag*)、前者の Bitt' は、後者が Dräuen という名詞化動詞である点からすれば、名詞の Bitte よりも名詞化動詞 Bitten と捉える方が自然だと思われる。なお (3) の ohne Wiss' und Wahn において Wahn という名詞が使われているのは、-fahn との押韻の都合上、名詞化動詞 Wähn' (< wöhnen) を用いられないからである。

② **gahn** (=mhd. gân; nhd. gehen) , **stahn** (=mhd. stân; nhd. stehen)

中高ドイツ語には、vân と同様の語尾 ân [a:n] をもつ動詞が見られる。「不規則動詞」とひとくりにされることもあるが、厳密には「反復動詞」(先の vân)、「語根動詞」(ここで扱う gân, stân; 新高ドイツ語表記では gahn, stahn)、「縮約動詞」(③で扱う hân と lân) (*1) などがこれに属す(詳細は略す)。これらの単語が、詩で使われることがある。

ブラームスの付曲で知られるシュペー(一般に初期新高ドイツ語の時期とされる 16~17 世紀に生きた)の「聖なる夜に」には -gahn, stahn という単語が出る。(*2)

(4) Der schöne Mond will unter**gahn**,/für Leid nicht mehr mag scheinen./ Die Sterne lan ihr Glitzen **stahn**,/ mit mir sie wollen weinen. (Spee, *In stiller Nacht*)

美しい月は沈もうとし、/ 苦しみのためにもう輝くことはないだろう、/ 星はその輝きを止め、/ 私と一緒に泣こうとする。

こう記されているが、(4) が初期新高ドイツ語による作品であれば、Hochdeutsch とは綴りの異なる単語も多いはずである。だがもし当時の綴りをそのまま採用すれば、以上の多くを書き換える必要が生じるし、逆に Hochdeutsch として読めるようにするには、各所に意味上の書き換え(翻訳)をほどこす必要がある。ただしおそらく、脚韻部分(-gahn と stahn) だけは往時の発音を維持しようとした結果が、(4) のテキストであろう(*3)。

なお、-gahn, stahn は不定詞だが、ここに不定詞が出るのは使役動詞 lan (lân) を受けるためである。lan は、次の③でとりあげる。

(*1) 中高ドイツ語を新高ドイツ語の正書法で表記する際の規則には、若干の混乱がある。中高ドイツ語の長母音を記す際、-h で表記するのが普通のようなのだが (z.B. ①の fahn, ここ②で扱う gahn, stahn)、中には中高ドイツ語綴りのままにされる例がある。それが③に出る lan, han である。だが a が長母音であることを思えば(だから中高ドイツ語としてはふつうは lân, hân と記される)、新高ドイツ語の正書法に従い—fahn, gahn, stahn 等と同様に—lahn, hahn と記すべきであろう。そうはせずに綴り上の不統一が生じているため、中高ドイツ語について誤解が生じかねない点は残念である。

(*2) 本稿で中高ドイツ語を表記する際、文脈に応じて、(a) 当時の綴り、(b) これに母音の長短を示す付加記号を加える等の配慮をした綴り、そして、(c) 新高ドイツ語の正書法に基づく綴りを、用いる。前注でも言及した lan, han も含めて記せば、gahn, stahn は (c) であり、gân, stân; lân, hân は (b) にあたる。そして、(a) 付加記号をつけない当時の綴りが gan, stan; han, lan である。中高ドイツ語に言及する際、煩雑になるため、(a)~(c) には言及しない。ちなみに gân, stân には gên, stên という別形もあった(古賀 197-9)。これが新高ドイツ語 gehen, stehen の元となった。

(*3) もっともそれぞれ現代語に訳して *-geh'n, ste'n* でもよいはずだが、おそらく古風な印象を残すために、この部分のみ初期新高ドイツ語形 (実質的に中高ドイツ語形) が維持されたのであろう。なお後述するように低地ドイツ語民謡にも *gahn* などが登場することがある。

民謡に見られる中高ドイツ語 モーゼンの例を出した際、「中高ドイツ語由来の方言形」に言及した (5 頁)。一般に、古語の痕跡は近代国家の言語政策を通じて失われがちだが、そうした外力の加わらない、地域で使われる生活のためのことば——いわゆる方言——には、古語の影響が残ることが多いようである。不定詞が *-ân* で終わる中高ドイツ語の動詞が、そのまま民謡に残った例をあげる。有名な「ターラウのエンヒェン」では、*schlahn* (= *mhd. slahen; nhd. schlagen*) が *stahn* と対になって、用いられている。

(5) *Käm' alles Wetters gleich auf uns zu schlahn,/ wir sind gesinnt beieinander zu stahn;*
(Volkslied, *Ännchen von Tharau*) (*1)

どんな嵐が僕らを襲おうとも、ぼくらは一緒にいよう；

テキストは 17 世紀前半のものであるが、前者が中高ドイツ語であれば、発音は厳密には [ʃlaxən] であって、*stahn* (= *mhd. stân*) とは押韻しない。ただし *slahen* には当時、他に *slâhen* [ʃlâ:xən] あるいは *slân* [ʃla:n] という別形があった (古賀 144) (*2)。「ターラウのエンヒェン」では、もともと後者の別形が用いられていたために、*schlahn* と綴られたのであろう。他の単語およびその綴りはすべて今日の共通ドイツ語である点は、先の *Spee* の場合と同様である。

余談だが、ターラウ *Tharau* は東プロイセンの地名である。それは現在、ロシア自治州の中心都市であるカリニングラードに位置するというが、同市は 18~19 世紀にはケーニヒスベルク *Königsberg* と呼ばれた。哲学者の I. カントや、作家の T.A. ホフマン、文学者の J.G. ハーマンなどが活躍した土地である。このうちハーマンは、啓蒙主義の理性偏重を批判する点において、当地で学んでいたヘルダーに影響を与えたが、そのヘルダーの影響下に詩作活動を行ったのがゲーテである (登張 12-3)。その意味でケーニヒスベルクは、ドイツ文芸・文化の発展に大きく寄与したと評価できる。

(*1) 詩の成立は 1637 年とされる (*Jugend* 67)。Hochdeutsch への翻訳 *Übertragen* はヘルダーによる (同前)。なお翻訳といっても、少なくとも *stahn* はそもそもヘルダーの母語である低地ドイツ語として生きている単語だという (田中① 4, 27 および第 3 図)。

(*2) *slahen* が新高ドイツ語で *schlagen* [ʃlâ:gən] になるのは、[x] と [g] の間で子音交替が起きたためである (古賀 143)。

③ *lan* (= *nhd. lassen*) , *han* (= 同 *haben*)

中高ドイツ語の *lan* (*lân*) や、これと同じ「縮約動詞」に属した基本単語としての *han* (*hân*) も、そのままの形で時々目にすることがある。*han* は新高ドイツ語の *haben* にあたる。中高ドイツ語でも *haben* が「完全な形」(古賀 215) であって、*han* はその縮約形である。

まず、先の (4) を (6) として再度引く (ただし下線は、以下の叙述に合わせた)。

(6) *Der schöne Mond will untergahn, / für Leid nicht mehr mag scheinen. / Die Sterne lan ihr Glitzen stahn, / mit mir sie wollen weinen.* (*Spee, In stiller Nacht*)

美しい月は沈もうとし、/ 苦しみのためにもう輝くことはないだろう、/ 星はその輝きを止め、/ 私と一緒に泣こう

とする。

lan 3行目に見られる lan (lân) は、lassen の中高ドイツ語形 lazen (lâzen) (*) の縮約形である。(6) では文法的に見て、後続する wollen にかかる不定詞である。あるいは同じことだが直前に wollen (< *mhd.* wellen あるいは wein) が略されている。

ところで、なぜこの部分について、lan という中高ドイツ語の音韻と綴り(長母音記号を欠く)を残したのかは不明である。他面では第 1,3 行目の gahn, stahn は、前記のように新高ドイツ語の正書法に基づく綴りになっている。綴りに不統一はあるとしても(前記のように gahn, stahn に合わせるなら lahn とすべきか)、ともあれこれは、詩の古風な印象を残すためとも思われるが、そうした配慮を、限られた単語にだけ向ける必要性は薄いと考えられる。とすればこれは、むしろ行内韻(lan と stahn の [a:n]) の押韻のためであろうか。これらをも新高ドイツ語に翻訳すれば、lassen は 2 音節語となって詩脚(上拍をもつ Trochäus) にあわなくなる(ただし民衆詩節と見れば一時的な Daktyrus は許容されうる)。

(*) lazen のように、z が中音あるいは尾音であり、かつその前に母音がある時は、[ts] ではなく [s] の音価をもつ(古賀 7)。これを示すために ʒ という文字を用い、lazen は laʒen (あるいは長音を明示して lâzen) と記されるのが普通である。なお ʒ の音価は純然たる [s] よりは [θ] に近いとする指摘もあるが(相良① 13)、あまりこだわらずにおく。ただし実際は、例えば人称代名詞中性 1 格 *es* および 2 格 *es* の ʒ と s とを、区別して発音しなければならない(*ë* は *e* の開音)。

han 一方、han (hân) は民謡で目にすることがある。

(7) Kann i glei' net allweil bei dir sei' / **han** i doch mei' Freud' an dir. (Volkslied, *Muss i denn*)
たとえいつも君のそばにいらなかったとしても、/ 僕の喜びは君にあるんだ。

(8) Du auserwählter einz'ger Trost, gedenke daran' / mein Leib und Gut, das sollst du ganz zu eigen **han**, (anonym, *All mein Gedanken*) (*)
愛する [私が選んだ] 唯一の慰めである方、覚えていて下さい / 私の肉体と財産を、あなたにすべてもってほしいのです、

前者(7)はシュヴァーベン方言による。見慣れない綴りが多いが、今でもほぼこの通りに歌われるようである。i は ich であり、net は nicht である(河崎 167-8)。ただし sei', mei' ——最後の -n を落とすのはシュヴァーベン方言の特徴だという(同前 167) ——はそれぞれ sein, mein のように、共通ドイツ語に直して歌うことが多いようである。glei' は gleich と歌うというが、シュヴァーベン語では ch も落ちる傾向があるのだろうか。一方で doch の ch はそのまま残されている。

それはともあれ、han がここで用いられているが(gahn, stahn にあわせるのなら、前記のようにこれも hahn の方がよい)、han i と、その共通ドイツ語形 hab' ich とでは音節数に変わりはないなく、また抑揚も同一であるため、これはあくまでシュヴァーベン方言らしさを残した結果なのであろう。

後者(8)は 15 世紀ドイツの歌謡であるため(*Jugend* 58)、新高ドイツ語へと、同正書法に基づいて翻訳してあるようだが、han は daran との押韻のために、残されたのであろう。あるいは古語としての雰囲気を維持するためかもしれない。さらに地域性を尊重したのかとも思われるが(出典の『ロハメア歌謡集』*Lochamer Liederbuch* は有名だが採集地の情報はない)、不明である。

なおここには、①で言及した dran が本来の daran の形で出るが、da の指示性が強い(= 第 2 詩行を受ける)点で、やはり新高ドイツ語、とくにその口語的用法を離れている。そしてここでも、

daran と han との押韻は不純韻である。

(*) 第2行冒頭の *mein Leib und Gut* は「破格」(桜井 419) である。重要な語を最初に1格で提示して、その後に——ふつうは——他の格(ここでは4格)で受けることは、詩ではよくある(→第3章統語論)。

低地ドイツ語と上部ドイツ語 最後に、以上に関連するかぎりドイツの方言について記す。

田中泰三氏によれば、アレマン方言(広義)(大ざおっぱに見て上部ドイツ語 *Oberdeutsch* は、東のバイエルン方言と西のアレマン方言に分けられる)、および低地ドイツ語 *Niederdeutsch* では、*gehen, stehen* は *gahn, stahn* (田中の表記法では *gān, stān*) であるという(田中① 4, 27 および第3図)。先に見た(5)「ターラウのエンヒェン」は低地ドイツ語圏の民謡であり、実際に *stahn* が使われていた。K. グロートが書いた低地ドイツ語民謡「君は僕の恋人だから」*Dat du min Leevsten büst* にも、*gahn* が出る(Groth, *Dat du...*)。脚韻のつごう上、今日でもそのまま歌われるようである。そこでは *gahn* と *Hahn* 「おんどり」が押韻する。

民謡「冬は去った」*Der Winter ist vergangen* にも、*stahn, gahn* が出るが、これは1537年のオランダの手稿を下にした *Tagelied* (きぬぎぬの歌) だという(*Jugend* 27)。そしてオランダは、低地ドイツ語圏と隣接する(*)。この民謡でも他の語は今日すべて *Hochdeutsch* に置き換えられているが、*stahn* と *gahn* のみをそのまま残したのは、古風な感じを出すというより、方言がもつ独特な雰囲気を示すためであろう。

(*) オランダ語は、オランダが1648年に国として独立したために、今日は国家語と見なされるが、オランダ語地域は歴史的には低地ドイツ語方言地域に属していた(塩谷② 2)。今日でさえオランダ語および低地ドイツ語は、その話し手が互いのことばをそのまま理解しあえるほどに近親的である。

2) 独自の現在形(直説法)

「1) 独自の不定詞」では、中高ドイツ語に由来する語形が、詩中で使われた例をあげた。だが、新高ドイツ語の範囲内でも、私たちが今日知る規範文法では処理しきれない語形に、出会うことがある。

• **kömmt** (*nhd.*, = kommt)

(1) Er [=Frühling] geht in Büschen, und sie blühen;/ den Fluren **kömmt** ihr frisches Grün,...
(Uz, *Gott im Frühlinge*)

春は茂みに進み, 茂みは花咲く; / 野の新鮮な緑は目ざめ, ...

ここに出る *kömmt* は新高ドイツ語であり、今日ふつうに使われる *kommt* にあたる。だが、通時的に見れば、*kommt* よりも *kömmt* の方が音韻法則にかなっている。古高ドイツ語においては、弱変化動詞第1類の2,3人称単数現在形は、-is, -it という i 音を伴う変化語尾をとった(高橋 70)。このために、同現在形は幹母音がウムラウトを起こしたが、一方その形をとらない例外的な単語があったようである(その事情は不明)。その代表例が *kommen* である(相良② 247)。ウムラウトが起こればそれぞれ *kömmst, kömmt* となるはずが、現実には今日、*kommst, kommt* が一般に使われている。(*)

ウムラウトの付く *kömmst, kömmt* は、民謡では意外と目につく。一つだけ例を挙げてみる。

(2) In der Dechanei,/ steht ein Teller auf dem Tisch,/ **kömmt** die Katz' und holt die Fisch'./
kömmt der Jäger mit der Gabel,/ sticht die Katze in den Nabel,... (Volkslied, *Abzählen*)

枢機卿の屋敷には、/ 食卓の上に皿があり、/ 猫が来て魚を取ってくる、/ 狩人がサジを手にとって来て、/ 猫の
ヘソを刺す、...

残念だが、この民謡の採集地はわからない。そのため、**kömmt** の形が古高ドイツ語の直接的な影響なのか、あるいはこの形態を残した方言の影響なのかは不明だが、(2) を含む民謡の例を見ると、共通ドイツ語として、この語形が、多かれ少なかれ——少なくとも別形として——使われた時期があったのではないと思われる。詩人が自らの母語（方言）を愛好したとしても、読者のことを思えば、おのれの母語をそう前面に出すわけには行かないだろうと想像されるからである。

なお、kommen 以外にも、hauen 「なぐる」、saugen 「吸う」なども、前記音韻法則の例外だというのが（相良② 247）、私は詩でも民謡でもこれらに出会ったことはない。hauen, saugen は、kommen に比べると一般にそう多く使われる単語ではないだけに、出会う可能性はおのずと限られざるをえないのであろう。

(*) (1) にはシューベルトが曲を付けている。だがおもしろいことに、今日これを歌う際、**kömmt** ではなく **kommt** と歌う歌手もいる。そもそも始めから **kommt** と表記している楽譜さえある。

3) 独自の過去形（直説法）

詩では、独自の過去形が用いられることもある。以下3つの例をあげる。

① **ward** (=wurde)

典型的なのは、werden の過去形 **wurde** の別形として、単数 1, 3 人称で用いられる **ward** である。これは、助動詞・本動詞の別なく用いられている。散文の書き言葉としても用いられたようだが、韻律を重視する詩ではよく登場する。

wurde は 2 音節語である。詩では各詩行を限られた音節で表現せざるをえないが、韻律の都合上、2 音節を当てられない場合には 1 音節語の **ward** が有効である。作例は無数にある。

(1) Und als die Hähne krähten,/ da **ward** mein Auge wach; (Müller, *Frühlingstraum*)

だが鶏が鳴いた時、/ 僕は目が覚めた；

(2) Wollust **ward** dem Wurm gegeben,/ und der Cherub steht vor Gott. (Schiller, *An die Freude*) (*1)

快樂は虫に与えられた、/ そしてケルビムは神の前に立つ。

前者 (1) の詩脚は上拍を有する Trochäus であり、この詩脚を維持すると同時に、他の表現をそのままとするなら、第 2 行 da の後には 1 音節語がくるのが望ましい。後者 (2) の詩脚は純然たる Trochäus であり、やはりここに **wurde** をおくことはできず、**ward** に頼るしかない。

(3)...mir **ward**, mir **ward**, ich weiß nicht wie,...// Sah ich ihn an, so **ward** mir heiß,/ bald **ward** ich rot, bald **ward** ich weiß, (Heisse, *Der Zauberer...*)

...私は、私は、どうしてだかよく分からなかった、...// 彼を見つめると、私は熱くなった、/ すぐに赤くなって、そして白くなった、

こちらの詩脚は Jambus である (*2)。ここでは 1 音節語 **ward** が本領を發揮している。そしてこ

の詩文は、各音節の語頭音である [m] [v] と、幹母音の [ɪ] [i:] が——弱音の場合を含めて——ほぼ全体を支配し (一部に [aɪ])、かつ各音節の語末音として [t] [s] が連続して響くのが心地よい。全体としての口調のよさに、思わず苦笑する。語り手の女性のあせりの気持ちが伝わるかのようである (なお第 2 詩行は冒頭に若干の韻律の乱れがあるようだが、行頭部分であればそれも許容されるだろう)。

なお詩ではよく、品詞にかかわらず語末の -e が略されるが、wurde が wurd' という形をとることはまずない。ただし接続法の場合は、本動詞・助動詞と関係なく、würd' が時に用いられる (桜井 232)。

(4) Was **würd'**, o Götter, sonst nach so viel Zauberei'n, / aus mir zuletzt geworden sein! (ebd.)

ああ神さま, たくさんの魔法の後にさらに, / 結局私はどうになってしまうの!

押韻の都合から ward が選ばれる場合もある。次の (5) の例では -hart が、(6) の例では -starrt が ward と脚韻を踏んでいる。

(5) Kinder, schaut das Wunder an, / wie die Hexe hexen kann, / wie sie hart, knusper**hart** / selber nun zum Kuchen **ward**! (Wette, *Brüderchen...*)

子どもたち, この奇跡を見てごらん, / どんなふうに魔女が魔法を使えるか, / 自分がいまはどんなに堅い, / ぼりぼりかむほど堅い / お菓子になったか!

(6) O Herz, dessen Zauber / zur Marter uns **ward**, / du ruhst nun in tauber / Verdampfung **erstarrt**; (Matthison, *Der Geistertanz*)

おお心よ, お前の魔法は / われらにとって責苦となった, / お前は今や安らいでいる, / 体がマヒして硬直したまま;

通時的に言えば、ward は中高ドイツ語 werden の直説法第 1,3 人称単数過去 wart に由来する。

中高ドイツ語の強変化動詞 (例えば helfen=*nhd.* helfen) は、1 人称単数過去および同複数過去では一般に幹母音異なる (またたいていの場合 2 人称単数過去もそれらとは違った) (古賀 127 以下; それぞれ例えば half, hulfen, hülfe)。そしてほとんどの場合は、1 人称単数過去形がそのまま (といっても発音や綴りに多かれ少なかれ変化が認められる) 新高ドイツ語の過去形となった (例えば half)。

一方、werden (*mhd.* wêren) の場合は、1 人称単数過去および同複数過去の異なる幹母音およびそれに由来する過去形が、つまり ward と wurden が、ともに新高ドイツ語の過去形となった。ただし同等の資格においてではなく、ward は文語ないし雅語の含みをもつようになり、しかも単数形としてのみ使われるようになった。

(*1) ここで der Cherub steht vor Gott とは、何を意味するのか。そもそも Cherub (ケルビム) とは何か。「第九」は日本ではあまりにも有名だが、最も盛り上がる箇所記されたこの詩文の意味は、ほとんど理解されていないだろう。これについては、詩における意味の拡大・縮小等に言及しつつ、第 4 章意味論で論ずる。なお、杉田「ベートーヴェン第九『喜びの歌』の謎」でこれを大まかに論じた。

(*2) 韻律から見るかぎり、Jambus と上拍をもつ Trochäus とに実質的な差はないと思われるが、詩の解釈上、各行最初の弱拍が次の音節と密接につながる (例えば同一語の一部として) のではない場合には上拍をもつ Trochäus と、つながりが強い場合は Jambus と判断するのが、合理的だと思われる。もちろん詩全体として見た場合、詩行によってそのつながりは一様ではないこと

もありうる。

② sahe (= sah, 強変化動詞の過去形)

ward は現代でさえ用いられるし、辞書に見出し語として出るのもふつうである。だが、現代では用いられず辞書にも出ていない過去形が、詩に現れることがある。例えば sahe (< sehen)。

sehen の 1,3 人称単数過去形は、規範文法下では sah である。中高ドイツ語でも同様である（とひとまず言うておく；細部の違いについては後述）。ところが詩では、時に sahe の形が見られることがある。その使用例については第 1 章音韻論でも紹介したが（157 頁）、この文脈で再度記す。

(7) Denn ach, ich **sah** dich!...//...Cidli, ich **sahe**/ dich, du Geliebte! dich Selbst! (Klopstock, *Gegenwart...*)

そのときああ、私は君を見た!...//... ツィードリよ、私は、/ 愛する者よ、君を見た! 君自身を!

(8) Und [ich] **sahe** sie nicken und blicken/ herauf... (Müller, *Tränenregen*)

そして〔僕は〕彼女がうなずき / 見上げるのを見ていた ...

中高ドイツ語において sehen の 1,3 人称単数過去は、正確には sach である。初期新高ドイツ語の時代にはこれは sah と綴られるようになるが（発音はともに [zax]）、sahe も別形として使われていた（ポーレンツ 114; ルターでの作例については同 115）。-e を付すのは sahe にかぎったことではなく、中高ドイツ語の強変化動詞においては、1,3 人称単数過去に -e を付ける例が見られる（*）。それは、古賀允洋氏によれば、「弱変化動詞の過去人称変化 にならっ（た）」ものであり、例えば halfe (=half, < mhd. helfen) がそうだという（古賀 83）。

ゲーテの「野ばら」では、冒頭の **Sah ein Knab'...** を、**Sah' ein Knab'...** と、アポストロフ付きで記す版もある（坂西 27; → 第 1 章 157 頁）。ただし、ゲーテが参照したと言われる Herder の民謡集（後述）では、**Es sah ein Knab...** と記されていたようである（Herder 331, 三浦 149）。sah' という表記がゲーテによるのか、地域（アルザスと思われるが不明）の独自性なのかは、現時点では判断できない。

他方、ヘルダーの採集した民謡を下にゲーテが詩を書いたのではなく、ゲーテによる創作民謡（何らかの実例をふまえていた可能性はあるとしても）をヘルダーが上記民謡集に取り入れた、という証言もある（登張他 17-8）。もしそれが真実なら、sahe がゲーテにとって自然だったと判断されるかもしれない（ちなみに *Knoop* 34 の言語地図からは、ゲーテの母語は中部ドイツ語、中でもヘッセン方言もしくはライン・フランク方言と判断される）。

(*) 第 1 章に、「これは中高ドイツ語において、強変化動詞の単数過去形に語尾が付されていたことの名残り、ないしそれを意識した作例と思われる」と書いたが（157 頁；強調はここで付加）、「語尾が付されていた」ではなく「語尾が付されることがあった」と訂正する。なお、-e 付与が目立つのは、上部ドイツ語における文章語においてだったようである（ポーレンツ 114）。

③ begunnt, kunnt (beginnen, können の中高ドイツ語 1,3 人称単数過去形) 等

sahe はまだしも外見から何と推測できるが、外見からは即座に判断しかねる単語が、詩に用いられることがある。

先に中高ドイツ語動詞の不定詞 (-stahn, gahn, lan) が登場する詩にふれたが、同じ詩から、同じ

く中高ドイツ語の 1,3 人称単数過去形が使われた例 — 詩は全体として新高ドイツ語に翻訳されているので、正確には、新高ドイツ語の正書法に従っているとはいえ中高ドイツ語の 1,3 人称単数過去形が例外的にそのまま残された例 — を、あげてみる。

(9) *In stiller Nacht, zur ersten Wacht, / ein' Stimm' **begunnt** zu klagen...* (Spee, *In stiller Nacht*)

静かな夜、初めての見張りの時 / ある声が嘆き始めた ...

begunnt **begunnt** は見慣れない単語だが、**beginnen** と関係がありそうに見える。実際それは、中高ドイツ語 **beginnen** (*nhd.* **beginnen**) の、1,3 人称単数過去形と判断される (ただし後述)。中高ドイツ語では、**began** という、新高ドイツ語の **begann** と類似した同過去形が併存したが (古賀 139)、**begunnt** と **began** は同じ 2 音節語であるのに、なぜことさら前者が用いられたのかは、不明である。

前述のように、そもそも (9) においても、他の単語はすべて新高ドイツ語形なのに、なぜこの単語のみが中高ドイツ語形なのかも、やはり不明である。これまでそうだったが、古歌を現代語で表記する際の基準が恣意的であるとの印象をまぬかれない。

あるいは、中高ドイツ語を、しかも新高ドイツ語 (**begann**) と発音の明らかに異なる語 (**began** ではなく **begunnt**) を用いることで、前記の **geuß** のように、幻想的であり古風でみやびな印象をかもし出すことが目ざされたのであろうか。

綴りについて言えば、(9) に記された **begunnt** は — 少々ややこしいが — **beginnen** (*mhd.*) の 1,3 人称単数過去形たる **begund'** (= **begunde**) の、新高ドイツ語正書法にもとづく綴りである (古賀 139, 相良① 39)。中高ドイツ語の過去形が **-de** という語尾をもつのは、「[弱変化動詞および混合変化動詞の] 後綴 **-te** は **n, m, r, l** の後においてしばしば **-de** に変る」という音韻現象 (相良① 41, s. 古賀 7) の一例と理解できる。(*)

(*) なお **begunnt** の語尾の綴りが、**begann** と同様に **n** の **s** 二重子音になっているのは、母音 **a** が単音であること — ただしこれは新高ドイツ語の話である。中高ドイツ語では同音の二重子音を二重子音として発音した (相良① 6,13) — を示すためであり、また、結局は同じことだが、語幹を同じにして不定詞との関係 (その変化形であること) を明確にする、新高ドイツ語正書法 (ポレンツ 111) を尊重した結果でもあろう。ただし新高ドイツ語でも、例えば **Nonne** の発音は [nónə] よりも [nónnə] に近いと感ぜられるが。

kunnt 以上とほぼ同じことが、助動詞 **künnen** あるいは **kunnen** (いずれも *nhd.* **können**) にあてはまる。民謡などに、その変化形である **kunnt** という単語が現れることがある。

(10) *Und ein Mädel von zwölf Jahren / ist mit über den Strudel gefahren; / weil sie noch nicht lieben **kunnt**...* (Volkslied, *Als wir jüngst...*)

ある 12 歳の娘が / 湧水と一緒に越えた; / なぜならその子はまだ恋を知らなかったから ...

kunnt は前記 **kunnen** の直説法 1,3 人称単数過去の **kund'** (= **kunde**) であり (古賀 184)、(10) に見るように、これには **wizzen** (*nhd.* **wissen**) の意味がある。これが **kunnt** となっている事情は、**begunnt** の場合と同様である。すなわち **kunnen** の 1,3 人称単数過去は、元は **kunnte** であったが、**te** の直前にある鼻音 **n** の影響で **kunnde** と発音された。だが (10) では語末の **e** を略したために、[kunt] と発音されるに至ったのである。中高ドイツ語では [t] 音は **t** で表し、母音の後の中間音でなければ (古賀 7)、[t] のために **d** を使う (残す) ことはないようである (相良① 12)。

なお、この民謡で **kunnt** という中高ドイツ語形が残されたのは、他の行末を占める **Grund** (*mhd.*

grunt) と韻を踏むためである。ただし中高ドイツ語における二重子音は実際に二重に発音されていたとすれば(前注)、ここでの押韻は不純韻である。

künnt 最後にもう一つ、同じ können 由来の単語をあげておく。

(11) Dem Weiblein ich gern dienen wollt',/ wenn ich's mit Fugen künnt./ Darum hab' ich der Neiger viel,/ daß mir's wird vergünnt. (Volkslied, *Mir ist...*)

もしもうまく出来るのなら、あの娘(こ)に尽くしたいものだが、/[でも] 妬み屋がたくさんいるから、それは僕には許されない

künnt は、同上の中高ドイツ語 können (*nhd.* können) の接続法 II 式 1,3 人称単数である künde (= künde) であり(古賀 184)、この音韻変化は、先に beginnen (*mhd.*)、kunnen (同、künchen の別形) について見たのと同じ現象である。(11)において künnt が押韻する vergünnt は、中高ドイツ語 vergunnen (*nhd.* vergönnen) の別形 vergünnen の過去分詞である(s. 古賀 181)。

4) 独自の過去分詞

① ge- の省略

過去分詞の徴表は、非分離動詞や -ieren 型の動詞を例外として ge- という接頭辞である、とかつて理解していた。だが ge- を欠いた次の詩文を見て、目を疑ったことがある(以下の(1)(2)は第1章でも取り上げたが、重複をいとわずに再引用する)。

(1) Mai ist kommen, der Winter ist aus. (Müller, *Trock'ne Blumen*)

5月〔春〕が来て、冬は去った。

(2) Was ich such', hab' ich funden,... (Müller, *Danksagung...*) (*1)

探していたものを僕は見つけた、...

新高ドイツ語ではもちろん gekommen、gefunden でなければならないが、いずれにも過去分詞の徴表である ge- が見られない。目を疑ったあげくに、あれこれの辞書・文法書をひもといてみたが、こうした作例がなぜありうるのか、当時は全く理解できなかった。

結論を言えば、これは中高ドイツ語の影響である。中高ドイツ語では、過去分詞が ge- を欠く場合がある。というより ge- が過去分詞の前綴りとして定着したのは、初期新高ドイツ語の時代のようなのである(ポーレンツ 114)。

そもそも中高ドイツ語では ge- は、完了形とは無関係に完了相(*2)をつくる働きがあり、語幹に比較的自由に付加されたが——相良があげる例では *sēhen* 「見る」→*gesēhen* 「発見する」(相良 ② 75; ē は e の開口音 [ɛ] を示すために便宜的に使われる文字である)——、逆に完了相の動詞では、他の接頭辞を有する非分離動詞を含めて、完了形をつくる際に ge- は不要と観念されたようである(同 74-5)。

前記の(1)(2)に見られる動詞——*finden* (*mhd.* *vinden*; 以下同じ)、*kommen* (*komen*)——の場合が、これに当たる。他にも *bringen* (*bringen*)、*werden* (*wērdēn*)、*nehmen* (*nemen*)、*treffen* (*trēffen*)、*lassen* (*lâzen*) などともそうだという(同 259)。

少し敷衍すれば、ge- を不要とする例として、新高ドイツ語では非分離動詞、-ieren 型の動詞、および話法の助動詞もしくはこれに準じたいくつかの単語(同 260)をあげることができる。

その理由は、非分離動詞——*be-*, *emp-*, *ent-*, *er-*, *ver-*, *zer-* 等——はそもそも完了相的な意味を有することが多いからであり (同 259)、*-ieren* 型の動詞は語尾部分 *ie* が強く発音され、非分離動詞と「発音の調子が似ている」ために、類推によって *ge-* が付されなくなったと考えられるという (同 260)。話法の助動詞では、例えばそれ自体完了相の意味をもつ *werden* の場合、*ge-* のつかない *worden* が用いられた名残が現在に生きており (同 75)、また他の助動詞もしくはこれに準じた単語の過去分詞に *ge-* がつかないのは、やはり *worden* からの類推によるようである。

もつとも非分離動詞が完了相の意味を持つというのは、一面では正しいが普遍化することはできない (太城 160-1)。それゆえむしろ、一部の非分離前綴りに含まれる完了相化機能が、そうした機能を持たない他の非分離前綴りにまで、類推から押し広げられたと考えるべきであろう。

(*1) いずれもミュラーの作例だが、韻律上の制約がなくなれば、もしくは詩脚が合致すれば、ミュラーも *ge-* のついた形を使うことがある。In eines Köhlers engem Haus/ hab' Obdach ich **gefunden**: 「炭焼きの狭い家に / 僕は宿をみつけた;」 (Müller, *Rast*)。

(*2) ドイツ語の動詞は様相上、大まかに完了相と継続相 (未完了相) とに分けられる。完了相とは、「動作が開始と共に終始・完了するもの」であり、継続相とは「継続する動作それ自体を示すもの」である。例えば *finden*, *sterben* などは前者に、*schlafen*, *gehen* などは後者に属する (相良② 68)。なお動詞の完了相を完了動詞と記す論者もいる (→ 次項)。

方言での *ge-* の省略 *ge-* のつかない過去分詞を用いるという言語現象は、現在でも方言に残っている。「南独では *finden*, *werden*, *bringen*, *kommen* などいわゆる完了動詞——完了相の動詞 (杉田注) ——に限って *ge-* をつけ (ない)」と、田中泰三氏は記す (田中① 27)。一方、エルベ左岸の低地ザクセン方言 (これは低地ドイツ語に属する) では、完了相に限らず過去分詞全般に *ge-* をつけないようである (河崎 131; ただしそれは単に共通語の過去分詞から *ge-* を取った形とは異なる)。

Des Knaben Wunderhorn を始めとする各種民謡集には、次のような例が登場する。

(3) Steht ein bucklicht Männlein da,/ hat mein Töpflein **brochen**...//...Steht ein bucklicht Männlein da,/ hat's schon halber **gessen**. (*1) (Volkslied, *Das bucklicht Männlein*)

すると、背中の曲がった小人がそこにいて / 私の小鍋を壊してしまいます ...//... すると、背中の曲がった小人がそこにいて / ムースの半分を食べてしまっています。

(4) Es trauern Berg und Tal,/ wo ich viel tausendmal/ bin drüber **gangen**. (*2) (Volkslied, *Ade zur guten Nacht*)

山も谷も悲しんでいる / ぼくはそこを何千回も / 通って行ったものだ。

前者 (3) には *brochen* (< *brechen*) という完了相動詞が出るが、同時に *gessen* (< *essen*) という継続相動詞の過去分詞が出る。後者 (4) に出るのは、*gangen* (< *gehen*) という継続相動詞のそれだけである。

他の民謡では、*sungen* (< *singen*)、*bracht* (< *bringen*) 等が使われているが (Volkslied, *Es ist...*)、前者は継続相動詞である。

なお、(3) の採集地は不明であるが (だが次の注 (*1) に記した事情でおそらく南部地域)、(4) はドイツ中部 *Mitteldeutschland* のものだという (*Jugend* 18)。付随的に記した *Es ist...* はケルン地域の民謡と思われる (同 98)。いずれも、先に記した「エルベ左岸の低地ザクセン方言」(河崎 131) とは異なるが、要するに *ge-* の省略は、少なくない方言で見られるようである。

(*1) ここに *gessen* という特異な過去分詞が出るが、最後の詩行を、*hats schon halb gegessen* としているテキストもある (*Jugend* 79)。このテキストは青少年向きであり、これは青少年が違和感なく読めるように配慮した結果だと思うが (原テキストの *halber* は *halb* の南部方言である)、直前に出る、過去分詞 *brochen* (*mein Töpflein brochen*) はそのまま残している (同前)。こちらも例えば *Töpf gebrochen* とでもすれば詩脚の問題は解消できるのに、そうしていない点は、いささか奇妙である。なお (3) に 2 度に出る *bucklicht* は、共通ドイツ語では *buck(e)lig* にあたる。*-icht* の意味は「*-ig* に近く、そのためこれに押されて、この後つづりをもつ語は多くない」という (桜井 114)。

(*2) これも前注 (*1) の場合と同様に、青少年向きに *gegangen* に置き換えられている (*Jugend* 18)。当該箇所詩脚は $\sim | \sim | \sim$ である。だが文字上の省略・変更はせずに、詩脚を $\sim | \sim | \sim$ に変えて、2 つめの *Zäsur* の前に *ge-* を置いている。ホイスラーに従うなら、 $X | \acute{X} \sim | \acute{X}$ と読むことになるが、詩脚を変える例はめずらしい。

上部ドイツ語での *ge-* の消滅 また、オーストリア語 *Österreichisch* を含む上部ドイツ語 *Oberdeutsch* では、閉鎖音 (*p, t, k, b, d, g*) の前では *ge* が音節ごと落ちるというが、さらにヴィーンでは、この現象 (語中音消失 *Synkope*) は、閉鎖音のみならず *z, qu* の前でも起こるといふ (河野 128-9)。もっとも、正確に言えば、完全に *ge* を落とすというより、*g* [*k*] の音を若干残しているようである。例えばオーストリア語を含む上部ドイツ語では、*sagen, haben* の過去分詞は *gsagt, ghabt* と綴られる (そして発音される) というが (河崎 70; 他に河野 145 では *gwesn* という例があげられている)、*gsagt* はさらに [*ksa:kt*] のように発音される、つまり [*k*] 音につられて *s* も無声化するようである。

しかもヴィーンでは、*gesagt*→*gsagt* という現象は、過去分詞を作る *ge-*、一般の非分離動詞の前綴りの *ge-*にかぎらず、同音の綴りを語頭にもつ他の品詞に及ぶ場合がある (河野 31)。

(5) *Armerl* so kugelrund,/ Lippen so frisch und ***g'sund***,/ *Füßerl* so hurtig ***g'schwind***, tanzt wie der Wind./ Lalala... (Volkslied, *Rosestock, Holderblüh*) (*)

腕は弾みたいに丸く,/唇はさわやかで元気に,/足はすごく速く活発に,/踊るんだよ風みたいに/ラララ ...」

(6) Den [=manchen] soll man als ***G'sell*** erkennen,/ oder gar ein Meister nennen,... (Volkslied, *Auf, du junger Wandersmann*)

彼ら [=何人もの人] を職人と見なすべきか,/それとも親方と呼ぶべきか,...

前者 (5) に出るのは形容詞 *gesund, geschwind* である。独和大によれば、両者は互いに語源的に関連があるというが、すくなくとも *geschwind* の *ge-* は強意を示すという。後者 (6) の *Gesell* (→「*尾辞の省略による語の縮小*」151 頁) は、名詞の例である。(5) はシュヴァーベン (高地ドイツ語地域の西側) 方言、(6) はフランケン (同中央部) 方言である。

なお、ホフマンスタールによるオペラ『バラの騎士』の台本では、18 世紀ヴィーンという舞台設定のためと思われるが、*g'* が意図的に用いられている (以下の例には過去分詞としての *kommen* も出る。またこの後の台詞では語中音消失のない *geschehen* も使われている)。

(7) Es ist was *kommen* und ist was ***g'scheh'n***, ich möcht' Sie fragen: darf's denn sein? (Hoffmannstahl, *Hab' mir's gelobt*)

何かが起こった, 何か [なされた], 僕は彼女に聞きたい: これでいいの?

なお、現代の Hochdeutsch に見られる Glaube (< *mhd.* g(e)laube, 以下同じ), gleichen (< geliche), Gleis (< geleis(e)), Gnade (< g(e)nade) 等も、同様の音韻変化を示している。

(* Armerl, Füßerl につく -erl は、後述するように南部・オーストリアの縮小辞である (大 ' . erl') (→163 頁)。

②弱変化動詞の強変化分詞 **entzunden**

弱変化動詞でありながら、強変化による過去分詞がつかわれる例がある。かつて *ge-* のつかない過去分詞に出会って驚いたが、この類の過去分詞にも驚かされた。前者と同様に、これも普通の辞書には現れない。そしてこの現象は難問である。

(8) Du holde Kunst, in wieviel grauen Stunden, / ... hast du mein Herz zu warmer Lieb' **entzunden**...! (Schober, *An die Musik*)

優しい芸術よ、どれだけつらい時に、 / ... お前は私の心を暖かな愛へと灯し ... てくれた!

entzunden (*mhd.* 弱変化動詞 I 類 = 混合変化動詞) (*1) の過去分詞は、*entzündet* (*nhd.* *entzündet*) であるが、(8) では *entzunden* という形が用いられている。これは詩人が、*Stunden* と脚韻を踏むために行った作為ではない。そうではなく、これはやはり通時的な事情に由来する。*Grimm* によれば、正統なものとは見なされていなかったが (後述)、一種の強変化分詞 *starkes Part.* として、*entzunden* の形をとった過去分詞形が知られていたと理解できる。*Grimm* でとり上げられたのは、次のような作例である (*Grimm*, 'entzunden')。

(9) ... vom eit'len Gute, von Silber und Gold, / nicht von des Ruhmes ewigen Sold, / sind die niedrigen Herzen **entzunden**. (Körner, *Knospen*)

... 名声という末長い報酬によってではなく / むなしい財物で、銀や金で、 / 低い心は火を付けられている。

ここで *entzunden* の採用は押韻のためである。*entzunden* は、この後に出る *verschwunden*, *gebunden* と押韻する。(*2)

もともと、*entzunden* を通時的に正確に説明するのは難しい。この説明を以下に試みる。(i) 基礎語の幹母音「u」について、(ii) 語尾の「d」音について、(iii) 語末母音「en」について、論ずる (以上は 95 頁まで)。

(*1) 弱変化動詞のうち I 類 (古賀 161-3) = *jan* 動詞は、不定形・現在形以外で「逆ウムラウト」を起こすことから、今日言う混合変化動詞と言ってよい

(*2) ケルナー (1791-1813) は、劇作家として成功し始めた矢先に、ナポレオン解放戦争で若くして戦死した詩人である。シューベルトはケルナーの「子守歌」に美しい曲 (いわゆる「シューベルトの子守歌」とは別) を付けている。

(i) 逆ウムラウト—なぜ幹母音は u なのか 問題となるのは第 1 に、グリムによって「逆ウムラウト」*Rückumlaut* と呼ばれた音韻変化に属す *ü*→*u* の変化である。ゴート語不定詞の後続母音 *a* (接尾辞 *-jan* 中の) の影響で、不定詞の幹母音が *ü*→*u* と変音をおこした、というのがグリムの理解である。

だがそうした説明は合理的なのかどうか。むしろ、ゴート語のある種の動詞の不定詞 (現在形を含む; 以下同じ) は、語尾 *-jan* の後続 (半) 母音 *j* [j] をもつ (*1) ためにウムラウトを起したが、一方、過去形・過去分詞では — [j] が維持された場合は不定詞と同様にウムラウトを起して、後に弱変

化型の変化形を残したとはいえ — [j] が「しばしば放棄され(た)」(相良① 41) 影響で、u 音がウムラウトをせずに維持された混合変化形が併存する形になった。そう考えるべきであると思われる。

つまり、*entzünden* はゴート語では *intandjan* であるが (*Grimm* ‘*entzünden*’)、語尾中の後続母音 j の影響で中高ドイツ語、新高ドイツ語の不定形はウムラウトを起こして *entzündēn* となったが、逆にゴート語の過去形・過去分詞では語尾中に j をもたなかった形態から、幹母音のウムラウトを起さない過去形 *entzundete*、過去分詞 *entzundet* ができる可能性が生まれたというのが、通時的認識の帰結である (vgl. 桜井② 34-5, 245)。(*2)

(*1) そのためドイツ語学ではこの種の動詞を *-jan* 動詞という。古高ドイツ語では、弱変化動詞には、*-en*, *-ōn*, *-ēn* で終わる 3 種類の動詞があったが、ゴート語ではそれぞれ *-jan*, *-ōn*, *-an* で終わるため、古高ドイツ語で *-en* をもつ動詞が「*-jan* 動詞」と呼ばれている。中高ドイツ語では 3 種の動詞のいずれの語尾もすべて *-en* になった (古賀 161)。

(*2) だから一般に、相良が言うように、グリムの *Rückumlaut* 説には根拠がないと判断すべきかもしれない (相良② 35, 245)。ただし、新高ドイツ語を共時的に見た場合には、むしろグリム説には一定の妥当性を認めうる。太陽の周りを地球がめぐっても、地球の住人には、太陽が地球の周囲をめぐっていると見ることで少なくない現象を理解し説明できるのと、同様であろう。

(ii) a 語中音消失—なぜ語尾は *-de*, *-te* なのか だがその、中高ドイツ語での *entzünden* の混合変化型過去形 (さしあたって、ここで問題の過去分詞ではなく過去形にふれる) は、先の *entzundete* ではなく、*entzunde* もしくは *entzunte* の形で現れるのが普通のようなのである。この独特な形態は、前出の *entzundete* の語中音消失でできたかと判断される。

まず *entzunte* だが、古賀允洋氏は、*entzünden* の基礎語 *zünden* の過去形は、*zunte* であると記す (古賀 162)。

古賀氏は過去形が *entzunte* の形をとるに至った事情までは記していないが、この点では小辞典の記述が示唆に富む。それによれば、「同一または同属の子音 [例えば t と t, d と t—杉田注] の間で、最終音節において」、語中音消失あるいは語末音消失が起こり (以下の例では *-te-* あるいは *-de-* の語中音消失)、例えば過去形の *wartete* (<*warten*) は *warte* に、過去分詞の *geredet* (<*reden*) は *geret* になったという (小 722)。ここからは、*zünden* の過去形が *zunte* になったのは、*zundete* の語中音消失が起こった結果と判断される。

一方で、相良守峯氏によれば、中高ドイツ語では、弱変化動詞および混合変化動詞の過去形後綴り *-te* は、「n, m, r, l の後においてしばしば *-de* に変る」(相良① 41)。これが *entzünden* にも当てはまるとすれば、*entzunte* は *entzunde* の形をとった可能性がある。武市修氏の研究によれば、実際、中世文学では *entzundete* が *entzunde* の形をとって用いられており、かつこれは、「語幹が *-d*, *-t* で終わる弱変化動詞(*) の過去形の場合 Mhd. でよく見られる現象である」という (武市 283)。実際は、武市氏の直接の論及は *enzünden* であるが、これは *entzünden* の別形 (小‘ent-’) である。そして *Grimm* によれば、中世伝説『トリスタンとイゾルデ』には、*enzunde* および *enzunte* という形の過去形が何度も出るという (*Grimm* ‘*enzünden*’)。

したがって、*entzünden* の過去形は中高ドイツ語において *entzunde*, *entzunte* であったと、合理的に判断できる。

(*) *entzünden* は確かに中高ドイツ語文法では弱変化動詞と見なされるが、幹母音の母音交替を起す *-jan* 動詞である限り、今日では混合変化動詞に属するはずである。

(ii)b 新高ドイツ語の正書法—なぜ語尾は *-d* なのか 以上は主に過去形についての記述だが、小辞典による前記説明には過去分詞も例にあげられていた (*mhd.* *geret←geredet*)。それを下にすれば、問題の *entzünden* の過去分詞 *entzundet* は、*entzunt* (*nhd.* *entzund*) の形で用いられたと判断される。

ただしこれは、新高ドイツ語としてのテキストでは、その正書法にしたがって *entzund* と記される可能性がある。

中高ドイツ語にあっては、綴りは、語幹とのつながり・語形変化との関連よりも音韻が重視された(相良① 6, ポーレンツ 111)。一方、新高ドイツ語では逆に前者を重視する。中高ドイツ語の *tac-tages* (2格), *kint-kindes* (同) が、新高ドイツ語では *Tag-Tages*, *Kind-Kindes* と綴られた事実に、それを見ることができる。

したがって *entzunt* は、新高ドイツ語の正書法では、*entzünden* とのつながりを重視して、*entzund* と記される可能性が高い。中高ドイツ語を含む詩のテキストにおいて、校訂者がどちらの正書法を重視するか—読者層を誰と想定するかに従いこれが決まる傾向がある—によって、綴りに違いが出る可能性がある。(*)

こうして語の (ii)a 通時的推移と (ii)b 正書法によって、前記引用文 (8)(9) の *entzunden* に近づく。だが、*entzund* (*mhd.* *entzunt*) と前者 *entzunden* との違いは大きく、後者の形はいぜんとして不可解である。

(*) この種のことは、異なる事情に基づくとはいえ、本節で扱う他の単語にも当てはまる。*vân* と *fahn*, *stân* と *stahn*, *begund'* と *begunnt* 等。

(iii) 強変化動詞からの類推—なぜ語尾は *-en* なのか ところで、混合変化動詞である *entzünden* の過去分詞が、*-t* ではなく *-en* という語尾をもつのはなぜかを説明する資料は、どうしても見つからない。したがって文献的裏づけをもって確証するというわけには行かないが、*entzunden* という混合変化動詞の過去分詞が *-en* の形をとるのは、幹母音について同じ母音交替を伴う強変化からの類推によるのではないかと私は想像する。

中高ドイツ語では、強変化動詞 1,3 人称単数過去が *-e* の語尾をもつことがあったが (*1)、*entzunde* に見られる *-e* を、強変化動詞に付加された *-e* と同様に見立てれば、*entzünden* の過去分詞が *-en* の形をとる (つまり *entzunden* となる) というのは、あるていど自然な類推と思われる。

ちなみに *Grimm* は、*entzunden* の形を「強変化分詞」*ein starkes Part.* と記すが、それを *tadelhaft* (批判すべき、欠点がある) と手厳しく評価している (*Grimm* 'entzünden')。ひょっとすると、*entzunden* が仮に強変化動詞の変化形からの類推によって成り立ったとしても、これは詩人個人もしくはごく限られた人たちのものであって、一般の母語話者には不自然に響いたのかもしれない。

ただし、*entzünden* という弱変化動詞に、強変化と同様の変化形 (*entzunden*) がなかったとまで言えるかどうかは不明である。例えば *Grimm* には、中高ドイツ語の単数過去形として *entzünd* ないし *entzünd* (*entzündt*) と表記された例が出るが、時代・地域によっては、新高ドイツ語で言う弱変化型の過去形が、つまり母音交替のおきない型の過去形が、実際に用いられていたのかもしれない。「中高ドイツ語」「古高ドイツ語」などと一般的な呼称が使われるが、実際はいずれにおい

でも、地域によってかなり独自の言語が話されていたはずである。時代をさかのぼればさかのぼるほど、そうであろう (*2)。

問題の *entzünden* にも、同様の事情から *entzunden* という過去分詞があったと、ひとまず見なしておきたい。

(*1) *sähen - sache* (ルター時代には *sahe*) - *gesehen* (前述 89 頁)。

(*2) 例えば、古高ドイツ語、古低ドイツ語を含む「古期ドイツ語」を、高橋輝和氏は大まかに見て 6 つの方言に、下位分類を入れれば 10 を超える方言に分けている (高橋 3)。中高ドイツ語も、やはり 10 を超える方言に分けられるようである (古賀 3)。

③ 混合変化動詞の弱変化分詞 *gekenn(e)t* (= *gekannt*)

動詞の変化形 (強・弱・混合) に即して単語を論じればきりがないのであるが、もう一つだけ気になる例をあげておきたい。それは、新高ドイツ語において混合変化型の動詞でありながら、幹母音が弱変化型である (いわゆる *Rückumlaut* を起した母音よりなる) 過去分詞をもつ動詞の例である。

(10) *Hirtin, sieh, dein Herz entbrennet, / hast den Schelm du nicht gekennet.* (Brentano, *An dem Feuer saß das Kind*)

ほら、羊飼いの少女よ、お前の心は燃えあがる [燃えあがった] が、/ お前はこのわんぱく坊主 [=アモール] を知らなかった。

新高ドイツ語 *kennen* は、*kannte - gekannt* と活用するが、かつては *kennte - gekennt* という変化形もあったようである。*Grimm* (Stichwort 'kennen') によれば、これは 18 世紀まで使われていて、クロプシュトック、ウーラント、シラーの例などにも見られるという。

(10) で *gekennet* は *entbrennet* と押韻する。*entbrennet* (基礎語: < *brennen*) は 3 人称単数現在と解したが、もしこれが過去分詞なら、*brannte - gebrant* とは異なる別形 *brennte - gebrennt* のそれと判断される (*Grimm* 'brennen')。なおここでは、*gekennet, entbrennt* とともに語末に弱音 *e* が添えられている。

5) 独自の命令法 (付随的に同形の直説法現在形)

• *geuß* (= *gieß*) , *schleußt* (= *schließt*)

命令法においても、近代の詩人による作品のうちに、見なれない語が現れる場合がある。

(1) *Geuß, lieber Mond, geuß deine Silberflimmer...* (Hölty, *An den Mond*)

注いでおくれ、月よ、注いでおくれ、お前のほのかな銀の光を ...

(2) *Der Ringelblume Knospe schleußt / die goldnen Äug'lein auf; / mit allem, was da reizend ist, / du süße Maid, steh auf!* (Shakespeare, *Ständchen*)

キンセンカの花のつぼみは / 金色の眼を開く ; / その時 [=朝] 魅力的なすべてのものといっしょに、/ 可愛い少女よ、さあ起きて!

いずれも、中高ドイツ語での変化形をそのまま用いた例である。

中高ドイツ語においては、幹母音が母音交替 *Ablaut* を起こす「強変化動詞」には 7 つの系列が

あるが、そのうちいわゆる第2系列動詞は、不定詞および直説法複数現在が ie [ie] ([i:] ではない) という母音を、直説法単数現在および命令法は iu [y:] という母音をもつ (例えば *biute* < *bieten*, *nhd. bieten*)。そして後者の長母音は新高ドイツ語においては複母音化して [ɔy] と発音され、eu と綴られるようになる。

つまり *gießen* の中高ドイツ語形 *giezen* の命令法 *giuz* は、現代なら *geuß* と綴られるが——岩波がこれを見出し語 'geuß' の下に記している——、ヘルティは (1) でこれを用いたと判断される。また、*schließen* の中高ドイツ語形 *sliezen* [ʃliesən] の直説法3人称単数現在 *sliuzt* (*sliuzet*) (*) は、今日なら *schleußt* と綴られるが (これも岩波には見出し語としての)、これを A. シュレーゲル (シェークスピアの詩の訳者) は (2) で用いたのである。

そして両者がこれらを用いたのは、おそらく中高ドイツ語形がもつ、幻想的かつ柔らかな雰囲気をかもしだすためだったのではないか。長母音には勢いがつくが複母音は穏やかである。しかも後舌母音から前舌母音への推移がさらにその印象を強めるように思われる。

(*) 中高ドイツ語の強変化動詞では、3人称単数現在 (直説法) の語尾 -et は、語中音消失 *Synkope* によって e を失い、しばしば -t になるという (古賀 82)。

類似する変化形の存在 だが、これらの単語の意味を読者は理解できたのであろうか。理解できるのでなければ、詩としての効果はないに等しい。おそらく、*geuß* あるいはそれに近いことばが、例えば方言などにおいて、あるていど残存していたのであろう。

例えばアルニムらによる *Des Knaben Wunderhorn* に採集された民謡にも、命令法としての *geuß* が出る。

(3) Sei mir günstig,/ mach mich brünstig,/ in mein Herz die Liebe **geuß**. (Volkslied, *Erziehung*)

私にねんごろにしてね / 私を燃えさせ / 私の心に愛を注いでね。

ここで *geuß* の命令形は、少し離れた箇所の *heiß* と押韻する関係上、文末に置かれている。いずれにせよ、こうした民謡が民衆の間で歌われ伝承されれば、この語形は多かれ少なかれ人々の共通の語彙となる。

あるいは、*gießen-geuß* そのものではなかったとしても、それと同型の語形変化 (ie → eu) に属する中高ドイツ語は、読者にとって一般に理解可能だったのではないか。私がそう感じるのは、例えば新高ドイツ語 *fliehen*, *fliegen*, *kriechen* の命令形として——*flieh[e]*, *flieg[e]*, *kriech[e]* 以外に——*fleuch*, *fleug*, *kreuch* という別形が存在し (直説法 2,3 人称単数現在の場合も別形があり、命令形の別形に -st, -t がつく形をとる)、かつこれが実際に使われたという事実があるからである (*1)。

以下、この3単語それぞれの3人称単数現在の作例をあげてみる——

(4) Ach! wer löst nun meine Ketten?/ Denn gefesselt ist der Arm,/ mich um**fleucht** der Sorgen Schwarm; /keiner, keiner will mich retten? (Tieck, *Liebe kam...*)

ああ! 誰がいま私の鎖をはずすのか? / なぜって腕が鎖にかけられていて / 心配の群れが私を迂回して飛ぶのだから / 誰も、誰も私を救おうとしてくれないのか?

(5) In die Lüfte hoch ein Reiher steigt,/ dahin weder Pfeil noch Kugel **fleugt**:/ tausendmal so hoch und so geschwind/ die Gedanken treuer Liebe sind. (Mörrike, *Jägerslied*)

空へと高くサギが飛ぶ / 矢も弾もそこへな届かない / 誠実な愛の想いは / 千倍も高くそして速い。

(6) Ihm[=Schütze] gehört das Weite,/ was sein Pfeil erreicht,/ das ist seine Beute,/ was da **fleucht** und **kreucht**, (Schiller, *Mit dem Pfeil...*) (*2)

矢が届く / 遠くのものまで射手が支配する / 飛ぶものも、はうのものも / 射手の獲物だ、

また、一般市民の言語感覚に多かれ少なかれ影響を与えたに違いない民謡でも、これらが使われる例がある。例えば民謡「夏の歌」に、3人称単数現在の **fleucht** が2度出るというように。

(7) Das Täubchen fleucht aus seiner Kluft/ und macht sich in die Wälder./ ...Die unverdroßne Bienenschaar fleucht hin und her,/ sucht hier und dar ihr' ed'le Honigspeise; (Volkslied, *Sommerlied*)

鳩は穴倉から飛び / 森へと逃げこみます。 / ... 辛抱強い蜂の群れがあっちこっちに飛び / ここかしこで高級な蜂蜜料理を探します；

-ie の代わりに -eu の形をとる別形がこのように使われるとすれば、多かれ少なかれ **geuß** や **schleußt** は、**gieß**, **schließt** の意と類推されえたであろう。(*3)

(*1) 念のため記せば、**fliegen** の場合、命令形の別形として **fleug**, **fleuch** の、直説法3人称単数現在の別形として **fleugt**, **fleucht** の両系がある。つまり **fleuch** - **fleucht** は、**fliehen**, **fliegen** の両方の意味を有する。(4)(5)(7)に見る **fleucht** は **fliegen** の意である。

(*2) **was da fleucht und kreucht** は「あらゆる生き物」くらいの決まり文句であるが、**fleucht** 「飛ぶ」と並んで **kleucht** 「地をはう」が使われている。

(*3) この点で誤解があったため、第1章で、**schleußt** の由来について不明な点があると記したが(121頁)、それは私の単純な間違いであった。その中高ドイツ語形が **sliezt** (**sliezet**) ならやはり **schleußt** との関連は不明だが、中高ドイツ語形は **sliuzt** (**sliuzet**) である(本号96頁)。したがって、**sliuzt** と **schleußt** は同じ発音であり、同一語と判断できる。

6) 接続法のように見える直説法過去形

直説法でありながら、一見接続法のように見える語が詩で用いられることがある。例えば **tät** がそれである。

① **tät** (*mhd.* **tet**, **tët**; < **tuon**) = **tat**, **tut** (*nhd.*, < **tun**)

(1) 'Und willst du, Herr Oluf, nicht tanzen mit mir,/ soll Seuch' und Krankheit folgen dir./
Sie **tät** ihm **geben** einen Schlag aufs Herz,/ sein Lebtage **fühlt**'er nicht solchen Schmerz.
// Drauf **tät** sie ihn **heben** auf sein Pferd:... (Herder, *Herr Oluf*)

「オルフ様、私と踊ろうとなさらないのなら、あなたを、はやり病にしますよ。」 / 妖精はオルフ氏の心に打撃を加えた / それまで、彼は生涯そのような苦痛は感じたことはなかった // その後、魔王の娘はオルフ氏を馬に乗せた：...

ここに見られる **geben tun** や **heben tun** は、**tun** の助動詞的な用法である。スイス方言ではこれが特徴的と言われるが(田中①29)、今日これは **Hochdeutsch** の口語的用法とされている。この用法は、前後しておかれる本動詞の意味を強めるが(→第2節口語「・tun」)、これは詩においても時おり見られる表現である。

(2) es schlafen die Menschen in ihren Betten,/ träumen sich manches, was sie nicht haben,/ **tun** sich im Guten und Argen **erleben**: (Müller, *Im Dorfe*)

人々は床(とこ)で休んでいる、/ 持っていない多くの物を夢見て、/ 良くも悪しくも元気になる:

直説法としての **tät** さて問題は(1)に出る **tät** だが、これは接続法ではなく直説法である。時制上は、直説法過去である。(*1)

この種の **tät** は漠然と「古形」と説明されることが多いようだが(佐々木 201)、正確には中高ドイツ語に由来する。tun (*mhd.* tuon) の直説法 3 人称単数過去の中高ドイツ語形は、tet[e] と tēt[e] という両形があった(相良① 45) (*2)。tēt[e] は、今日なら **tät[e]** と綴られるはずである。一方、中高ドイツ語における過去接続法の 3 人称単数 **tæte** [tɛːtə] (同前) —æ は ë で示される開口音 [ɛ] の長母音 [ɛ:] である — もまた **täte** と綴られるはずである。

ここに、tuon の直説法と接続法とが混同される可能性が生まれる。新高ドイツ語では、その直説法は **tat** と理解されているために、一般には両者は区別されるとしても、時とすると差異が不分明になりうる。接続法は語末に -e を有するとしても、詩の場合は -e は省略される傾向があるために、違いを明示する指標とはなりにくい。

大ざっぱに見てこれが、**tät** を直説法として使わせる事情である。実際その種の言い方があることは、例えば相良大(見出し語 'tun') に明示されている。そこでは、「助動詞として; 俗語・方言で他の動詞の不定形と共に用い、現在形・過去形の書換となる」という記述の後に、第 3 の例文として **tät** を用いた例があげられている。「er **tät**(=tat) das Reisen wählen, 彼は旅行を選んだ。」がそれである。

この例がどこまで一般化しうるかは不明だが(私は寡聞にして相良大の記述以外ではこの種の例文を見たことがない)、**tät** が直説法として用いられる可能性は、踏まえておかなければならない。

なお(1)について敷衍すれば、ここで **tät** は、**tat** (過去) の意味で用いられていると思われる。最後の詩行に **fühlt'** が出る。このアポストロフは私がつけた。これが原典にあったかのどうかは確認できないが(Deutscher Klassiker Verlag 全集版ではついている [Herder 335]) (*3)、詩の全体の流れからすれば、**fühlt'** も **tät** も直説法過去だと判断される(ただし後述するように、歴史的あるいは物語的現在 [桜井 256] とすることも可能である)。

(*1) オックスフォード大学が開設するドイツ詩のサイト '*Oxford Lieder*' の訳を、念のためのせる。

She **struck** her hand across his heart,/ Never in his life did he feel such pain.// She **lifted** him up onto his steed: (geben **tät**, heben **tät** の訳はそれぞれ **struck**, **lifted** である。)

(*2) ここでも、先に **sah** について見た、過去形に -e が付される傾向が示唆されている。

(*3) この版では、Loewe の付曲で歌われる歌詞とかなり違う部分が見られるが、本稿の趣旨を逸脱するためこれ以上ふれない。

他の作例 通時的な状況はつまびらかではないが、今日では、**tat** と **tät** は綴り上も発音上もはっきりと区別されるのに、例文を見る限り、**tät** を **tat** の意味で用いるのは、ヘルダー(先の(1) *Herr Oluf* の作者) やゲーテの時代にはめずらしいことではなかったと思われる。

実際、ゲーテの作例もあげることができる。

(3) Er [König] sah ihn [=einen gold'nen Becher] stürzen, **trinken**/ und sinken tief ins Meer./ Die Augen **täten** ihm sinken,/ [er] trank nie einen Tropfen mehr.

(Goethe, *Es war ein König*) (*1)

王は、金の盃が落ち、おぼれ、/そして海深く沈むのを見た。/王の目は伏せられ、/[王は]もはや一滴をさえ飲まなかった。

これは、ゲーテ『ファウスト』第1部で、グレートヒェンが口ずさむ歌である。「トゥーレ」と呼ばれた国の王の物語ということになっているが、ファウストとの恋に直接関係はなく、むしろグレートヒェンのその後の悲劇に関する伏線と了解されるようである。

ここでは *tät* は3人称複数形で用いられている。その中高ドイツ語形は、過去直説法でも過去接続法でも *tæten* [tɛ:tən] である。直説法には違いの明瞭な *täten* という形もあるとはいえ、*tæten* を用いる限り直説法も接続法も違いがない。

なお、(1)の *Herr Oluf* をデンマーク語から訳したヘルダー (1744-1804) は、ゲーテに深い影響を与えたゲルマニストである。民謡集『歌 *Liedern* に現れた民衆 *Völker* の声』(ドイツ語圏以外の民謡・詩も含むが、ヘルダーによってすべてドイツ語に訳されている; 1778-9年刊) や各種の哲学的・歴史的な諸論稿を通じて、ドイツの民族 *Volk* 文化研究に関わり、文化的なドイツ・ナショナリズムの生長において重要な役割を果たした。したがってその後のドイツ・ロマン主義の歴史において、ヘルダーを、また部分的にゲーテを、無視することはできない (小牧 3-18)。(*2)

(*1) *'Oxford Lieder'* 訳: He saw it fall and fill/ and sink deep into the sea./ His eyes **closed**:/ he never drank another drop. (sinken *täten* は *closed* と訳されている。)

(*2) ここで示唆したように、*Volk* 民衆、*Volkslied* 民謡はそれぞれ民族、民族の歌でもある。民族の特性を民衆のうちに見た点にこそ、ドイツ・ロマン主義の特徴を見ることができる。

民謡に見られる *tät* 民謡にもこの手の直説法は見られる。3行にわたるがまず引用する。

(4) Der König **tät** fragen,/ wem's Ringlein sollt' sein?/ Da **tät** mein Schatz sagen:/ "Das Ringlein g'hört mein!" // Mein Schätzlein **tät** springen/ Berg auf und Berg ein,/ **tät** mir wie d'rum bringen/ das Goldringlein fein! (Volkslied, *Rheinslegendchen*)

王様は尋ねるの、/これはいったい誰の指輪か? って、/私の恋人が言うの、/「指輪は私のです!」 って、// 恋人は山の上へ/下へと飛び跳ねて、/私にもう一度/きれいな金の指輪をもってくる!

ここでも *tät* は直説法と解すが、(1)(3)の場合と異なり時制は現在であろう。相良大の注記にも「現在形・過去形の書換となる」とあったが、ここでは文脈上、*tät* が現在形の代用となっていると解釈するのが自然であると、私には思われる。そして意味上(4)は起こりうる出来事を語っており、その限りで *tät* には一種の未来形の含み(*)があるように感じられる。

だがこうなると、接続法との境界があいまいである。起こりうる出来事を表すという点では、主文の接続法の用法として知られる「可能の接続法」(桜井 396) と類似してくるからである。(4)では、その可能なできごとを淡々と語ることで、詩の話し手が見た白昼夢(空想・想像)の幻想的な印象あるいは物語的な印象を、強めているように思われる。助動詞としての *tät* には、そのような機能(思えば(1)(3)の作例にもそうした要素を見出しうる)があるように感じられる。

(*1) *'Oxford Lieder'* 訳が、*will* を使っているのは、そのためであろう。The King **will** enquire/ whose ring it might be:/ my sweetheart **will** say/ the ring belongs to me.// My sweetheart **will** bound/ over hill, over dale,/ and [**will**] bring back to me/ my little gold ring.

詩人による他の作例(つづき) 次の例でも同様である。物語的な叙述そのものではないが、(4)

と同様に、登場人物の想いの内で情況が物語叙述風に回想されている。

(5) Es sind die mehreren Dinge auf der Welt, / so daß sie ein's nicht glauben **tät**, / wenn man sie möcht' erzählen hör'n... (Hoffmannsthahl, *Hab' mir's gelobt*)

世間は、そういうことがいくらでもあるが、/ それゆえ人 [= 世間] は一つのことさえを信じないでしょう、/ いくら語られるのを聞きたくても ...(*1)

次の例はより微妙である (ここで **tät** は本動詞であり不定詞は分離動詞の **zutun** である)。

(6) Und wenn sie **tät** die Äuglein **zu** / und **schläft** in süßer Ruh', / dann **lispelt** als ein Traum- gesicht/ ihr [=kleine Blumen] zu: Vergiß, vergiß mein nicht! (Müller, *Des Müllers Blumen*)

彼女がその眼を閉じるとき / そして甘い安らぎのうちに眠る時、/ お前たち [= 小さな花] は夢に出て / 彼女にささやくだろう: 「私を忘れないで!」と>(*2)

ただしひょっとするとこれは、Hochdeutsch の規範文法どおりに、**wenn** 構文中の接続法 II 式かもしれない。その可能性も捨てきれないが、その場合、これにつづく **schläft** が **schliefe** (= **schliefe**) となっていない点が気になる。**lispelt** も **lispelt'** (= **lispelte**) となっていない。**schliefe** が使われていない点を思えば、**lispelt** は直説法の 3 人称現在形として用いられていた、と判断する方が無難に思われる。その限り、(6) 中の **tät** も直説法と解したい。

(*1) 'Opera Arias Composers Singers' 訳: It's the many things in the world that make you do not believe it when you want to hear it. 「世間には、あることを [実際にあったと] 耳にしたくても、それを信じさせてくれない多くの事情がある。」

(*2) 'Oxford Lieder' 訳: And when she **closes** her eyes/ and **sleeps** in sweet repose, / then whisper to her as a dream: 'Forget me not!'. (ここでは **tät zu** が **closes** と訳され、直説法の **schläft** もそのまま **sleeps** と訳されている。)

② **dächte** (*mhd.* **dæhte**; <denken) = *dachte* (*nhd.*, <denken)

モーゼンの詩には、一般には接続法と見なされる **dächte** (<denken) が直説法として使われていると判断される例がある。

(7) Sie [=Blüten] flüstern von einem Mägdlein, / das **dächte**/ die Nächte/ und Tage lang, wußte, ach, selber nicht was [sie dachte]. (Mosen, *Der Nußbaum*)

花は、ある少女のことをささやいている、/ その子は考えた、/ 夜も / 昼もずっと、でもああ、自分では答えが見つからなかった。

佐々木庸一氏はこれをやはり古形と記すが (佐々木 219)、少々問題が残る。

dächte の中高ドイツ語形は **dæhte** [dɛ:xtə] である。それを新高ドイツ語の正書法に従って **dächte** と記すのはよいが (ただしそれでは長音も [x] も明示されないが、これは致し方ないであろう)、実は **dæhte** は、中高ドイツ語・直説法過去 2 人称である (古賀 164,166)。(*)

一方、モーゼンの原文では、**Mägdlein**, / **das dächte** に見るように、**dächte** は明らかに 3 人称として使われている。この点、問題がないのかどうか。あるいはこれは、**dächte** を 2 人称変化形と解して **du, Mägdlein, das du dächte...** と読むことは不可能ではないが、少々無理があると感じられる。

あるいはこれは方言に依拠した表現であろうか。田中泰三氏によれば、「強変化動詞の過去形に低地ドイツ語では Umlaut を付けることがある」という (田中① 26, 強調杉田)。例として **kēm** (=kam

< kommen) があげられるが、Hochdeutsch の正書法で書けば、これは **käm** である。モーゼンのように **dachte** を **dächte** とするのは、ひょっとすると低地ドイツ語の影響であろうか。ちなみにモーゼンは低地ドイツ語圏に属する北ドイツのオルテンブルクで生まれ、十代の半ばまではここで育った。その限りモーゼンは「はえぬき」(柴田武 12-3) の低地ドイツ語話者と判断される。

ただし、たとえそうだとしても、**denken** は中高ドイツ語・新高ドイツ語のいずれにおいても混合変化動詞である点で、問題が残る。もっとも混合変化においては、幹母音は強変化動詞と同じように変化するため、田中氏の指摘は混合変化動詞にも及ぶ可能性はあるのだが。

もう一つ問題なのは、そもそもモーゼンに低地ドイツ語で書いているという自覚があったかどうかである。(7) を含む詩全体を見るかぎり、そうした痕跡は感じられない(本来ならモーゼンの詩作全体が俎上にのせられなければならないが、それは現在の私にはできない)。あるいは押韻の都合上、ここにだけ低地ドイツ語を用いたと解してもよいのではないかと思われる。中高ドイツ語等の詩・民謡を現代語に翻訳する際、一部の単語を原文のままに残すことがあるのと同様にである。

以上② **dächte** について挙げられたのは 1 例のみだが、① **tät** を含め、詩人がいろいろな形で中高ドイツ語ないし方言を使う例があることを踏まえて、あえて問題にした。

(*) **denken** は、中高ドイツ語においては弱変化動詞第 3 類であり、古高ドイツ語では **-ên** 動詞である(古賀 164)。

7) 直説法過去形のように見える接続法

「接続法のように見える直説法過去形」とは逆に、直説法過去形のように見えるが実は接続法 II 式であるという例も見られる。これにも、多かれ少なかれ中高ドイツ語および方言が関係する。

・ **war** (オーストリア方言) = **wäre**

(1) Da wußt' ich nicht, wie das Leben tut./ **War** alles, alles wieder gut!/ alles! alles, Lieb' und Leid/ und Welt und Traum! (G.Mahler, *Die zwei blauen Augen...*)

そこ [= 菩提樹の下] では、人生の成り行きがどうなるかは、僕には分からなかった。/ 全てが、全てが、再びよくなってくれたら!! 全てが! 全てが、愛と苦悩が / そして世界と夢とが!

この **war** は、外見からはわからないが、ヴィーン方言(もしくはそれを含むオーストリア方言、あるいはいわゆる南部方言)であって、実は接続法 II 式であるようだ。Hochdeutsch では **wäre** がこれにあたる。

この詩を書いたのは、作曲家のマーラーである。マーラーは、今日のチェコ共和国で生まれたが、その母語は——生後すぐに移り住んだ「モラヴィアのイラーヴァ」がその地域における「ドイツ文化の一中心」だったことからすれば(柴田南 30)——オーストリア方言を含むバイエルン方言だったと判断される(河野 16)。そしてその後 15 歳でヴィーンに移り住み、死の 5 年前までずっとそこで活躍した(同 32 以下)だけに、マーラーはヴィーン方言の影響をも受けていただろうと想像される。

接続法としての **war** は、ヴィーン方言の特徴のひとつである(河野 28,153)。接続法 **wäre** がヴィーンで直説法と同じ **war** になったのは、中高ドイツ語 **sîn** (*nhd.* sein) の接続法 II 式 **wære** [vɛ:

ra] (*) が、ヴィーンでは [vá:ra] と発音されることによっている (河野 153)。

本項についても、前項の *dächte* の場合と同じことを言わなければならない。war を含めて、中高ドイツ語の名残が詩中に現われうる可能性をふまえておくことが、詩を間違いなく読む前提であろう。

(*) ヴィーン風の発音では、一般に a の調音点は口腔内の後ろに寄って o に近い音となるため、å と書かれるという (河野 28)。一方、直説法過去 1 人称・3 人称単数 *wære* は本来 *wår* と書かれるべきだが (同前 143)、war と記されるのもふつうだという (同 143-4)。

接続法としての tat なお詩では出会ったことはないが、ヴィーン方言では本動詞としての tat が接続法としての *tät* の代わりに用いられることがあるという (河野 154)。それは、ヴィーン方言では過去形がほとんど使われなくなったことによるという (同前)。その限り *tat = tät* は、war-wäre のように、wære の発音に関連して起きた現象とは異なるが、詩を読む際に記憶に値する。

接続法 *tat* として河野純一氏があげる例は、*Ich tat das nicht.* (ヴィーン方言では *I tat das net.*) で、これは *Ich täte das nicht.* の意であるという (同前)。関連して、接続法の意味は「非現実性や潜在的可能性などに関連したことをあらかず用い方がほとんどである」とすれば (同 152)、この文の意味は「私はそんなことはしないでしょう」くらいの意と判断される。

以上に加えて、ヴィーン方言では *tät* も使われるようである。これが使われるのは助動詞的な用法としてであって、一般に *Hochdeutsch* において *würde* を用いて接続法 II 式に代える場合——桜井和希氏はこれに「条件法」という用語をあてている (桜井 413) ——に、*würde* の代わりに *tät* が使われるのだという (河野 154)。これは、先に見た「接続法のように見える直説法の過去形 ① *tät*」における作例 (4)——*Volkslied, Rheinslegendchen*——の解釈枠組みともなりうるであろう。

ただし河野氏があげる作例のニュアンスは、(4) のそれとズレがあるように感じられる。前後の文脈を欠いた例文だが、*I tät lesn* (*Ich tät lesen*) = *Ich würde lesen.* にせよ、*I tät kumman* (*Ich tät kommen*) = *Ich würde kommen* にせよ (同前)、「非現実性」「潜在的可能性」の表示というより、「心づもり」「予定」あるいは「想像」の表示ということなら、しっくりとするのだが。

(2) 曲用 (名詞類 Nomen 変化) Deklination

「活用」と異なり、「曲用」は一般には耳なれない言葉である。それは、名詞類 *Nomen* の性・数・格における変化 *Deklination* を、動詞の「活用」*Konjugation* に対して術語化した呼称である。

「名詞類」と記したが、それは冠詞・名詞・形容詞・代名詞・数詞等を包括する概念である。これらの品詞は、語形変化や機能において、ある程度まとまりのある類を形成していると判断される (相良② 57)。

ここでは、詩において見られる、名詞類の格・数における独自な変化形をとりあげる (詩においては性について特異と言えそうな曲用はないようである)。

1) 独自の格変化

詩人が、日常語と異なる格変化形を用いることは、ふつうはない。韻律・押韻等の関係で必要だったとしても、それを用いれば、人々の詩の理解は不可能になるであろう。それは格変化の場合に限らないが、格変化の規範を逸脱するなら、ちょうど日本語において「てにをは」を変えた場合に理解困難になるのと同様の事態を招くであろう。

ただし詩人が、主に中高ドイツ語を念頭に置いて、現在（あるいは当時の現在）の標準的なそれといくぶん異なる格変化形を用いることはある。だがそれは恣意的に造られるではなく、使用可能な変化形は Hochdeutsch のうちにあり、その型はいくつかに大別されうる。そしてそれは読者（少なくともドイツ語の母語話者としての）には十分に理解される範囲のものなのである。

だが非母語話者の読者には、理解が容易ではないことがある。比較的分かりやすい例をあげれば、例えば人称代名詞 2 格 **mein** は、「古い本来の形」として、今日でも「詩または慣用句」に（桜井 136）、あるいは「古風荘重な文体で」（相良② 171）に用いられるが、小型の文法書では **meiner** しか記されない。**mein** が記されたとしても、現代の Hochdeutsch として利用される確率が低いからなのか、括弧でくくられてしまい（z.B. 中島 82）、学習者の注意がそらされてしまう。

それゆえ、人称代名詞 2 格の例を含めて、詩に見られる少々特異な格変化について見ておくことにする。

①男性・中性名詞単数 3 格の -e

中高ドイツ語においては、例外はあるとはいえ（ポーレンツ 58）、一般に男性・中性名詞の単数 3 格には -e がついた。例えば 男性名詞 **steine** (< *mhd.* *stein*=*nhd.* *Stein*; 以下同じ) , **tage** (< *tac*=*Tag*)、中性名詞 **worte** (< *wort*=*Wort*) , **pfärde** (< *pfärt*=*Pferd*) (*1) 等のように（古賀 9 以下, 31 以下）。

今日では、これらの -e は基本的に消失し、同 3 格に -e がつく例は、古典からの引用、格言、慣用句 (*2) など以外には、一般には見られないようである。

だが詩では（私が主に読んできたのは 18~19 世紀の詩であるだけになおのこと）、同 3 格に -e が付される例は多い。むしろそれが 2 度出れば 1 度は -e がつく、と言ってもおそらく過言ではない。それは主に韻律および押韻の必要に由来する。

(1) Am Brunnen vor dem **Tore**,/ da steht ein Lindenbaum...Der Hut flog mir vom **Kopfe**,/
ich wendete mich nicht. (Müller, *Der Lindenbaum*)

城門の前の井戸のそばに、/ 菩提樹が 1 本立っている ... 帽子が僕の頭からとんだが、/ 僕は振り返らなかった。

(2) Im Rhein, im heiligen **Strome**,/ da spiegelt sich in den Wellen/ mit seinem großen **Dome**
... (Heine, *Im Rhein*...)

美しい流れライン川の / 波に反射する、/ その [ラインの] 大聖堂とともに ...

いずれも、詩行末尾の男性・中性単数の 3 格に -e が付されて、弱勢終止となっている。(2) では、弱勢終止による弱勢韻が見られる。(*3)

(*1) 中高ドイツ語においては、正書法が確立していなかったために、またおそらく地域差が大きかったために、いくつもの綴りが知られている場合がある。**pfärt** は実際には **phert**, **phärt**, **pherit** 等と綴られたようである（小 426）。

- (*2) 古典からの例として、例えば *Der Prophet gilt nichts in seinem Vaterlande.* (下宮 77, ルカによる福音書 4-24) 「預言者は郷里に容れられない」。格言の例としては、*Der Apfel fällt nicht weit vom Stamme.* (下宮 11) 「リンゴは幹の遠くには落ちぬ」。慣用句は比較的多く、例えば *zu* の例として *zu Hause* 「家へ・家に」(ただし *e* をつけないことも多い), *zu Lande* 「陸路で」, *zu Tode* 「死ぬほどに、ひどく」など。
- (*3) 詩学では、強音節 *Hebung*・弱音節 *Senkung* による終止をそれぞれ男性終止・女性終止と、またそれらが韻を踏む場合にそれぞれ男性韻・女性韻と呼ぶ。だが本稿では、男性・女性のたとえを避けるために、若干語弊があるがそれぞれ強勢終止・弱勢終止、強勢韻・弱勢韻と記す。なお「弱勢韻」は、当然ながら強音節を度外視した弱音節だけの韻ではない。

②女性名詞単数 3 格の -n

女性名詞でも、単数 3 格に (-e がではなく) -n がつく例が見られることがある。

- (1) *Auf die Nacht in der Spinnstüb'n, / da singen die Mädchen, / da lachen die Dorfbub'n, / wie flink geh'n die Rädchen!* (Heyse, *Mädchenlied*)

夜になって、紡ぎ部屋で、少女たちが歌っている、村の青年らが笑っている、糸車はなんとすばやく回ることか!

- (2) *Ist's der Frohen Einer, / der die Freuden reiner / Lieb' und Freundschaft teilt, / gön'n ihm noch die Wonnen / unter dieser Sonnen, / wo er gerne weilt!* (Seidle, *Das Zügelglöcklein*)

純粋な愛と友情の喜びを / 分かち合うのが / キリスト者の一人なら、まだ彼に歓喜を恵みたまえ、彼がとどまろうと望む / この太陽の下で。(※1)

ここでは、*Stüb'n* も *Sonnen* も複数に見える。だが (2) では、太陽が複数形で書かれるのは奇妙に感じられる。しかも当然ながら、両者ともに、複数形と解したのでは冠詞および指示代名詞の格変化が不自然である。

実はいずれも、女性弱変化名詞単数の 3 格である。今日、女性弱変化名詞で -en がつくのは複数形のみだが、中高ドイツ語にあっては、単数 2-4 格に -en がつく例はめずらしくなかった (4 格の例は後述する)。Asche (*mhd.* asche; 以下同じ)、Gasse (ga33e), Kirche (kirche), Glocke (glocke), Frau (vrouwe), Woche (woche) などの単語がそれである (古賀 43)。今日ではわずかに複合語の規定語にその痕跡が見られるが (*Frauenzimmer*, *Gassenbube*, *Kirchenlied*, *Wochenende* 等) (*2)、一般に -en の形が非複合 (単純) 形に、もしくは複合語の基礎語として現れることはまずない。それにもかかわらず (1)(2) が -en (-n) を必要としたのは、*Stube* を第 3 行の *Bub'n* と、*Sonne* を前行の *Wonnen* と押韻させるためである。

- (※1) *der Frohen* (2 格) は、「福音」*die Frohe Botschaft* に由来することばと見て「敬虔なキリスト者」の意と解した。

- (※2) 「抽象名詞では複数の 2 格, 3 格をのぞいてはこの n を失っている」(古賀 43) というが、*Höhenlied* (讃美歌・聖歌), *Tiefenpsychologie* 「深層心理学」等のように、複合語をつくる際に -en の形をとるものがある。しかも、*Höhe* (*mhd.* hoehe) も *Tiefe* (同 *tiefe*) も、-n を失った抽象名詞としてあげられている例である (古賀 43-4)。あるいはいずれの複合語も、そうした特質が変質した新高ドイツ語と解されるべきなのだろうか。例えば *Tiefenpsychologie* に見るように、近現代に

おける学術的・技術的あるいは芸術的等々の多面的な関心の爆発的な増大が、言語上の転換と無関係だったとは思われない。

中高ドイツ語の名残 ただし、女性弱変化名詞 3 格について、次のような熟語・言い回しが見られることがある。

(3) ...[es gibt] nichts Lieblicher's auf Erden/ als wenn man herzt und küßt! (Mörrike, *Der Knabe...*)

... この世では、[二人が] むつみあい口づけする以上に / いいものなんてないんだ!

(4) Sah ein Knab' ein Röslein steh'n,/ Röslein auf der Heiden. (Goethe, *Heidenröslein*)

ある少年がバラが咲いているのを見た / 荒れ野にバラが咲いているのを .

今日、女性弱変化名詞の単数 3 格は *-en* をとらないが、*auf Erden* には *-en* が現れる。これは、中高ドイツ語の名残である (*1)。一方、(4) の *auf der Heiden* もまた同じように説明されるのが常であるが (桜井 79)、これについては少々誤解があるようである。*Heide* (*mhd.* *heide*) は、中高ドイツ語では強変化名詞であって (小 725)、次に見るようにその単数 3 格に *-n* はつかない。

(5) Under [=unter] der linden/ an der heide,/ dâ unser zweier [=beider] bette was [=war],...
(*Vogelweide, Under der linden*) (*2)

草原にある / 菩提樹の下に / 私たち 2 人のしとねがあった ,...

民謡でも、前置詞 *auf* がついているにもかかわらず、*Heide* に *-n* を欠いた例が見られる。

(6) Im Wald und auf der Heide,/ da such' ich meine Freude,/ ich bin ein Jägermann. (Volkslied, *Im Wald und...*)

森や原野で / 私は喜び [= 獲物] を探す / 私は狩人 .

いずれが正しい言い方なのだろうか。おそらく、*Heide, Heiden* のいずれも使われていたのであろう。つまり中高ドイツ語にも地域性があった (いや、時代が古ければ古いほど地域性は大きかったであろう)、あるいは後の新高ドイツ語の時代にあつて、地域において違いがあつた (ゲーテが民謡を採集した — とひとまず言うておく — と思われるアルザスでは *Heiden* だった?) ということなのであろう。

なおヘルダーは、ゲーテと同じ野ばらを扱った作品 (あるいは採集した民謡) に、*Röschen auf der Heide* という題を付しているが、詩中では、*Es sah ein Knab' ein Röslein steh'n/ das Röslein auf der Heiden* (第 1 連) と、*-n* のついた語を用いている (三浦 149, 第 2,3 連でも同じ)。これはおそらく、第 1~3 連でそれぞれ *Freuden* (不純韻)、*leiden, Leiden* と韻を踏むためである。

さて、*auf Erden, auf der Heiden* に関わる説明が長くなったが、いずれにせよ、作例 (1)(2) で見た *in der Spinnstub'n, unter dieser Sonnen* に見られる *-n* は、中高ドイツ語形を念頭に置いて付された語尾と判断される。男性・中性名詞単数 3 格の *-e* と比べれば、作例はきわめて少ないが、古典的な背景をもつ形態として、許容されているようである。

(*1) 中高ドイツ語において *erde* (*nhd.* *Erde*) は強・弱両様の変化形をもっていたようである。「この世で」の意では、*ûf erde, ûf erden, ûf der erden* という三様の熟語 — *ûf = auf* (*nhd.*) — が辞書に見られる (小 159)。

(*2) 逆に *linde* は今日なら *unter der Linde* だが、中高ドイツ語ではそれは弱変化名詞であるため (古賀 159)、*unter* (*mhd.* *under*) *der linden* のように *-n* がついた。小辞典は *linde* を強変化として

いるが (小 353)、これは誤植であろう。なお、an der heide は今日なら auf der Heide であろうか (an のこの意味は hinan などに残る)。

女性弱変化名詞単数 4 格の例 付随的に、先に「後述」とした、女性弱変化名詞の単数 4 格に -n がつく例をあげておく。

(7) Durch die Dämmerung der Tränen/ seh' ich ferne **Sonnen** steh'n, — (Tieck, *Sind es...*)

涙による薄明りを通じて、/ 私は遠方の太陽を見る、—

(8) Weiser stehen auf den Wegen, / ... und ich wand're sonder **Maßen**, / ohne Ruh', und suche Ruh'. (Müller, *Der Wegweiser*)

道しるべが道々に立っている、/ ... そして僕は節度なくさすらう、/ 安らぎはないのに安らぎを求めている。

前者 (7) の **Sonnen** についてはすでに見た。これが複数形なら内容的には奇妙であるが、文法的には問題ない (*Sonne* は新高ドイツ語で女性弱変化名詞)。ただし単数形であっても、中高ドイツ語の名残として理解可能である。中高ドイツ語 *sunne* (*nhd.* *Sonne*) の単数 4 格は、*sunnen* あるいは *sonnen* と判断されるからである (相良① 21-2, 古賀 286)。

一方、(8) に出る **Maßen** はどのような意味か。*Maß* (はかり・物差し) は男性名詞であり、**Maßen** という形は複数 3 格しかありえないが、ここで **Maßen** は、*sonder* (=ohne) の後に置かれている以上 4 格である。これは実は、*Masse* (大量・多数) という女性弱変化名詞の単数 4 格である。これも新高ドイツ語なら -en にはならないが、中高ドイツ語 *masse* の名残としてなら許容されるであろう (その意味では **Maßen** ではなく **Massen** と記す方がよい; なお女性弱変化名詞でも抽象名詞では -n をとらないという前掲の注に記した古賀の説明 (104 頁) とはずれるが、ここでは問わないでおく)。

③男性・中性名詞単数に見られる -e, -en

以上、①②では単数 3 格名詞 (一部 4 格名詞) の後綴り -e, -n にふれたが、他の格においても、男性・中性名詞に -e, -en という後綴りが見られることがある。

ただしあらかじめ記せば、本項③で扱う単語は厳密には同じカテゴリーに属するとは言えない。例えば最初に扱う *Fels* と *Felsen* は、同語源の単語とはいえ、異なる単語として認知されているのに対し、例えば後にとり上げる *Herz* と *Herze* について見ると、後者は前者の別形と見なされるだろうからである。

したがってこれらは、本来別項目で扱うべきではあるが、章節・項目立てが煩瑣にならないよう、便宜的に③の題の下にひとまとめにした。

• **Felsen** <*Fels* (岩・岩盤) 男性単数 2 格

(1) Und wie des **Felsen**/ urartes Erz/ ewig derselbe/ bleibet mein Schmerz. (Rellstab, *Aufenthalt*)

岩壁の / 太古の鉱石のように、/ 僕の苦しみは / 永遠に続く。

一般に **Felsen** の 2 格は **Felsens** だが (*), (1) で用いられた **Felsen** は、同意味の雅語体である *Fels* (別単語) の 2 格だという。

韻律および脚韻 (奇数行は脚韻を踏まない) の都合上は、**Felsen** でも **Felsens** でもよいはずだが、にもかかわらず詩人があえて雅語形を選んだのは、それがかもし出す雰囲気を重んじたということ

なのだろうか。男性・中性名詞の場合、2格を機械的に表示する -s が付くのは、文法偏重の散文的な味気なさを感じるが、弱変化名詞はそれから自由であることで、ある種のやわらかさを感じられるように思える。あるいは *Felsens* を採用した場合に、弱音末尾の子音とはいえ *des Felsens unarteg...* と s 音が連続するのを避けたのであろうか。残念だが、その事情は分からない。

なお *Fels* にはもう一つの意味と語形変化がある。*Felsen* と *Fels* が別単語だと判断した理由の一つがこれである (→149 頁)。

(*) -en で終わる男性・中性名詞の 2 格の語尾は -ens である (中島 74, z.B. *Gartens*)。

• **Funken = Funke (火花) 男性単数 1 格**

(2) *Freude, schöner Götterfunken, / Tochter aus Elysium...* (Schiller, *An die Freude*)

喜びよ, 美しい神の火花よ, / 楽園の娘よ ...

Funken-Funke は語形変化の類似性からして、*Felsen-Fels* と異なり、別単語とは判断しにくい。例えば独和大も、*Felsen-Fels* の場合のように意味等を別個に記述するようなことはせずに、見出し語 '*Funken*' では '=Funke' と記して処理している。その意味で、*Funken* は *Funke* に -n がついてできた形であると判断されているように思われる。

小林松次郎氏によれば、ドイツ語には、「e に終る古い形態の外に en に終る新しい形をもつ名詞」があるという (小林 56)。例えば *Gedanke* 「思想」, *Glaube* 「信仰」, *Name* 「名前」, *Schade* 「損害」, *Schatte* 「影」など (いずれも男性名詞) がそうである。これらは、同じ名詞の異なる形態と判断されている。そして *Funke* もこの種類の名詞に属するという (同前)。

ただしこれらの単語のうち、-e 形と -en 形のどちらが正式であると母語話者に見なされているかは、語源問題とは別問題である。例えば上に列挙した 5 例のうち、後 2 者は、*Schaden*, *Schatten* が正式な形と見なされているようである (独和大による)。

この種の単語への注意は不可欠である。私は市民講座でシラーの *An die Freude* をずっと読んできたが、そこに *Götterfunken* (呼格 = 1 格) の形が出る *Funken* について何度か質問をうけた。一般の辞書には *Funken* までは載っていないのである。

(3) *Und blaue Funken brennen / an jedem Blatt und Reis, / und rote Lichter rennen / im irren, wirren Kreis;* (Heine, *Aus alten Märchen...*)

どの葉にも小枝にも / 青い火花が燃え, / 赤い光が, / 騒ぎ狂った仲間たちのうちを走っている .

-e, -en の語尾を持つ名詞群のうちに、*Friede-Frieden* 「平和」も数え入れなければならないが、これについては「語の縮小」で扱う (→150 頁)。

• **Gemüte/ Geschicke/ Glücke < Gemüt, Geschick, Glück (心, 運命, 幸運) 中性単数 1, 4 格**

集合名詞を作る *Ge-* が語幹に付いてきた単語 (中性名詞) では、後綴りとして -e を付ける場合と付けない場合がある (語幹が名詞だったものの例をあげれば、*Gebirge*, *Gelände*; *Gemüt*, *Geschick*, *Glück* 等)。

だが、一般に後者のように -e をつけないのが普通の単語でも、-e を付して使われる場合がある。

(4) ...und [Träume] mit ihrer Himmelskunde / selig durchs **Gemüte** zieh'n! (Wesendonck, *Träume*)

...そして〔夢は〕その天の知らせとともに、/ 幸福にも、心を通して流れる！

(5) Wohl, ich weiß es, arme Pflanze;/ ein **Geschicke** teilen wir, (Wesendonck, *Im Treibhaus*)

なるほど私は知っている、哀れな植物よ；/ 私たちは運命を分かち合っている、

Gemüte も Geschicke も、詩の基調となる詩脚――に納めるために選ばれたものであろうが、これを可能とした要因は中高ドイツ語である。第1章にも記したが (155 頁)、Gemüt は中高ドイツ語では gemüete もしくは gemuote であり (小 213) (*)、また (5)Geschick のそれは geschicke であった (*Duden*)。

もつとも、集合名詞の造語法から言えば、一般に Ge-e はよく見られる音型である (桜井 65)。詩人といえども、語彙の一部となったとはいえ、この種の集合名詞の語源に通暁しているわけではおそらくなく、むしろこの造語法から -e のついた語形を選んだのではないかと思われる。

(6) Und dieses ist das **Glücke**,/ daß durch ein hohes **Gunstgeschicke**/ zwei Seelen einen Schmuck erlanget, (anonym, *Und dieses ist...*)

これは幸運だ、/ 恩寵という高貴な運命を通して / 二つの魂が一つの宝を得るとは、

Glück はもともとと同じ造語法によって生まれた単語のようであるが、(6) は Glücke という形が使われた例を示している。これも中高ドイツ語に由来しており、それは gelücke あるいは glücke であった (→ 過去分詞以外の ge- ないし Ge- については 89 頁)。(6) は、18 世紀初頭以前のもものと判断されるが (これはバッハの『結婚カンタータ』の下になった詩の一部である)、それ以降も少なくない詩人によって、Glücke が用いられていたようである。その詩人のうちには、ティーク、ヘルダーリン、ゲーテなどの名前も見られる (*Grimm* 'glück')。

なお、第1章で中性名詞単数1格に -e がつく例にふれ、「中高ドイツ語 あるいは方言由来でなければ、詩語として詩人の間で流通していた言葉なのであろう」と書いたが (155 頁)、少々分析が足りなかった。「詩人の間で流通していた」としても、それには通時的および共時的な根拠があるのであって、前者であればそれはやはり中高ドイツ語に、また後者であれば中高ドイツ語の影響が比較的よくのこる方言に、見出される。

(*) ただし gemüete, gemuote の基礎語である muot (*nhd.* Mut) は、「広く精神状態・能力」などを意味したのであって、「勇気」Mut の意ではないとされる (小 395)。今日の Gemüt の意味は、これに由来するのであろう。muot が Mut になる過程で多様な精神状態・能力などがそぎ落とされたのは、それらを示す各種概念の、したがって各種語彙・表現の成長と相即しているのかもしれない。Bewußtsein「意識」、Einbildungsgraft「想像力」、Empfindung「感覚」、Gefühl「感情」、Sinnlichkeit「感性」、Urteilstkraft「判断力」、Vernunft「理性」、Verstand「悟性」、Wahrnehmung「知覚」、Wille「意志」等 (Kant ①)。

・ Herze = Herz (心) 中性単数 1,4 格

Herz は詩にしばしば登場する言葉だが、他に 1,4 格で Herze という形が使われることがある。

(7) Wo ein treues **Herze**/ in Liebe vergeht,/ **da welken** die Lilien/ auf jedem Beet. (Müller, *Der Müller...*)

誠実な心が / 愛に消えると、/ どの苗床のユリも / しおれてしまう。

中高ドイツ語に弱変化名詞として herze, herz の両形があった事実 (小 274,725) が、この背景と

なったと思われる。今日 **Herze** を、**Herz** の別形の位置づけでだが見出し語として掲載している辞書があることからすれば（大, 相良, 岩波）、**Herze** も文芸において（大では「雅」, 相良・岩波では「詩」と注記される）あるていど使われていたと判断される。

この **Herze-Herz** も、**Gemüte-Gemüt**, **Geschicke-Geschick**, **Glücke-Glück** も、前述の **Felsens-Felsen**, **Funken-Funke** の場合とちがい、音節数が異なる。それゆえ第一義的には韻律の都合によっていずれかの語が選択されたと思われる。次の例では、**Herze**, **Herz** の両形が出る。

- (8) Nun, armes **Herze**, sei nicht bang! / nun muß sich alles, alles wenden. / ... Nun, armes **Herz**, vergiß der Qual! ... (Uhland, *Frühlingsglaube*)

あわれなお前, 不安になるな! / 今すべてが, すべてがおのずと変わる. / ... あわれなお前, 苦しみを忘れよ!

- (9) Und Sorge, daß dein **Herze** glüht / und Liebe hegt und Liebe trägt, / solange ihm noch ein ander **Herz** / in Liebe warm entgegenschlägt. (Freilichrath, *O, Lieb...*)

お前の心が燃えるように気づかいなさい / そして愛を抱き, 愛を育てるように, / 他の心が, お前の心と / 愛のうちに暖かく鼓動している限り.

いずれも、韻律の都合が語彙を決定した様子が、よく分かる例である。

だがこうした例ではない場合には、**Herze** が中高ドイツ語由来であることでもしだされる、多少とも古風で奥ゆかしい印象が、重視されたのであろう。そうでなくても、強音による単音節の後に弱音の語尾が着くことで得られる柔らかな印象に、意味が見出されたのかもしれない。例えば次の例のように（もっともここでも韻律や押韻が語を選ぶ要因として当然はたらいはいるが）。

- (10) Lieb Liebchen, leg's Händchen aufs **Herze** mein;— (Heine, *Lieb Liebchen*)

愛しい人よ, / 手を僕の心においておくれ;—

- (11) Ihr Tage des Lenzes / mit Rosen geschmückt, / wo ich die Geliebte / ans **Herze** gedrückt!

(Rellstab, *Herbst*)

汝ら青春の日々は / バラによって飾られている, / 私が恋人を / 抱きしめたその青春の日々は!

④人称代名詞 1,2 人称単数 2 格——mein, dein 等

詩において、代名詞に関わる特異な格変化の例は見当たらないが、ほとんど唯一の例外は——これ自体、規範文法の範囲内のことである——先に「(2) 曲用」(102 頁) の冒頭で記した人称代名詞 2 格の場合である。

人称代名詞の 2 格は、1 人称では *meiner*, 2 人称では *deiner*, 3 人称では *seiner*, *seiner*, *ihrer* (単数) である。

- (1) Mein Leben will ich nur zum Geschäfte / von seiner Liebe von heut' an machen. / Ich denke **seiner**, mir blutet das Herz. (Willemer, *Liebeslied*)

私の人生を私は, 今日から / ただ彼の愛の / 仕事場としたい. / 私は彼を思い, 私の心は血をながす.

だが詩では、中高ドイツ語に由来する *mein*, *dein*; *sein(m.)*, *sein(n.)*——中高ドイツ語形は *mîn*, *dîn*; *sîn(m.)*, *sîn(n.)*——を用いることが少なくない。中高ドイツ語ではこれが本来の 2 格だったようだが、新高ドイツ語では、複数形の *unser*, *euer*, *ihrer(Ihrer)* にあわせる形で、*meiner* 以下の形ができたのだという（古賀 64）。

韻律の関係で、2 音節語の *meiner* 等より 1 音節語 *mein* 等が適切な場合などに、それは用いられ

るようである。

(2) Ich bin **dein**,/ Liebchen **fein**,/ denke **mein**! (Honold, *Liebesbriefchen*)

優しい恋人よ、/私は貴方のもの、/私のことを想って!

(3) Ich denke **dein**, wenn mir der Sonne Schimmer/ vom Meere strahlt;/ ich denke **dein**,
wenn sich des Mondes Flimmer/ in Quellen malt. (Goethe, *Nähe des Geliebten*)

私はあなたを想う、太陽のかすかな光が / 海からさしこむときに、/ 私はあなたを想う、月のきらめく輝きが / 泉に姿を描くときに。

前者の (2) は 2 hebig の各詩行で dein, mein が脚韻を踏んでいるが、後者の (3) では、dein は脚韻には関係していない (ただし奇数行同士で中間韻を踏んではいる)。けれども、それにもかかわらず短縮形を用いることで、詩人は韻律上の効果をねらっていると私は感じる。行末の場合に限らないが、文脈を deiner という弱勢終止よりも、dein という強勢終始ので終わらせた方が (この点では前項の Herz の場合とは違った印象をもつ)、言葉の力がより強く出るように私には思われる。もちろんそれは詩の内容も関係するのだが。

vergessen, gedenken 2 格支配の動詞としてよく詩で用いられる単語は、他にもある。

(4) Die Klänge schleichen der Schönsten/ sacht in den Traum **hinein**./ Sie schaut den blonden Geliebten/ und lispelt: "Vergiß nicht **mein**!" (Kugler, *Ständchen*)

その調べは [一番] かわいい子の / 夢にこっそりと入りこむ、/ かわいい子はブロンドの恋人を見やり、/ そしてつぶやく、「私を忘れないで!」と。

(5) .../dann lispelt als ein Traumgesicht/ ihr zu: Vergiß, vergiß **mein** nicht! (Müller, *Des Müllers Blumen*)

... すると夢の幻影としてささやくだろう、/お前たち [=水車屋の花] は、「私を忘れないで、忘れないで」と!

もちろんここで mein を用いたのは、ワスレナグサ Vergißmeinnicht を連想されるためである。

前者の (4) では、脚韻の都合上 (hinein と押韻する)、花の名とは語順がちがってしまったが、先の (2) の ich bin dein/ denke mein! と同様に、強勢終止によってともに上昇的な気分 (山口 21) をかもし出すとはいえ、nicht よりは mein に強調を置いたのもかえって味わいがある。一般の言い方をズラした点でも、新鮮さを感じる。

2 格支配の動詞として最後に gedanken の例をあげる。これも詩ではよく用いられる。

(6) Es flüstern und rauschen die Wogen/ wohl über ihr stilles Haus./ Es ruft eine Stimme:

"Gedenke **mein**!/ bei stiller Nacht im Vollmondschein!/ Gedenke **mein**!" (Lorenz, *Lorelei*)

波がざわめきささやいている / 彼女 [=ローレライ] の静かな家を越えて、/ ある声が叫ぶ:「私を思い出して! / 静かな夜に満月の光のうちで!私を思い出して!」

念のため言えば、Hochdeutsch では 2 格を目的語とする動詞は減っている。かつての et.² denken は an et.⁴ denken と、同 et.² vergessen は et.⁴ vergessen と表現するのが普通である。だが gedenken は相変わらず 2 格支配の動詞として用いられるようである。

⑤変化語尾を欠く形容詞 — 主に中性単数 1・4 格 (まれに男性 / 女性単数 1・4 格)

第 1 章で音韻論の観点からふれたように、詩では、中性名詞 1・4 格につく形容詞の変化語尾が省略されることがある (143-4 頁)。いやむしろこれは非常に多いと言うべきである。共時的には、限

られた音節によって詩文を構成するために、1音節でも減らす必要が往々にして生ずるからであるが、一方通時的には、これは、中高ドイツ語以前には「付加語としてはあらゆる性の単数1格及び中性〔単数〕1格・4格は不変化の形」をとることができたという事実^(相良② 209-10, 強調杉田)に由来する。

この用法は詩にかぎったことではないが、ドイツ詩理解のために必要な知識であるため、ここでとり上げる。

以下の(1)は、後者(中性単数1・4格)の例である。前記のように、この種の省略は非常に多い。前者(男性/女性の単数1格)の例は後者と比べてかなりまれだが、(2)として紹介する。

(1) Des Verräters **feindlich** Lauschen/ fürchte, Holde, nicht. (Rellstab, *Ständchen*)

告げ口屋がいじわるく聞き耳をたてても、/ 愛しい人、こわがらないで。

(2) ...und [der Elf] ist als wie ein **trunken** Mann,/ sein Schläflein war nicht voll getan,... (Mörike, *Elfenlied*)

...〔妖精は〕酔っぱらいのようであり、/ ひと寝入りもろくにできなかった、...

後者(2)では、詩人にとって韻律的に変化語尾を不要と見なす事情——そうしたものがあつたとして——は不明だが(変化語尾を付けても *trunken*→*trunk'ner* のように音節数は同じに保てるし、押韻のつごうを考慮する必要もないようである)、通時的にはやはり、相良氏が言う中高ドイツ語以前からの前記の事情に関係すると判断される(*trunken*の意味に関しては「語の縮小」について論ずる際にふれる→132頁)。

詩の例ではないが、慣用句として知られている *ein gut Vater* (相良② 332)なども、同じ事情に由来すると判断される。他に相良守峯氏は、古高ドイツ語について次のような例をあげている(相良② 210)。以下、(=)内は変化語尾を伴う本来の形であり、ダッシュの右は古高ドイツ語の各単語に該当する新高ドイツ語である。

• *blint man* (= *blintêr man*) — *blint* = *blind*, *man* = *Mann*

• *blint magad* (= *blintiu magad*) — *magad* = *Magd*

• *blint kind* (= *blintaꝯ kind*) — *kind* = *Kind*

相良氏の前記記述のうち中性単数1・4格については多様な名詞の例が見られるが、男性/女性1格の場合には、私が見た限り総じて人(擬人化された存在を含め)、なかでも親族呼称の場合などに用いられる傾向が強いように感じられる。

民謡でも次のような作例が見られる。直後に、他の男性名詞に対して変化語尾を伴う同じ形容詞(*wahrer*)が使われているところからすれば、変化語尾の有無は詩脚のつごうで決められた部分もあるのだろうか。

(3) **Wahr Mensch** und **wahrer Gott**,/ hilft uns aus allem Leide... (Volkslied, *Es ist...*)

真の人間と真の神よ、/ われらをあらゆる苦しみから救いたまえ...

以上は前置された形容詞についての事情である。後置された形容詞は、限られた場合を除き変化語尾はとらない(第1章 125,158頁;→第3章統語論)。

なお、第1章で事情が不明なままだった *zum bräutlich Licht* (Rellstab, *Liebesbotschaft*) という表現(148頁)については、現時点でも十分な説明はできないが、中性単数3格でも形容詞の変化語尾が略される例と見なしうるようである。

2) 複数形の利用 / 独自の複数形

屈折接辞、なかでも屈折接尾辞の例として、名詞の複数形を作る接尾辞をあげなければならない。ドイツ語名詞の複数形にはいくつものパターンがあるが、時に詩人は実際のそれとは異なる形の複数形を用いることがある。最大の事情は押韻のつごうであろうが、韻律のつごうもこれに加わる。複数形をめぐるのは、いくつかの使用類型がある。以下、次の3つに分けて考察する。

①複数形が一般にはないとされる、あるいはあると解されていても普通は使わないとされる単語であるにもかかわらず、詩人がそれを用いる場合、

②単語に複数形がいくつかあり、そのうちある複数形の利用頻度が高く他はあまり使われないのに、詩人が後者を用いる場合、

③詩人が自ら独自の複数形を作り出す場合、である。

①一般には使用されない複数形

以下で取りあげるのは、いずれも、自然への関心（そこには自然への畏怖も含まれる）を鮮明にしたロマン派の詩で好まれることばであるが、辞典ではこれらについて、あるいは「複数形なし」等と記され（例えば後述する *Gram* (ア)、あるいは複数形が明示されていても、語の意味ごとに「ふつうは単数で〔用いる〕」、「複数なし」等と注記されている（例えばここで扱う *Luft* (大・ア)）。にもかかわらず、詩ではしばしばその複数形が用いられる。

・ *Düfte* < *Duft* (芳香) ・ *Lüfte* < *Luft* (空気・微風)

例えば、物質名詞であるのに、複数形の *Lüfte* は *Düfte* と同様に非常に好まれる。

(1) *Daß der Ostwind Düfte/ hauchet in die Lüfte,/ dadurch tut er kund,/ daß du hier gewesen.* (Rückert, *Daß sie hier gewesen*) (*1)

東風は、芳香を / 空中へと漂わせることで / 知らせてくれる、/ あなたここにいたことを。

(2) *Säuselnde Lüfte wehend so mild, / blumiger Düfte atmend erfüllt...!* (Rellstab, *Frühlingssehnsucht*) (*2)

さらさら流れる空気がとてもまろやかに吹き、/ 花々の芳香で息をしつつ満たされ...!

Duft と *Luft*、複数形の *Düfte* と *Lüfte* は、押韻のためにしばしば対で用いられる。それは (1) では明瞭だが、(2) ではむしろ中間韻 (第1章 122 頁) を踏むために用いられている。そして空気・微風とそれに乗って漂う芳香とは、ロマン派詩人にとって不可欠の題材である (→ 第2節詩語のうち「*Duft*」「*Luft*」)。

民謡においても *Lüfte* を見ることがある。

(3) *Wohlauf ihr klein Waldvögelein,/ die ihr in Lüften schwebt,/ stimmt an, lobt Gott den Herren mein,/ singt all, die Stimm' erhebt;* (Volkslied, *Kinderlieder*)

さあ、空を飛ぶ / お前たち小さな森の鳥たちよ、/ 歌っておくれ、わが主たる神をたたえておくれ、/ みなで歌い、その声をあげておくれ、

ここでは、詩脚 (Trochäus) 上は *Luft* より *Lüften* の方がつごうがよい。schwebt の前に何ら

かの非分離前綴りをおけば Luft も不可能ではないが、そうした作為よりも Lüften の利用が作者にとって自然だったのであろう。

なお、まれに Däfte の代わりに Dufte という複数形が使われることがある (→150 頁)。

(*1) 引用 (1) は daß で始まるが、3 行目の da- がこれを受ける。4 行目の daß... は直前の kund tun の目的節である。

(*2) 2 行目の blumiger Däfte は難解である。形式的には複数 2 格だが、これは「方法の状況」を表わす 2 格 (桜井 427) と判断される。つまりこの詩行は、「さらさら流れる空気」が「花のような芳香」で満たされて息をしつつ云々、といった意味であって、あえて言えば blumiger Däfte には具格 Instrumentalis 的な意味が付与されているように思われる。具格は、形態は異なるが古高ドイツ語に見られた (ポーレンツ 58, 高橋 101-2)。

・ Gräme(n) < Gram (苦しみ)

(4) O Augen blau, warum habt ihr mich angeblickt?/ Nun hab' ich ewig Leid und **Grämen!**

(G.Mahler, *Die zwei blauen Augen...*)

青い目よ、なぜお前は僕をじっと見たのか?/いま僕は絶え間なく、苦しみと悩みに襲われる!

Grämen は Gram の複数形と判断されるが、同複数形はふつう辞書に記されない。そればかりか、複数形はないと記した辞書さえある (ア)。だが詩人は、複数形として Gräme (強変化第 2 の場合) ないし Grämen (混合変化の場合) を想定して用いているようである (s. 桜井 70-1)。あるいはこれは動詞 grämen (悲しませる) の名詞化ともとれるが、他動詞としてのその意味を思えば、やはり Gram の複数形ととる方が無難と思われる。

ひょっとするとこれは、詩人 (音楽家のマーラー) の母語に近いザクセン方言かヴィーン方言かもしれない。これが方言であることを示唆するのは次の民謡であるが、残念だがどの地域の民謡かは不明である。出典はアルニムらによる *Des Knaben Wunderhorn* である。

(5) O du, allerschönste Zier,/ Scheiden, das bring **Grämen**. (Volkslied, *Lebwohl*)

ああ、この上なく美しい少女よ、/別れはなんとつらいことか。

クラウディウスの有名な次の詩 (全 8 詩節のうち第 7 詩節) にも Grämen が登場するが、韻律のできばえ・語選択のたくみさ (一ノ瀬 16-8) 等を考慮すると、ここでは押韻のつごうが大きな意味を持っていたと判断される。

(6) Wollst endlich sonder **Grämen!** aus dieser Welt uns **nehmen!** durch einen sanften Tod!

(Claudius, *Der Mond...*)

汝はついに苦しみなく / この世から私たちを連れ去ろうとするのか / 穏やかな死を通じて!

次行に出る nehmen が——実は先の (4) の場合もそうである——と同様に、Grämen と押韻する。ただし前者の幹母音は [ɛ:], 後者のそれは [é:] であって、厳密にはここでの韻は不純韻である。

・ Lunen < Luna (月)

外来語由来の Luna (→ 第 2 節外来語「・Luna」) の場合は事情は少し複雑である。

(7) O komm jetzt, wo **Lunen!** noch Wolken umzieh'n,/ laß durch die **Lagunen!** Geliebte, uns flieh'n! (Moore, *Venezianisches Gondellied*)

ああ、今来ておくれ、月を / まだ雲がおおっている時に、 / 干潟を通過して / ねえ、遠くに行ってしまうおうよ！

Luna はローマ神話における月の女神である。それが転じて「月」を意味する場合がある。その場合には複数形はないとされるが（ア 'Luna'）、ここで詩の訳者（この詩は Freiligrath による翻訳詩である）はあえて複数形を用いている。

一応その複数形は Lunen とされているが、luna はもともとイタリア語もしくはラテン語であり、その複数があるとしたら、それぞれ lune, lūnās である（ラテン語では対格 = 4 格、というのは (7) で「月」は 4 格だからである；イタリア語には格はない）。

なのに訳者がそれを使わなかったのは、何より押韻のつごうからである。Lunen は第 3 行の Lagunen（干潟）と押韻するが、奇妙なことだが月について複数形を用い、かつそれを Lunen とした結果なのである（それぞれの単数形 Luna, Lagune では押韻できない）。(*)

もちろん訳者は、根拠なく Lunen という語形を選んだのではない。おそらく、古典語由来の単語の複数形は——原語の複数形が用いられることがあるとはいえ——Museum-Museen「博物館」、Thema-Themen「主題」に見るように、語尾 -en をとることが比較的多いという事情（中島 72）によると判断される。

(*) ちなみに Moore の英語原文では、月を複数形で表すという不自然な操作をせずに、moon と lagoon が押韻する。

②一般的に使われるのとは異なる複数形

以上のように、詩では、そもそもない、もしくはあったとしてもあまり使われないとされる複数形が用いられるだけでなく、一般的に用いられるのとは異なる、しかも使用頻度の低い複数形が登場することがある。

・ Lande = Länder < Land (国・土地)

独和大は、雅語では Lande が Land の複数形として用いられると記す（複数形は一般には Länder）。また小辞典ながら岩波(*)にもこれが記載されている（変化形は Lande は強変化第 2 型、Länder は同第 3 型である）。実際、この複数形は詩において時おり見られる。

(1) Und meine Seele spannte/ weit ihre Flügel aus,/ flog durch die stillen **Lande**,/ als flöge sie nach Haus. (Eichendorff, *Mondnacht*)

そして私の魂は / その翼を遠くへと広げ、 / 人知れぬ国々を飛んだ、 / あたかも故郷へ飛ぶかのごとくに。

(2) Froh erleb' er [=Franz, der Kaiser] seiner **Lande**, / seiner Völker höchsten Flor! / Seh' sie, Eins durch Bruder**bande**, / ragen allen andern vor! (Haschka, *Gott erhalte...*)

皇帝フランツが、おのれの国々の、 / おのれの民の最高の繁栄を見ますように！ / 兄弟のごとき団結で統一したわれらの国々・民が、 / あらゆる他の国・民族に立ち優るのを見ますように！

Lande は Länder と同様に 2 音節語である。その意味では違いがないのに詩人があえて Lande を用いたのは、基本的にはやはり押韻のためと考えられる。Lande は (1) では spannte と、(2) では、この後に出る Bruder**bande** と押韻する（ただし前者は半韻である。(1) を含むアイヒェンドルフの詩には、他にも **Himmel-Brütenschimmer** という半韻が現れる）。しかも、(2) において Lande, Bruder**bande** が出る奇数行は、弱勢韻を踏むことが期待されている。

逆に1音節語を要するために、LandeをLand'として用いた例もある。この手の省略はLänderの場合には不可能である。

(3) ...zierlicher schreibt Liebchens liebe Hand,/ schreibt ein Brieflein mir in ferne Land'.

(Mörrike, *Jägerslied*)

... 恋人の手は〔鳥よりも〕もっと愛らしく書く、/手紙を私に、遠くの国々へと。

ここで(1)~(3)のいずれでもLandeを「国々」と訳したが、独和大でによれば、「(地形の観点から見た)土地;地方,地帯」の意味で用いられていると判断される。独和大は、これは雅語としてのLandがもつ意味であり、その複数形はLandeであると明記する(例えばdurch die Lande ziehen「方々の土地を旅して回る」)。

ただし(2)ではその意味のLandを、国家の意のLandに重ねあわせている部分がある。ここで国家の意のLandが複数なのは奇妙に見えるかもしれないが、この詩が神聖ローマ帝国皇帝に対する賛歌として書かれた18世紀末、同帝国は多数の領邦国家Landより成っていた。

複数形Landeの由来は不明である。中高ドイツ語では,lant (*nhd.* Land; 以下同じ)の複数1,4格はlantおよびlender (Länder)とされている(小335)。だがGrimmによれば、16世紀頃まで生きていた複数形lantの代わりに、「男性名詞に似せて形づくられたlandeが〔その後〕発達した」のだという(*Grimm* 'Land')。例えば、強変化の男性名詞stein (Stein)の複数1,4格steine (Steine)、同tag (Tag)のtage (Tage)のようにである(古賀9)。

なお、Länderが副詞の形で用いられることがある。例えば次のように。

(4) [Du=der Mond] wallst länderein und länderaus,/ und bist doch, wo du bist, zu Haus.

(Hölty, *Der Wanderer an den Mond*)

〔君=月は〕あちこちの国に入り国から出て歩む、/でも君は、どこにしようが家にいる〔=君がいるところが君の家だ〕

(*) 岩波独和は、前に出たgeuß, schleußtの場合もそうだったが(21頁)、小辞典でありながら中高ドイツ語まで踏まえた編集方針が取られていたようである。これに比べ最近の独和辞典は、大辞典でもなければ、古い(といっても新高ドイツ語の)文献を読むようにはできていないようである。大学での第2外国語に対する問題意識が弱体化していないか。

• Rosse = Rösser < Roß (乗馬馬)

Roß [rɔs]の場合は少々事情が異なる。一般にRoßは詩語としては乗馬馬を意味するが、これと比較されるべきは一般の共通ドイツ語Hochdeutschでの用法ではなく、南部・オーストリア・スイス方言でのそれである。そこではRoßは、Pferdつまり馬一般(馬車馬,農村での力役用の馬)を意味する(→第2節「方言」中の「・Roß」)。

(6) Ade! du muntre,du fröhliche Stadt, ade!/ Schon scharret mein Rößlein mit lustigen Fuß;

Rellstab, *Abschied*)

さらば!元気な陽気な街よ,さらば!僕の馬は陽気な脚でとうに〔地を〕かいた;

ここでは、Roßを詩人は乗馬馬の意味で使っている。問題はその複数形だが、Roßの詩語としての複数形と同方言としてのそれとは異なる。前者ではRosseが、後者ではRösserが使われるようである。もっとも後者の例を私は見たことがない。それゆえ、前者をあげるにとどめる。

(7) Es binden die drei Ritter/ die Rosse unten an,/ und klettern immer weiter/ zum Felsen

auch hinan. (Brentano, *Zu Bacharach*)

3人の騎士も / 馬を下につないで、 / どんどん登って行った / その岩山を目指して。

(8) O sieh, was tummeln sich für schöne Knaben/ dort an dem Uferrand auf mut'gen **Rosen**, / weithin glänzend wie die Sonnenstrahlen; (Lǐ-Bái 李白, *Von der Schönheit*)

おお見よ、どんな美男がはしゃぎまわっているか、 / 陽光のように遠くまで輝いて、 / 勇敢な馬に乗ってそこ水辺で;

現実には、詩において馬が登場した場合、特に乗馬馬とされなくてもたいてい乗馬馬が念頭に置かれている。だから、RoßはPferdで代用しうる。次の作例に見られるように、文脈上それは明らかである。

(9) Er stieg vom **Pferd** und reichte ihm den Trunk/ des Abschieds dar. Er fragte ihn, wohin er führe... (Wáng-Weí 王維, *Der Abschied*)

彼は馬を降り、馬に別れの飲み水を与えた / 彼は問う、どこへ行くのかと ...

それでも詩人がRoßを使うのは、おそらくそれに「(血筋のいい) 馬」(独和大) というニュアンスが感じられるからであろうか。引用はひかえるが、Eichendorff, *Waldgespräch* では「ローレイ」の馬、Fontane, *Tom, der Rheimer* では妖精の女王の馬、Percy, *Edward* では王子エドワードの馬、Shakespeare, *Ständchen* ではアポロンの馬、Tieck, *Keinen hat es...* ではプロヴァンス伯領の王子ペーターの馬、等々である。

そしてScott, *Jäger, ruhe...* では、次のように修飾語を付けてあえてその血筋の良さを誇っている。

(10) Schlaf, nicht quäl es deine Seele, / daß dein e'dles **Roß** erlag. (*ebd.*)

眠れ、お前の魂を苦しめるな、 / お前の血筋のいい馬が斃(たお)れたからといって。

結局のところ、乗馬馬以外の馬が(ほとんど)登場しないという事実は、詩人が意図せずして置いた自らの政治的な位置についての問いを、読者に投げかけているかもしれない。ハイネのような、時代の流れに積極的に身を託した詩人もいたであろうが、そうではなく己の狭い個人的な世界に閉じこもった詩人が多かったのであろう。

• Weibe = Weiber < Weib (女性)

(11) Mein Trost ob allen **Weiben**, / dein tu' ich ewig **bleiben**. (Volkslied, *Innsbruck...*) (*)

あらゆる女性にまさる私の慰め、 / 私は永遠にお前 [=インスブルック] のものだ。

この作例を出すのがよいかどうかは、判断に迷う。一般にこの詩はVolksliedと解されており、また15世紀の古謡が元になっているために、特殊と見なされる可能性があるからである(*)。とはいえ、一つの作例として知っておく価値はある。

新高ドイツ語におけるWeibの複数形はWeiberだが、ここで詩人はおそらく次行のbleibenとの押韻のためにWeibenの形を用いた。この背景もまた中高ドイツ語である。中高ドイツ語では、Weibはwipであり、その複数3格(obは3格支配である)はwibenであると判断される(相良①19, 古賀31)。(11)のWeibenは今日でこそ奇妙だが、中高ドイツ語形がそのまま採用されたのであろう。時代的に見ても、十分にそれが可能だったと判断される。

この詩は新高ドイツ語に翻訳して歌われているが、今まで見た各種の例と同様に、この箇所でのみ、押韻を示すために古形がそのまま残されたと判断される。

なお後に、新高ドイツ語の *Weiber* につながる *wiber* も複数形として用いられたというが（古賀 293）、実際は *-er* をとらないことが多かったようである（同 34）。したがってこの場合も、3 格は *wib[er]en=wiben* となったはずである。

(*）これは、H. イーザク（1450 頃 -1517）の付曲で知られている。第 1 詩行の *ob* は 3 格支配で *über* の意である。これは今日ではスイス方言として残ると言われるが（大 ‘ob’）、Hochdeutsch には 1 音節の代替語がないためそのまま歌われている。

③ 詩人独自の複数形：-s 型 / -(変音)e 型

詩人が、独自の複数形を用いる場合がある。もちろん時代の曲用 *Deklination* 法を前提にした上でのことであり、読者はおおまかに複数形と想像できるが、曲用の由来がはっきりしない場合もある。あるいは以下には、②の「一般に使われるのとは異なる複数形」に分類できる例もあるかもしれない。

・ -s 型複数形 (Kuckucks)

ドイツ語名詞において複数形を作るパターンは多様だが、変音 *Umlaut* せずに、語末に *-s* をつけるタイプがある。このタイプの複数形は主に英語などから入った外来語に多いようだが（中島 72）、そうではない単語について詩人が *-s* 型の複数形を用いることがある。

例えば *Kuckuck*（カッコウ）(*1)。本来の複数形は *Kuckucke* だが、次のように *-s* を用いた例が見られる。

(1) *Bring auch viel Nachtigallen/ und schöne **Kuckucks** mit!* (Overbeck, *Sehnsucht...*)

いっしょに連れてきて、たくさんのナイチンゲールと / かわいいカッコウも！

この詩の詩脚は *Trochäus*— である。それは時に軽強音節 *leichte Hebung*（山口 38）を含むとはいえ、かなり厳格である。そこで本来の *Kuckucke* を使うと一時的に *Daktyrus*— になってしまうことを、詩人は避けたのであろうが、*Kuckucks* の由来は不明である。*Grimm* を含む大型の辞典をひもといても、見出し語とさえなっていないため、なかなか事情が突き止められないが、*Kuckuck* は、*-e* 型の複数形をもつとはいえ（ただしこれがいつ定着したかは不明）、多くの外来語のように（塩谷① 69-71）、複数形にするには *-s* を付ければよいと見なされたのだろうか。

独和大によれば、実際 *Kuckuck* はラテン語の *cucūlus* に由来するという。外来語といってもかなりドイツ語化しているが（むしろ借用語である）、そのまま *-s* をつけることが（も）詩人には自然なことだったのだろう、と判断しておきたい。

あるいはこれは、方言なのだろうか。関連文献からは、事項そのものではないとしても、背景となったかもしれない事情は見えてくる。田中泰三氏によれば、低地ドイツ語、特にメークレンブルク（ハンブルクの東方）、フリースラント（ユトランド半島南西部～オランダ北西部）では、*-el*, *-er*, *-en* に終わる名詞の複数を *-s* とするという（田中① 22）。(1) を書いた詩人 Overbeck は、まさにそのフリースラントに属するリュューベックで生まれ、リュューベックで没している。*Kuckuck* の複数形が *Kuckucks* とされた事実とは、まだ開きが大きいだが、多かれ少なかれこの種の事情が関係しているであろうと想像する。(*2)

(*1) *Kuckuck* が普通の綴りとされているようだが、アルニムらの *Des Knaben Wunderhorn*

では、Kukuk という綴りも見える (Volkslied, *Ablösung*; 須永 74, 122)。

(*2) 原稿書きの終盤の段階で、意外なことに、*Oxford* (独英辞典) の見出し語 'Kuckuck' には、'Kuckuck *der*; Kuckucks, Kuckuke' (= Kuckuck は男性名詞; 複数は Kuckucks, Kuckuke) という記述があることを知った。私が見た独辞典・独和辞典、文法書 (和書) には一切 Kuckucks にふれた記述はなかっただけに半信半疑ではあるが、今後、より丁寧に辞典・文法書類に当たってみたい。

・-(変音)e型複数形 (Häupte)

Haus - Häuser, Wort - Wörter などのように、複数形に -(変音)er 型をとる単語がある (強変化第 3)。Haupt も本来はそうである (pl. Häupter)。だが詩においては、複数形として -(変音)e 型 (Häupte, 強変化第 2) を用いた例がある (変化形の名称は桜井 71-2 による)。

押韻の実際を見てもうらうために、少々長いが引用する。

(2) Abends will ich schlafen geh'n,/ vierzehn Engel um mich steh'n:/ zwei zu meinen **Häup-**
ten,/ zwei zu meinen Füßen,/ zwei zu meiner Rechten,/ zwei zu meiner Linken,/ zweie,
die mich decken, /zweie, die mich wecken... (Wette, *Sandmännchen*...)

夜には寝ます,/ 14 人の天使が私の周りにいます:/ 2 人は頭に,/ 2 人は足に,/ 2 人は右手に,/ 2 人は左手に,/ 2 人の天使が毛布をかけてくれる,/ 2 人の天使が起してくれる ...

ここでは各詩行末を -en で一貫させる (*) 必要上、Haupt の複数にあえて -(変音)e 型に変えられている。だが、これにどのような根拠があったのだろうか。名詞の変化形は、Hochdeutsch の規範文法において、強変化、弱変化、混合変化をあわせて 6 種類にわけられているが (桜井 70 以下)、Häupte という変化形は、いずれにも属さない。

とすると、これはどこかの方言の影響の可能性もある。(2) は A. ヴェッテのもので、これを含むその台本に、従兄弟でヴァーグナーの弟子であるフンパーディングがつけたオペレッタが、有名な『ヘンゼルとグレーテル』であるが、どうやら (2) は、アルニムらによる *Des Knaben Wunderhorn* から取られたようである。それは「夜の祈り」*Abendgebet* と題された詩 (民謡) で、語順を含めて若干の違いはあるものの、(2) とほぼ同一である。

しかも、ここでは単に Häupte という複数形が使われただけでなく、zu Häupten という熟語も使われている。それは、対比的に出る zu Füßen からの類推によって形づくられたと思われる (相良② 139)。これを見ていると、規範文法にとらわれない、民衆の生活に根差したことばの自由さを感じさせられる。ここでは特に引かないが、*Des Knaben Wunderhorn* を始めとする民謡集を読んでいると、その種の自由・自在な表現に驚嘆させられる。

話を (2) に戻すが、足について複数形 (Füße) を用いるのはよいが、頭が複数形 (Häupte) なのは奇妙ではないか。だが、頭についてこのように複数形が使われているのは、「成句などにおいては単数で良いはずの場合 にも複数形を用いる習慣」があることによるようである (同前)。

なお詩では Häupte の使用例は少なくないのかもしれない。独和大では、Haupt の複数形は、詩語 (同辞典の用語では雅語 = 詩語) において Häupte であると注記される (大 'Haupt')。Grimm ではヴィーラントやゲーテの作例がいくつか紹介されている。

(*) 詩学では、詩行末尾で弱音 -en がくり返されても押韻とは見ない。とはいえ、一定のリズム感が

生まれるのは確かであろう（第1章125）。語頭韻でさえ、ある種の詩的感興を読者（聞き手）にもたらずであろう。**Dies deine Augen?/ Dies dein Mund?/ Hier deine Hand?/ Hier dein Herz?** (Wagner, *Isolde! Geliebte!*) 「これはあなたの目?/ これは君の口?/ これはあなたの手?/ これは君の心?」

* * *

本項で複数形を扱った最後に、1点についてふれる。

田中泰三氏によれば、他にも、複数で *-e* が脱落して (*1) 単数との区別がつかなくなる場合には、代わりに幹母音が変音（ウムラウト）するものや（*Ärm, Hunde, Pünkt, Täg*）、複数形として一般に他の語尾をとるのに南部（特にバイエルン）では *-er* をとるものがあるという（*Menscher*）(*2)。また *-el, -er* で終わる語に *-n* をつけることもあるという（*Fingern, Fenstern, Löffeln*）（田中①21-2）。

いずれの例にも出会ったことはないが、この種のことは視野のうちに入れておく価値はある。いずれも方言のケースであるとはいえ、共通語化し、ひいては一般の詩に応用される可能性がある。日本語でありかつ語尾の例だが、例えば「じゃん」という横浜方言や「ちゃった」という東京方言（柴田武101）が共通語化した場合のように。

(*1) 田中氏の着目は、あくまで具体的な方言の特性を考慮した上でのことであろう。本来はもっと多様な可能性があるのだと思うが、その種の研究は残念だが寡聞にして知らない。

(*2) *Menscher* は、一般には口語として中性名詞 *Mensch* 「あばずれ」の複数形として用いられるが（大'Mensch'）、ここでの *Menscher* はそれとは無関係である。

2, 派生 Derivation, Ableitung

派生とは、語幹への接辞の付加・除去等により新たな語（派生語）を形成する働きである。時には、目立った接辞がなくとも、母音変化によって（z.B. *trinken*→*trank*→*Trank*）、あるいはそれもないまま（z.B. *trinken*→*Trinken*）直接的に、派生語が作られる場合もある。また派生の意味を、異なる品詞が作られる場合に限定することもあるが、ここでは同品詞間での語形成も派生に含める。

以下、「2, 派生」での考察の視点は、「1, 屈折」の場合と同様に、言語共同体内における通時的・共時的な語形成であるよりは（もとよりそれを当然ふまえた上で）、詩人による詩作の際の語利用である。つまりここでも以下の課題は、詩人が用いる詩語・詩句に関する、派生 Derivation, Ableitungの観点から見た記述・考察と理解されたい。

その際、下位項目として、（1）異品詞間の派生および（2）同品詞間の派生に分けて論ずる。

（1）異品詞間の派生

ここで論ずるのは、1) 動詞の名詞化・形容詞化、2) 名詞の動詞化・形容詞化、そして3) 形容詞の名詞化・動詞化である。他の種類の派生もありうるが、重要なこの3種の派生に論題をしばる。

1) 動詞の名詞化・形容詞化

①動詞の名詞化 (名詞化動詞)

例えば英語では、動詞を名詞化させるために to 不定詞および動名詞が利用される。一方ドイツ語では、zu 不定詞が名詞として使われることはもちろんあるが、zu なし不定詞も一般に使われ、かつ名詞としての安定性を得て大文字化されることも多い。

先に引用した Denken もだが、Essen, Trinken, Leben, Sehnen, Sterben 等は皆この例である。そしてこれらは、安定的なドイツ語として辞書の見出し語にもなっている。Leben などは、もはや名詞化動詞 (*Duden* 'Leben') と意識できないほどに日常語化している。Sterben もそうである。

(1) Neig' dein blaß Gesicht, / **Sterben** trennt uns nicht. (Korngold, *Glück, das...*)

あなたの青ざめた顔がうつむいても、/ 死は私たちを割くことはできない。

こうした名詞化(法)には汎用性がある。どのような動詞でも、詩人が動詞をそのまま名詞として用いる傾向があるのは、おそらく一般の場合以上である。冠詞によって名詞としての機能が明示されることも多い。

(2) **Das Wandern** ist des Müllers Lust, / **das Wandern!** (Müller, *Das Wandern*)

さすらいは水車職人の快樂だ、さすらいは!

(3) Das ist **ein Flöten und Geigen**, / **Trompeten schmettern** darein; (Heine, *Das ist...*)

あれはフルートとバイオリン [の演奏] だ、/ トランペットもそれに加わり鳴り響いている;

(2) の冒頭に出る Wandern もまた、名詞と解される。ここでは定冠詞がつくために、その印象は強まっている。

(3) も同様だが、事情は若干複雑である。Flöten, Geigen は、flöten, geigen の名詞化動詞 (動詞の名詞化) である。後者はいずれも Flöte, Geige から造語された動詞だが、ここではその動詞があらためて名詞化されている。第 2 行の Trompeten は同じように造語された名詞化動詞とも読めるが、それを受ける schmettern という動詞からすれば、むしろ名詞の複数形と判断される。

名詞化動詞には、修飾語が付くことも多い。

(4) Heilig **Schweigen** / in Fichtenzweigen. (Mayrhofer, *Erlafsee*)

トウヒの枝には / 聖なる沈黙。

名詞化動詞は、名詞として 2~4 格でも用いられる。また前置詞を伴った名詞化動詞は、詩の表現力を高めている。

(5) Ach, ich bin **des Treibens** müde! (Goethe, *Der du von...*)

ああ、私は活動にあいた!

(6) Lächelnd nickte mir dir Kön'gin, / lächelnd, **im Vorüberreiten**,... (Heine, *Neue Liebe*)

妖精の女王が私に微笑みながら目くばせした、/ 頬笑みつつ、すばやく走り去りながら、...

後者は前綴りをもつ動詞による表現だが、不定詞に他の種類の規定語をつけた複合語、例えば im Blütentreiben 「花が穂を付けている時期に」(Rilke, *Bei dir...*) という表現も興味深い。規定語ではないが、現在分詞による修飾語句を伴い独自の味わいをもし出す in sehndem Blühen 「憧れに満ちて花を咲かせつつ」(Klingemann, *Frühlingslied*) といった例もある。これらは、凝縮された

言語芸術である詩に求められる簡潔な表現を可能にするばかりか、表現の可能性自体を広げるように思われる。

一方名詞化動詞は、動詞として目的語や状況語をもつこともできるはずだが、目的語や状況語をそれ自体の内にもつ表現を詩で見た記憶がない。形式的には、**Angstmachen, Teilnehmen; Schlafengehen** 等いろいろありうるが、一定以上の複雑な表現を、あえて名詞化動詞に託す必要はなさそうである。他の仕方（多くの場合 **zu** 不定詞句）でより明確に表現できるし、それもまた十分に詩的でありうる。

- (7) O wie [ich] mich sehne [danach] auszuruh'n,...die müden Augen zuzutun,...!! Und nichts zu forschen, nichts zu späh'n,/ und nur [davon] zu träumen leicht und lind,/ der Zeiten Wandel nicht zu seh'n,/ zum zweiten Mal ein Kind [zu sein]! (Groth, *O wüßt ich doch...*) (*)

ああ、私は... 休みたいと、... 疲れた目を閉じたいと願う!! 何物も探究せず、何物もうかがわずに、/ 時の変転を見ずに、/ 再度子どもであることを / ただ軽く優しく夢見ることだけを願う!

- (8) Und die Seele unbewacht/ will in freien Flügen schweben,/ um im Zauberkreis der Nacht/ tief und tausendfach zu leben. (Hesse, *Beim Schlafengehen*)

魂は監視されないまま / 自由な飛翔のうちへと漂い、/ 夜の魔法の輪のうちで、/ 深く、そして何千倍も生きようとする。

名詞化動詞を論ずればそれ自体興味深いが、形態論の枠を超えるのでこれ以上論じない。またここでは、**-ung** 等による動詞の派生は除外した。

- (*) 1行目の **sehne** は原文では **sehnet** である（私が調べた限りどの版を見ても例外はなかった）。

sehnte→**sehnt'**→**sehnet** という推移でこの形ができたと考えることはできるが、**sehnet** も **sehnte** も結果的に2音節語でありかつ同一の抑揚をもっており、あえてこの変形が必要とは思われない。それゆえ少々安易だが、現時点では **sehnet** は **sehne** の誤植だと見なしておきたい。なお例えばメリングなどは、**sehnet** を **sehne** と歌っているように聞こえる。

②動詞の形容詞化（副詞化を含む）

接尾辞を付す必要があるとはいえ、動詞の形容詞化も比較的容易である。分詞が形容詞ないし副詞として機能するからである。ドイツ語では過去分詞には述語的用法があり、それは完了形、受動態等で頻繁に使われるが、一方現在分詞は、「未来受動分詞」としての用法を含めて、ほとんど付加語的用法にかぎられているようである（例外は **reizend** のように形容詞化した現在分詞である）。(*)

用法は限られるとはいえ、現在分詞は詩ではよく用いられる。

- (8) **Rauschender** Strom,/ **brausender** Wald,/ **starrender** Fels/ mein Aufenthalt. (Rellstab, *Aufenthalt*)

どよめく嵐、/ うなる森、/ そびえたつ岩、/ [それが] 私のすみかだ。

分詞は、現在分詞・過去分詞のいずれも副詞的に使用されうるし、また「述語的付加語」（桜井337, 英文法で言う分詞構文）ともなりうる。後者は詩では、おそらく日常的な用法よりはるかに多く用いられる。

- (9) Du hebst mich **liebend** über mich,/ mein guter Geist, mein bess'res Ich! (Rückert, *Wid-*

mung)

君は僕を愛によって [=愛しながら] 僕以上に高める、/ 君は僕のよき魂、よりよき私!

(10) Ich ruhe still im hohen grünen Gras/ und sende lange meinen Blick nach oben,/ von
Grillen rings **umschwirrt** ohn' Unterlaß,/ von Himmelsbläue wundersam **umwoben**.

(Allmers, *Feldeinsamkeit*)

私は小高い緑の草地に静かに休み、/ その上にずっとまなざしを送る、/ コオロギが絶え間なく群がり、/ 妙な
青い空にとりまかれつつ。

現代詩を別とすれば、総じて詩人は、詩が散文的になること——例えば主語・述語の遺漏のない並びによって文をつくる、そうした文同士の関係を接続詞等を用いて明らかにしながらつなげる等——を嫌う傾向がある。(9)(10)のごとく述語的付加語(句)が、日常語と比べて比較的多く用いられるのは、そのためであろう。

(*) reizend ほどには形容詞化してないと思うが、Ach, wie **trügend** ist die Welt!/ Nein, ich kann ihr nicht vertrauen. 「ああ、世の中はなんて欺瞞的なのか! いや、私は世の中に信頼はおけない。」(Tieck, *Liebe kam...*) という詩行を見たことがある。

2) 名詞の動詞化・形容詞化

名詞の動詞化も形容詞化も、ドイツ語では比較的容易である。これらによる派生語は日常語としても用いられるが、詩では独特な単語が使われる。

①名詞の動詞化

本項の記述の元になったのは、主に「リート」と呼ばれる歌に用いられた詩である。それらは、リートが発展した時代的な経緯から、ロマン主義的な詩人の詩にもとづくものが多い。それだけに、独自の語彙の存在を指摘できる(→第2節語彙論)。先に複数形に関連して **Duft** をあげたが、この動詞形 **duften** をも同語彙に含ませることができる。

• duften (匂う) (< Duft)

いろいろなものが私たちの周囲で匂いうる。大地や水の匂いが、春の到来を告げてくれる。月が光を注ぐと同時に匂い立ち、人々に精気を与えてくれる。風がほのかな匂いを運び恋人の存在を知らせてくれる、等。

だが何より嗅覚を刺激するのは、花のようである。それ自体の匂いを私たちは感じるが、花々は、泉の音・流れ等と結びついて匂いを増すようである。「共通感覚」**Gemeinsinn** と呼びうる現象は、古くから論じられた。五感はそれぞれ機能的に分けられようとも、その1つが制約を受けると、その影響は他の感覚に及ぶことを、当時の自然哲学(科学)は明らかにした(Kant ③)。他面では、1つの感覚が他のそれとあいまって、感覚の複合体として事象を認識する、と。

例えば聴覚が嗅覚と手を携えて春の到来を受けとめる。

(1) ...sanft **rieselt** die Quelle,/ süß **duften** die Blumen. (Kind, *Hänflings Liebeswerben*)

... 泉は優しく音を立て、花々は甘く匂う。

(2) Rings schlummern die Blüten am rieselnden Bach/ und **duften** im Schlaf, nur die Liebe ist wach. (Schack, *Ständchen*)

あたりでは、さらさら音を立てる小川のそばで花がまどろみ、/ 眠りのうちに香り、愛だけが目覚めている。

人間にとって最も鋭敏な感覚である視覚が、嗅覚と手を携えて、春や花の美しさを実感させることも多い。先に、いろいろなものが私たちの周囲で匂いうるが、「月が光を注ぐと同時に匂い立ち、人々に精気を与えてくれる」、と記した。これはハイネが詩に書いたことである (Heine, *Sommerabend*; ただしここでは *duften* がではなく、*Goldner Mond.../ strahlt herunter, duftig labend.* と、形容詞 = 副詞が使われている)。月の光そのものが匂い立つというより、月の光が、人の嗅覚を周囲の匂いに対し鋭敏にするということなのであろう。

そのハイネは他の詩で、恋する女性の象徴としてハスの花を登場させ、その姿とその香りだかい匂いにふれている。ひときわ目立つ花の香りが実感されるのは、ハスの、象徴的な意味での姿態と振る舞いとがあいまった場合であろう。

(3) Der Mond, der ist ihr Buhle,/ er weckt sie mit seinem Licht,...Sie blüht und glüht und leuchtet/ und starret stumm in die Höh'/ Sie duftet und weinet und zittert/ vor Liebe und Liebesweh. (Heine, *Lotusblume*)

月はハスの恋人、/ 月はその光でハスの花を目覚めさせる、... ハスは花咲き、燃え、輝き、/ そして黙って高みを見上げる、/ 香りを放ち、涙を流し、そして震える / 愛と愛の悲しみのために。

18~9 世紀は、西洋人の東洋に対する関心が高まった時期である (サイド 277)。たくさんの作曲家に靈感を与えたりュッケルトは高名な東洋学者だったし、シューベルトの付曲で知られる W. ミュラーの息子は、インド学の大家マックス・ミュラーとなった。そしてこの時期にゲーテはペルシャに関心を寄せ、ハイネはインドに憧れた。

(4) Dort liegt ein rotblühender Garten/ im stillen Mondenschein;/ Die Lotosblumen erwarten/ ihr trautes Schwesterlein. (Heine, *Auf Flügeln...*)

そこ [=ガンジス川沿いの最も美しい場所] には、静かな月明かりのなかで / 赤く花咲く庭がある、/ 蓮の花たちが / その愛する妹を待ち受ける。

この 2 つの詩 (3)(4) でハイネが詩に歌ったハスの花 (妙法蓮華経の蓮華) は、仏教における悟りの象徴である。色彩といい形といい香りといい、あまりに美しいのに、それが泥の中から咲く事実、仏教者は、汚辱に満ちた世での悟りに通じる象徴性を見出したのであろう。だがハイネは (3) では、神秘的な東洋の神秘的なハスの花のうちに、恋する女性の象徴を見る。ハスの花がもつ目が覚めるほどの色彩と美しさと匂いのすばらしさが、ハイネの靈感を刺激したようである。

一方、西洋人が数ある花のうち最も魅せられたものの一つは、バラである。その香りもまた、人々を魅了する (→ 第 2 節詩語「Rose」)。

(5) Denkt an die Rose nur, wie klein sie ist,/ und duftet doch so lieblich, wie ihr wißt. (Heyse, *Auch kleine Dinge...*)

バラのことを考えて、それがどんなにちっぽけでも、/ バラは周知のように、とても気持ちよく香ることを。

• **schimmern** (ほのかに輝く) (< Schimmer)

私がリートによって接してきた主に 19 世紀の詩では、*duften* 以上の頻度で *schimmern* が用い

られているようである。それは、マティソン (*Adelaide*)、A. シュレーゲル (*Der Schmetterling*) から、ハイネ (*Sommerabend*)、デーメル (*Wiegenliedchen*) にまで及んでいる。ロマン派詩人は自然への深い関心とともに、感覚によって与えられる自然の表象を大事にした。嗅覚を通じて与えられるそれ以上に、視覚・聴覚を通じて与えられるそれを。

多くの場合、schimmern は夜の薄明りの光景を示すために用いられるようである。純然たる暗闇は恐れを与えるが、夕焼けや月のほのかな輝きは闇の怖さを追い払うのみか、人の心に、漠たる憧れの念を起させるようである。

- (6) Mitten im Schimmer der spiegelnden Wellen/ gleitet wie Schwäne der wankende Kahn/
Ach, auf der Freude sanftschimmernden Wellen/ gleitet die Seele dahin wie der Kahn;
(Stolberg, *Auf dem Wasser...*)

鏡のように輝く波のほのかな光のなか / 揺れる小舟が白鳥のようにすべる / ああ、喜びの穏やかに光る波の上を / 魂が小舟のようにすべり行く；

ここでは湖水での小舟が、同乗者との一体感をもりあげる装置となっている。だがこれをいやましにするのは、湖水を照らす夕焼けである。(6) では、schimmernd は波にかかる修飾語として使われているが、この後の詩節では、次のように、時間の翼にこの語が付されている。

- (7) Morgen entschwinde mit schimmerndem Flügel/ wieder wie gestern und heute die Zeit/
bis ich auf höherem strahlendem Flügel/ selber entschwinde der wechselnden Zeit. (*ebd.*)
時は明日も、ほやかに光る翼で / きのう今日と同じように再び消え失せるがよい / 私自らがより高い光輝く翼にのって、移ろう時から消えうせるまで。

時間と翼はしばしば結びつけられてきたが、時の神サトゥルヌスは翼のみか大釜をもつ(水之江26)。それは時が有する残酷さの象徴である。これに対比した時、ほやかに輝く翼(これはさらに「より高い輝く」strahlend 翼と記されている)は時の残酷さとは無縁であり、詩人は時の流れを肯定的に描いている。それを象徴的に示すのが翼の輝きである。

月明かりについて schimmern が使われた美しく幻想的な詩は、ハイネのものである。ここでは妖精の姿が、月明かりによって輝くさまを歌っている。

- (8) Dorten, an dem Bach alleine,/ badet sich die schöne Elfe;/ Arm und Nacken, weiß und
lieblich,/ schimmern in dem Mondenscheine. (Heine, *Sommerabend*)
小川のほとりで、ひとり / 美しい妖精が沐浴をしている / 白く愛らしい腕とうなじが、 / 月明かりのうちでほやかに輝いている。

schimmern から逆成された rückgebildet 基礎語を、花について使う詩人もいる。

- (9) Es war, als hätt' der Himmel/ die Erde still geküßt,/ daß sie im Blütenschimmer von ihm
nur träumen müßt'. (Eichendorff, *Mondnacht*)
それはまるで空が大地に / そっと口づけをしたかのようだった / 大地がほのかな花の光で / 空のことだけを夢見るようにと。

後者の(9)では、花そのものが薄明りを発するというより(そう想像するのも楽しいが)、月明かりが反射した花々の輝く白さが、詩人の目をとらえるのであろう。前項で、ハスと月(それぞれ女性・男性名詞)とが向き合うハイネの詩を見たが、ここでは大地と空(同じく女性・男性名詞)が向き合っている。ここでは、月の発する薄明りが両者を媒介する。夜、月に対して存在感の薄い空と、む

しろ黒々と見える大地とを、花の白さが媒介することで初めて、叙情的なムードが立ち上るのである。

schimmern は夜とのつながりを持った言葉と思われるが、陽光の下の情景にも使われることがある。次の詩の主題は蝶である。人と対比して見えてくる、蝶の自由さに詩人はふれる。

(10) Es [=Tanzen] macht keine Mühe,/ und reizende Farben/ **schimmern** hier im Grünen.
(A.Schlegel, *Der Schmetterling*)

それ [=踊り] は何ら骨折りではないし、魅力的な色が、ここ緑野でほのかにきらめいている。

• **tönen** (響く) (< Ton)

tönen は、物、鳥、人等の多様な存在が音を発する様を示す。それは心地よい音の場合もちろんあるが、そうではない場合（悲しみをさそう音、人を不安にする音、時に不気味な音）もある。

恋の歌につきもののナイチンゲールの声は前者に属すだろう。幼児をやさしく寝かせる子守歌も同様である。

(11) Du **tönest** mir mit deiner süßen Kehle/ die Liebe wach; (Hölty, *An die Nachtigall*)

お前 [=ナイチンゲール] は、甘い喉で、僕の愛を呼び覚ます；

(12) Schlafe in der Flaumen Schoße,/ noch **umtönt** dich lauter Liebeston. (anonym, *Wiegenlied*)

お休み、羽毛のふとこで、大きな愛の調べがまだお前の周りで響き [=お前を包み] ます。

だが、悲しい響きにも接しなければならぬのが、世の常である。別れの響きはその典型例であろう。乗り物での別れの場合には、しばしば「汽笛」がその響きとなる。若い人にはなかなか理解されないかもしれないが、少なくとも一昔前まで、長きにわたってそうであった。

(13) Nun läuft das Schiff schon aus, es/ **tönt** das Nebelhorn so tief./ Wenn du gut/ angekommen, schreib mir einen Brief! (倉田香月, *Der Abschied*)

いま、船はすでに出て行き、霧の汽笛が深くひびいています。あなたが無事に、着いたなら、私に手紙を下さい！ (今鳴る汽笛は、出船の合図、無事で着いたら、便りをくりやれ)

これは有名な「出船」である。杉山長谷夫によるその哀愁に満ちたメロディは、単純なものだけに、涙をさそう。

しばしの別れもだが、愛する者との永遠の別れは、ことに若くして亡くなった人との別れは、どんなに悲しいだろう。宮沢賢治は、妹を亡くした慟哭（どうこく）の思いを詩に綴っていたが、私は次の詩を読むと、場面は異なるとはいえ、その「永訣の朝」を思い出す。ここで詩人は、風の音にさえ死者の声を聴く。

(14) Ein weiß Gewand/ bedeckt das Bild,/ in zarter Hand/ eine Lilie quillt.// In Geisterhauch/ sie zu mir **spricht**:...// “Und all die Lust,/ die ich empfind’/ nicht deine Brust/ kennt, Menschenkind!...” (Bruchmann, *Schwestergruß*)

白い装いが、その姿を隠し [=おおい]、細い手のうちに、一本のユリが浮き上がる。// 霊の息吹のうちで、妹は私に語る：...// 「私を感じる、全ての喜びを、人の子よ、あなたの心は、知らないのです!...」

シューベルトの友人ブルッフマンは若くして妹を亡くしたが、彼は妹が幸福に死んだ——死によって「全ての喜び」 *all die Lust* を手にした——と信じようとしている。宮沢賢治が、妹は天に往生

したと信じようとしたのと同様に。

妹が語り終え姿が消えた後に、ブルッフマンはこう書いている。

(15) So **tönt** die Luft,/so saust der Wind./ Zu den Sternen **ruft**/ das Himmelskind, (*ebd.*)

空気はそう響き/風はそう音を立てる./天の子が,/星に向かって[そう]叫んでいる,

死んだ妹は、(14)に見るように己の喜びを兄に語ったが、ブルッフマンは、妹はさらに空気となり風となってその思いを響かせ **tönen**、「天の子」となって星に向かってそれを叫ぶ **rufen**、という白昼夢を見る。

その後ブルッフマンは、妹は天の星そのものとなって自分を見守る、と信ずるようになったようである。妹への思いをこめて改めて書いた詩では、波の戯れにふれた上で、それを魂の波に置きかえて語る。

(16) Wenn der Mensch zum See geworden, /in der Seele Wogenspiele/ fallen aus des Himmels Pforten/ Sterne, ach, gar viele, viele. (Bruchmann, *Am See*)

人が海になったなら,/魂の波の戯れと[なったなら],/星が天国の門から落ちてくる,/ああ,とても多くの,多くの星が.

この詩は比較的単純で、詩としてはむしろ凡庸なものと思われるが、(14)~(15)をふまえると、妹への追慕の詩として、心を打つものがある。(15)で「天国の子」=妹は星に向かって叫んでいたが、(16)では天国で星に姿を変え、兄の下に降りてくるのである。末尾に‘**gar viele, viele**’とある。この詩のすべてはこの句にかかっている。これにシューベルトが当てた旋律は、何度聞いても美しい。ここで歌い手の技量がためされる(個人的な好みを書けば、私はマティアス・ゲルネとイアン・ポストリッジの歌が秀逸だと思う)。

(14)~(15)*Schwestergruß* がブルッフマンの「永訣の朝」だとすれば、(16)*Am See* は「白い鳥」である。「白い鳥」は宮沢賢治の詩である。彼は妹の死語、いく編かの詩をのぞいて詩作の手をおくが、それでもふと思いついて書いた詩がある。どこかで2羽の白鳥を見たようなのである。その時賢治は、それが妹と自分であると信じる。

「二疋の大きな白い鳥が/鋭くかなしく啼きかはしながら/しめつた朝の日光を飛んでみる/それはわたくしのいもうとだ/死んだわたくしのいもうとだ/兄が来たので/あんなにかなしく啼いてみる」

これに童話「よだかの星」を合わせると、2羽の白鳥は空高くに飛んで星になる。

(17) In reiner Flamm'/ schwebt sie empor,/ ohne Schmerz und Harm,/ zu der Engel Chor.
(*ebd.*)

清らかな炎の内で/妹は高く漂う,/痛みも苦勞もなく,/天使の合唱へと.

②名詞の形容詞化(副詞化を含む)

・ **miniglich** = **minig** (愛すべき・愛情のこもった)

名詞を形容詞化する派生接尾辞はたくさん知られている(桜井 113 以下)。詩で問題になるのは、**-iglich** という形容詞化語尾である。

最初にドイツ語における副詞の歴史について簡単に記す。

ドイツ語では、多くの場合形容詞をそのまま副詞として用いるが、純然たる副詞もある。歴史的

に見れば、古高ドイツ語においては形容詞に *-o* を付けて副詞が作られ（高橋 49）、中高ドイツ語においては、この *-o* は母音推移によって *-e* となった（相良② 317）。新高ドイツ語にいたると、ほとんどの場合その *-e* が脱落し形容詞との区別がなくなった。

ところで中高ドイツ語においては、*-ec(nhd. -ig)*, *-er*, *-en* で終わる形容詞(*)には、*-e* をではなく *-liche(n)* を添えて副詞としたという。だから例えば *êwic* (同 *ewig*) にこれを付して、*êwicliche(n)* (同 *ewiglich*) という形の副詞ができあがることになる（相良② 317）。こうしてできた *-iglich* という語尾を持つ形容詞・副詞はなかなか興味深い（ただし後述するように、本項で扱う *minniglich* の場合は事情はもう少し複雑である）。

(*) 相良守峯氏は、*-er* で終わる形容詞としては *sicher* を、*-en* で終わる形容詞として *offen* をあげる。

その副詞形は、それぞれ *sicherliche(n)* (*nhd.* *sicherlich*)、*offenliche(n)* (同 *öffentlich*) である（相良② 317）。両者とも中高ドイツ語として造語されたと理解されるが、*Duden* によれば、両単語ともすでに古高ドイツ語において使われていた (*ahd.* *sichurlicho*, *offanlih*; *Duden* ‘*sicherlich*’ ‘*öffentlich*’)。その限り、相良氏の指摘と矛盾する部分があるが、いまはこれをおく。

語尾 *-iglich* をもつ単語 さて、*-iglich* という語尾を持つ単語として、*Minne* (恋) に由来する派生形容詞 *minniglich* (見出し語とするのは相良大, 独和大, *Wahrig*) をはじめ、いくつもの単語が知られているが（以下で順次とりあげる）、この奇妙な形は、詩以外では見られない（おそらく）からなのか、派生形容詞もしくは形容詞化語尾をあつかった文法書などでも、取り上げられていない (z.B. 桜井 113-20)。

(1) Traute, minnigliche Frau,/ wollest nimmer fliehen; (Hölty, *Das Minnelied*)

愛すべきいとしい方,/決して逃れようとしないで下さい;

一方、同じく *Minne* から発したに違いない *minnig* という単語が使われる場合もある。

(2) [Ich] bin euch gesinnt gar minnig, st! (Wette, *Sandmännchen...*)

私はお前たちをととても愛おしく思ってるよ,シー!

minnig は——後述する *wehmütig* と *wehmütiglich* の場合と類比的に——*minniglich* より程度の高い状態を意味する可能性がある。語尾 *-lich* は、語幹が形容詞の場合に、その形容詞が示す「性質、状態への接近」を表わす（桜井 119）。つまりそれは、「...しげな」「...がかった」「(楽しい)」「(悲しい)」に対して「(楽しい)げな」「(悲しい)げな」という場合の、また「(赤い)」に対して「(赤み)がかった」という場合の) とでも訳すべき含意があると考えられる。

ただし問題なのは——この点では先の *êwicliche(n)* とは異なる——、*minniglich* は、*minnig* に *-lich* (桜井 119) がついたのでなく、始めから *minniglich* の形でつかわれた可能性が高いという点である。相良大や岩波のように *minnig* と *minniglich* をともにのせ、同義だとしている辞書もあるが、他はそうではない。中辞典以上であれば *minniglich* をのせている辞書は少なくないが、*minnig* は独和大, *Duden*, *Wahrig* にも見えない。

実際中高ドイツ語として *minneclich* および *minnecliche(n)* は、しばしば使われている（後者は副詞）。一方 *Grimm* によれば、*minnig* の作例は極めてまれだという (*Grimm* があげるのは *Tieck* の 1 例のみ)。そしてそれを *minniglich* から逆に「模造された」*nachgebildet* ものと見なしたうえで、*minnig* は——*minniglich* が ‘*liebenswert*’ ‘好意的な’ の意であるの対して——、*Lexer* を引きつつ、‘*Liebe hegend*’ ‘愛情を抱いている’ の意であるとしている。

Grimm は共時的な意味にこだわりすぎているかもしれないが、こうして通時的に見れば、*minniglich* は直接 *Minne* を語幹とし、かつ中世騎士道下での宮廷恋愛 *Minne* の意味をこめて使われていたために、その意味はたしかに「好意的な」くらいの意味ととるべきかもしれない。宮廷恋愛にあっては、騎士は領主等の奥方を恋の対象としつつも、それは永遠に成就できない宿命を持っているからである。

つまり、(2) では、詩人は *minniglich* を避け、それよりも強い意味を意識して *minnig* (愛している) を用いたと解すべきだと思われる。(2) のことばは、劇中で眠りの精 *Sandmännchen* が幼い子どもたちに発する言葉だが、その愛情のこもった言い方からすれば、*minnig* の含みは明らかであると私には思われる。他面では、(2) に先立つ詩行に出る *innig* (引用では略) との押韻のために *minnig* が用いられたのかもしれないが、重要なのはむしろ上記の意味であろう。

・ **wehmütiglich = wehmütig** (物悲しい)

(3) Du siehest mich an **wehmütiglich**/ und schüttelst das blonde Köpfcchen; (Heine, *All-nächtlich...*)

君は僕を悲しげに見る、/そして金髪のを振る；

これは、*minniglich* 等からの類推に基づき詩人によって造語された単語のように思われる。語幹は *Wehmut* である。あるいはすでにそこから派生していた *wehmütig* か語幹だと言ってもよいかもしれない (形成順序は *minniglich* と逆に *-ig* 形が先である)。私が知るかぎり、利用頻度が低いのか、*Grimm* を含む大辞典にも見出し語として採用されないのみか、語幹である ‘*Wehmut*’ の記述中にも登場しない。

おまけにこれは4つもの音節より成る。抑揚は— — — — であるが、実際は2つめの強音は軽強程度に発音されるはずである。だがそのような扱いの面倒な単語を、なぜハイネは用いたのか？

関連して(3)に続く部分を見ると、その辺の事情が若干見えてくるように思われる。以下、続く部分を(3)とともに引用する。

(4) Du siehest mich an **wehmütiglich**/ und schüttelst das blonde Köpfcchen;/ Aus deinen Augen **schleichen sich**/ die **Perlentränentröpfchen**. (*ebd.*) (*)

君は僕を悲しげに見る、/そして金髪のを振る、/君の眼から、真珠のような涙の雫が、/ひそかに流れ落ちる。

追加部分は少々韻律が乱れている。この詩全体は民謡詩節よりなるが、*schleichen sich* の詩脚が — — | — であるのに対して、脚韻を踏む2行前の *wehmütiglich* は変則的な — — | — — (ただし *Zäsur* 後の — はむしろ軽強) であり、しかも脚韻の [iç] は、2行前と異なり最後の強音に置かれている。これでは一般には押韻とは見なされない。*wehmütiglich* の代わりに、あたりさわりなく *wehmütig* — — | — (*Zäsur* 後の — は同上) とすれば、何も問題はなかったはずだが、ハイネがあえて *wehmütiglich* を選んだ事情が理解できない。

あるいは、この場所での韻律の乱れこそが、詩文の内容とあいまって、詩人が意図したものだったのであろうか。

(*) 複合語はよく詩に登場するが、あまり長くなると詩的印象が減じる。ハイネがここで用いた *Perlentränentröpfchen* は3語 (縮小辞を考慮すれば4語の印象が強い) より成るが、内容的にはともあれ、詩に用いる複合語としてはぎりぎりの音節数に達していると思われる (6音節, 3強音)。

・ **wonniglich, wonnig** (気持ちのよい)

wonniglich は Wonne に由来する。これは、miniglich と異なり、また wehmütiglich と同様に、短縮形（仮にそう呼んでおく）の wonnig から造語されたものと判断される。だが、wonnig とは内包が若干異なる。

独和大によれば、wonnig には、Wonne 由来の雅語として「〔非常に〕喜ばしい・気持ちよい」といった意味と、一般的な「愛すべき・かわいい」といった意味があるとされる（アクセスでは後者のみを取り上げられている）。一方、wonniglich は前者を意味するという（大 'wonniglich'）。その限り、wonniglich は wonnig の意味を限定したと解しうる。

(5)...und die helle Freude zücket/ durch die Schwere, die mich drücket,/ **wonniglich** in meiner Brust. (Märike, *Verborgenheit*) (*)

... 明るい喜びが、/私を圧迫する重苦しさを通り抜けて、/私の胸を気持ちよくよぎる。

ここでは、独自のニュアンスをかもしだすことが、この語利用の第一目的であろうが、他の目的があるとすれば、それは多かれ少なかれ韻律上の問題を解消するためであろう（詩脚は Trochäus; wonniglich の -lich は軽強）。

なお wonniglich の下になった Wonne はそれ自体、独自の詩語である（→ 第 2 節詩語「・Wonne」）。

(*) ここで zücket(zückt) は、zucket(zuckt) の意である。メーリケは zucket に代えて中高ドイツ語を用いて zücket とした（小 715）。それは 2 行目の drücket と押韻する。

3) 形容詞の名詞化・動詞化

①形容詞の名詞化

動詞の名詞化と同様に、形容詞の名詞化も日常のドイツ語にふつうに見られる。

(1) Ich, Vogelfänger, bin bekannt/ bei **Alt** und **Jung** im ganzen Land. (Schikaneder, *Der Vogelfänger...*)

鳥さしの俺さまは、よく知られてる / 老いにも若きにも国中で。

ここでは形容詞を無語尾のまま名詞化しているが、形容詞や人称代名詞によって格を明示した例も多い。meine Liebe (meine Liebeste), mein Lieber などはその良い例であろう。

一方詩では、形容詞の、一般には名詞化しにくい意味を名詞化する場合や、その述語的用法から名詞を造り出す場合がある。詩がことばの芸術であり、ことばが、それがもつ可能性を最大限引き出そうとする姿勢とともに用いられるために、日常語としての用法を超えた試みがなされるさまが見てとれる。

(2) Herr! schicke, was du willt,/ ein **Liebes** oder **Leides**; (Mörrike, *Gebet*) (*)

主よ！汝が欲するものを送りましたまへ、/ 好ましいものであろうと、嫌なものであろうと；

(3) Wehe dem **fliehenden**,/ Welt hinaus **ziehenden**! (Rellstab, *In der Ferne*)

逃げ去る者に禍あれ、/ 世間を超えて移ろうものに！

前者の (2) に見る ein Liebes は lieb の付加語的な用法からの、[ein] Leides は — スイスドイツ語を別とすれば（大 'leid'） — ふつうは述語的にのみ用いられる（相良② 220）leid からの造語で

ある。これが ein Liebes と対になって使われているのがおもしろい（一方リルケは、ein Liebes だけを用いている。Rilke, *Bei dir...*）。

ところで、前掲「1) 動詞の名詞化・形容詞化」でとりあげたが、分詞は品詞としては動詞由来の形容詞である。このうち現在分詞には述語的用法が少なく、形容詞としての特質はかなり限定されるが過去分詞と同様に名詞化する例はめずらしくない（例えば die Reisenden 「旅行者」, der von daußen Kommende 「外から入ってきた男」；過去分詞については後述）。

だが (3) で引用した詩はいささか特異である。実験的とも言える手法で、名詞化された現在分詞を実に 18 回もつらねている。(3) につづく詩行は次のようである。仮に現在分詞を大文字化し名詞としての特質を強調したなら（まして先立つ名詞との複合語の形にしたらなおさら）、その不気味さは際立つであろう。

(4) Fremde durchmessenden,/ Heimat vergessenden,/ Mutterhaus hassenden,/ Freunde verlassenden,/ Folget kein Segen, ach,/ auf ihren Wegen nach. (*ebd.*)

外国ばかりを歩くものに、/ 故郷を忘れるものに、/ 母の家を憎むものに、/ 友人を捨てたものに、/ 何の祝福も、あ
あ、/ その歩く道で後に続かない。

(*) willt が du の定動詞として用いられているが、これは中高ドイツ語に由来する。willt は第 4 行（略）の quillt と押韻する。

不分明な過去分詞 現在分詞に比べると、過去分詞の使用例は多い。日常語でも同様である。だが日本語の母語話者には、過去分詞はなかなか分かりにくい。念のため、過去分詞の不分明になりがちな意味について記す。

(5) Auf dem Hügel sitz' ich, spähend/ in das blaue Nebelland,/ nach den fernen Triften sehend,/ wo ich dich, Geliebte, fand. (*Jeitteles, Auf dem Hügel sitz' ich*)

丘の上にぼくは座っている、/ 青い霧の大地をうかがいながら、/ ぼくが、ねえ君〔大好きな人〕、君に出会った、/ あの遠くの牧草地をながめながら。

Geliebte, Geliebter は、受動的意味を有する他動詞の過去分詞に由来する。(5)に限らず、詩によく出る単語である。例えばヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』のいわゆる「愛の二重唱」は、トリスタンによる '*Isolde, Geliebte!*' という叫びで始まる。だが、何度聞いても奇妙な感じを受ける。私たち日本人 (= 日本語を母語とする人) なら、「[私の] 愛する人」と言うべきところを、ドイツ語では「愛される人」と、あたかも他人 (ひと) ごとであるかのように表現するのだから。

さらに分かりにくいのは、再帰動詞の過去分詞の場合である。メーリケの詩 *Lied eines Verliebten* (恋する者の歌) で使われる verliebt が良い例である (詩中に 'verliebt' は出ないので引用はできない)。これは sich verlieben (ほれる, 恋をする) 由来の言葉であり、その過去分詞は「恋をしている」という、実質的に能動の意味を有する。民謡から一つ引用してみる。

(6) Keine Rose, keine Nelke/ kann brennen so schön,/ als wenn zwei verliebte Seelen,/ beieinander steh'n. (*Volkslied, Kein Feuer...*)

バラもナデシコも / 愛し合う二つの魂が / 寄り添っているときほど / 美しくは燃えることはできない。

ティークの有名な『長靴をはいた雄猫』 *Der gestiefelte Kater* の gestiefelt もそうである。これは Stiefel 「長靴」を語源とする sich stiefeln 「長靴をはく」という再帰動詞に由来する。

②形容詞の動詞化

動詞化は名詞からのものが多いが、形容詞もまた動詞化されることがある。そう多いとは言えないが、時に詩に登場する。例えば **grünen** (緑になる, 若芽・若葉を出す)、**blauen** (青くなる) 等。

(7) Die liebe Erde allüberall/ blüht auf im Lenz und **grünt** aufs neu! / Allüberall und ewig **blauen** licht die Fernen! (Wáng-Weí 王維, *Der Abschied*)

大地はいたるところで、青春のうちに花開き、新たに緑をなす! / いたるところで、そして永遠に、未来は明るく青く輝く!

他にも、色を示す形容詞を動詞化した単語がある。**bläuen**, **gelben**, **grauen**, **röten**, **schwärzen**, **weißen** など。たいてい自動詞だが、他動詞もしくは再帰動詞の(あるいは他動詞・再帰動詞の意味をかねている)場合もある。例えば **bläuen** は、(7)に出る **blauen** が自動詞であるのに対して他動詞である。

また形容詞を動詞化する前綴り **er-** が使われることもある。

(8) ...säuselt der Kalmus im **rötlichen** Schein;/...atmet die Seel' im **errötenden** Schein.
(Stolberg, *Auf dem Wasser...*)

... 菖蒲が薄赤い光の中でかすかに響き /... 魂は、赤く染める光のうちに呼吸する。

他に **trüben** 「曇らせる」、**welken** 「枯らす」や、自動詞化語尾である **er-** を用いた **erglänzen** 「輝く」、**erstarren** 「氷結する・凝固する」などにも、時々詩で出合うことがある。民謡ではより自由に使われているように思われる。

(2) 同品詞間の派生

本項を仮に「派生」と名づけたが、ドイツ語としての語の形成(例えば **trinken** に非分離前綴り **er-** が付いて **ertrinken** という語が形成される) (*1) を問題にするのではなく、特別な場合を除き既存の語彙群から、詩人が——**an sich** にせよ **für sich** にせよ——ある語(例えば **trinken**)を、いかにそれとは異なる語(例えば **ertrinken**)の意味をこめて用いるか、が主題である。

その場合、一般の派生の場合以上に、他の接辞の付加(語の拡大)のみかその省略(語の縮小)も重要になる——というより詩の本性上省略の方が一般的である——ため、以下、接頭辞ならびに接尾辞に注目して、語の拡大・縮小を論ずることとする。

「(1) 異品詞間の派生」では接尾辞が用いられたが、ここでは接尾辞のみならず(あるいはそれ以上に)接頭辞が関係する。それを省略するあるいは付加するという形で。接頭辞が付く場合と欠く場合とでは意味が異なるのが普通だが(その点で異品詞間の派生とは違いがある)、にもかかわらず詩人が——たいていの場合少なくとも韻律を考慮して——そこに類似した意味をこめる点を、ここで問題にしたい。この種の議論は、本来は意味論の一部とされるべきであろうが、以下では意味を語の形態に着眼して考察するため、本節で扱うことにする。

以下、個々の単語についての解釈の適否は問題となりうるが、全体として、詩では以下のような語の縮小・拡大がなされる点の理解が、詩を解釈する際に不可欠である点の指摘であると解していただきたい。(*2)

一般に言語学で派生と言う場合、以上のように、接頭辞・接尾辞等による他品詞の形成をさす。だが、同品詞による語形成をも派生ととらえる余地がドイツ語にはある。分離・非分離前綴りによって新たな単語（同一品詞の）を造ることができ、またそう頻度は高くはないとはいえ、語を他品詞に代える各種語尾（特に形容詞化・副詞化語尾、名詞化語尾）を同一品詞に対しても用いることができるからである（例えば *klug-klüglich*, *Zeit-Zeitung* などにそれは見られる）。

そして本項 (2) の冒頭に記したように、言語共同体内での通時的・共時的な語形成それ自体が問題なのではなく（それはドイツ語学の主題であり本稿の課題を超えている）、本節は、あくまで詩人によるそれらの語使用に関わる。

(*1) これは共時的（論理的）な理解であって、通時的に見て実際に単純形 *trinken* から複合形 *ertrinken* が形成されたかどうか（つまり単純系を基礎語、複合系を派生語と言えるかどうか）は、容易には分からない。だが本稿では詩人による語使用が問題であるため、ドイツ語におけるこの種の語形成の問題にはこだわらないことにする。

(*2) 私がここで縮小形と見なした基礎語もしくは語幹の意味が辞書等ではっきり記述されている場合もあるが、見落としがちな意味を確認するためにも、そうした語をも一部とりあげたことをお断りする。「見落としがち」というのは、もとより私個人の経験に基づく判断ではあるが、それを諒とせられたい。

1) 語の縮小

同一品詞間の派生について、しかも最初に問うべき語の縮小について、まずひとつの例を用いて説明する。例えば先に直説法 *tät* との関連で引用したゲーテの「トゥーレの王」――

(1) *Er sah ihn [=einen gold'nen Becher] stürzen, trinken/ und sinken tief ins Meer./ Die Augen täten ihm sinken,/ trank nie einen Tropfen mehr. (Goethe, *Es war ein König...*)*

王は、金の盃が落ち、おぼれ、/そして海深く沈むのを見た。/王の目は伏せられ、/[王は]もはや一滴をさえ飲まなかった。

この詩は、Trochäus (—) と Daktyrus (—) が混じるいわゆる民謡詩節よりなる。おそらく、グレートヒェンに民謡調の歌を歌わせることで、彼女が市井の堅実・素朴な女性であること、さらに (1) に登場する王の死を語ることで、前述のように (→98-9 頁)、グレートヒェンに待ち受ける運命をゲーテは暗示したのであろう。

ここでは、王が投げた杯が、海深く沈む前に ‘trinken’ すると書かれているが、trinken の意味を「飲む」ないしそれに近い、行為者の主体的な動作と解するかぎり、ゲーテの真意は理解されない。本来ここに置くべきは *ertrinken* であろう。それは、訳に示したように、むしろ受動的に「(水などを飲んで) おぼれる」という意味である。(*1)

だがゲーテはここを、‘stürzen, ertrinken’ つまり — — | — とするよりも、結果論だが、むしろ ‘stürzen, trinken’ つまり — | — とする方が良いと判断したようである（民謡詩節の場合でも、その都度の詩脚として Trochäus と Daktyrus のいずれを選ぶかに際し詩人としての感覚が働く）。この詩脚 (Trochäus) の連続を可能にしたのが、ertrinken の意で trinken を使うことである。

詩人はこのようにして、限られた音節よりなる詩行を、形態上縮小した単語で表現する場合があ

る。時には逆に形態上拡大した単語で表現する場合がある（→語の拡大, 153頁）。

縮小ないし拡大された語が有する意味は、一般に知られている場合もあるし（例えば後述する lassen←verlassen, überlassen; Sang←Gesang）、逆に詩人によって独自にこめられる場合もある（同 Wurf←Entwurf）。またその中間領域に属する場合もある。上の trinken は、最後の例に属すだろう（*2）。このことと関連するのか、アクセスでは trinken の「関連語」のうちに ertrinken が置かれている（ただしその意味までは記されず）。

意味に関わる限りこれは意味論で扱うべきテーマだが（→第4章意味論）、ここでは、意味の問題をあまり前面に出さずに、語の縮小——次項では語の拡大——を論ずる。その際、それぞれ接頭辞と接尾辞に着目する。

（*1）前記オックスフォード大学のドイツ詩サイト '*Oxford Lieder*' の訳では fill となっているが（→「接続法のように見える直説法の過去形」のうち tät の注, 99頁）、意味が曖昧である。おそらく trinken を原意に近いままにとり、杯が水を「飲む」と解し、その意味で杯が水を「満たす」fill としたのであろう。「語の縮小」等の問題を考えなければそれでもよいが、少々不自然である点は否めない。

（*2）第1章で「日本語詩での省略」についてふれ、そこで、「頬(ほ)につたふ / なみだのごはず……」という啄木の短歌を例にあげた（154頁）。ここで啄木は頬(ほほ、ほお)を示すのに「ほ」という言葉を使っている。これは一般的に使われた語ではなく、啄木による造語である。語源的に見て「ほほべた」（ほほのあたり）が「ほつべた」になり、さらに「ほっぺた」になったのは、一般的な言語使用のことだが、ここからあえて「ほほ」を指すために「ほ」という語を用いたのは啄木である。とはいえ啄木も完全に一般的な言語使用の枠組みを破ったのではない。やはり「ほ」は、「ほほべた」「ほつべた」「ほっぺた」等との類推から、ほほ間違いなく理解されうる語に属している。その限り、ここでの短縮は中間領域にあったといえる。

①接頭辞の省略による語の縮小

ドイツ語は総じて、例えば英語と比べて音節数が多い。そのためか、現代のドイツ語では音節数の少ない英語等の借用が多いというが（ポーレンツ 159-60）、詩ではそもそも少ない音節で思想や感情を表現する努力は、ずっとなされてきた。もちろん借用語を安易に用いるのではなく、むしろ固有のドイツ語に一定の工夫——言い換えをのぞけば接辞の省略等——をほどこすことで。

後述するように、接頭辞が省略の対象とされる傾向が目立つようである。もちろん、語末母音・eの省略など、機械的とも呼びうる操作を考えれば、接尾辞の省略が多いはずだが、語彙のレベルで言えば接頭辞の省略の方が多く思われる。（*）

言いかえれば語が短縮される場合、短縮の最大の手段となるのは前綴りの省略である。そもそもドイツ語において前綴りは基礎語に各種の意味を付与する。基礎語と派生語との間にかなりのずれが生じている場合もあるとはいえ、派生語は多かれ少なかれ基礎語の意味を含意している。

だから逆に、派生語において前綴りがこめた含意を、基礎語に担わせることも可能になる。表現において音節単位の制約を受ける詩人は、こうした意味の転移を、したがって基礎語ならびに派生語を最大限に利用する。

以下、動詞における分離・非分離前綴りの省略を具体的に記すが、各項の題として、等号「=」

の左に、詩人によって用いられた基礎語を、右に、詩人がその独自の意味—— () 内に表記——を基礎語にこめた、接頭辞をもつ派生語を記す。

なおここで等号を用いても、単語自体の意味が同一であるという意味ではない。詩人が基礎語にこめた意味が派生語のそれに近いことを示す、と理解されたい。

(*) これは一面では、多くの詩人らが各種接辞を付す等の試みを通じて多様なニュアンスの語を創造してきたドイツ語に対して、「疾風怒涛」*Sturm und Drang* 運動が与えた影響と考えられるかもしれない。18世紀末、この運動の担い手によって、「意味論的に希薄」な語は切りつめられる傾向が生まれたという。例えば *auf dem* は *aufm* のように縮約形で、また前綴りの例で言えば例えば *zerschmettern* が *zer-* を落として *schmettern* の形で (ポーレンツ 139)。これはドイツ語の歴史的な推移の一コマだが、その種の精神は詩人に反映したと考えられないか。詩は、散文と異なる方向性を有する文芸だからである。つまり詩は、最小限のことばで、かつ一定の内的なりズムを重視しつつ、思想・感情 (時に事態を) を表現する。前綴り等によりニュアンスを示すことも重要だが、しばしば詩文の流れによって意味をかもしだす。

a, 動詞

• **bergen** = **verbergen** (隠す)

(1) *Mein Sohn, was **birgst** du so bang dein Gesicht?* (Goethe, *Erlkönig*)

息子よ、なぜそんなに不安げに顔を隠すのか?

bergen は一般には「救出する」という意味であるが、他面ではこの語の古義から、「隠す... (隠して) 守る, かくまう」「含んで (秘めて) いる」(独和大) という、詩語としての固有の意味が形成されたのだろうと考えられる。古義とは *Duden* によれば、‘*einer Fluchtburg unterbringen*’ 「逃亡都市に収容する」という意味である。

ドイツには「[都市の] 空気は人を自由にする」という諺があるが、*Duden* に記された「逃亡都市」とは、中世期において、封建的な領主権力から独立した (たいていは市民=手工業者の) 都市のことであり、当時、農民は避難所 *Asyl* としての都市に逃げこんで一定の月日を経れば、封建権力といえども手出しができなかった、という歴史が知られている (羽仁 43)。

その意味で、農民を都市内に「かくま (い)」「隠す」こと、「秘めて」おくことは、「救出する」ことを意味する。そうした意味が *bergen* にこめられていると判断される。

(2) ***Birg**, o Veilchen, in deinem blauen Kelche,/ **birg** die Tränen der Wehmut, bis mein Liebchen/ diese Quelle besucht!* (Hölty, *An ein Veilchen*)

ああスマイルよ、お前の青いガクのうちに隠せ、/ 悲しみの涙を、私の恋人が / その水源を訪ねるまで隠せ!

• **danken** (jm. et(4) ~) = **verdanken** (jm. に et(4) を負う)

(3) *Du **hälfst** vom Tode mich zurück,/ auf immer **dank'** ich dir mein Leben;* (Goethe, *Rettung*)

きみは僕を死から救ってくれた、/ 僕は命を永久に君に負っている ;(*)

詩脚は *Trochäus* (—) である。この流れでは *verdanken* より *danken* がしっくりする。次もまた同様であろう。

(4) *Ihr **danket** Flammen euer Sein,/ ich geb' euch nun den Flammen wieder,...* (Baumberg,

Als Luise...

お前たちは、存在を炎に負っている。/ 私はお前たちを今、再び炎に与える、...

veranken の親称 2 人称単数現在 **verdankt** で、音節数は (4) に出る **danket** と同じである。その限りでは置き換え可能だが、**danket** が一音節の抑揚を持つのに対して **verdankt** のそれは逆の一音節である。主語と入れかえて **Verdankt ihr...** とすれば詩脚上の問題はなくなるが、特別な意味をかもし出す定動詞倒置は、避けられるなら避けた方がぶななのであろう。

(*) **hälft** を過去形で訳したが、これは文脈的に見て歴史的・物語的現在である。

• **erstehen = auferstehen** (復活する)

(5) Doch **erstehst** in alter Pracht,/ Glorie der düst'ren Welt,/ du, am Morgen neu erwacht,...!

(Wesendonck, *Schmerzen*)

だが、淡い世界の栄光よ、/ 朝、新たに目覚めて、/ お前は古い壮麗さのうちで復活する、...!

詩脚は Trochäus である (*). **erstehen** は一般には「購入する」(vt.) という意味だが、ここではこれが、それ自体詩語である **auferstehen** 「復活する」の代わりに使われている (例えばマーラーは交響曲第 2 番「復活」で、クロプシュトックの詩 *Auferstehen* を用いている)。大きな辞典には、詩でのこの種の用法を踏まえた意味がのる (例えば相良大、独和大)。

(*) ただし第 2 行の **Glorie** は、一音節 | 一音節 であっても実質的に一音節 | 一音節 と発音されるはずである。あるいは、ハイネが *Lilie* を *Lilje* としたように (第 1 章 139 頁)、**Glorie** も **Glorje** と解することも可能だった。なおこれに付曲したヴァーグナーは、**Glorie** に倍の音価を与えることで 4 拍子のリズムを維持した。

• **geben = vergeben** (許す)

(6) Möcht' es dieser [=Schöpfer, Erhalter] **geben**,/ und mein ganzes Leben/ wär...! (Mörike,

Fußreise)

創造者・保護者がこれを許してくれればいいのだが、/ そして私の全生涯は /... であってほしいものだ!

ここでは、大まかに見て佐々木庸一氏の解釈にしたがった (佐々木 215; ただし氏の解釈は **geben**=**erlauben** である)。詩脚は同前。第 2 行の冒頭 **und** は軽強でいどに読まれるはずである。

• **laden = einladen** (招く・誘う)

(7) Die frohen Freunden **laden** dich,/ O komm an uns're Brust! (Goethe, *Trost in Tränen*)

陽気な友達たちは君を誘っている、/ ああ僕らの胸においで!

laden は、詩語として **einladen** の意をもつとされている (大 'einladen')。詩脚は Trochäus。

• **lassen = verlassen** (放す・すてる)

(8) ...der im letzten Augenblicke/ sterbend nur dich von sich **läßt**; (Jacobi, *An Cloë*)

... それ [=僕の胸] は死にゆきつつ最後の瞬間にだけ / 君を放す [=それ以外は放さない] だろう;

(9) Ach, wie ist's möglich dann,/ daß ich dich **lassen** kann! (Volkslied, *Treue Liebe*)

ああ、僕が君を捨てることができるなんて、/ そんなことがどうして可能なのだろう!

一般に、各種分離・非分離動詞と元となる基礎語は多くの意味を有するが、lassen もその例にもれない。

相良守峯氏によれば、そもそも中高ドイツ語の lâzen (*nhd.* lassen), lân (その別形) は verlassen の意味をも含んでいた (相良① 47)。「インスブルックよさらば」*Innsbruck, ich muß dich lassen* は、イーザク Isaac の付曲で有名だが、ここでも lassen は verlassen の意味で用いられている (テキストは 15 世紀のものであり、初期新高ドイツ語と考えられる)。

なお、*Innsbruck...* の本文では、題と同じ詩行の lassen が次行の Straßen と押韻することになっているが、一般的にはありえない組み合わせである。この音韻のズレはおそらく、現代語に翻訳した結果であろう。中高ドイツ語の名残を有する原文では lâzen (*nhd.* lassen) と strâzen (同 Straßen) で、きれいな純粹韻だったはずである。

• lassen = überlassen (委ねる・まかせる)

同じく lassen は、überlassen の意味で用いられることもある。

(10) Ein jeder...laßt ihn [=Einsamen] seiner Pein.// Ja! laßt mich meiner Qual! (Goethe, *Wer sich...*) (*)

誰もが ... 彼 [=孤独な者] をその苦悩に委ねる [=さらす] // そうだ! [汝らは] 私を私の苦しみにさらせ!

これは、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に登場する豎琴ひきが、自らの過去に想いをはせつつ歌う歌だが、同じ豎琴ひきの他の歌には、非分離動詞 überlassen が同じ意味で用いられている。

(11) Ihr.../ dann überlaßt Ihr ihn [=den Armen] der Pein:/ denn alle Schuld rächt sich auf Erden. (Goethe, *Wer nie...*)

御身ら [=天的な諸力] は .../ そして彼 [=哀れな者] を苦悩にゆだねるのです:/ すべての罪は地上でその報いを受けるのですから。

lassen は、特に詩語としてというわけではないが、他にも hinterlassen, belassen 等の意で用いられる (大 'lassen')。

(*) 引用の際に ihn を「=Einsamen」と注記した。詩の本文にこの言葉は出てこないが、内容上そう理解するのが適切と判断した。

• mögen = vermögen (できる)

(12) Da quält' ich mich so manchen Tag,/ weil mir kein Lied gelingen mag, — (Seidl, *Sehnsucht*)

その時、私は何日も苦しんだ! どんな歌も私にはうまく歌えないだろうから、—

(13) Daß ich dich fassen möcht! in diesen Arm! (Goethe, *Ganymed*)

お前を、この腕へと / つかむことができるようにと!

独和大によれば、今日ではあまり見られないというが (▽印)、ここで詩人は mögen を中高ドイツ語での含意で、すなわち vermögen の意味 (大 'mögen') で用いている。もちろん mögen と vermögen とは統語法が異なる (後者は助動詞的に使われた場合に zu 不定詞をとる)。この意味は今日でもアレマン方言 (フライブルクを中心とする、スイス接するドイツ南西部地域の言語) に残るという (同

前)。

中高ドイツ語としてのその含みは、例えば 13 世紀の Minnesang として有名な「菩提樹の下で」*Under der linden* (Vogelweide) に見られる。

(14) ...dâ muget ir vinden/ schône beide/ gebrochen bluomen unde gras. (*ebd.*) (*)

...そこではきっと分かるでしょう / 花も芽も / ともにかなり折れている [=押しつぶされている] のが、

これを現代語に訳す際、次に見るように、1 行目の 2 人称複数現在親称の助動詞 *muget* (< *mügen* od. *mügen*; *nhd.* *mögen*) を *können* を用いて訳した例もある。

(15) ...da könnt ihr schön/ gebrochen finden/ [beide] Blumen und Gras. (現代語訳: Wikipedia 'Under der linden')

なお (13) の *möcht'* は、脚韻の必要から選ばれた語ではない。この 2 行はそれだけで独立した詩節を構成する。加えてこの詩は自由詩であり、結局 *mögen* を用いるか *vermögen* を用いるか、あるいは他の動詞を用いるかは、けっきょく詩人の直感にもとづいている。

(*) *ir* = *ihr* (*nhd.*; 以下同じ), *vinden* = *finden*, *schône* = *schön* (意味上は *vollständig*), *bluomen unde gras* = *Blumen und Gras* (*gras* は意味上は *Keim*)

- **tragen = ertragen** (耐える) → 「語の拡大」のうち「**ertragen = tragen** (担う)」(155-6 頁)
- **trinken = ertrinken** (おぼれる) → これについては「語の縮小」の導入部に記した (132 頁)

- **vertrauen = anvertrauen** (打ち明ける)

(16) Vertraust du dich doch sorglos, / täglich dem wilden Meer. (Heine, *Das Fischermädchen*)

心配せずに心中を打ち明けておくれ / 毎日、荒々しい海に向かって。

vertrauen は一般には、信頼する・信用するといった意味で使われるが、詩語として *anvertrauen* の意味で用いると注記した辞書もある (大 'vertrauen')。

この詩は *Trochäus* と *Daktyrus* の混じる民謡詩節よりなるが、上拍はおかれる場合とおかれなない場合がある。これをどのような語の並びにするかにもよるが、上拍を含めてわずか 7 音節——第 2 行のように上拍をおかなければわずか 6 音節——の詩行に 3 音節語 (不定詞ならば 4 音節語) が場を占めるのを、詩人は避けるのではないか。

そして内容的にも、*vertrauen* は *anvertrauen* の意味で用いられていると判断される。ただし、(16) に先立つ 2 詩行 *Leg an mein Herz dein Köpfchen/ und fürchte dich nicht zu sehr;* (*ebd.*) 「君の頭を僕の胸に置いておくれ / そんなに怖がらないで;」を考えると、(16) に見られる定動詞倒置 + *doch* を、「何しろ... だから」という、理由を表わす表現 (藤田 39-40) とすることもでき、その場合は *vertrauen* は通常の意味と解するのが自然であり、(16) は「だって、きみは毎日荒れた海に、/ 何の心配もせずに身を委ねているのだから」と読むことができる。

過去分詞を作る ge- の省略 過去分詞の *ge* が省略されることがある点は、その事情とともに第 1 章 (→ 第 1 章 146 頁) および本章第 1 節の 4) (→ 89 頁) でも論じた。以下の単語に関わる引用はすでに同所で行った (括弧内は *mhd.*)。

- *bracht* = *gebracht* < *bringen* (*brâht* < *bringen*)
- *brochen* = *gebroschen* < *brechen* (*brochen* < *brechen*)

- funden = gefunden < finden (vunden < vinden)
- gangen = gegangen < gehen (gangen < gēn, gān)
- gessen = gegessen < essen (ge₃₃en < e₃₃en)
- kommen = gekommen < kommen (komen < kōmen)
- sungen = gesungen < singen (sungēn < singen)

b, 名詞・形容詞 (動詞由来)

語の短縮は名詞・形容詞においてもなされる。この場合も、動詞なら分離・非分離前綴りと見なされる接頭辞が略されたような外観を呈する場合が多い。

以下、名詞およびこの種の形容詞 (= 動詞に起源をもつ形容詞) を特に項分けせずに記す。

• Blick = Anblick (ながめ・光景)

(1) Ich hab' ihn gesehen! / Wie ist mir geschehen? / O himmlischer **Blick!** (Goethe, *Verschiedene...*)

彼を見た! / 私はどうなってしまったのだろうか? / ああ, すばらしいお姿!

一般に Anblick は「ながめ・光景」の意味で、**Blick** は「視線・まなざし」の意味で使われる。逆に Anblick にも後者の意味があり、**Blick** にも前者の意味があるが、それぞれ第2義的と判断される。その意味で、**Blick** は Anblick の、Anblick は **Blick** の意味も担っている。

(1) では、**Blick** に Anblick の「ながめ・光景」の意味がこめられている。この点において、三浦鞞郎氏の解釈に従う (三浦 27)。

なお、この詩の詩脚は上拍を持つ **Daktyrus** である。10 行のうち第 3, 3, 4 行がひとまとまりになっているが、(1) はその最初の 3 行である。第 3 行は ~ | ~ ~ | ~ であり、**O himmlischer** を他のことばに代えるのでなければ、行末強音節—の箇所には **Blick** を置くしかなさそうである。

• Neigen = Zuneigen (愛着・好感)

(2) Alle das Neigen... / ach, wie so eigen / schaffet es Schmerzen! (Goethe, *Rastlose Liebe*)

すべての愛着... / ああ, 何とも奇妙なことに / それは苦しみを生み出す!

これは、不定形をそのまま動詞とする名詞化動詞の例である。ここでは Neigen に Zuneigen の意味がこめられていると判断されるが、それは、同じ neigen に由来する -ung 型の名詞化動詞 Neigung-Zuneigung からの類推によってえられた意味であろう。

ちなみに Neigung (感性的な欲求) は、カント倫理学において否定的な意味においてだが重視された概念である。人は Neigung (感性的な欲求) ゆえに「義務に合致した」**pflichtmäßig** 行為をなすうが、それは必ずしも「義務に発する」**aus Pflicht** 道徳的行為ではない、とカントは論ずる (Kant ②)。

• Sang = Gesang (歌)

(3) Rausche, flüst're meinem Sang / Melodien zu, (Goethe, *An den Mond*)

〔川よ〕音を立てて、私の歌にささやいておくれ / いくつものロディーを、

Sang は、今日では一般に mit Sang und Klang 「鳴り物入りで」、ohne Sang und Klang 「ひっそりと」という言い回しが唯一の使用例のようである。だが他面では Gesang の意で使われる例があることが辞書で示唆されている（大‘Sang’）。(3)に見るように、詩では実際 Sang が時に用いられることがある（Vogelsang のように複合語の基礎語として使われる例もある）。

一方、一般に訳詩のように韻律へのこだわりが薄れる場合にも、つまり語をあえて 1 音節にする必要がない場合でも、Sang が時に用いられる。

(4) Darum Silvia, tön, o **Sang**, / der holden Silvia Ehren; (Shakespear, *An Silvia* [独訳])

だからシルヴィアに、ああ歌よ鳴り響け、/ 優しいシルヴィアの名誉に〔鳴り響け〕；

ここでは o Sang という呼びかけは、かならずしも o を必要とするわけではない。だから、同じ意味を表すためには tön, o, Sang の代わりに tön, Gesang と言ってもよいわけである。だが訳者がそうしなかったのは、Sang に Gesang と異なる含みをこめたからではないかと思われる。

Sang と歴史的に深いつながりがあるのは Minne（宮廷愛）であり（→‘minniglich’, 126 頁）、それは Minnesang の形につながるであろう。それだけに、Minnesang の基礎語となった Sang にはおそらく雅（みやび）やかな雰囲気がある。（*）

他方 Gesang には、優雅とは言えない印象があるように思われる。ge- は名詞の前綴りとして動詞の語幹に付ける場合には、『軽蔑』の意味（大‘ge.’）を帯びることがあるからである。ハイデガーは *Sein und Zeit* で、現存在の日常的な存在様態たる「頹落」の具体相の一として Gerede 「おしゃべり」を論じていたが、この語にはある種軽蔑的なニュアンスが含まれていた。Gesang にもそれに類する含みがなかったかどうか。

シューマンは、自らの歌曲集を *Lieder und Gesänge* と題したが（第 1~4 集）、そこでは Gesang を Lied とはつきりと区別する意識が働いていた。抒情性を第一とする Lied に対して、Gesang はバラード的な形式（素朴な言葉による短い物語詩）や内容（物語を主にした歌）を暗示していると言われることがある。一方、鳥等のさえずりが Gesang（Vogelgesang）と呼ばれている事実も、Lied と区別する傾向を強めたかもしれない。Schwanengesang は比喩的に芸術家の最後の作品を指すが、元々は白鳥が死の間際に歌うと信じられた歌のことである。また Gesang には、飾らない親しみのもてる歌という含意が感じられることもある（例えばハイネの *Auf Flügeln des Gesanges*）。

いずれにせよこうした諸事情から Gesang のニュアンスが決まり、前記 Sang との間に、小さくない意味上の差異があったのではないかと思われる。

(*) Minnesang にも、Minne の対象たる貴婦人のつれなさに対するうらみ・つらみを歌ったものもある。とはいえ Minnesang の作法では、宗教的とも言える比喩に満ちた崇拜の感情が、全体を支配する（高津 124 以下参照）。

• **traut = vertraut**（愛する・親密な）→ 第 2 節詩語「・traut」

• **trunken = betrunken**（酔った）

これについては、先に、‘ein trunken Mann’ という、格変化語尾を欠いた形容詞（Mörrike, *Elfenlied*）について記した（→111 頁）。

(5) Wie rauscht der Erlenbach, wie rauscht im Grund die Mühle / ich bin wie **trunken**, irr-

geführt – (Mörrike, *Auf einer Wanderung*)

ハンノキ林の小川がさらさら流れ、大地の内を水車が回るように、/私は酔い、道に迷ったかのようだ—

この単語は、例えばシラーの *An die Freude* に、*feuertrunken* (炎に酔いしれて) という複合語の形で登場する。ミュラーが書いた詩にも *schlummertrunken* (まどろみに酔った) という語が見える (Müller, *Morgengruß*)。

李白 (Lǐ-Bái) の詩をベートゲが翻案し、後にマーラーが交響曲『大地の歌』第5楽章で用いた際に、その題——*Der Trunkene im Frühling*——でも、これが単独で使われている (*trunken* 自体は詩中に出ないが、詩末に *betrunken* が、*Laßt mich betrunken sein!* 「私を酔うままにしておくれ」という形で登場する)。

また、*feuertrunken*, *schlummertrunken* と同様に、複合語の場合には *be-* の省略が明瞭になる。

(6) *Meine Seele...jauchzet und singet vom Duft berauscht/ viel liebestrunkene Lieder.* (F. Schumann, *Meine Liebe ist grün*)

私の魂は... 芳香に酔いながら、歓声を上げ歌う、/愛に酔ったたくさんの歌を。

なお *trunken* は、通時的に言えば、中高ドイツ語 *trinken* の過去分詞だという (相良② 259)。中高ドイツ語完了相の動詞は *ge-* をつけなかったことは第1節に記したが (89頁、その他の例は前項「a, 動詞」の末尾にもあげておいた)、それと同様の経緯で *ge-* を欠いたまま形容詞として流通したようである。

trunken ないしその派生語は、現代語としても使われている。例えば *Trunkenheitsfahrt* 「酒酔い運転」。

• **Wurf = Entwurf** (企て)

(7) *Wem der große Wurf gelungen,/ eines Freundes Freund zu sein;...* (Schiller, *An die Freude*)

友の友となるという偉大な企てを / 実現した者は;...

Wurf は *werfen* (投げる) に由来する。その1,3人称単数過去形 (直説法) は *warf* だが、接続法II式は今日 *würfe* である (*warf* に由来する *wärfe* もある [大])。一方中高ドイツ語では、1,3人称過去複数形は *wurfen* である (小 704)。*Wurf* はこの形に由来すると判断される。

(7) は、ベートーヴェンの第9交響曲で有名な *An die Freude* の一節である。*Grimm* は *Wurf* との関係でイメージされる *werfen* の比喩的な意味として、サイコロ遊びにおける賭けをあげ、シラーのこの部分にもその反映を認めている (*Grimm* ‘Wurf’)。その限りでは、*der große Wurf gelingt* は、一か八か思い切って賭ける (サイコロを投げる) というニュアンスと解されているようである。

だが、少々不自然な感じはいなめない。「友の友となる」(友と思っている相手にとって真の友になる) ということは、偶然の賭けによってではなく、人としての真心のこもった対応を通じてのみ可能になるのではないだろうか。シラーは、亡命生活のなかで貧困・絶望・孤独に陥り、自殺までしかけたとき、彼の作品を愛する若者4人が差しのべた手に上がることで生き延びたというのが、彼らとの実際の交流において、無謀な賭けをしたのではなく、置かれた立場と受けた恩義を考慮しつつ誠実に対応したのである (矢羽々 37 以下)。

同じ *An die Freude* は、他の詩節で次のように続く。

(8) *Küsse gab sie [=Freude] uns und Reben,/ einen Freund, geprüft im Tod; (ebd.)*

喜びは我らに口づけとブドウ〔酒〕を、死の試練に置かれたときに友を与えてくれた；

これらを念頭においたとき、*Wurf* はむしろ *Entwurf* (企て) の言いかえととるべきだと私は判断する (s. 矢羽々 68)。

なお、(7) を含む *An die Freude* は、厳格な *Trochäus* で書かれている。その詩脚の下で、*der große Wurf* を例えば *der groß' Entwurf* と書けない訳ではないが、男性名詞 1 格に付く形容詞の語尾を略すことはまれである (→110-1 頁)。

c, 形容詞 (非動詞由来)・副詞 (本来の副詞) 等

a の例で短縮 (省略) されたのは、分離動詞・非分離動詞に使われる前綴りであった。b で扱った名詞・形容詞も、前綴りをもつ動詞からの派生語であった。

だが他の品詞 (固有の副詞、前置詞、接続詞) の場合には、そうした前綴りが省略されるということは、一般にはない。あるいは前綴りと見えたとしても、語源的に見て、派生を可能とする前綴りと見なしえないものも含まれる。要するに、以下の単語で略されたと見える前綴りのな言語要素 (*so-*, *ge-*) の意味・効果は、通時的にも共時的にも必ずしも判然としないことはお断りする。

・ *gar = sogar* (しかも)

so は分離・非分離動詞等をつくる前綴りではないが、*sobald*, *soeben*, *sofern* 等を見る限り、副詞・接続詞をつくる接頭辞の一部と見なしうるように思われる。その *so-* が略される例もある。

(1) *So ist's mein eig'ner Schmerz,/ und Tränen fließen gar so süß,/ erreichern mir das Herz.*
(Goethe, *Trost in Tränen*)

それは私特有の悲しみです、しかも涙はとても甘く流れて、私の心を軽くしてくれます。

ここで *gar* を *und* につなげて *sogar* 「しかも」の意味に解したが、その点において三浦鞞郎氏に従う (三浦 77)。なるほどこれは一つの解釈である。この *gar* は、*und* にではなく *so süß* にかかっていると、したがって「きわめて」といった意味にも、当然解しうる。

・ *gen = gegen* (に向かって)

この両者は、*gar-sogar* と違って内包は同じである。そして通時的に見れば、確かに *gegen* から *gen* が生成したようである (*Duden*)。さりとして *gegen* の *ge-* を前綴りと見なすのは困難であろうが、便宜的にここで扱う。

(2) *...da der Engel niederschwebt/ und es [=sein Gebet] sanft gen Himmel hebt.* (Wesendonck, *Der Engel*)

... その時、天使は低く漂い、心の願いを天に向かってやすらかに高めます。

(3) *Sie [=Menschen] jammern in Nöten,/ wir [=die Vögel] flattern gen Himmel.* (F. Schlegel, *Die Vögel*)

人間は労苦すると嘆くが、われら [=蝶] は天へ向かって舞う。

いずれも *Himmel* とともに用いられているが、*gen Himmel* は一種の熟語である。独和大では、見出し語 'gen', 'Himmel' および 'fahren' に、これがのる (*gen Himmel fahren*)。

もちろんこの表現に限られるわけではない。またこの語は単音節であるため、短い詩では有用であろう。以下は、アネルセン（アンデルセン）の風刺 2 行詩＝いわゆるクセーニェ *Xenie* である。原文はデンマーク語だが、独訳は意味上多少ずれはあるものの、なかなかうまくできている。

(4) *Kolumbus fuhr gen Westen bloß, /und war die Erde doppelt groß.* (下宮 57)

コロンブスはひたすら西に向かって進んだ、/そして大地は拡大して 2 倍になった。

• **wie = sowie** (するや否や)

(5) ...**wie** wird das Schätzchen lachen, / ihm wässert schon der Mund— (Mörrike, *Der Knabe und...*)

... いい子が笑えば、/もうその口は、よだれを流しているだろう。—

wie が **sowie** (sobald) の意を有することは、相良大が明示している。また **wie** に **wenn** の意があるとする辞書もある (岩波 'wie')。その他、**wie** を始めとする従属接続詞には、それぞれ多様な意味＝用法があることが多いようである。詩で使われた場合、各々に即して確認する必要がある (他の語、他の語義についてはここでは略す)。

②接尾辞の省略による語の縮小

接尾辞には、品詞を特徴づける、あるいは品詞を転換させる機能を有するものが多いが、それらが略されることがある。以下、a, 動詞、b, 名詞、c, 形容詞・副詞の順に論ずるが、a では動詞化語尾が **-igen** から **-en** に置き換えられる例、b では名詞化語尾 **-ung** が、c では形容詞・副詞を作る派生接尾辞 (ここでは **-artig**, **-en**, **-ig**, **-haft**, **-lich**) が略される例を取り上げる。

この他に、必ずしも明確な接尾辞と見なされていないが、接尾辞的な働きをすると判断されうる言語要素が略される場合もある。これを d として最後に論ずる。

a, 動詞

• **ängsten = ängstigen** (不安がらせる)

(1) —**Ängste, quäle/ dich nicht länger, meine Seele!** (Mörrike, *In der Frühe*)

—もう不安がるな、/苦しむな、私の心よ!

ここでは、動詞を造る接尾辞 **-igen** が同じ機能の **-en** に置き換えられている。そして **ängsten** は、**quälen** とともに、再帰動詞として **sich** (ここでは **dich**) を共有している。**ängste** の抑揚は Trochäus の一拍にびたりと当てはまる。

そもそも **ängsten** と **ängstigen** は、ドイツ語単語として少々曖昧な位置におかれているようである。前者しかのせない辞書があるかと思えば (*Grimm*)、後者しかのせない辞書もある (*Duden*)。両者をのせながらも、前者の意味を後者に還元した辞書もあれば (独和大, 相良大)、前者の意味と後者のそれを分けた辞書もある (岩波)。だが (1) の場合には、意味上 **ängsten** を **ängstigen** に還元した独和大・相良大の解釈がふさわしいと私は判断する。

• **einen = einigen** (一緒にする・統一する)

(2) ...wird uns, die Glücklichen, sie [=die Sonne] wieder **einen**. (Mackay, *Morgen*)

... 太陽は幸せな私たちを再び一つにするだろう、

ここでも *-igen* が *-en* に置き換えられている。この *einen* は 2 詩行前の *'scheinen'* と脚韻を踏むが、より重要なのは、*einigen* がめざす *einig* な状態は外形的な統一の印象が強いのに対して、*einen* がめざすそれではむしろ内面の統一が強調されているように思われる点である。「一つにする」——むしろ日本語の統語法を考慮して「一つになる」ならもっとよい——はその点を考慮した訳である。

なおこの詩に R. シュトラウスがつけた曲（後にオーケストラ伴奏に編曲された）は、極めて美しい。詩の持つ雰囲気、最大限たくみに音楽化したと判断される。とくにバイオリン・ソロの美しさは比類がない。

この詩の詩脚は上拍をもつ *Trochäus* であり、*'Glücklichen'* は本来なら—|—となるはずである。だが 2 つ目の強拍は、朗読の心づもりでは軽強であるが、実際は弱拍でさしつかえない。

b, 名詞

• *Dämmer* = *Dämmerung* (薄明り, < *dämmern*)

(3) Ich denke dein/ im Dämmerschein/ der Abendhelle/ am Schattenquelle! (Matthison, *Andenken*)

僕は君を想う、夕明りのさす / たそがれの光の下、陰の落ちた湧き水のそばで！

(4) ...tief unten geht die Dämmerstunde/ mit lautlos leisem Schritt vorbei. (Rilke, *Im alten Hause*)

... はるか下の方で、たそがれ時が / 音もなく静かな歩みとともに通りすぎて行く。

通時的に見ると、*Dämmer* は *dämmern* からの逆生語であり (*Duden*)、*Dämmerung* の媒介はないのかもしれない。だが共時的には、それは *Dämmerung* から *-ung* を落とす形で造語されたかのように感じられるだろう。*Dämmer* は雅語 (大) だけに、なおさらそうである。詩人にとって、—|—の 3 音節語は、*Jambus* や *Trochäus* を詩脚とする詩では用いやすい語とは言えず (*-ung* 部分を軽強とする等の不自然さが生ずる)、したがって *Dämmer* は *Dämmerung* との対比において選ばれるはずである。

(3)(4) で *Dämmer* は、複合語の規定語として使われているが、辞書の見出し語として採用されている点からすれば、これは単独でも用いられると判断される。

Dämmer と類似した語形 (語幹の末尾が流音) を有する逆生語の例として、*Handel* (<*handeln*)、*Schimmer* (<*schimmern*) などがあげられる (*Duden*)。前者の *Handel* には、*Handlung* という語尾 *-ung* をもつ関連語もあり、そのかぎり *Dämmer-Dämmerung* と類似しているが、*Handel* (商売・商業) と *Handlung* (行為) の意味はかなり異なる。

一方、*Wandel-Wand(e)lung* は形態上も意味上も、*Dämmer-Dämmerung* と類似的である。しかも *Wandel* は *Dämmer* と同様に、単独でも用いられる。

(5) O wie mich sehne...//...der Zeiten Wandel nicht zu seh'n,/ zum zweiten Mal ein Kind [zu sein]! (Groth, *O wüßt ich doch ...*)

... 時の変遷を見ず / 再度子どもとなることを、// ... ああ私はどんなに憧れているか！

wandeln と類似した意味をもつ *wandern* は、ロマン派の詩ではよく用いられる (*Müller, Das Wandern*)。-ung を付した名詞 *Wand(e)rung* も同様である (*Mörike, Auf einer Wanderung*)。一方、

wandern からの逆生語かどうかは不明だが、Wander という語が、複合語の規定語としてよく見られる。

(6) Nun weiter denn, nur weiter, mein treuer **Wanderstab!** (Müller, *Das Wirtshaus*)

ではもっと先へ、いっそう先へ〔行こう〕、/ 僕の誠実な遍歴棒よ! (*)

(7) Überm Garten durch die Lüfte/ hört' ich **Wandervogel** zieh'n, (Eichendorff, *Frühlingsnacht*)

庭の高くに、風をぬって / 渡り鳥が飛ぶのが聞こえた、

これは、単独では用いられないようである。その点 Dämmer や Wandel と異なるが、Wanderung の意味を有する 2 音節語 (—) として重宝されるであろう。

(*) Wanderstab は、遍歴職人が遍歴時に用いる杖のことである。

c, 形容詞・副詞 (形容詞由来)

• **eigen = eigenartig** (奇妙な)

(8) Alle das Neigen/ von Herzen zu Herzen,/ ach, wie so **eigen**/ schaffet es Schmerzen! (Goethe, *Rastlose Liebe*)

すべて愛着は...! ああ、何とも奇妙なことに / 心から心へと / 苦しみを生み出す!

これは先に Neigen をとり上げた際に見た詩である。ここで eigen から略されたと見なされるのは -artig である。これは、名詞・形容詞につけて『形・性質・種類が ... の』を意味する形容詞をつくる (大' . artig') が、総じて その種 の意味を付す形容詞化語尾は、i 音をもたずに基礎語の音韻に変化 Umlaut を生じさせない場合には、基礎語との違いがあいまいになる傾向があるようである (*)。だから、-artig の省略も比較的違和感がないのであろうか (-artig がついた形容詞は 2 音節をよけいに要するだけに、用いれば散文的な印象が強まるだろう)。

この詩の詩脚はたいていの場合 — — | — — であるが、(8) では第 2 行のみ上拍をもつ。この上拍は、第 1 行の Neigen の後に、そのまま弱音として続けて読まれるであろう。つまり \acute{X} — | \acute{X} — Λ ではなく \acute{X} — | \acute{X} — $\underline{\quad}$ のように。

(*) -lich も同種の意味を付す語尾と言えるが、これには「その表す意味が本源形容詞よりも弱い程度であること」(相良② 92) を示す場合があり、その点で若干異なる。

• **eigen = eigentümlich** (特有の)

(9) Mein Herz sieht an dem Himmel/ gemalt sein **eig'nes** Bild — Es ist nichts als der Winter,/ der Winter kalt und wild. (Müller, *Der stürmische Morgen*)

僕の心はその空を眺め / その特有の姿を描いた — それは冬以外の何物でもない、/ 冷たく荒々しい冬。

eigen は外延の広い形容詞である。eigenartig (奇妙な) ばかりか、ここでとりあげた eigentümlich の意味で用いられる例は、時々詩に認められる。eigen を後者の意で用いた述語的用法の例として、ノヴァーリスの「賛歌」をあげてもよい。

(10) Nicht innig, nicht **eigen** genug/ kann sie [=Liebe] haben den Geliebten./ Von immer zärteren Lippen/ verwandelt wird das Genossene/ inniglicher und näher. (Novalis, *Hymne*)

親密ではなく、十分に特有というわけでもない / 愛される者を、愛はわが物にしうる。 / いっそう優しい唇によって / 愛された者は変えられる、/ より親密な者に、より近い者に。

だが、この *eigen* なぜをそう解するのか。

詩の文脈上、第1行の *innig, eigen* が最終行の *inniglich, nah(e)* とつながりがあるのは明らかである。ここで *eigen* は「自分のもの」（ドイツ語なら女性形で *Meinige*）という意味と取りうるし、後半の *nah(e)* 「近い」も同様に解釈可能である。

だがそれは奇妙である。なぜなら、それは *innig, inniglich* において実質的に意味されている事柄だからである。とすれば、ここで *eigen, nah(e)* と言われているのは、愛される者 (*das Geliebte, das Genossene*) が、いかにも愛する者の相手にふさわしい、独特な個性を帯びた存在だということの意味する、ととる方が自然である。

では、なぜ意味が曖昧になることを承知で *eigen* が用いられるのか。前項の *eigenartig* もそうだが、*eigentümlich* は4音節を要する。それが大きな要因の一つであることは間違いあるまい。また両語が *eigen* に比して意味を特化しすぎる点が、むしろ散文的であって詩的ではないとの印象を与えたのであろうか。

なお *eigentümlich* は、*eigen* に *-tümlich* という語尾が着いたのではもちろんなく、名詞化語尾 *-tum* のついた名詞 (*Eigentum*) に、さらに形容詞化語尾 *-lich* を付した語である。だが、形式的にはそうだったとしても、もともと初期新高ドイツ語として、‘*als Besitz eigen*’ (*Duden*) 「所有物として自分のものである / 自分のものとして所有している」という意味であり、思うにそこから、*eigentümlich* では語源が示す意味以上に *eigen* が意味が意識されえたのであろう。

• **frevel = frevelhaft** (忌まわしい、邪悪な)

(11) Und der König ergriff mit **freveler Hand**/ einen heiligen Becher, gefüllt bis zu Rand. (Heine, *Belsazar*)

王は〔その〕忌まわしい手で / 神聖な盃をつかみ、縁まで〔酒を〕満たした

形容詞化語尾 *-haft* は「... のような」「... のある」といった意味を付加する (大‘*-haft*’)。そして *Frevel* にこれを付して *frevelhaft* という形容詞が造られたと判断される。一方、*frevelhaft* の意味を部分的に含む *frevel* という形容詞も、用いられてきたようである。*Duden* (Stichwort ‘*frevel*’) によれば、それはすでに古高ドイツ語以来使われていたという (*ahd. fravali, mhd. vrevel*)。

ところで、一般の辞書には、*Frevel* (名詞) および *frevelhaft* は見出し語としてのるが、*frevel* (形容詞) は、大辞典でもなければ載らないようである。独和大では *frevel* は「雅語」(詩語) とされているが、詩人が *frevel* を、*frevelhaft* (独和大によれば2つの意味のうち1つが *frevelhaft* と重なるようである) その他の代わりとして用いたこと等を通じて、独自の単語として生き残ったのであろう。

なお、*mit freveler Hand* を「〔その〕忌まわしい手で」と訳したが、原文には定冠詞類がついていない。にもかかわらず「その」を補ったのは、詩では、意味上弱い用語——「意味上重要ならぬ形式的用語 (Formwort)」(相良② 64) —— を省略する傾向があるからである (→ 第4章意味論)。

• **gold = golden** (金製の、金色の)

-en は、「語幹 (Stammwort) [= 名詞] が表示する物質であるという性質をあらわす」(桜井 113) 形容詞をつくる派生接尾辞であるが (正確にはそれ以外の意味をも表す; 後述)、これが略されるこ

とがある。

ここではそれが問題だが、他方、以下の作例では、付加語的用法しかない形容詞が、述語的に用いられているという問題も生じている。

形容詞は一般に——以下本来は統語論の問題だが(→第3章統語論)必要な範囲で記す——付加語的にも述語的にも用いられる。だが、付加語的にしか用いられない形容詞がある。例えば **-en** という派生接尾辞をもつ形容詞がそれである。したがって **golden** の使用は、付加語的用法に限定される(相良② 220)。けれども詩では、これが述語的に用いられることがある。

(12) ...wenn die Lüfte **golden**,/ scheint die Wiese grüner. (Schlegel, *Der Schmetterling*)

... 空気が金色になれば,/ 野原はずっと緑色に見える。

ここで **golden** は「金色の」(金製ではなく)の意味で用いられている。

本項で問題の **gold** もまた同様である。そもそもドイツ語に **gold** という形容詞はないが、にもかかわらず、ゲーテはこれを、次のように **golden** の代替形容詞として(しかも述語的用法において)用いている。

(13) **Gold'ne** Träume, kommt ihr wieder?/ Weg, du Traum! so **gold** du bist; (Goethe, *Auf dem See*)

黄金の夢よ, お前たちはまたやって来るだろうか?/ 去れ, 夢よ! お前がどんなに黄金のようであろうとも;

ここで第2行の **gold** は、文脈的に見て、第1行の **golden** の代替であると判断される。したがって、ゲーテの心づもりとしては、ドイツ語における **golden** の用法を **gold** にこめているはずである。にもかかわらず、ゲーテはそれを、本来用いられない述語的用法で用いている。それによって表現の可能性が広げられた。

しかも詩作の論理からすれば、以上によって、韻律上不要な弱音がとりさられ、この詩の詩脚——**vierhebiger Trochäus**——はきれいに充足されたことになる。

ついでに記せば、**golden** の副詞的用法は興味深い。

(14) **Golden** tropft[']s] Blatt um Blatt/ nieder vom hohen Akazienbaum. (Hesse, *September*)

葉が一枚また一枚と, 黄金のように/ 高いアカシヤの木からしたたり落ちている。

この例では、秋に葉が舞い散る様子が **golden** という言葉で表現されている。ここで詩人は、散り行く葉が黄金のようだというのではなく、また落葉後に地面が黄金のじゅうたんになると言うのでもなく、葉がはらはらと散りゆくさまが黄金が降るかのようだと言っているのである。

私が住む北海道の道東地域では、真冬、空気中の氷結した水滴に陽が当たってキラキラと輝き舞う「ダイヤモンドダスト」と呼ばれる美しい現象に出会うことがある(→YouTubeを)。葉が「黄金が降るかのよう」に舞うというのは、おそらくそれに類する光景を指しているのであろう。

・ **graus = grausig** (おそろしい)

(15) Doch kaum das **grause** Wort verklang,/ dem König ward's heimlich im Busen bang.
(Heine, *Belsatzar*)

だが恐ろしい言葉が響き渡るとたちまち/ 王の胸のうちに不安が密かに広がった。

(16) Wenn du nicht **laßt**/ den Erdengott,/ bevor dich **faßt**/ der **grause** Tod. (Bruchmann, *Schwestergruß*) (*)

恐ろしい死があなたを / つかむ前に / あなたが / 現世の神を捨てないなら .

ここにも、*frevel* (前々項) や *gold* (前項) と似た事情が関係していると思われる。*graus* は名詞 *Graus* 「恐怖」からそのまま転用された形容詞のようである。認知度は *frevel* と *gold* の間くらいなのか、独和大では *graus* は *grausig* の意味としながらも (見出し語 ‘*graus*’; だが奇妙なことに *grausig* は見出し語になっておらず、*grausenhaf* の箇所に付随的に載っているだけである)、*Graus* と同様に、▽印で、今日使用はまれになったと注記する。

一方、*Graus* 由来の形容詞には *grausam* もある (Scott, *Ave Maria*)。すると自ずから *grausig* と *grausam* の間に意味上の差異が生まれる可能性があるが (あるいは差異を生もうとする傾向が2つの単語を生んだとも言えよう)、用例からすれば、*grausam* は *grausig* と類似した意味と用法を保有していると判断される。

(* ここに出る *läßt* は奇妙だが (ふつうなら *läßt*, < *lassen*)、これは中高ドイツ語である (*mhd.* < *lân* / *lâzen*)。新高ドイツ語の綴りになっているが、中高ドイツ語としては *last* (長音符をつけて *lâst*) と綴られる。一方、(16) は副文だけで成り立つ詩節である。前詩節は *Und all die Lust, / die ich empfind' / nicht deine Brust / kennt, Menschenkind!* 「私が感じる / 全ての喜びを / 人の子よ、あなたの心は / 知らないのです!」、と記されている。先にブルッフマンの「永訣の朝」について記したが (125 頁)、この詩では、若くして亡くなった妹が、その死を嘆く兄に対して、現世での執着を捨てなければ (これが (16) の趣旨である)、自分が幸福に天に昇ったことは分からないでしょう、と伝えているのである。ここでの *lassen* は *verlassen* 「捨てる」の意味で用いられている (135-6 頁)。

・ **innig = inniglich** (心からの、親密な)

-iglich という語尾を持つ形容詞 (副詞) については、第 1 節で、*minniglich*, *wehmütiglich*, *wonniglich* を名詞語幹からの派生語として扱った。ここでは同じ語尾をもつ形容詞語幹由来の *inniglich* をとりあげる。

(17) *Dës wirt [l̥ɛz] noch gelachtet / inneclîche, ...* (*Vogelweide*, *Under den linden*) (*1)

それだから、いままだ / 心から笑われてしまうでしょう、...

これは中高ドイツ語である。*inneclîche* は現代綴りなら *inniglich* であり、-lich (*mhd.* -liche) という副詞化語尾を持っている。正確には、中高ドイツ語では、類似した -lich と -lîch(e) の2つの派生語尾があり、前者は形容詞を、後者は副詞を造る語尾だったという (→127 頁)。新高ドイツ語では、発音上も綴り上も区別なく用いられている。以下の例は、(17) と同様に副詞として使われている。

(18) *Nicht innig, nicht eigen genug / kann sie [=Liebe] haben den Geliebten. / Von immer zärteren Lippen / verwandelt wird das Genossene / inniglicher und näher.* (*Novalis*, *Hymne*)

親密ではなく、十分に特有というわけでもない / 愛される者を、愛はわが物にしうる / いっそう優しい唇によって / 愛された者は変えられる / より親密な者に、より近い者に。(*2)

ここには、*inniglich* と同時に、問題の *innig* も登場する。*Duden* によれば、*innig* と *inniglich* は意味上、特に区別されない (独和大でも同じ)。だが *inniglich* (副詞) は古高ドイツ語時代にもあった (*mhd.* *inneclîch*; *ahd.* *inniglih*) ようだが、*innig* の古高ドイツ語形はふつうは辞書に記されない (*Grimm* ‘*innig*’ ‘*inniglich*’ の記述でも同様に読める)。つまり、共時的に見れば——*minniglich* と同様に——*inniglich* は語幹の *innig* に副詞化語尾 -lich がついて派生した形と見なされようが、通時

的には、-ig に lich が付加したのではなく、-iglich 形が先にできたか、あるいは（成立の前後は判然としないとしても）-iglich 形の方がより一般的に使われたか、のどちらかであろう。

以上の歴史的経緯と別に、ここで重要なのは、詩人が innig を韻律の都合から、その inniglich の短縮形として用いていると思われる点である。(18) は自由詩だが、それは脚韻において顕著である。一方韻律の点では、自由詩とはいえ、あるていど統一的な詩脚を想定できる。上拍を持つ場合の詩脚は大まかに見て Daktyrus— である。もとより他の語句を基本的に変えなければの話でしかないが、innig はその— 部分に納めるべく選ばれているように思われる。

次の例では、その点はより顕著であろう。

(19) Der kleine Sandmann bin ich, st!/ und gar nichts arges sinn' ich, st!/ euch Kleinen lieb' ich innig, st!/ bin euch gesinnt gar minnig, st! (Wette, *Sandmännchen...*)

私はあの小さな眠りの精、シー！悪いことは何も考えない、シー！小さなお前たちを心から愛してるよ、シー！お前たちをとっても愛おしく思ってるよ、シー！

この詩（台本）は上拍つきの dreihebiger（解釈によっては「st!」を含めて vierhebiger）Trochäus で書かれている。そして、どの行末にも強拍の st! が見られるが、おそらくその前の— 拍が押韻する。1,2 行目では bin ich と sinn' ich が、そして 3,4 行目では、問題の innig と minnig が、押韻している。そして内容に手を加えないかぎり、3,4 行目は inniglich, minniglich ではなく、innig, minnig だからこそ、詩脚に適合する。

厳密に言えば、前者を使った場合には、— ーの軽強音部分 (-lich) で脚韻を踏むのみか、先立つ 2 音節 (-innig) も含めた 3 音節にまたがる reicher Rheim「豊韻」（山口 49）を踏むこともできる。だがそうすると、明らかに 1,2 行目の詩脚からはみ出すし、さりとしてそれを避けるために 1,2 行目でも同様の豊韻を踏もうとすれば、よけいな小細工をしなければならなくなり、かえって不自然な感じが否めないであろう。

だから詩人は、inniglich, minniglich ではなく、innig, minnig をここに置いたのであろう。

(*1) wirt = *nhd.* wird, *ë3*= 同 es だが、興味深いのは *dës* である。これは中性指示代名詞 *da3* の 2 格であり、今日の *deshalb* に近い意味を有する。これは 2 格が副詞的に使われた典型的な例である（相良① 63）。次の民謡の詩句は、*dës* のこの語義を残している。Als ich bei meinen Schafen wacht,/ ein Engel mir die Botschaft [ge]bracht./ **Des** bin ich froh,... (Volkslied, *Als ich...*) 「うちの羊を起した時,/ 天使が私に伝言をよこした./ だから私はうれしくて,...」

(*2) *eigen* を含む第 1 行は、形式的には第 2 行の *haben können* にかかる副詞句だが、実質的に *der Geliebte* にかかる形容詞句と読んだ（→ 第 3 章統語論、第 4 章意味論）。

• **stet = stets**（不断の・不断に）

(20) Mein Trost ob allen Weiben,/ dein tu' ich ewig bleiben,/ **stet** treu, der Ehren fromm;
(Volkslied, *Innsbruck...*)

あらゆる女性にまさる私の慰めよ,/ 私はずっとお前のものであり,/ 常に誠実で、名誉に忠実でいる;

stet-stets はどこに分類すべきかと迷ったが、この例に見られる -s は、副詞化語尾とは言えないとしても、副詞の徴表となっている。後述するように、副詞化語尾に準ずる機能さえもっている。

stet は、中高ドイツ語の形容詞 *stæt, stæte* に由来する（小 513; æ は ä [ɛ] の長音）。今日これは、

付加語的にのみ用いられるというが(大‘stet’)、(20)では述語的に用いられている。そして、新高ドイツ語において一般に副詞として使われる *stets* は、この 2 格の強調形 *stætes* に由来するという (*Duden* ‘stets’)。

この語にかぎらず、総じて形容詞の 2 格に由来する副詞は少なくない (桜井 350)。例えば *anders*, *bereits*, *links*, *rechts*, *vergebens* 等 (第 2 節「詩語」でふれる *-wärts* という接尾辞をもつ副詞も同様である)。また名詞由来の副詞の場合も、名詞 2 格にあった *-s* の形をとるものが少なくない。*abends*, *anfangs*, *morgens*, *nachts* などによく使われるが、他にも例えば *flugs*, *rings*, *stracks* (< *mhd.* *strac*) 等があげられる (相良② 317 による)。

こうした副詞の場合は、*-s* は副詞の徴表であるが (ただしもちろんその逆は言えない)、副詞化語尾に準ずるものとして機能することもある。典型的なのは、今とり上げた *nachts* などの例であろうか。*Nacht* はもともと女性名詞であり、本来 *nachts* (その語源は *des Nachts*) は可笑しいが、これは *tags* の類推によって作られたという (*Duden* ‘nachts’)。

なお (20) の第 1 行に出る *ob* 「...にまさる」および *Weiben* (*nhd.* *Weiber*) については、またここで言う「お前」は、題に見られる街「インスブルック」のことを指している可能性がある点は、116 頁に記した。

d, 他の接尾辞の省略

前記のように、引き続きあつかうのは *-de*, *-e*, *-en*, *-n* 等の、接尾辞的な言語要素が略される (*) 場合である。一定の品詞を造る、明確な意味・効果を持つ——ひいては辞書の見出し語となる——接尾辞とは言い難いが、これらは名詞に付いて、意味もしくはニュアンスの異なる他の単語を、もしくは同じ単語の別形を造る。

(*) 少なくともそういう外見を呈する。個々の要素についての語源的な検討は、一部を除きできていない。

・ **Fels** (岩, 3 格) = **Felsen**

(1) Wenn auf dem höchsten **Fels** ich steh'!/ ins tiefe Tal hernieder seh'!/und singe. (Müller, *Der Hirt auf dem Felsen*)

最も高い岩壁に立つと、/僕は深い谷を見降ろして、/歌う。

Fels と **Felsen** については、先に「独自の格変化」のところで言及した (106 頁)。そこでは **Fels** の 2 格を **Felsen** としたが、実は **Fels** にはもう一つの変化形があるようである。その場合は、単数は 2~4 格を含めてすべて **Fels** である (ア ‘Fels’)。(1) で用いられたのは、その 3 格である (「独自の格変化」で言及した **Fels** と **Felsen** の 3 格はともに **Felsen** である)。

ところで、ここで用いられた **Fels** (以下 **Fels**¹) と、先の **Fels** (以下 **Fels**²)、**Felsen** とでは、意味上の違いがあるようである。辞書の記述は微妙に異なるため正確には理解しかねるが、母語話者さえこれらを混同して使っていると判断される。(1) に出る **Fels**¹ は、「岩盤」——地質学で言うそれ、つまり「地表の下にある岩石の層」(大辞泉)——の意味で使われる傾向が高いようである (ア)。だが (1) で詩人はこれを、そうした厳密な意味においてではなく岩壁ていどの意味で用いている (違いが実感されていれば、これは意味論の問題となる → 第 4 章意味論)。

次の(2)に出る **Fels** はひとまず **Fels**² ととれるが、仮に **Fels**¹ だったとしても、やはり意味は「岩盤」ではありえないだろう。(3)の第1行に出る **Fels** (4格) は、**Fels**¹ 由来である (**Fels**² 由来なら **Felsen**)。ただしここでも意味は「岩盤」ではない。(*1)

(2) **Kennst du den Berg und seinen Wolkensteg?...es stürzt der Fels und über ihn die Flut!**
(Goethe, *Kennst du...*)

あの山とそこにかかる雲の小橋をご存じですか?... [そこでは] 岩壁は切り立っており, その上に大雨が降るのです!

(3) **Wenn wir auf diesen Fels hinsinken/ zum Schlaf, und uns dein Schutz bedeck, / wird weich der harte Fels uns dünken./ Du lächelst, Rosendufte wehen.** (Scott, *Ave Maria*) (*2)

私たちがこの岩へと倒れて / 眠るとき, あなた [= 聖母] の加護が私たちをおおうなら / 固い岩が私たちに柔らかに思われるでしょう / あなたが微笑むと, パラの香りが漂うでしょう.

もちろん詩人が **Felsen** ではなく **Fels** (**Fels**¹ であれ **Fels**² であれ) を用いたのは、独自のニュアンス (それがあるとして) を別とすれば、詩脚の都合であろう。(1)~(3)のいずれも、詩脚はひとまず上拍をもつ—格である。**Fels**はそのうちの強拍に置かれている。

ただし(2)の出だしの—|—は「転置強音」(山口 40)によって—|—のように (ただし上拍の一は軽強であろう)、(3)の1行目に出る **hinsinken** では、—|—を「均衡強音」(同 41)によって—|—のように (ただし同上)、読まなければならない。

(*1) 地質学の発展は、主に19世紀になってからだという。だから **Fels**¹ が明確に「岩盤」の意味をもつようになったのも、ひいては一般市民にその意味が普及したのも、それより後のことかもしれない。そのかぎり、私の論証には若干不備がある。

(*2) ここには **-dufte** (**Dufte**) という単語が見えるが、どうもこれは **Duft** の複数形のようなものである (ふつうは **Düfte**)。だがその由来は分からない。古高ドイツ語には **-i**, **-a** を複数語尾とする男性名詞があったが (高橋 33-5)、語尾が **-i** の場合は幹母音のウムラウトが起きやすく (古賀 9-10)、**-a** の場合はそうではない。これを踏まえると、古高ドイツ語 **duft** の複数には、**dufti** [dýfti] (今日の正書法に従って記せば **düfti**) と **dufta** があり、**-i** と **-a** が中高ドイツ語として曖昧母音化して **düfte** (*nhd.* **Düfte**) と **dufte** (同 **Dufte**) になったのではないか、そして押韻の都合上、詩人は後者の形を用いたのではないかと想像される。だが現時点では、残念だがこれは仮説の域を出ない。*Grimm* も *Lexer* も、この点では有益な情報を提供してくれない。

• **Friede = Frieden** (平和・平安)

Frieden には **Friede** という別形がある。*Grimm* を見る限り、両者はゴート語あるいは古高ドイツ語から、別個に発達してきたようである。煩瑣になるので語源の記述は省略するが、両者は併存するとはいえ、辞書類を見る限り、少なくとも今日は **Frieden** が正規の語と意識されているようである。だが詩では、**Friede** もかなり使われていると判断される。いや私が見るところ、詩では **Friede** が普通である。

(4) **Ach, ich bin des Treibens müde!...Süßer Friede,/ komm, ach komm in meine Brust!**
(Goethe, *Der du von...*)

ああ, 私は活動に飽いた!... 甘い平和よ, / 来ておくれ, 私の胸へと!

ところで、ここで **Friede** は詩脚の関係からではなく（音節数も語の抑揚も **Frieden** と違いはない）、脚韻の都合で選ばれている。**Friede** と押韻するのは、**müde** である。

だが次の例に見るように、**Friede** が脚韻と無関係に使われることもある。

- (5) Mir ist es, denk' ich [lieber] nur an dich,/ als in den Mond zu seh'n;/ ein stiller **Friede** kommt auf mich,... (Goethe, *Jägers Abendlied*)

月に見入るよりも、/私は君だけを考えている気がする；[すると] 静かな平安が僕に訪れる、...

- (6) Du bist die Ruh'!/ der **Friede** mild./ Die Sehnsucht du/ und was sie stillt. (Rückert, *Du bist die Ruh'*)

君は憩い、/穏やかな安らぎ、/君は憧れ、/そしてそれを満たすもの。

ここで **Friede** は、語それ自体のニュアンスから選ばれているのではないだろうか。**Frieden** *ernährt*, **Unfrieden** *verzehrt*. 「平和は繁栄のもと、不和は破滅のもと。」という諺がある（野本 58）。これと異なり——仮説の域を出ないが——**Friede** は、政治的な意味での平和よりはむしろ来世での、あるいは（来世とのつながりは必ずしも意識されてないまま）現世で望まれる「心の平安」を意味する傾向があるのかもしれない。

(4) もそうだったが、(5) でも現世的な平安への願いをこめて、**Friede** が使われているように思われる。ここでは、狩人が日々のつらい仕事のさなかに、恋いこがれる相手を思い、安らぎを感じてささやかな幸福感にひたっている様が歌われている。(6) では、相手の存在そのものが無条件で安らぎだと歌われている。ここでは **Friede** が **Ruhe** とともに用いられているが、両者は異なる様態をさすというより、ほぼ同義に用いられているように思われる。**Friede** は平和というより、心の平安であり安らぎである。おそらく **Frieden** 以上にそのニュアンスが強い。**Friede** を古風と見なす辞書は少なくないが（*Wahrig* 等）、受動的に平和を願う以上のことができなかつた人民にとって、求め得るのは心の平安であり安らぎだったからであろう。

私はドイツ詩において **Frieden**（2~4 格の場合はのぞく）に出会ったことはあまりないが、もちろん押韻の都合に合わせてこれが選ばれることは少なくないだろう。**Friede** を用いる詩人も、語を 1 格主語あるいは補語として行末に置くことになれば、その観点から **Frieden** を選ぶはずである。

- (7) Du bist die Ruh', du bist der **Frieden**./ du bist vom Himmel mir *beschieden*. (Rückert, *Widmung*)

君は憩い、君は安らぎ、/君は天から僕につかわされた。

先の (6) で **Friede** を用いたリュッケルトも、ここでは *beschieden* と押韻させるべく、**Frieden** を用いている。

• **Gesell = Geselle**

- (8) ...die klaren Rinnen rauschten *hell*,...Da war's gescheh'n um dich, **Gesell**! (Müller, *Rückblick*)

... 清い流れが明るく音を立てた、... お前はもうだめだったのだ、若者よ！

- (9) Laß [das Bächlein] singen, **Gesell**, laß rauschen,/ und wandre fröhlich nach, (Müller, *Wohin?*)

若者よ、[小川に] 歌わせよ、さらさらと流れさせよ、/そして陽気に [川に] 沿ってさすらえ、

ここに出るのは *Gesell* であるが、今日一般には *Geselle* が使われるし、辞典で見出し語となるのも *Geselle* である。また通時的に見ると、中高ドイツ語の「弱変化名詞が単数一格にもっていた e を今も保存する名詞」として *Geselle* があげられており (小林 54)、今日はこちらが正式な語と理解されることになる (*1)。同時に辞典での扱いを見る限り、確かに *Geselle* が母語話者にとって正式な語であり、*Gesell* はその別形と理解されているようである。

ただし、総じて別形と解される語彙は、正式な語彙と意味を同じくしても (*Duden* によれば、*Gesell* も *Geselle* も内包はほとんど同じと判断される) 語のニュアンスには違いがあるのが普通である。独和大でも *Duden* でも *Gesell* は時代遅れだと記されているが (▽印)、それは徒弟制度——両単語のいずれも歴史的には徒弟制度下の (ふつうは若い) 「職人」を意味したという——が衰退した結果であって、*Geselle* が「若者」という広い意味を獲得したのに対して (*2)、*Gesell* は明示的にはそうではなかったのであろう (独和大の場合、*Gesell* については用例として職人に関わる熟語があげられただけである)。

韻律論的に見れば、ここで *Gesell* が使われた理由はあるていど明らかである。(8) では *Gesell* は行末に置かれ、その前に出る *hell* と押韻する。そしてこれは強勢韻であるため、*helle-Geselle* ではなく、*hell-Gesell* の方がふさわしい。(9) では押韻とは無関係に使われているが、—格に都合がよいように *Gesell* が選ばれたのであろう。

なお、そもそも詩で韻律・押韻等の事情から語末母音あるいは語中母音が略されたとしても、省略を示すアポストロフは一般にはあまり付けられないため、正確には、(8)(9) の *Gesell* は、独立した単語としての前記 *Gesell* なのではなく、*Geselle* の語末母音省略形である *Gesell'* だった可能性もある。

(*1) *Hirte* 「羊飼」もそうだというが (小林 54)、辞典を参照するがぎり、*Geselle* と異なって *-e* を欠く *Hirt* が正式な語と解されているようである。ただし *-e* を伴う中高ドイツ語の名残なのか、例えばバッハの教会カンタータ「イスラエルの牧者よ、聞きたまえ」*Du Hirte Israel, höre* では、*Hirte* が用いられている (このテキストの成立年代は 18 世紀前半である)。なお *Hirte* は *Geselle* と同様に確かに弱変化名詞でもあったが、本来は強変化名詞である (相良① 18)。

(*2) マーラーの *Lieder eines fahrenden Gesellen* は「さすらう若人の歌」と訳されることが多いが、それはこうした意味の転換による。(8)(9)、とくに (9) では、*Gesell* は明らかに遍歴職人であるが——(8) では不明——、便宜的に「若者」としておいた。

• **Zier = Zierde** (飾り)

ドイツ語には、*-de* で終わる名詞がいくつかある。有名なのは *Freude* (< *mhd.* *vröude* < *ahd.* *frewida/ frouwida*; 以下同じ) であろう。他にも *Begierde* (< (be)girde < *girida*)、雅語として使われる同義の *Gierde* (< *girde* < *girida*)、ここから派生した *Neugierde* などもそれである。

この *-de* という語尾は、今日一般の文法書などでも辞書でも明示されないが、古高ドイツ語において広まった、動詞から女性名詞を造る語尾 *-ida* の名残であるという (野入 27)。

一方、これらの単語から *-de* (< *-de* < *-ida*) を略した *Begier*, *Gier*, *Neugier* なども用いられている (例えば *Heidegger*, *Sein und Zeit* における、頹落した現存在の日常的な存在様態として概念化された *Neugier*)。私は詩においてこれら省略形は見たことがないが、これと似た事情から使われる *Zier* (飾

り) (Zier=Zierde < zierde < zierida) は目にする。

(10) Nun liegst du erschlossen/ in Gleiß und Zier/... (Hesse, *Frühling*)

いまお前は開かれている、/輝きと装いのうちで、/...

(11) Was frommt des Maien holde Zier?/... (Chézy, *Romanze*)

五月の優美な飾りは何に役立つのだろうか?/...

いずれの場合でも、Zier は mir (ここでは詩行は略す) と押韻する。もちろん強勢韻であるため、ここには一〇拍の 2 音節語 (Zierde) を持つてくることはできない。

Zier は民謡でも見られるが、次の民謡では、Zier は飾りのように美しい女性を意味している (→ 第 4 章意味論)。

(12) ...o du, allerschönste Zier,/ Scheiden, das bring Grämen. (Volkslied, *Lebewohl*)

... ああ、この上なく美しい少女、/別れはつらい。

この Zier はもちろんドイツ語の語彙の宝庫から詩人が見出したのであろうが、zierlich 「愛くるしい」という形容詞の存在がそれを容易にしたのであろう (Mosen, *Der Nußbaum*)。Gier の場合も gierig という単語に出会う (Kind, *Jäger-Chor*)。

* * *

以上はすべて、接辞の省略——いつていの含みを有する接辞の場合もあるとはいえ——による語の縮小であった。他に、複合語の構成素である、明瞭な固有の意味を有する規定語が省略される場合もあるが (例: Huhn 鶏 ← Rebhuhn ヤマウズラ)、これは、以上とは性格が異なるため、第 4 章意味論で扱う。

2) 語の拡大

これまでとは逆に、詩において一般に用いられる単語が音節的に拡大される場合がある。

詩人はもちろん語のニュアンスを重視しているが、同時にやはり韻律や押韻の都合で、自由詩の場合でもいわば内的リズムを重視して、語が選ばれていることも多いと判断される。

語が拡大される場合、これまでと同様に、接辞が付加されるのが普通である。以下、接辞を①接頭辞および②接尾辞に分けて「語の拡大」現象を記述するが、①②いずれにおいても、派生上の機能が a, 明確な場合と b, 不明確な場合とがある。

以上に続いて、③縮小辞の付加による語の拡大を論ずる。ここでは 5 つの縮小辞を取り上げる。

①接頭辞の付加による語の拡大

接頭辞を付加することで語を拡大する例は確かに見られるが、さほど頻度が高いものではない。それは思うに、散文と異なり、短い詩行内で用いることのできる音節数は限られているからであろう。以下、品詞を特に分けることなしに記述する。

a, 派生上の機能が明確な接頭辞 — 分離・非分離前綴り

• Angesicht = Gesicht (顔, 目, 表情)

(1) Die kalten Winde bliesen/ mir g'rad' ins Angesicht, (Müller, *Der Lindenbaum*)

冷たい風が吹きつけた、/ ちょうど僕の顔に。

- (2) [Alle Seelen,] die.../ Gott, im reinen Himmelslicht,/ einst zu seh'n von **Angesicht** [sind]:/
alle Seelen ruh'n in Frieden! (Jacobi, *Litanei*)

ああ、明るい天の光の下で、/ かつて目で見ることができた ... [すべての魂は] / すべての魂は、平和のうちに
安らいで下さい!

Angesicht は、詩ではしばしば目になる。(1)(2) のいずれでも、基本的に詩脚上の都合から選ばれたと思われる。前者は上拍をもつ **Trochäus** の、後者は上拍のない **Trochäus** の並びの必要からである。

だが重要なのは、語の意味である。**Angesicht** は中高ドイツ語に由来する単語とはいえ、オーストリアの言葉であり、少なくとも今日的な意味は、詩人が詩語として用いることで獲得されたようである。意味は (1) では比較的明瞭だが、(2) では意味論的な特殊化 (顔→目) ないし転換 (表情→目) が起きている (池上 84; →第 4 章意味論)。一般に **Angesicht** には「顔」と「見ること」の意味があるとされるが (ア)、その意味が、顔にある見るための器官である「目」まで広がるのは自然である。一方 **Angesicht** は、**Gesicht** の各種の含意で用いられる場合がある。

- (3) **Ewig sind wir nun geschieden!** / Damon, liebste du Philaiden, / **fleuch** ihr **Angesicht!** (Gott-
ter, *Pflicht und Liebe*) (*)

私たちは今や永遠に別れました! / ダーモンよ、あなたはフィライデン [= 私] を愛しています、/ 彼女の顔 [目]
を避けて下さい!

- (4) «Lebe wohl» — Du fühlst nicht, / was es heißt, dies Wort der Schmerzen; / mit getros-
tem **Angesicht** / sagtest du's und [mit] leichtem Herzen. (Mörke, *Lebe wohl*)

「さようなら」— あなたは感じていない、/ それが、苦痛のこの言葉が、何を意味するかを、/ 安らかな表情で、
しかも軽やかな気持ちであなたはそれを口にする。

ここで (3) の **ihr Angesicht** をひとまず「彼女の顔」「彼女の目」と訳したが、実質的に意味されているのは「彼女の表情」「彼女の顔つき」であろう。(4) の **Angesicht** もまた同様である。ここでも意味の転換が起きている。**Angesicht** は、顔および見るというその機能の意を安定的に担うが、同機能を担う器官 (目) と同機能の帰結 (表情・顔つき) に関わる含みを、**Gesicht** から得ているように思われる。

(*) 第 3 行に出る **fleuch** は、中高ドイツ語の名残をとどめた、命令形 **flieh**[e] の別形である (→ 21 頁)。

• **ertragen = tragen** (担う)

ertragen はふつうは「耐える」という意味である。だが、それではうまく理解しえない詩に出あうことがある。

- (5) **Lieber durch Leiden** / möcht' ich mich schlagen, / als so viel Freuden / des Lebens **ertra-**
gen. (Goethe, *Rastlose Liebe*)

むしろ苦悩によって / 僕は自らを生み出したい、/ 人生のかくも多くの喜びを / 担うよりも。

ここでは、文脈的に「耐える」は奇妙であり、むしろ **ertragen** によって、耐えることに先立つ「担う」という体験 (ドイツ語ではこれを **tragen** が示す) が意味されていると思われる。この解釈については佐々木庸一氏にしたがう (佐々木 188)。

この詩は民謡詩節よりなり、以上の部分は— — | — — という詩脚を有する（第4詩行には上拍 Auftakt がつく）。ertragen の er- は、Zäsur 直前の弱音節に位置する。ゲーテが tragen に対して ertragen を用いたのは、この弱音節の処理のためであろう。

なお興味深いことに、tragen は逆に ertragen 「耐える」の意味をもつ。中高ドイツ語からすればそうである（小 552）。例えば民謡「インスブルックよさらば」は15世紀末の歌だというのが、ここでは次のように、tragen が ertragen の意味で用いられている。

(6) Groß Leid muß ich jetzt **tragen**,/ das ich allein tu' **klagen**/ dem liebsten Buhlen mein.
(Volkslied, Innsbruck...)

私が最愛の恋人にだけ / 訴える大きな苦しみに、/ いま耐えなければならない。

ただし、ある青少年向けの民謡集では、子どもにとって理解が困難と考えたのか、(7) の jetzt tragen を同じ3音節かつ— — 格に納めて ertragen としている (Jugend 61)。置き換えは最小限にする必要があるが、ともあれこれによって tragen の意味が明瞭になっている。

b, 派生上の機能が不明確な接頭辞 — al-, all-

- **allhier = hier** (ここで) → 第2節 (補) 官庁語 「・allhier, allüberall 等」
- **also = so** (そのように)

all- は官庁語・雅語として、総じて「場所・時などを意味する副詞につけてこれを強調する」働きがあるという (大'all. .)。同辞典では'al. .' についてはそうした記述はないが、also は元々 ganz so の意であり (相良② 110, Duden 'also)、時間や空間に関わるわけではないとしても、同じく強意の意をこめて使われたようである (→ 第2節詩語 「・also」)。

特に詩では、al- を付けない so が、しばしば口調を整える等のために使われることがあるだけに (→ 第2節詩語 「・so」)、アクセントのある also ははっきりと強意が感じられるのであろう。ただし多かれ少なかれ韻律上の都合も考慮されている。

(1) ...wie mögt ihr [=Palmen von Bethlehem] heute/ so zornig sausen!/ O rauscht nicht **also**!
(Vega, Geistliches Wiegenlied)

... 今日お前たち [=ベツレヘムのヤシ] は、何と / 怒りをあらわに吹くのだろう! ああ、そんなふうには音を立てないで!

(2) **So wie** dort in blauer Tiefe,/ hell und herrlich, jener Stern,/ **also** er an meinem Himmel,/ hell und herrlich, hehr und fern. (Chamisso, *Er, der herrlichste*)

かの青い深みにあって、/ 明るく見事にかの星が [輝く] ように、/ 彼は私の天にあって、/ 明るく見事に、気高かつ遙かに [輝くか] 。

前者の(1)は、外語(*)からの訳詩であるため、かならずしも韻律や押韻が重視されてるわけではない。だがこの詩は上拍つき Trochäus— — を詩脚としており、しかも全体として弱勢終止が優勢であるため、also は単音節かつ強音の so より、おさまりがよかったようである。

後者の(2)では、also は冒頭の so wie に呼応する。したがって also が欠けても意味は通じ、その限りこれは冗語であろうが、やはり安定的な詩脚 (— 格) の都合上、詩人にはこれが不可欠だったのであろう。

詩脚に関連して、もう1点あげよう。

(3) War es **also** gemeint,/ mein rauschender Freund,/ dein Singen, dein Klingen,/ war es **al-
so** gemeint? (Müller, *Danksagung...*)

これを意味していたのか、/ 僕のさざめく友よ、/ お前の歌、お前の響きは / これを意味していたのか?

韻律の点からすれば、(3) は興味深い作例である。この詩の詩脚は、(1)(2) と異なり上拍つきの Daktyrus———であるが、第 1,4 行だけは上拍が———のように 2 つ置かれている。あるいは、———のように、上拍—の前に強拍— (あるいは軽強拍—) が置かれていると解することもできる (他の詩節では oder という 2 音節語や was ich, für die 等の句が上拍———に当てられている)。

以下は後者の解釈によるが、各詩行の中心となるのは Daktyrus 部分であり、also はそこに置かれている (下線部)。そこでは言葉のつながり上、単音節の so ではなく、———となる 2 音節語 also が必要だったのであろう。

——— | ——— | —
——— | ——— | —
——— | ——— | —
——— | ——— | —

(*) Fremdsprache を日本語では外国語と言うが、もともと言語にとって、それをを用いる言語共同体が国家であるかどうかは本質的な問題ではない。アイヌは国家を形成していなくても、文化の媒体となり文化そのものでもあるアイヌ語を持つ。アイヌ語は私たちにとって「外国語」ではない。一般に己の母語ではない言語は、「外語」とでも言うべきであろう。

②接尾辞の付加による語の拡大

接尾辞には、前記のように、名詞をつくる -ung, 形容詞をつくる -en, -ig, -lich 等のように、a, 派生上の機能が明確なものもあれば、b, 不明確なものもある (例えば -e や副詞につく -en 等)。

以下では a, b を分けて論じるが、いずれの場合も品詞の区別はしない。

a, 派生上の機能が明確な接尾辞 — -ig, -lich

• **ewiglich** = ewig (永遠に)

「永遠に」の意を表す場合、一般には auf ewig や [auf] immer und ewig 等が用いられることが多いようである。だが、簡潔な表現を重視する詩人は、詩として 1 音節の形容詞 ewig をそのまま副詞として用いることがある。

(1) Ach, schon ist die Flur verschwunden,/ wo ich selig Sie gefunden!/**Ewig** hin, ihr Won-
netage! (Rellstab, *Auf dem Strom*)

ああ、僕があなたと幸せにも出会った野原は、/すでに消え失せた！/ 悦びの日々は彼女から永遠に失われた！

(2) Die liebe Erde allüberall/ blüht auf im Lenz und grünt aufs neu! /Allüberall und **ewig**
blauen licht die Fernen!/**Ewig...ewig...**(sic) (Wáng-Weí 王維, *Der Abschied*)

大地はいたるところで / 青春のうちに花開き、新たに緑をなす！/ いたるところで、そして永遠に、未来は明るく
青く輝く！/ 永遠に ... 永遠に ...

最初に記せば、ewig は口語の用法から、「非常に長い時間」を意味することがある。例えばメー
リケが ...und küssest **ewig, ewig** gar,/ du tust ihr [=der Liebe] nie zu Willen. 「いくら口づけしても、

本当にいくら口づけをしても、/君は愛の意図に達しないだろう。」(Mörrike, *Nimmersatte Liebe*) と書いた時、**ewig** で意味していたのはこれであろう。

けれども例えば(1)では、失恋に嘆く男性にとって、深い思い出の場である野原が、単に長時間にわたって消え失せただけだとは、誰も解しないであろう。(2)で語られたさすらい人の、大地・自然に託す未来の行路への思いもまた同様である。何度かとり上げた民謡「インスブルックよさらば」で、**dein tu' ich ewig bleiben** という場合も同様である (Volkslied, *Innsbruck...*)。「私は永遠にあなたのもの」と解して初めて恋人の思いが伝わるのではないか。

そのようにして **ewig** が確かに「永遠に」の意味で使われるのだが、一方、主に韻律の都合からなのか、これにさらに **-lich** をつけた **ewiglich** が用いられることがある (→前掲「名詞の動詞化・形容詞化」122頁)。副詞 **ewiglich** は、中高ドイツ語以来の伝統を有することばである (*mhd. êwicliche*)。

(3) **Zwar werd' ich ewiglich mich selber haßen, / der dir mit dieser Hand den Tod gegeben.**

(Collin, *Der Zwerg*)

確かに私は、あなたにこの手で死を与えた私自身を / 永遠に憎むでしょう。

ewiglich の箇所には、同じ3音節の **auf ewig** を置くことができる。だがそうすると、**Trochäus** を基調とする韻律が破たんする。その箇所には— —しか置くことはできないが、**auf ewig** は— —の抑揚を持つ。したがってそこには、「永遠に」という意味を構成しうる他の熟語等を用いるのではない限り、**ewiglich** を置くしかないことになる (なおその場合2つ目の強音は軽強音である)。

語順を **Zwar werd' ich mich auf ewig...** と変えることは可能だが、**mich** が不要に強調されるかもしれない。そうではなかったとしても、(3)のまま **ewiglich** を用いたのは、語の独自のニュアンスのためだろうか。この語の語幹は、**minniglich** の場合のような名詞 (Minne) ではなく形容詞 (**ewig**) であり、語幹それ自体との意味の差異化が生じる可能性がある。辞書を見る限り **ewiglich** には、中高ドイツ語の *êwecliche* の含意があるのか、「とこしえに」「とわに」といった古風な印象が伴うようである (大, ア)。

• **klüglich = klug** (賢明にも)

(4) **Grünt einst uns das Leben nicht fürder, so haben/ wir klüglich die grünende Zeit nicht versäumt,...** (Reil, *Das Lied im Grünen*) (*)

僕らの人生が将来緑にならなくなっても、/ 僕らは [それまで] 賢明にも緑となる時間を浪費せず、...

形容詞 (**klug**) に、形容詞化 (ないし副詞化) 語尾 **-lich** がついた点では、これは先の **ewig-ewiglich** と同類である。同様の構造をもった語として、**froh-fröhlich** なども挙げられるが、この場合はいずれも独立の単語と見なされる傾向が強い。それに両者はともに形容詞としても副詞としても使われる。**klug** も一応そうであるが、付加語的および述語的な形容詞としての使用例はよく目にするが (以下の作例)、副詞の例は多くないようである。

(5) **Es hüpfen herbei und lauschen/ die frommen, klugen Gazell'n;** (Heine, *Auf Flügeln...*)

おとなしく利口なカモシカたちが / こちらへとやってきて、聞き耳を立てる；

(6) **Mutter, die rät mir klug, / wärst du herein mit Fug, / wär's mit mir vorbei!** (Volkslied, *Vergebliches Ständchen*)

母さんが賢くなれと言うのよ、/ 万一あなたが入りこんだら、/ 私はおしまいよ！

その点で、副詞としては *klüglich* が使いやすく——*klüglich* はもっぱら副詞として使用される (独和大) ——、かつ韻律上の理由から選ばれることも多いであろう。そして *rot-rötlich* の場合と同様に、どちらかと言えば *klüglich* の方が、含意が直截的ではないように感じられる。

(*) 詩ではしばしば定動詞倒置による詩文が見られるが (→ 第3章統語論)、韻律の都合に由来して特別な意味をもたない場合も多い。だがここでは定動詞倒置は *wenn* 節 (しかも *auch* 等の意をこめた譲歩節) と判断する。第1行に出る *fürder* は、独和大によれば *fürderhin* (*künftig*) 「今後は、将来は」の意である。

• **selbig = selb** (同一の) → 次節 (補) 官庁語 「・selbig = selb」

b, 派生上の機能が不明確な接尾辞 — -e, -en

• **alleine = allein** (... だけ、1人で [が])

allein には、副詞、形容詞、そして接続詞の用法がある。一方、*alleine* (辞書はふつう *allein* を参照するよう求める) は、副詞として使われるのが普通のようなのである。

(1) *Laß, o Welt, o laß mich sein! / Locket nicht mit Liebesgaben, / laßt dies Herz **alleine** haben / seine Wonne, seine Pein!* (Mörrike, *Verborgenheit*)

ああ世の人よ、/私をそっとしておいてほしい! 愛の贈り物で誘ったりしないで、/この心が、その喜び、苦しみを /感じるだけにしておくれ!

この詩の詩脚は *Trochäus* (—) である。それゆえ、詩句の並びによるとはいえ、一般に *allein* よりも *alleine* の方が用いやすいのであろう (アクセントを伴う *-leine* が *Trochäus* の強弱格にうまくおさまるため)。

一方 *alleine* は、*allein* とともに形容詞としても用いられる。次に見るように、一般には述語的である。用法が述語的であることを明示した辞書さえある (ア)。

(2) *Ich steig' hinauf des Berges Höh', / dort ist man doch **alleine**;* (Heine, *Der arme Peter*)

僕は山の頂にのぼる、/そこでは一人ぼっちだ;

詩行末に置かれた場合には、他の詩行との間の押韻の必要から選ばれたと判断できることが多いようである。ある民謡では *alleine* が *reine* と、直後では *-e* を伴わない *allein* が *Jungfräulein* と押韻している (*Volkslied*, *Gemachte Blumen*)。

だがハイネの詩には、このように用いられる *alleine* を、付加語的形容詞のごとくに (ただし名詞が略されている) 使っているように見える例がある。その時、中高ドイツ語における副詞の名残を示す *-e* は、女性を示す語尾に変わる。

(3) *Dorten, an dem Bach **alleine**, / badet sich die schöne Elfe;* (Heine, *Sommerabend*)

そこ、小川のほとりで、ひとり、/美しい妖精が沐浴をしている;

文をどこで区切るかにもよるが、これは一般には「美しい妖精だけが……」「美しい妖精が……しているだけである」、あるいは「小川のほとりで一人で、美しい妖精が…」と解されるであろう。けれども、(3) はむしろ、「ただ一人 [の女性・妖精] が」とでも言うかのようである。つまり、「ただ一人が、その美しい妖精が、沐浴をしている」*alleine, die schöne Elfe, badet sich...* と。

同様のニュアンスを示す表現を、次のように、ハイネは他でも用いている。

(4) Ich lieb' sie nicht mehr, ich liebe alleine/ die Kleine, die Feine, die Reine, die Eine; (Heine, *Die Rose...*)

もうそれ [=バラ, ユリ, 鳩, 太陽] を愛していない, 僕が愛するのはただ一つだけ / 小さなもの, 細やかなもの, 清いもの, 一つのもの;

ich liebe 以下をふつうに読めば、「僕は… [=第2行] だけを愛している」と解されようが（日本語では、alleine が女性形であることを、第2行の4つの名詞化形容詞とともに自然な形で表せないのが残念である）、私はあえて付加語的形容詞（その名詞化）の意と解したい。（*）

（*）(4) では alleine がコンマなしに次行につながるため、私の解釈に若干無理があることは承知している。ただし例えば西野茂雄氏は(4)を「私が愛しているのは、たったひとつ、…」としており、alleine を実質的に付加語的形容詞と読んでいると解しうる（西野「解説・訳詩」）。

• **dorten = dort** (そこで)

(5) Freu' dich! schon sind da und dorten/ Morgenglocken wach geworden. (Mörike, *In der Frühe*)

喜んで! すでにそこかしこで / 朝の鐘がめざました。

この例に見られる -en は、一般に da 由来の合成副詞に使われる傾向があるようである。例えば、draußen, drinnen, droben (桜井 352)。(5) では、代名詞由来の副詞として、da と並んで代表的な dort に、-en が付されている (dorten に関する通時的・共時的事情については第1章 161 頁)。

dorten は一般に、(5) に見るように da und dorten という形で用いられるようであるが、次のように単独で使われる例も見られる（これは前項でも用いたハイネの詩文である）。

(6) Dorten, an dem Bach alleine, / badet sich die schöne Elfe; (Heine, *Sommerabend*)

そこ, 小川のほりでは, ひとり, / 美しい妖精が沐浴をしている;

dorten は、オーストリアでは今でも使われるが、他の地域では「今日まれになった語句」に属するという（大 'dorten'）。200 年前に生きたハイネにとってどうだったのかは明らかではないが、むしろそれが自覚的に、かつ効果的に使われているようにも感ずる。(6) は、幻想的でおとぎ話風の雰囲気がかもし出される詩である。ひょっとすると dorten のような古語もしくは「辺境に置かれた」unorganisch (*Grimm* 'dorten') 語彙が、その雰囲気をいささかなりとも強めていないかどうか。

• **Gemüte = Gemüt** (心) → 第1節曲用「1) 独自の格変化」の 107-8 頁

動詞や形容詞から名詞をつくる際に使われる -e には、「継続する状態をあらわす名詞」をつくる働きがあるというが（桜井 64）（*）、名詞につけられた -e の機能は明確ではない。

（*）桜井があげるのは Hilfe (< helfen), Liebe (< lieb), Wärme (< warm) など。

• **Geschicke = Geschick** (運命) → 同上 107-8 頁

• **Herze = Herz** (心) → 同上 108-9 頁

• **sonsten = sonst** (そのほかに)

(7) In meinem Sinne wohnt mein Freund nur, / und sonsten keiner und keine Feindesspur.

(Willemer, *Liebeslied*) (*)

私の心のうちには、私の友 [=恋人] だけが住んでいる。他に誰もどんな敵の印も [そこには] ない。

これも第1章でとりあげた (→161頁)。sonsten は先の dorten と同様に、「今日まれになった語句」に属すとされるが、意味は sonst と大差はないと判断される (大 'sonsten')。Grimm を見る限り、sonst と並んで 15 世紀頃から用いられたようである。18 世紀末の古典期にも、用例がいくつも見いだされる。

それは民謡にも見られる。

(8) Die [=sieben Jungfrauen] nimmer ihren Leib den groben Gästen trauen; / die streuen
Palmen aus, und **sonsten** ander Kraut, ... / Die [=fünf Meister] spielen auf der Laut', und
sonst ein Instrument. (Volkslied, *Ländlich, sittlich*)

彼女ら [=7人の少女たち] は [ダンスの際] 自分の体を粗野な客たちに任せない; [結婚式で、勝利の象徴である] シュロを、他にも別の野菜をまく、... / 彼ら [=5人の親方] はリュートを演奏し、他にも何か楽器を演奏する。

und sonst(en) を、同じ (8) の他の箇所と比べてみると、やはり詩脚にもとづいて **sonsten** か **sonst** が選ばれている。この民謡は Trochäus で書かれている。前者の und **sonsten** は、弱拍を伴う強弱拍 $\cup | \cup$ に、後者の und **sonst** は、弱拍を伴う強拍 $\cup | \cup$ に置かれている (後続する弱拍には冠詞 ein が置かれる)。つまり作者は、語の並びによって **sonsten** と **sonst** を使い分けていることが分かる。

(*) ヴィレマーは、ゲーテ『西東詩集』(1819年刊)のうちで、架空の詩人ハーテムの恋人ズライカの名で登場する。ただし同詩集にその詩が採用された際、それにゲーテの手が入っている可能性がある。ここでは Freund と Feind が対比させられているが、Freund は恋人の意である。次項「・vornen」の注を参照のこと。

• **vornen** = **vorn** (手前に・最初に)(9) So hast du, Hafis, auch getan, / wir fangen es von **vornen** an. (Goethe, *Versunken*)

そんな風にハーフィスよ、あなたもしたでしょう、/ 僕らはそれを改めて [最初から] 始めます。(*)

vorn は vor den の縮約形のようなものである。これは von vorn という熟語として用いられることが、少なくないようである。空間的に「前方から」、時間的に「最初から」を意味する (ア 'vorn')。

一方、vorne という単語もあるが、独和大に見出し語としてのもの、意味は vor と同じとされる。語源は不明である (vor と冠詞類との縮約形とは考え難く、vorn に -e が付いた形であろう)。そして問題の vornen は辞書にそもそも見当たらない。語源もやはり不明であるが、vorn に -en が付いた形だと見なしておく。

いずれにせよ、ここでは von vorn の代わりに von vornen が使われていると判断されるが、この -n は、先立つ von が 3 格をとることの類推からつけられた語尾であろうか。もしくは反意語である von hinten からの、あるいは類似した von dannen (そこから去って) 等の表現からの類推であろうか。それとも、これまでに見た dorten, **sonsten** などと同様に、副詞に -(e)n を付すのは、比較的一般的だったのだろうか。

現時点では由来は何と結論づけることはできないが、vornen は、大辞典を参照するかぎり (9) の作者ゲーテの造語ということではなく、ゲーテその他の詩人たちの時代まで時々使われた事実があるようである (Grimm, 'vorn' I 3)。

(*) (9) を含む詩にシューマンが曲を付けたが、(9) はすべて省かれている。冒頭に So とある。これは恋人の巻き毛を手でくしけずる in solchen reichen Haaren/ mit vollen Händen...fahren 「こんなに豊かな髪の毛を / 手全体で ... くしけずる」という愛撫の動作を意味するが、ゲーテは、この詩が収録された『西東詩集』*Westöstlicher Divan* で自己を仮託したペルシャの詩人ハーフィスに対する賛辞の意味を、この詩にこめたのである。前項「・sonsten」の注を参照のこと。

③縮小辞の付加による語の拡大

語の拡大の例は多くはないと記したが、その手段として縮小辞 (-chen, -el, -erl, -le, -lein) のついた語を加えるなら、もう少し例を増やすことができる

以下の語は、民謡ではおそらく特別な意識なしに選ばれている。詩人による詩の場合には、それ自体が独自の意味・ニュアンスをもつ一つの語と了解されることもあるようだが、そうでなければ、主に韻律上の問題を解決することに主眼を置いて選ばれているように思われる。

詩で縮小辞は頻繁に利用されるため、以下、例は最小限度にとどめる。

・ -chen

(1) Ein **Mädchen** oder **Weibchen** w ünscht Papageno sich, (Schikaneder, *Der Vogelfänger...*)

パパゲーノは娘っか女房が欲しいんだ、

ここで -chen を用いたのは行内韻を踏むことに主眼があるかもしれないが、いずれもすなおな愛おしさの表現でもあろう。共通ドイツ語において代表的な縮小辞はこれである。私が見るところ、この使用頻度が最も高い。

詩でよく使われるのは **Liebchen** である。この語はアクセスでは古語とされる。「古語」の意味もあいまいで、いつの時代を指すのかは不明だが、独和大にも相良大にも関連する注記はない。少なくとも「ドイツリート」の詩を見る限り、特に古語という印象はない。以下の (2) は 19 世紀初頭の、(3) は 20 世紀初頭の詩である。

(2) Lieb **Liebchen**, leg's Händchen aufs Herze mein; (Heine, *Lieb Liebchen*)

愛しい恋びとよ / 手を僕の心においておくれ

(3) Ich bin dein, / **Liebchen** fein, / denke **mein!** (Honold, *Liebesbriefchen*)

優しい恋人よ、私はあなたのもの、私のことを想って!

-chen をもつ語の文法的な性は中性だが、その自然の性を尊重する詩人も多い。

(4) ...weil dein **Weibchen** mit dir wohnt in einem Nest, / **ihrem** singenden Gatten / tausend trauliche Küsse gibt. (Hölty, *Die Mainacht*)

... だってお前 [= 小夜鳴き鳥] の妻はお前といっしょに巢のうちですごし、 / 彼女のさえずる夫に / 安らぐ千ものキスをあげるのだから、

-chen は詩では実にいろいろな単語につけられる。以下その例をとりあげてみる (煩瑣になるため、意味および出典としての詩・民謡の記載はさける)。

男性詩人が恋人に向けた詩では、**Kindchen**, **Mädchen**, **Schätzchen** などが用いられ、恋人の容姿について **Gesichtchen**, **Händchen**, **Köpfchen** などが使われている。子守歌や童話のなかでは植物・動物・昆虫等について **Bienchen**, **Imm'chen**, **Mäuschen**, **Pferdchen**, **Rößchen**, **Veilchen** 等が、

眠りにつく子どもの姿態について *Kindchen*, *Prinzchen*, その *Fingerchen*, *Händchen*, *Mündchen*, *Seel'chen* 等が使われている。以上いずれの場合にも、一般に可愛らしさの表現と見なされる。

Hüttchen, *Rädchen*, *Silberglöckchen*, *Stub'chen* など実際の大きさ (小ささ) を、*Briefchen*, *Grüßchen*, *Schläfchen*, *Wiegenliedchen*, *Wörtchen* などちょっとした、時間・空間的に短いそれを、*Aschenfünkchen*, *Legendchen*, *Schrittchen* は比喩的な意味での小ささを意味する。先の *Veilchen* との押韻のために使われた *Weilchen* もそうである。

Bürderchen, *Schwesterchen* などは親しみをこめた言い方である。しかも *Ännchen*, *Gretchen*, *Hänschen* のように、同じ含みは時に固有名詞にも及ぶ。

Hundertteilchen, *Perlentränentropfchen* などという、おもしろい例もある。

Ständchen はすでに固有のドイツ語単語として認知されているが、立ちん坊で (*Stand<stehen*) 演じられる演奏の意で、*-chen* には時間的および比喩的な意味をこめているのであろう。名詞ではないが、詩以外でも使われる *bißchen* もなかなかおもしろい。

なお、ふつう *-chen* がつくると幹母音がウムラウトを起すが、それは *-chen* が「古くは」、i 音を有する *-kîn* だったからである (桜井 64)。(*)

(*) プッチーニの歌劇『ジャンニ・スキッキ』では、「私のお父さん」*O mio babbino caro* という有名なアリアが聞かせどころである。おもしろいことに、この *babbo* 「お父さん」(トスカーナ方言だという) 自体が親密語である上に、さらに *-ino* で親密さを増している。これに当てはまる言葉がドイツ語にあるとすれば *Vati* およびそれに縮小辞をつけた語だが、*Vätichen* (あるいは *Vätilein*) という言い方——日本語ならこれは「おとうちゃん」に近いだろう——を実際するものかどうか (独和大 'Papa'¹) によれば *Papachen* はあるらしい。

・-el

-el は、地域性が強く一般には使用頻度が高くないせいか、手あかのついた *-chen*, *-lein* (後述) にくらべて詩的な、あるいは民謡的なニュアンスが感じられる。

(4) *Da steht der Bub und da steh' ich, / und mit dem fremden Mäd^uel dort / wird er so glücklich sein, (Hoffmannsthal, Hab' mir's gelobt)*

ここにあの若者がおりここに私がいる, / そして彼はそこで知らない娘と一緒に / とても幸福になるのでしょう, これは R. シュトラウスの歌劇『バラの騎士』*Der Rosenkavalier* からの一節であり、その舞台は 18 世紀ウィーンである。これを書いた詩人ホーフマンスタールは、それを意識して、ここでオーストリア方言を用いている。

(4) では *Mäd^uel* という単語が使われているが、縮小辞 *-el* はオーストリア方言だという (河野 14,16)。独和大ではより広く「南部方言」とされている (大 ' . . el)。他にも、*Bub* (共通ドイツ語では *Junge*; *Bube* はそうした意味ではふつう用いない) が使われ、*da* が *hier* の、*dort* が *da* の意で用いられている点——そのことは舞台設定から理解できる——等からも、(4) がオーストリア方言で書かれていることが分かる。

Mäd^uel を含む *-el* の使用例は、民謡では比較的多い。

(5) *Da [=dort oben am Berg] gucket ein fein's lieb's Mäd^uel heraus!...Mein Herzle is' wund, /*

komm', Schätzle, mach's g'sund! (Volkslied, *Wer hat...*)

そこ [= 山の上] では、かわいい娘が外を眺めている!... 僕の心は傷ついている、/ 恋人よやってきて元気にして!

(6) ...bald hab' ich ein Schätzle,/ bald bin ich allein! (Volkslied, *Rheinslegendchen*)

... あるときは恋人がいるけど、/ あるときは私は一人!

おもしろいことに、(6) の *Reinslegendchen* には、Schätzle の他に、Schatz も Schätzlein も登場する。どちらも用いられる文脈に大きな違いはないため、これらのどれを採用するかは——それぞれのニュアンスを別とすれば——韻律・押韻上の都合によると判断される。音節数からすれば、Schätzlein は Schätzle と同じはずだが、前者を用いたのは、次のように他の行の -lein と中間韻 (→ 第1章 122 頁) を踏むためである。

(7) Mein Schätzlein tät' springen/...das Goldringlein fein! (*ebd.*)

私の恋人は飛び跳ねて!... きれいな金の指輪を [もってくる]!

ちなみに後半部分の -lein は、行末の fein と行内韻 (→ 同上) をも踏んでいる。他にもこの詩は、Ringlein hinein!...wem's Ringlein sollt' sein?...Das Ringlein g'hört mein!” 「金の指輪を投げ入れる!... これはいったい誰の指輪なのか... 『それは私のです!』」とあちこちで行内韻を踏む。また1行目に出る tät' は、接続法であるよりは直説法 tut の意と考えられる (→22 頁以下)。

なお、(5) を含む民謡 *Wer hat...* には Äuglein, Liedlein という言葉は出るが、Äugel, Liedel は出ないようである。(6) の題は -legendchen であり本文中に Fischlein, Ringlein, Töchterlein は出るが、-legendel, Fischel, Ringel, Töchterel は用いられていない。-el には、基礎語との関係において相性の良し悪しがあるようである。(5) に出る Herzle, Schätzle の -le については後述する。

• -erl

縮小辞 -erl は、南部・オーストリア地域で使われるという (大' .erl')。実際、次の例はオーストリア方言だという (*Jugend* 136)。

(8) [Es] Kommt a Vogerl geflogen,/...hat a Zitterl im Goscherl... (Volkslied, *Kommt a Vogerl geflogen*)

鳥が飛んでやってくる、/... 紙片を口に加えている ...

いずれも、基礎語の語尾 -el, -e を落として縮小辞 -erl をつけている。以下、落とされた語尾を {} 内に示す: Vogerl < Vog{el} + erl, Zitterl < Zitt{el} + erl, Goscherl < Gosch{e} + erl——この操作によって、結果的に同じ音節数が保たれている。

ちなみに Vogerl の場合ウムラウトは起きていない。これは -erl の古形が i 音を含まなかったからであろうか。*Grimm* でもそこまでの説明はない。だが Vögerl (pl.Vögerle) という使用例もあったと記されている (*Grimm* 'Vogerl')。

なお(8)に出る a は不定冠詞であり (河野 85)、「口 (くち)」Gosche は南部・オーストリア方言である (大,ア) (*). ヴィーンでは、人称代名詞 es の e が落ちて s の形を取ったり、あるいはそもそもそれさえ使わなかったりするというのが (河野 72)、(8) では共通ドイツ語の規範文法にしたがって仮主語 es が落ちているという意味で、冒頭に [Es] を付した。wenn の省略と解することも可能である。

(*) *Knoop* ではより詳しく地域を限定しているが、煩瑣になるのでここではふれない (*Knoop* 404)。

• -le

-le は前掲 -el とともにオーストリア方言だというが (河野 14,16)、ドイツ南部を含めた地域で使われると判断される。縮小辞として -le を使うことが多いのは、シュヴァーベン方言の特徴だという指摘もある (河崎 170)。以下 (10) の採集地は不明だが (ただし南部の可能性が高い)、(9) は南部中央に位置するシュヴァーベンの民謡だとされる。(*1)

- (9) Mädle, ruck, ruck, ruck an meine grüne Seite! / I hab' di gar so gern, i kann di [gut] leide!
(Volkslied, *Mädle*, ruck...) (*2)

彼女~, さあさあさあ僕のすぐそばへ来て! / 君のことが好き, 大好きなんだ!

- (10) Mein Herzle is' wund, / komm, Schätzle, mach's g'sund! (Volkslied, *Wer hat...*)

僕の心は傷ついている, / 恋人よやってきて元気にして!

前者 (9) の i は ich、di は dich の意であると思われる (河野 69)。決め手にはならないが、他のシュヴァーベン方言による民謡にも、i や di が登場する (例えば Volkslied, *Jetzt gang I ans Brünnele*) ことから、ひとまずそう判断する。ruck は rucken (がくんと揺れる) 由来の言葉のようである (大 'ruck')。後者 (10) に出る g'sund については第 1 節「独自な過去分詞」に関連して記した (→91 頁)。

以上のように民謡には -le はよく出るが、それが頻出する民謡を紹介する。

- (11) Widdele, wedele, hinterm Städlele / hält der Bettelmann Hochzeit. / Pfeift das Mäusele,
tanzt das Läusele / schlägt das Igele Trommel... (Volkslied, *Widdele*, *wedele*...)

柳の小枝よ, [ほこりを] 払って! 納屋の裏で / 乞食が結婚式をあげます / ネズミが笛吹き, シラミが踊り, ハリ
ネズミが / 太鼓を叩きます ...

冒頭の *Widdele* は不明だが、*Wiede* 由来と判断して「柳の小枝」と解した。*wedele* の頭は小文字で記されており *wedeln* (払う・振り払う) の命令形ととったが、第 2 詩節には *Wedele* 「[動物] の尾」という言葉が出る。

なお、-le はその前に e を挿入することがある ((11) に出る *Widdele*, *Städlele* は基礎語自体に e 音が含まれる)。そのために、*Mädlele* という単語に出合うことがある (Volkslied, *Vorbereitung...*)。一見 *Mädel* に -e が付されたように見えるが、そうではない。

- (*1) 前に *bißchen* に言及したが、シュヴァーベン方言ではこれもまた -le を付けて、*bissle* というのだそうである (河崎 170)。他に、*bissele*, *bissel*, *bissl*, *bissal* 等を見たことがあるが、煩雑になるので考察は略す。

- (*2) この *leiden können* を「がまんできる」と訳した例に出会ったことがあるが、それは *jn. gut leiden können* 「... が好きだ」(ア) の意であろう。

• -lein

- (12) [Es] Spricht das Mägdelein, Mägdelein spricht: / "Unsere Liebe, sie trennet sich nicht! "
(Wentzig, *Von ewiger Liebe*)

乙女は語る, 乙女は語る: / 「私たちの愛は終わらない!

- (13) Wenn alle Brünnlein fließen, so muß man trinken,... (Eichendorff, *Wenn alle...*)

泉がみな泉が流れ出すと、おのずと皆が〔そこから水を〕飲み、...

-lein は、北部の -chen に対し南部のことばだという。実際はどちらの言い方も今日の共通ドイツ語に見られるが、-lein の使用頻度の方が落ちるようである。-lein は共通ドイツ語では、-chen よりも詩語のイメージが強いからであろうか。塩谷饒氏によれば、-lein は位相上（文体上）、詩的に使われるという（*1）。

造語法から言うと、-lein のために幹母音がウムラウトを起す。それは、-lein が中高ドイツ語では i 音を有する -(e)lîn だったからである（*Duden*）。また -lein を名詞に付す場合、中高ドイツ語の縮小辞 -(e)lîn に見るように、基礎語との間に e が入ることがある。そのため例えば Magd は、Mägdelein の形をとるのがふつうだという（*2）。一方、語中音 e の省略（Synkope）形である Mägdlein は古風なのだという（大 'Mägdelein'）。

(14) Der Eichwald brauset,/ die Wolken zieh'n,/ das Mägdelein sitzt/ an Ufers Grün. (Schiller, *Des Mädchens Klage*)

樾の森がとどろく、/ 雲が流れる、/ 少女は岸辺の緑に / 座っている。

これはひとえに、詩脚 Trochäus にあわせるために、Mägd- の後に -lein 以外の弱音を落としたからである。その箇所が das Mägdelein sitzt だとしたら、韻律はくずれ詩の妙味はうすれる。

(*1) 塩谷饒氏は私の恩師である。氏の文法書には明示されていないが、授業で氏はこう指摘した（杉田のノートによる）。

(*2) 第 1 章で「縮小辞による複合語において、縮小辞の前に e が付される例もある」（156 頁）と記して Mägdelein の例をあげたが、むしろ Mägdelein は標準的な綴りであり、私の記述には間違いがあった。

* * *

以上、縮小辞による語の拡大にふれたが、いずれの縮小辞でも、語幹の母音（語中音あるいは語末音）を略してから付す場合がある。

(15) Wenn ich ein Vög'lein wär/...flög' ich zu dir! (Treitschke, *Der Ruf vom Berge*)

もし僕が鳥だったなら /... 君のところに飛んでいくのだが！

(16) Am meisten aber dauert/ mich Lott'chens Herzeleid; (Overbeck, *Sehnsucht...*)

でも僕に一番悲しいのは、/ ロッテの心の痛み；

Vöglein の Vögl (<Vögel) は語中音消失 Synkope の例である。Lottchen の Lott (<Lotte) や、(13) に見る Brunnlein の Brünn (<Brunnen) などは、語末音消失 Apokope の例である。

なお Lottchen が Löttchen にならない事情は不明である。ゲーテの『ヴェルテル』でも、ロッテの妹は姉を Lottchen と呼んでいる（Goethe, *Werther*, Am 16. Junius）。一方、民謡「ターラウのエンヒェン」（東プロイセンのケーニヒスベルク近郊の民謡）では、Anna は Änn'chen と変音している。固有名詞を変音させるかどうかには、地域によって差があったのだろうか。

あるいは、ちょうど弱変化動詞の直説法 2,3 人称単数 kömmt, kömmt (<kommen) が、例外的に kommst, kommt という形をとると同様に（→84 頁）、Lotte は例外的な単語なのだろうか。

また、縮小辞がついた名詞にさらに縮小辞を付ける例がある。民謡ないしそれに近い詩（台本）でしか見たことはないが、興味深いので実例をあげておく。

(17) Ach Brüderlein, ach Hänselein,/ du willst mich hänseln noch? (Wette, *Brüderchen...*)

お兄ちゃん, ねえハンス (ヘンゼル) ,/ 私をまだからかおうっていうの?

(18) Beim Bier und auch beim roten Wein, / bei einem schwarzbraunen **Mädelein**, hätte deiner bald vergessen. (Volkslied, *Waldvögelein*)

ビールや赤ワインがあって, / 栗色の髪の女の子がいれば, / すぐ君のことを忘れちゃうよ.

いずれも (特に固有名詞では)、第1次縮小辞のついた名詞がそれ自体独立した単語と見なされた結果であろうか。桜井和市氏は *Sächelchen* という語を紹介しているが (桜井 64)、これも同様であろう。ただし (17) の *Hänselein* では、直後に出る *hänseln* (からかう) と、語末の n 音まで含めて語呂合わせをせんとする意図が働いたと思われる。

文献一覧

1) 研究書・詩集等

池上嘉彦『英詩の文法——語学的文体論』研究社, 1967

一ノ瀬恒夫『ドイツ詩学入門』大学書林, 1967

河野純一『ウィーンのドイツ語』八潮出版社, 2006

河崎 靖『ドイツ方言学——ことばの日常に迫る』現代書館, 2008

高津春久編訳『ミネゼング (ドイツ中世叙情詩集)』郁文堂, 1978

古賀允洋『中高ドイツ語』大学書林, 1982

小林松次郎『高級ドイツ文典』三修社, 1965

小牧健夫『ドイツ浪漫派の人々』弘文堂, 1950

サイド, E., 『オリエンタリズム 上』平凡社ライブラリー, 1993

坂西八郎編『楽譜「野ばら」91 曲集』岩崎美術社, 1997

相良守峯①『Mittelhochdeutsche Grammatik (中高ドイツ文法)』南江堂, 1954

—— ②『ドイツ語学概論』博友社, 1965

桜井和市『改訂 ドイツ広文典』第三書房, 1968

佐々木庸一訳編『ドイツ・リート名詩百選』音楽之友社, 1964

佐藤亮一『生きている日本の方言』新日本出版社, 2001

塩谷 饒①『新編ドイツ文典』三修社, 1973

—— ②『オランダ語文法入門』大学書林, 1979

杉田 聡「ベートーヴェン第九『喜びの歌』の謎——『神の前に立つ』のは人間である」(『論座』 [Web 雑誌, <http://webronza.asahi.com>] 2020 年 12 月 18 日付)

柴田 武『日本の方言』岩波新書, 1958

柴田南雄『グスタフ・マーラー——現代音楽への道』岩波新書, 1984

下宮忠雄編著『ドイツ・西欧 ことわざ・名句小辞典』同学社, 1994

須永恆雄編訳『マーラー全歌詞対訳集』国書刊行会, 2014

高橋輝和『古期ドイツ語文法』大学書林, 1994

武市 修『中世ドイツ叙事文学の表現形式——押韻技法の観点から』近代文芸社, 2006

- 太城桂子他『語彙・造語—ドイツ語文法シリーズ⑦』大学書林, 2002
 田中泰三①『ドイツ語方言』郁文堂, 1956
 — ②『スイスのドイツ語』クロノス, 1985
 登張(とばり)正實他「ヘルダーとゲーテ」, 『世界の名著 38 ヘルダー・ゲーテ』(中央公論社, 1979)
 所収
 中島悠爾他『必携ドイツ文法総まとめ』白水社, 2003(改訂版)
 西野茂雄「解説・訳詩」, 『ハイネ詩〜シューマン曲「詩人の恋」作品 48/「リーダークライス」作品 24』(東芝 EMI 株式会社, SERAPHIM EXCELLENT SERIES, EAC-30325) 所収
 野本祥治『ドイツの諺』郁文堂, 1961
 羽仁五郎『ミケルアンジェロ』岩波新書(改訂版), 1968
 藤田五郎『演習本位 新和文独訳』第三書房, 1951
 ポーレンツ, P.『ドイツ語史』白水社(岩崎英二郎他訳), 1974
 三浦鞆郎訳注『ゲーテ詩集』郁文堂, 1970
 矢羽々 崇『「歓喜に寄せて」の物語—シラーとベートーヴェンの「第九」』現代書館, 2007
 山口四郎『ドイツ詩を読む人のために—韻律論的ドイツ詩鑑賞』郁文堂, 1989(第3版)
 水之江有一『図像学事典』岩崎美術社, 1991

- Arnim, A./ Brentano, C., *Des Knaben Wunderhorn*, 1805-8, Dritter Band (German Edition), Kindle 版
 Heidegger, M., *Sein und Zeit*, 1927
 Herder, J.G., *Stimmen der Völker in Liedern*, 1778-9 (in: *Johann Gottfried Herder Werke*, Bd.3, Deutscher Klassiker Verlag, 1990)
 Kant, I. ①, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781
 — ②, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, 1885
 — ③, *Kritik der Urteilskraft*, 1890
Jugend (Abk.) : Mainerts, E.(hrsg.), *Das Liederbuch der Jugend, Unsere schönsten Volkslieder*, C. Bertelsmann Verlag, 1979
 Tieck, L., *Der gestiefelte Kater*, 1812
 Vogelweide, Walter von der, *Gedichte*, German Edition, aristoteles, Kindle 版

2) 辞典

- 以下、冒頭に略号を記す(和書はあいうえお順、洋書はローマ字のアルファベット順)。
 ア / アクセス—『アクセス独和辞典 第3版』三修社(電子辞書)
 岩波 / 岩波独和—『岩波独和辞典(増補版)』(小牧健夫他編, 岩波書店, 1971)
 相良大—『相良大独和辞典』(相良守峯編, 博友社, 1958)
 小 / 小辞典—『中高ドイツ語小辞典(新訂)』(伊東泰治他編, 同学社, 2001)
 大辞泉—『デジタル大辞泉』(小学館)(電子辞書)
 大 / 独和大—『独和大辞典(第2版)』(国松孝二他編, 小学館, 2000)(電子辞書)
Duden—*Duden Deutsches Universalwörterbuch*, 6.Auflage (Bibliographisches Institut GmbH)

(電子辞書)

Grimm—*Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm* (ネット辞書 <http://dwb.unitrier/de/de>)

Knoop—*Wörterbuch deutscher Dialekte* (Knoop,U.(hrsg.), Bertelsmann Lexikon Verlag, 1997)

Lexer—Lexer, M.(hrsg.), *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch* (ネット辞書 <https://woerterbuchnetz.de/?sigle=Lexer#0>)

Opera Arias Composers Singers (オペラアリアのサイト <https://www.opera-arias.com>)

Oxford—『オクスフォード独英辞典』*Oxford German Dictionary*, Third Edition, German-English, Oxford U.P., 2008 (電子辞書)

Oxford Lieder (ドイツ詩のサイト <https://www.oxfordlieder.co.uk>)

Wahrig—*Wahrig Deutsches Wörterbuch*, Einmalige Sonderaufgabe-Ungekürzt, Bertelsmann LexikonVerlag, 1971

引用詩一覧

ローマ字表記作者名のアルファベット順による。作者名の右の()内に置いたのは訳者名である。本文中を含め、詩の題はイタリック体にした。その右の「→」は、本文中で用いた短縮形を示す。

さらに右の()内は、作曲家による付曲がある場合に、作曲家の名や収録歌曲集名などを示す(ただし私が作曲家を把握できていない場合がありうる。また歌曲集名の記載は、著名なものに限った)。なお近年『白鳥の歌』*Schwanengesang* (シューベルト) という呼称は用いないことが多いが、ここではそれを採用した。

Allmers, H., *Feldeinsamkeit* (Brahms)

anonym, *Du Hirte Israel, höre* (Bach)

— , *O Welt, ich muß dich lassen* →*O Welt...* (Bach)

— , *Und dieses ist das Glück* →*Und dieses ist...* (Bach „Hochzeitkantata“)

— , *Wiegenlied* (Schubert)

Baumberg, G., *Als Luise die Briefe ihres ungetreuen Liebhabers verbrannte* →*Als Luise...* (Mozart)

Brentano, C., *An dem Feuer saß das Kind* (R.Strauß)

— , *Zu Bacharach am Rheine* →*Zu Bacharach*

Bruchmann, F., *Am See* (Schubert)

— , *Schwestergruß* (Schubert)

Chamisso, A., *Er, der herrlichste von allen* →*Er, der herrlichste* (R.Schumann „Frauenliebe und Leben“)

Chézy, H., *Romanze* (Schubert „Rosamunde“)

Claudius, M., *Der Mond ist aufgegangen* →*Der Mond...* (Schutz)

Colin, M., *Der Zwerg* (Schubert)

Dehmel, R., *Wiegenliedchen* (R.Strauß)

Eichendorff, J.K., *Frühlingsnacht* (R.Schumann)

— , *In einem kühlen Grunde* → *In einem...* (Volkslied, *In einem kühlen Grunde* に同じ)

— , *Mondnacht* (R.Schumann)

— , *Verschwiegene Liebe* (Wolf)

— , *Waldgespräch* (R.Schumann)

— , *Wenn alle Brunnlein fließen* → *Wenn alle...* (Volkslied, *Wenn alle Brunnlein Fließen* に同じ)

Fallersleben, H., *Winter, ade!* (Volkslied, *Winter, ade!* と同じ)

Fontane, Th., *Tom, der Reimer* (Loewe)

Freiligrath, F., *O lieb, solange du lieben kannst!* → *O lieb...* (Liszt)

Goethe, J.W., *An den Mond* (Fanny Mendelssohn-Hensel)

— , *Auf dem See* (Fanny Mendelssohn-Hensel, Schubert)

— , *„Die Leiden des jungen Werthers“* → *Werther*

— , *Der du von dem Himmel bist* → *Der du von...* (Liszt, Schubert)

— , *„Faust, Der Tragödie erster und zweiter Teil“* → *Faust*

— , *Erlkönig* (Loewe, Reichardt, Schubert, Zelter)

— , *Es war ein König in Thule* → *Es war ein König* (Liszt, Schubert, R.Schumann, Zelter)

— , *Ganymed* (Schubert, Wolf)

— , *Heidenröslein* (Schubert, Silcher usw.)

— , *Jägers Abendlied* (Schubert)

— , *Kennst du das Land, wo die Zitronen blüh'n?* → *Kennst du...* (Beethoven, Schubert, R. Schumann, Wolf)

— , *Nähe des Geliebten* (Beethoven, Schubert, Tomášek)

— , *Rastlose Liebe* (Reichardt, Schubert)

— , *Rettung*

— , *Trost in Tränen* (Schubert)

— , *Verschiedene Empfindungen an einem Platze* → *Verschiedene...*

— , *Versunken* (Goethe „*Westöstlicher Divan*“) (R.Schumann)

— , *Wer nie sein Brot mit Tränen aß* → *Wer nie...* (Schubert, R.Schumann, Wolf)

— , *Wer sich der Einsamkeit ergibt* → *Wer sich...* (Schubert, R.Schumann, Wolf)

Gotter, F., *Pflicht und Liebe* (Schubert)

Groth, K., *Dat du min Leevsten büst* (Volkslied, *Dat du min Leevsten büst* に同じ)

— , *O wüßt ich doch den Weg zurück* → *O wüßt ich doch...* (Brahms)

Haschka, L., *Gott erhalte Franz, den Kaiser* → *Gott erhalte...* (Haydn)

Heine, H., *Allnächtlich im Traume seh'ich dich* → *Allnächtlich...* (R.Schumann „*Dichterliebe*“)

— , *Am Meer* (Schubert „*Schwanengesang*“)

— , *Auf Flügeln des Gesanges* → *Auf Flügeln...* (F.Mendelssohn)

— , *Aus alten Märchen winkt es* → *Aus alten Märchen...* (R.Schumann „*Dichterliebe*“)

- , *Belsatzar* (R.Schumann)
- , *Das Fischermädchen* (Schubert „*Schwanengesang*“)
- , *Das ist ein Flöten und Geigen* → *Das ist...* (R.Schumann „*Dichterliebe*“)
- , *Der arme Peter* (R.Schumann)
- , *Die Rose, die Lilie, die Taube, die Sonne* → *Die Rose...* (R.Schumann „*Dichterliebe*“)
- , *Im Rhein, im heiligen Strome* → *Im Rhein* (Liezt, R.Schumann)
- , *Lieb Liebchen* (R.Schumann)
- , *Lorelei* (Clara Wieck-Schumann, Silcher)
- , *Lotusblume* (R.Schumann „*Myrten*“)
- , *Neue Liebe* (F.Mendelssohn)
- , *Sommerabend* (Brahms)
- Herder, J.G., *Herr Oluf* (Loewe)
 - , *Röslein auf der Heide*
- Hesse, H., *Frühling* (R.Strauß)
 - , *September* (R.Strauß)
 - , *Schlafengehen* (R.Strauß)
- Heyse, P., *Mädchenlied* (Brahms)
 - (Übersetzung), *Auch kleine Dinge können uns entzücken* → *Auch kleine Dinge...* (Wolf „*Italianisches Liederbuch*“)
- Hoffmannsthal, H., *Hab' mir's gelobt* (Hoffmannsthal/R.Strauß „*Der Rosenkavalier*“)
- Hölty, L., *An den Mond* (Schubert)
 - , *An die Nachtigall* (Schubert, Brahms)
 - , *An ein Veilchen* (Brahms)
 - , *Das Minnelied* (Schubert)
 - , *Der Wanderer an den Mond* (Schubert)
 - , *Die Mainacht* (Brahms)
- Honold, E., *Liebesbriefchen* (Korngold)
- 石川啄木『一握の砂』
- Jacobi, J.G., *An Cloë* (Mozart)
 - , *Litanei auf das Fest Allerseelen* → *Litanei* (Schubert)
- Jeitteles, A.E., *Auf dem Hügel sitz' ich* (Beethoven „*An die ferne Geliebte*“)
- Kind, J., *Hänflings Liebeswerben* (Schubert)
 - , *Jäger-Chor* (Kind/Weber „*Der Freischütz*“)
- Klingemann, K., *Frühlingslied* (F.Mendelssohn)
- Klopstock, F.G., *Auferstehen* (G.Mahler, *Symphonie Nr.2*)
 - , *Gegenwart der Abwesenden* → *Gegenwart...*
- Körner, K., *Knospen, Der Schreckenstein und der Elbstrom* → *Knospen* (nach *Grimm*, ‘entzünden’)
 - , *Wiegenlied* (Schubert)

- Korngold, W., *Glück, das mir verblieb* → *Glück, das...* (Korngold „*Die tote Stadt*“)
- Kugler, F., *Ständchen* (Brahms)
- 倉田香月 (村上紀子・マルグリット畑中), *Der Abschied* (出船) (杉山長谷夫)
- Lǐ-Bái 李白 (Bethge, H.), *Der Trunkene im Frühling* (G. Mahler „*Das Lied von der Erde*“)
- , *Von der Schönheit* (ebd.)
- Lorenz, W., *Lorelei* (R. Schumann)
- Mackay, J. H., *Morgen* (R. Strauß)
- Mahler, G., *Die zwei blauen Augen von meinem Schatz* → *Die zwei blauen Augen* (G. Mahler „*Lieder eines fahrenden Gesellen*“)
- Matthison, F., *Adelaide* (Beethoven, Schubert)
- , *Der Geistertanz* (Schubert)
- Mayrhofer, J., *Erlafsee* (Schubert)
- , *Sehnsucht* (Schubert)
- 宮沢賢治, 「永訣の朝」
- , 「白い鳥」
- Moore, Th./Freiligrath, F., *Venezianisches Gondellied* → *Gondellied* (F. Mendelssohn, R. Schumann)
- Mörrike, E., *Auf einer Wanderung* (Wolf)
- , *Der Knabe und das Imm'lein* → *Der Knabe und...* (Wolf)
- , *Elfenlied* (Wolf)
- , *Fußreise* (Wolf)
- , *Gebet* (Wolf)
- , *In der Frühe* (Wolf)
- , *Jägerslied* (Wolf)
- , *Lebe wohl* (Wolf)
- , *Lied eines Verliebten* (Wolf)
- , *Nimmersatte Liebe* (Wolf)
- , *Verborgeneheit* (Wolf)
- Mosen, J., *Der Nußbaum* (R. Schumann „*Myrten*“)
- Müller, W., *Danksagung an den Bach* → *Danksagung* (Schubert „*Die schöne Müllerin*“)
- , *Das Wandern* (ebd.)
- , *Das Wirtshaus* (Schubert „*Winterreise*“)
- , *Der Hirt auf dem Felsen* (Schubert)
- , *Der Müller und das Bach* → *Der Müller...* (Schubert „*Die schöne Müllerin*“)
- , *Der Lindenbaum* (Schubert „*Winterreise*“)
- , *Der stürmische Morgen* (ebd.)
- , *Der Wegweiser* (ebd.)
- , *Des Müllers Blumen* (Schubert „*Die schöne Müllerin*“)
- , *Frühlingstraum* (Schubert „*Winterreise*“)

- , *Im Dorfe* (ebd.)
- , *Morgengruß* (Schubert „*Die schöne Müllerin*“)
- , *Rast* (Schubert „*Winterreise*“)
- , *Rückblick* (ebd.)
- , *Tränenregen* (Schubert „*Die schöne Müllerin*“)
- , *Trock'ne Blumen* (ebd.)
- , *Wohin?* (ebd.)
- Novalis, *Hymne* (Alma Schindler-Mahler, Schubert)
- Ottenwald, A., *Der Knabe in der Wiege* (Schubert)
- Overbeck, C.A., *Sehnsucht nach dem Frühling* → *Sehnsucht...* (Mozart)
- Percy, Th.(Herder, J.G.), *Edward oder Eine altschottische Ballade* → *Edward* (Loewe, Schubert:
Eine altschottische Lied, Brahms: *Edward*)
- Reil, J., *Das Lied im Grünen* (Schubert)
- Rellstab, L., *Abschied* (Schubert „*Schwanengesang*“)
- , *Auf dem Strom* (Schubert)
- , *Aufenthalt* (ebd.)
- , *Frühlingssehnsucht* (ebd.)
- , *Herbst* (Schubert)
- , *In der Ferne* (Schubert „*Schwanengesang*“)
- , *Liebesbotschaft* (ebd.) (*)
- , *Ständchen* (ebd.)
- Rilke, R.M., *Bei dir ist es traut* → *Bei dir...* (Alma Schindler-Mahler)
- , *Im alten Hause*
- Rückert, F., *Du bist dir Ruh'* (Schubert)
- , *Widmung* (R.Schumann „*Myrten*“)
- Schack, A., *Ständchen* (R.Strauß)
- Schikaneder, E., *Der Vogelfänger bin ich ja* → *Der Vogelfänger...* (Mozart „*Die Zauberflöte*“)
- Schiller, F., *An die Freude* (Beethoven, Schubert)
- , *Des Mädchens Klage* (Schiller „*Wallenstein*“) (F.Mendelssohn, Schubert)
- , *Mit dem Pfeil, dem Bogen* → *Mit dem Pfeil...* (Schiller „*Wilhelm Tell*“ ; Volkslied, *Mit dem Pfeil, dem Bogen* に同じ)
- Schlegel, A., *Der Schmetterling* (Schubert)
- Schober, F., *An die Musik* (Schubert)
- Schumann, F., *Meine Liebe ist grün* (Brahms)
- Scott, W.(Storck, A.), *Ave Maria* (Schubert)
- , *Jäger; ruhe von der Jagt!* → *Jäger; ruhe...* (Schubert)
- Seidl, J.G., *Das Zügelglöcklein* (Schubert)
- , *Sehnsucht* (Schubert)

- Shakespear, W.(Bauernfeld, E.), *An Silvia* (Schubert)
 — (Schlegel, A.), *Ständchen* (Schubert)
- Spee, F., *In stiller Nacht* (Brahms)
- Stolberg, F., *Auf dem Wasser zu singen* → *Auf dem Wasser...* (Schubert)
- Tieck, L., *Keinen hat es noch gereut* → *Keinen hat es...* (Tieck „*Die schöne Magelone*“) (Brahms,
 „*Romanzen aus Magelone*“)
 — , *Liebe kam aus fernen Landen* → *Liebe kam...* (*ibd.*)
 — , *Sind es Schmerzen, sind es Freuden?* → *Sind es...* (*ibd.*)
- Treitschke, G.F., *Der Ruf vom Berge* (Beethoven)
- Uhland, L., *Frühlingsglaube* (Schubert)
- Uz, J., *Gott im Frühlinge* (Schubert)
- Vega, L.(Geibel,E.), *Geistliches Wiegenlied* (Brahms)
- Vogelweide, W.v.d., *Under der linden* (Vogelweide)
- Volkslied, *Abendgebet* (Arnim/Brentano „*Des Knaben Wunderhorn*“)
 — , *Ablösung im Sommer* → *Ablösung* (*ibd.*)
 — , *Abzählen bei dem Spiel* → *Abzählen* (*ibd.*)
 — , *All mein Gedanken*
 — , *Als ich bei meinen Schafen wacht* → *Als ich...*
 — , *Als wir jüngst im Regensburg waren* → *Als wir jüngst...*
 — , *Ännchen von Tharau* (Silcher)
 — , *Auf, du junger Wandersmann*
 — , *Das bucklicht Männlein* (Arnim/Brentano, *ibd.*)
 — , *Daß sie hier gewesen*
 — , *Dat du min Leevsten büst* → *Dat du...* (Groth, *Dat du min Leevsten büst* に同じ)
 — , *Der Winter ist vergangen*
 — , *Erziehung durch Genuß* → *Erziehung* (aus „*Anmutiger Blumenkranz aus dem Garten der Gemeinde Gottes*“) (*ibd.*)
 — , *Es ist ein Ros entsprungen* → *Es ist...*
 — , *Gemachte Blumen* (Arnim/Brentano, *ibd.*)
 — , *Glückauf, der Steiger kommt*
 — , *Im Wald und auf der Heide* → *Im Wald und...*
 — , *In einem kühlen Grunde* → *In einem...* (Eichendorff, *In einem kühlen Grunde* に同じ)
 — , *Innsbruck, ich muß dich lassen* → *Innsbruck...* (Isaac)
 — , *Jetzt gin I ans Brünnele*
 — , *Kein Feuer, kein Kohle* → *Kein Feuer...*
 — , *Kinderlieder, Das Federspiel, A.B.C.mit Flügeln* → *Kinderlieder* (Arnim/Brentano, *ibd.*)
 — , *Kommt a Vogerl geflogen*
 — , *Ländlich, sittlich* (Arnim/Brentano, *ibd.*)

- , *Lauf, Müller, lauf*
 - , *Lebewohl* (Arnim/Brentano, *ebd.*) (Silcher)
 - , *Lob des hohen Verstands* → *Lob des...* (Arnim/Brentano, *ebd.*)
 - , *Mädle, ruck, ruck, ruck* → *Mädle, ruck*
 - , *Mir ist ein fein's braun's Maidelein* → *Mir ist...*
 - , *Mit dem Pfeil, dem Bogen* → *Mit dem Pfeil...* (Schiller, *Mit dem Pfeil, dem Bogen* に同じ)
 - , *Muss i denn*
 - , *Rheinslegendchen* (Arnim/Brentano, *ebd.*) (G.Mahler „*Lieder nach Gedichten aus, Des Knaben Wunderhorn*“)
 - , *Rosestock, Holderblüh* (Silcher)
 - , *Sommerlied* (Arnim/Brentano, *ebd.*)
 - , *Treue Liebe*
 - , *Vergebliches Ständchen* (Brahms)
 - , *Vorbereitung zur Tanzstunde* (Arnim/Brentano, *ebd.*)
 - , *Waldvögelein* (*ebd.*)
 - , *Wenn alle Brunnlein fließen* → *Wenn alle...* (Eichendorff, *Wenn alle Brunnlein Fließen* に同じ)
 - , *Wer hat das schön schöne Liedlein erdacht* → *Wer hat...* (Arnim/Brentano, *ebd.*) (G. Mahler „*Lieder nach Gedichten aus, Des Knaben Wunderhorn*“)
 - , *Widele, wedele*
 - , *Winter, ade!* (Fallersleben, *Winter, ade!* に同じ)
- Wagner, R., *Der öde Tag zu letztenmal!* → *Der öde Tag* (Wagner „*Tristan und Isolde*“ , 2.Aufzug, 3.Auftritt)
- , *Isolde, Geliebte!* (*ebd.*, 2.Aufzug, 2.Auftritt)
- Wáng-Weí 王維 (Bethge, H.), *Der Abschied* (G.Mahler, „*Das Lied von der Erde*“)
- Weisse, Z.F., *Der Zauberer* (Mozart)
- Wenzig, J., *Von ewiger Liebe* (Brahms)
- Wesendonck, M., *Der Engel* (Wagner)
- , *Im Treibhaus* (*ebd.*)
 - , *Schmerzen* (*ebd.*)
 - , *Träume* (*ebd.*)
- Wette, A., *Brüderchen, komm, tanz mit mir* → *Brüderchen...* (Wette/ Humperdinck „*Hänsel und Gretel*“)
- , *Sandmännchen und Abendsegen* → *Sandmännchen...* (*ebd.*)
- Willemer, M., *Liebeslied* (Goethe „*Westöstlicher Divan*“) (R.Schumann)

(*) この詩を本稿第1章では誤って *Frühlingssehnsucht* と記した (119, 148, 158, 167 頁)。これを標記のように訂正する。

Healthy lifestyle education in the CLIL classroom

Marshall SMITH¹

(Received:19 APRIL, 2022) (Accepted:25 JULY, 2022)

CLIL 教室での健康的なライフスタイル教育
(内容言語統合型学習)

スミスマーシャル

Abstract

Scientific studies have shown that poor health can lead to lower academic achievement and poor class attendance in school. Teachers report improvements in attendance, attention, behavior, and levels of concentration in schools where healthy eating has become accepted practice. Research also shows that healthy lifestyle habits during adolescence can prevent many of the diseases and disabilities in adulthood and later. Health economists affirm that people with a better education are more likely to choose a healthier lifestyle. Considering this evidence, it is strongly suggested that education on how to have a healthy lifestyle be a mandatory subject for all students – and the younger, the better. However, given the time and curriculum constraints of most schools, this is not an easy goal to achieve. Accordingly, this paper shows how Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine (OUAVM) has incorporated healthy lifestyle education as a content and language integrated learning (CLIL) course in the English program. CLIL, which has other definitions, is a teaching method that involves teaching students about a given subject in a foreign language. It has become the umbrella term for simultaneously learning a content-based subject, such as lifestyle health, through the medium of a foreign language, while concurrently improving one's ability in the foreign language by using it to study the given subject. This paper shows how this integration can be done practically by incorporating eight natural laws of health from the NEWSTART Lifestyle program into a health course also categorized as an English course at OUAVM.

Keywords: academic achievement, CLIL, education, healthy lifestyle, NEWSTART, nutrition

¹Division of Natural Sciences and Physical Education, Department of Human Sciences
Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine
Address correspondence: Marshall Smith, marshall@obihiro.ac.jp
帯広畜産大学人間科学研究部門自然科学・体育学分野
連絡先：スミスマーシャル、marshall@obihiro.ac.jp

Introduction

Research has shown that substandard health conditions can be associated with lower grades in school for students and higher absenteeism (Centers for Disease Control and Prevention, 2014; Kim et al., 2016). Teachers have reported improvements among students in attending classes, attention span, behavior, and levels of concentration in schools where students get a proper nutrition intake on a regular basis (Adolphus et al., 2013). Studies also show the importance of forming healthy lifestyle habits early in life for helping to prevent many of the diseases and disabilities in adulthood and later (Jones et al., 2019; Saffari et al., 2013). Health economists argue that better educated people are more likely to choose healthier lifestyles (Li, 2014). And, last but not least, the rising incidence of new viruses and other diseases, such as COVID-19, has led us to realize the importance of a healthy lifestyle in providing stronger immunity against such diseases (Food and Agriculture Organization of the United Nations [FAO], 2020; Zimmerman & Woolf, 2014).

As a health and nutrition educator, I've had a long-standing interest in such research on health and the importance of its effects on academic performance. The outbreak of past diseases, but especially the COVID-19 pandemic and fallout, have only reinforced the sense of urgency for better health education. The data keeps showing that better health leads to better academic performance and, vice versa, poor health is associated with poor academic achievement and students missing more classes (Nyaradi, 2013).

A paper by Amy Ross (2010) looked at studies concerning nutrition and its relationship to brain function, ability to learn, and social behavior. The studies showed that proper nutrition has a direct effect on student performance and behavior in school, and confirmed that nutrition has a direct effect on neurotransmitters which are important in sending messages from the body to the brain. Interestingly,

obesity contributed to lower achievement in school.

The model in Chrissy Carroll's study in *Today's Dietitian* helps to portray this cyclical relationship between poor nutrition and educational outcomes by showing how a poor diet in early childhood leads to lower academic performance throughout the school years which, in turn, results in fewer job opportunities and lower socioeconomic status that, again, leads to poor dietary choices and a vicious cycle (Carroll, 2014).

With this evidence in hand, it is strongly suggested that healthy lifestyle education be a mandatory subject for all students – the younger, the better. However, given time and curriculum constraints in most education systems, this is not an easy goal to achieve.

Content and Language Integrated Learning (CLIL)

For this reason, Content and Language Integrated Learning (CLIL) plays an essential role. CLIL is a teaching method that involves teaching students about a given subject in a foreign language (van Kampen et al., 2016). It has become the umbrella term for simultaneously learning a content-based subject, such as lifestyle health, through the medium of a foreign language, while concurrently improving one's ability in the foreign language by using it to study the given subject. This dual achievement through a single action is aptly portrayed by the idiom "kill two birds with one stone". The term CLIL was coined by David Marsh, University of Jyväskylä, Finland (1994): "CLIL refers to situations where subjects, or parts of subjects, are taught through a foreign language with dual-focused aims, namely the learning of content and the simultaneous learning of a foreign language (Marsh, 2017)."

The concept of CLIL has also been described as 'content-based instruction (CBI)', 'bilingual education', and a host of other terms; and, for English-specific learning, has been called 'English for Academic Purposes (EAP)'

or 'English medium instruction (EMI)' (Brown, 2018). The advantages of such a dual approach include learning content while developing language skills, being able to integrate language learning into a broader school curriculum, increasing student motivation, fostering thinking and application skills among students who see the importance of language in their areas of interest and real-life situations, and, overall, the potential to create a more natural learning environment (Shraiber & Ovinova, 2017).

Accordingly, with Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine (OUAVM) being a science university with no language degree program, CLIL becomes an essential tool for ensuring language acquisition among students. OUAVM has incorporated healthy lifestyle education as a content and language integrated learning (CLIL) course in the English program where the two subjects can be studied simultaneously. The rest of this paper shows how this is done practically by incorporating the eight laws of health in the NEWSTART Lifestyle program into a health course also categorized as an English CLIL course.

Eight Natural Laws of Health (NEWSTART)

The challenge of health today is to educate and motivate people to adopt a healthier lifestyle, and to help them realize that one can do more for their own health than any doctor, hospital or technological advance (Berger, 2015). The scientific data confirms that the choices we make, hour by hour, day by day, largely determine the state of our health, the diseases we get, and often even when we will die (American Heart Association, 2015).

But what are the right choices? For example, one day a newspaper ad may promote a high carbohydrate diet, the next day a low carbohydrate diet, and another day a no-carbohydrate diet. Which is correct? So much health information flowing through the media is overwhelming, confusing, and often contradictory. People want information

that is reliable, understandable, and scientifically sound.

For these reasons, a course teaching time-tested health principles becomes essential, an attractive course to show students how they can look and feel healthier, stay younger with more energy, and gain a clearer understanding of how to manage their life for maximum health, immunity and wellbeing.

Accordingly, this paper shows how this can be done practically by incorporating the eight natural laws of health in the NEWSTART Lifestyle program. NEWSTART is an acronym for these eight natural laws as shown here: N stands for nutrition, E for exercise, W for water, S for sunlight, T for temperance, A for air, R for rest, and T for trust (NEWSTART, 2021). Following is a more in-depth look at each of these health guidelines.

1. Nutrition

At a global level we see that the majority of deaths are attributed to the category of non-communicable diseases (NCDs); these are chronic, long-term illnesses such as cardiovascular diseases (including stroke), respiratory diseases, cancers and diabetes that collectively account for more than 70 percent of global deaths (Ritchie & Roser, 2018). Yet, research has shown that these diseases are largely avoidable and caused by lifestyle. For example, changing to a simple diet during World War II caused a drop in heart disease and stroke (Esselstyn, updated 2018). Most cancers could be prevented through lifestyle modification (Barnard, 2004). Unfortunately, the average American diet consists of high-fat and low-fiber content (Prasad, 2019).

The American Cancer Society guidelines for nutrition and cancer prevention advise us to choose foods from plant sources (Kushi et al., 2012). Animal products are the largest source of saturated fat and cholesterol, and have no fiber. So, we should limit our intake of high-fat foods, particularly from animal sources. In fact, whole-grain breads, cereals or rice should be our main source of energy (Jonnalagadda,

2011). This should be accompanied by at least 5 servings of fruits and vegetables each day. Fruits and vegetables have been consistently shown to reduce the risk of many lifestyle diseases (Harvard School of Public Health, 2021). And to ensure an adequate intake of fiber, protein and energy, legumes should be included in our diets as well.

The best diet turns out to be plant-based or vegetarian (Berger, 2018). In fact, more people – especially the well-heeled, actors and sports figures – are choosing a vegetarian, and even vegan, lifestyle (Tanenbaum, 2018). With powerful evidence also showing the positive environmental impact of a vegetarian lifestyle, in addition to the health benefits, it only becomes that more essential for ensuring a healthier and safer future.

2. Exercise

The good news is that greater vitality, better health and longer life can be ours through regular, brisk physical activity. A sedentary lifestyle is a direct route to an earlier grave. Inactivity kills us – literally (Kandola, 2018). It is said that everyone has two doctors: the right leg and the left leg (Trevelyan, 1928). The more we use them, the healthier we will be. Exercise is the second natural law of health that helps us feel good by maintaining a desirable weight, strengthening the heart and bones, lowering blood pressure and the LDL cholesterol level, along with lifting depression and relieving stress (Semeco, 2017). And it even slows down the aging process (University of Birmingham, 2018).

Everyone should choose an enjoyable exercise and participate in it regularly. That is the key – sustainability! Walking is the ideal exercise. It's inexpensive, safe, and nearly everyone can do it. You can select your own speed and you can stop when you want. As your fitness improves, you can gradually add speed and time. Other good exercises are swimming, bicycling, gardening, and even golf – if you don't use a cart.

To be effective, active (aerobic) exercise should be brisk

and continuous for at least 15 to 20 minutes. A daily program of 30 to 40 minutes of active exercise will give you maximum benefits (Centers for Disease Control and Prevention, 2018).

3. Water

We all learn early in life that the body is around 45% to 75% water. Our kidneys process more than 175 liters daily. And the body loses about 2.5 to 3 liters daily through the skin, lungs, urine and feces. If this water isn't replaced by drinking plenty of fresh water daily, our body systems suffer and manifest symptoms such as body odor, bad breath, and unpleasant-smelling urine, and eventually more serious complications (Benelam & Wyness, 2010).

Beverages other than water, however, can pose special problems. Many have fat and sugar calories that must be digested like food. Sugar in beverages requires extra water for metabolism. Studies have demonstrated that caffeine and alcohol dehydrate the body because they work as diuretics, contributing to fatigue, dry skin, indigestion and headaches (Stookey, 1999).

How much water should a person drink? Drink enough to keep the urine pale. Since the body loses 2.5 to 3 liters of water a day, and food provides 0.5 to 1 liter of water, we should try to drink 1.5 to 2 liters of water daily. Get into the habit of drinking water throughout the day (Benelam & Wyness, 2010).

4. Sunlight

The fourth natural law is sunlight, which serves an essential role in killing germs, enhancing skin and sleep, boosting the immune system, reducing pain from swollen arthritic joints, relieving certain symptoms of PMS, lowering blood cholesterol levels, and even elevating one's mood, which helps alleviate depression problems. What's more, sunlight on the skin helps the body manufacture vitamin D (Grimes et al., 1996; Raman, 2018).

One must be careful, though, not to get too much.

Sunburn destroys healthy, living tissue and is a major risk for skin cancer (Grey, 2018). Even too much of a good thing can often be hazardous. Up to 30 minutes of sunshine a day is sufficient for most people (Nall, 2018).

5. Temperance

Temperance can be defined as, first of all, abstinence - refraining from unhealthy practices like smoking and alcohol abuse (Wikipedia, 2019), secondly, choosing foods in a more natural or wholesome state (less processing) like whole grain bread and brown (unpolished) rice, and thirdly, seeking for balance and moderation, even in important and healthy things like sunlight mentioned earlier.

There is the story about a woman who heard that carrots were rich in beta-carotene, which the body turns into vitamin A and provides protection against certain cancers. So, she started juicing 2 to 3 kilograms of carrots every day. When her skin started turning a sickly yellowish color, her doctor told her she was getting too much beta-carotene. The story can't be verified, but the effects of a lack of moderation can be in this case (University of Rochester Medical Center, 2021).

Too much of a good thing can be a bad thing when it comes to health. Common sense and moderation will do more for your health than any health fad or "miracle cure". Temperance is an important key to good health that we should learn to apply to all areas of our lives (Kasalika, 2010).

6. Air

Given that air is the backbone of life and all body functions, most people recognize that clean and fresh air is vital to a vibrant life. Air is composed of about 21 percent oxygen, the rest being nitrogen and other gases (Powell, 2018). Since the body operates on oxygen, a steady fresh supply is vital for life. Oxygen is picked up in the lungs from the air we breathe, and delivered to our bodies via the red blood cells. Well-oxygenated cells are healthy and contribute

to overall well-being (Cedar, 2018).

Unfortunately, we have little control over the quality of the air we breathe each day depending on where we live and levels of pollution; but, when possible, steps should be taken regarding indoor air quality and ensuring it is refreshed regularly. Another "feel good" technique is to stop where you are and take a few slow, deep breaths several times a day (Harvard Mental Health Letter, 2009). A final way to flush your body with oxygen is regular exercise mentioned earlier.

7. Rest

Life today has become fast-paced, demanding and exhausting, with people constantly on the go. Yet, the inability to sleep has become epidemic with many people resorting to sedatives and tranquilizers. For other people, getting to sleep isn't the problem, but making time for it with their busy schedules.

Rest is the time for the body to renew itself by restoring energy, removing waste, repairing of damaged cells, managing stress and strengthening the body's immune system against disease (Besedovsky, 2019). Insufficient rest means this process is incomplete, leading to adverse effects over time.

People need different amounts of rest, but the average adult does best on 7 to 8 hours of quality sleep each night. Newborn babies sleep from 16 to 20 hours, while young children usually need 10 to 12 hours (Mental Health America, 2019).

Some tips for getting a good night's sleep include going to bed and waking up the same time each day, avoiding caffeine, not using alcohol as a sedative, daily exercise and sun exposure (National Institutes of Health, 2012).

Your body is your most valuable possession. It may be tempting to skip sleep, but in the long run that is counterproductive (Eugene & Masiak, 2015).

8. Trust

Trust is the mental component of the eight natural laws of health. It refers to possessing a good mental attitude and peace of mind with the ability to not worry too much. More and more people are living longer, healthier lives, but surveys show they are feeling less and less satisfied mentally, and the trust component is dropping (Yang, 2013).

It's been said that the condition of the mind affects health much more than many people realize. Anger, fear, resentment and distrust can actually produce effects on the body that weaken its immune system and open the door to disease. On the other hand, positive emotions like love, joy, faith, and trust produce protective substances that strengthen the immune system and protect the body from disease. Scientific research has actually demonstrated that people who trust in God are healthier than people who don't believe in God (Harrington, 2010).

Trust, thus becomes a vital component of good health and a rewarding life (Bhattacharya, 2003; Mental Health Foundation, 2018).

Conclusion

Since it has been studied and reported that an unhealthy lifestyle leads to lifestyle diseases and related problems - more specifically to lower academic performance and achievement among students - efforts must be made to improve their health, especially through education that leads to lifestyle changes. However, given the time and curriculum constraints, this is not an easy goal to achieve. For this reason, an English CLIL course in basic and practical health was developed at Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine (OUAVM) to ensure that students get the double benefit of improving their health and English skills simultaneously. The eight natural laws of health including nutrition, exercise, water, sunlight, temperance, air, rest, and trust, are incorporated into the curriculum for this purpose.

Feedback has been positive of this approach, especially when employing the eight natural laws of health to encourage students to make practical healthy lifestyle changes for their future.

References

- Adolphus, K., Lawton, C. L., & Dye, L. (2013). The effects of breakfast on behavior and academic performance in children and adolescents. *Front Hum Neurosci.* 7:425. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2013.00425>
- American Heart Association. (2015). Lifestyle changes for heart attack prevention. <http://www.heart.org/en/health-topics/heart-attack/life-after-a-heart-attack/lifestyle-changes-for-heart-attack-prevention>
- Barnard, J. (2004). Prevention of cancer through lifestyle changes. *Evid Based Complement Alternat Med.* 1(3): 233–239.
- Benelam, B., & Wyness, L. (2010). Hydration and health: a review. *Nutrition Bulletin.* <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/j.1467-3010.2009.01795.x>
- Berger, K. (2015). Teaching patients about healthy lifestyle behaviors: communication is the first step. <https://www.hsph.harvard.edu/ecpe/teaching-patients-about-healthy-lifestyle-behaviors-communication-is-the-first-step/>
- Berger, M. (2018). Vegetarian diets may be even better for us than we thought. *Healthline.* <https://www.healthline.com/health-news/vegetarian-diets-may-be-better-than-we-thought#1>
- Besedovsky, L., Lange, T., & Haack, M. (2019). The sleep-immune crosstalk in health and disease. *Physiol Rev.* 99(3): 1325–1380.
- Bhattacharya, S. (2003). Brain study links negative emotions and lowered immunity. *New Scientist.* <https://www.newscientist.com/article/dn4116-brain-study-links-negative-emotions-and-lowered-immunity/>
- Brown, H. (2018). English-medium instruction in Japanese

- universities: History and perspectives. In P. Clements, A. Krause, & P. Bennett (Eds.), *Language teaching in a global age: Shaping the classroom, shaping the world*. Tokyo: JALT.
- Carroll, C. (2014). Better academic performance: Is nutrition the missing link? *Today's Dietitian*. <http://www.todaysdietitian.com/pdf/courses/CarrollAcademicPerformance.pdf>
- Cedar, S. H. (2018). Every breath you take: the process of breathing explained. *Nursing Times* [online] 114(1): 47-50.
- Centers for Disease Control and Prevention (CDC). (2014). Health and academic achievement. https://www.cdc.gov/healthyyouth/health_and_academics/pdf/health-academic-achievement.pdf
- Centers for Disease Control and Prevention (CDC). (2018). <https://www.cdc.gov/physicalactivity/basics/pa-health/index.htm>
- Eugene, A. R., & Masiak, J. (2015). The neuroprotective aspects of sleep. *MEDtube Sci*. 3(1): 35–40.
- Esselstyn, C. Jr. (updated 2018). Abolishing heart disease. T. Colin Campbell Center for Nutrition Studies. <https://nutritionstudies.org/abolishing-heart-disease/>
- Food and Agriculture Organization of the United Nations [FAO]. (2020). Maintaining a healthy diet during the COVID-19 pandemic. <https://doi.org/10.4060/ca8380en>
- Grey, H. (2018). Here's how much damage a really bad sunburn can do. *Healthline*. <https://www.healthline.com/health-news/heres-how-much-damage-a-really-bad-sunburn-can-do#1>
- Grimes, D. S., Hindle, E., & Dyer, T. (1996). Sunlight, cholesterol and coronary heart disease. *QJM*. 89(8): 579-89.
- Harrington, A. (2010). God and health: What more is there to say? In Harper CL Jr. (Eds.), *Spiritual Information 100 Perspectives on Science and Religion, Vol. 2*. Templeton Foundation Press, Philadelphia, USA. https://www.researchgate.net/publication/43408245_God_and_Health_What_More_Is_There_To_Say
- Harvard Mental Health Letter. (2009). Take a deep breath. Harvard Health Publishing. <https://www.health.harvard.edu/staying-healthy/take-a-deep-breath>
- Harvard School of Public Health. (2021). The Nutrition Source. Vegetables and fruits. <https://www.hsph.harvard.edu/nutritionsource/what-should-you-eat/vegetables-and-fruits/>
- Jones, N. L., Gilman, S. E., Cheng, T. L., Drury, S. S., Hill, C. V., & Geronimus, A. T. (2019). Life course approaches to the causes of health disparities. *AJPH Supplement 1*: S48-S55.
- Jonnalagadda, S. S. (2011). Putting the whole grain puzzle together: health benefits associated with whole grains – summary of American Society for Nutrition 2010 Satellite Symposium. <https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC3078018/>
- Kandola, A. (2018). What are the consequences of a sedentary lifestyle? *Medical News Today*. <https://www.medicalnewstoday.com/articles/322910.php>
- Kasalika, J. (2010). Temperance: the secret to good health. *The Nation Online*. <https://mwnation.com/temperance-the-secret-to-good-health/>
- Kim, S. Y., Sim, S., Park, B., Kong, I. G., Kim, J. H., & Choi, H. G. (2016). Dietary habits are associated with school performance in adolescents. *Medicine (Baltimore)* 95(12): e3096.
- Kushi, L. H. et. al. (2012). American Cancer Society guidelines on nutrition and physical activity for cancer prevention. *ACS Journals*. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.3322/caac.20140>
- Li, J. (2014). More education leads to a healthier lifestyle. *The Conversation*. <http://theconversation.com/more-education-leads-to-a-healthier-lifestyle-22540>
- Marsh, D. (2017). CLIL approach: content language integrated learning. <https://www.slideshare.net/IvanaYramain/clil-method-david-marsh>
- Mental Health America. (2019). Rest, relaxation and exercise.

- <https://www.mentalhealthamerica.net/conditions/rest-relaxation-and-exercise>
- Mental Health Foundation. (2018). Physical health and mental health. <https://www.mentalhealth.org.uk/a-to-z/p/physical-health-and-mental-health>
- Nall, R. (2018). What are the benefits of sunlight? *Healthline*. <https://www.healthline.com/health/depression/benefits-sunlight>
- NEWSTART. (2021). <https://www.newstart.com>
- Nyaradi, A., Li, J., Hickling, S., Foster, J., & Oddy, W. H. (2013). The role of nutrition in children's neurocognitive development, from pregnancy through childhood. *Front Hum Neurosci*. 7: 97.
- National Institutes of Health (NIH). (2012). Are you sleep deprived? *MedlinePlus Magazine*. 16-21. https://magazine.medlineplus.gov/pdf/MLP_Summer2012web.pdf
- Powell, J. (2018). What gases make up the air we breathe? *Sciencing*. <https://sciencing.com/gases-make-up-air-breath-8450810.html>
- Prasad, K. N. (2019). *Micronutrients in health and disease*. (2nd ed.). CRC Press, Boca Raton, USA. <https://www.taylorfrancis.com/books/mono/10.1201/9780429243462/micronutrients-health-disease-kedar-prasad>
- Raman, R. (2018). How to safely get vitamin D from sunlight. *Healthline*. <https://www.healthline.com/nutrition/vitamin-d-from-sun>
- Ritchie, H., & Roser, M. (2018). Causes of death. *Our World in Data*. <https://ourworldindata.org/causes-of-death>
- Ross, A. (2010). Nutrition and its effects on academic performance; How can our schools improve? Submitted as thesis for degree of Master of Arts Education at Northern Michigan University. https://www.nmu.edu/sites/DrupalEducation/files/UserFiles/Files/Pre-Drupal/SiteSections/Students/GradPapers/Projects/Ross_Amy_MP.pdf
- Saffari, M., Amini, N., Eftekhari-Ardebili, H., Sanaeinasab, H., Mahmoudi, M., & Piper, C. N. (2013). Educational intervention on health related lifestyle changes among Iranian adolescents. *Iran J Public Health*. 42(2): 172–181.
- Semeco, A. (2017). The top 10 benefits of regular exercise. *Healthline*. <https://www.healthline.com/nutrition/10-benefits-of-exercise#section1>
- Shraiber, E. G., & Ovinova, L. N. (2017). CLIL technology as an innovative method to learn foreign languages at university. *Bulletin of the South Ural State University Educational Sciences*. 9(2): 82-88.
- Stookey, J. D. (1999). The diuretic effects of alcohol and caffeine and total water intake misclassification. *Eur J Epidemiol*. 15(2): 181-8.
- Tanenbaum, S. (2018). 14 celebrities who ditched meat to go vegan or vegetarian. *Everyday Health*. <https://www.everydayhealth.com/diet-nutrition-pictures/influential-celebrity-vegetarians.aspx>
- Trevelyan, G. M. (1928). *Walking*. (1st ed.). Hartford, CT: Edwin Valentine Mitchell. <https://www.biblio.com/book/walking-trevelyan-george-macaulay/d/1045864025>
- University of Birmingham. (2018). A lifetime of regular exercise slows down aging, study finds. *ScienceDaily*. <https://www.sciencedaily.com/releases/2018/03/180308143123.htm>
- University of Rochester Medical Center. (2021). Beta-carotene. UPMC Health Encyclopedia. <https://www.urmc.rochester.edu/encyclopedia/content.aspx?contenttypeid=19&contentid=betacarotene>
- van Kampen, E., Admiraal, W., & Berry, A. (2016). Content and language integrated learning in the Netherlands: teachers' self-reported pedagogical practices. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism* (2018). 21(2): 222-236.
- Wikipedia. (2019). Temperance movement. https://en.wikipedia.org/wiki/Temperance_movement
- Yang, Y. (2013). Long and happy living: Trends and patterns of happy life expectancy in the U.S., 1970–2000. *Soc Sci Res*. (2008) 37(4): 1235–1252.

Zimmerman, E. B., & Woolf, S. H. (2014). Understanding the relationship between education and health. *National Academy of Medicine*. <https://nam.edu/perspectives-2014-understanding-the-relationship-between-education-and-health/>

概 要

科学的研究によると、健康状態が悪いと学業成績が低下し、学校への出席率が低下する可能性があります。教師は、健康的な食事が受け入れられるようになった学校での出席、注意、行動、集中力のレベルの改善を報告しています。研究はまた、青年期の健康的な生活習慣が成人期以降の多くの病気や障害を予防できることを示しています。医療経済学者は、より良い教育を受けた人々はより健康的なライフスタイルを選択する可能性が高いと断言しています。この証拠を考慮すると、健康的なライフスタイルを実現する方法に関する教育は、すべての学生にとって必須の科目であることが強く推奨されます。ただし、ほとんどの学校の時間とカリキュラムの制約を考えると、これを達成するのは簡単な目標ではありません。したがって、この論文は、帯広畜産大学(OUAVM)がどのように英語プログラムの内容言語統合型学習(CLIL)コースとして健康的なライフスタイル教育を組み込んだかを示しています。他の定義を持つCLILは、外国語で特定の主題について学生に教えることを含む教授法です。これは、ライフスタイルの健康などのコンテンツベースの科目を、外国語を介して同時に学習すると同時に、外国語を使用して特定の科目を学習することで外国語の能力を向上させるための総称になっています。この論文は、NEWSTART ライフスタイルプログラムからの8つの自然法則を、同じくOUAVMの英語コースとして分類されている健康コースに組み込むことによって、この統合が実際にどのように行われるかを示しています。

キーワード：学業成績、CLIL、教育、健康的なライフスタイル、NEWSTART、栄養

アタヤル語群において冷感を表す語の再建

落合いずみ

(受付 : 2022 年 4 月 25 日, 受理 : 2022 年 7 月 25 日)

Reconstruction of the words for coldness in Atayalic languages

Izumi OCHIAI*

摘 要

アタヤル語 (オーストロネシア語族アタヤル語群) の「寒い」を表す形式には *gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*tələtu* 型の 3 つの型が見られる。それぞれの型について、アタヤル語と系統的に最も近い言語であるセデック語における同源語を特定し、それぞれの型の起源を探る。まずアタヤル語の *gəhiraq* 型については、Rinax 集落 (ツオレ方言系) に見られる *gihaq* 「北」に関連がある。セデック語における同源語は *rihaq* 「山の裏側」である (アタヤル語群祖語は **Rihaq* または **Rihaq*)。Rinax 集落における「寒い」はそこから派生された *ka-gihaaq* である。早期の形式は *ka-giha<ra>q* と再建され、語根 *gihaq* に対し化石接尾辞 <*ra*> が挿入されたと考えられる (その後 *r* は同一母音間で脱落)。他の集落においては *giha<ra>q* となった後で *r* が *y* に変わった。そしてさらに前次末音節の母音が弱化し *gəhiyaq* を得た。この語は「寒い」としては形態的にも意味的にも改新を経ている。次に *məsəkinut* 型については、セデック祖語に **səkəy* と再建されうる形式があり、意味は「寒い」である。これはアタヤル語 *məsəkinut* 型の高祖語であり、アタヤル祖語では **səkəy* の語尾 *y* を削除し化石接尾辞 *-nut* を付加した。アタヤル語群祖語において本来「寒い」を意味した語はこの **səkəy* である。最後にアタヤル語の *tələtu* 型はセデック祖語の高祖語に **tə-ləətə* (後に **tə-ləətu* に変化) という高祖語があり「冷たい」という意味である。アタヤル語でも *tələtu* 型は本来「冷たい」を表していた。以上よりアタヤル語群祖語における「寒い」は **mə-səkəy*、「冷たい」は **tə-ləətə* と再建される。

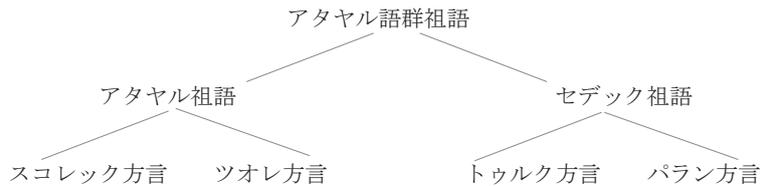
キーワード : アタヤル語 セデック語 寒い 冷たい 山の裏側

1. はじめに¹

アタヤル語群は台湾で話される言語群であり、アタヤル語とセデック語の2つの言語を含む。台湾には十数にのぼる先住民族がいるが、アタヤル族・セデック族もそのうちに含まれる。アタヤル語群をはじめ台湾における

先住民族の言語は全てオーストロネシア語族に属する。小川・浅井（1935：21、559）によると、アタヤル語はアタヤル語スコレック方言とアタヤル語ツオレ方言の2つの方言に大別される。セデック語はセデック語パラソ方言とセデック語トゥルク方言に大別される（図1）²。

図1 アタヤル語群の系統樹



本稿の目的は、セデック語との比較を基に、アタヤル語の「寒い」を表す形式に見られる3つの型の由来を探ることである。まず2節ではセデック祖語において「寒い」を表す形式を再建する。3節では李(1996:211)によって宜蘭縣におけるアタヤル族の諸集落において収集された「寒い」を表す形式を概観した上で3つの型、*gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*talətu* 型が見られることを指摘する。さらに4節では李(1996)よりも約80年前に佐山(1983a、1983b（初出は1918、1920）)によってアタヤル語の分

布域全体で収集された「寒い」を表す形式を概観し、同様の3つの型が見られることを指摘する。但し、「寒い」に対しアタヤル語には3つの型が併存しているは考えにくく、それらのうちどれか1つが本来「寒い」を表す語であり、それ以外は別の起源をもつと考えられる。5節では *gəhiraq* 型が「山の裏側」に由来することを述べる。6節ではセデック祖語において「寒い」を表す形式がアタヤル語において「寒い」を表す形式の1つである *məsəkinut* 型と同源関係にあることを述べ、この形式が

¹本稿は北方言語学会第4会大会（2021年11月7日、オンライン）において行った研究発表を基にしている。この研究発表の際にご助言をくださった方々、また本稿の草稿にご助言をくださった方々に感謝する。ただし本稿の不備は筆者のみに責任がある。

²音素筆者のフィールド調査（2018年から2019年にかけて）によるとアタヤル語スコレック方言の音素は母音 /a e i o u ə/、二重母音 /aw ay uy/、子音 /p β t k ʔ q ʔ s x h z r l m n ŋ j w/ であった。/β/、/ʔ/、/j/ は表記上 *b, g, y* を用いる。母音 *o* と *e* はそれぞれ二重母音 *aw* と *ay* に遡ることがこれまでの調査において観察できた。Huang（1995：16-17）におけるアタヤル語ツオレ方言の音素目録によると、アタヤル語スコレック方言の音素目録と異なる点は子音 /ʈ/ を持ち、母音 /ə/ を持たないことである。/ʈ/ は表記上 *c* を用いる。

また、筆者のフィールド調査（2011年から2020年にかけて）によると、セデック語パラソ方言の音素は母音 /a e i o u/、二重母音 / uy/、子音 /p b t d ʈ k g q s x h m n ŋ l r j w/ である。母音 *o* と *e* はそれぞれ二重母音 *aw* と *ay* に遡る。月田（2009：56-62）によると、セデック語トゥルク方言は母音 /a i u ə/、二重母音 /aw ay uy/ を持ち、子音の音素目録はセデック語パラソ方言とほぼ同一だがセデック語トゥルク方言では /ʈ/ が無い。

なお、本稿におけるセデック語パラソ方言のデータは筆者のフィールド調査からである。セデック語トゥルク方言とアタヤル語のデータは先行研究からの引用である。その場合音韻的表記に近づけるため、先行研究の表記に対し本稿筆者が多少の変更を加えていることがある。

本来アタヤル語においても「寒い」を表していたことを述べる。7節ではアタヤル語において「寒い」を表す別の形式である *talatu* 型が「冷たい」に由来することを述べる。

本稿における冷感を表す語彙「寒い」と「冷たい」の区別については、安部（1985）による体の全部、体の一部という分類方法を用い、体全体で冷感を受ける場合（話者の置かれた環境の気温が低い場合など）は「寒い」、体の一部で冷感を受ける場合（例えば水や食べ物などの物体に触れ、その温度が低いと感じる場合など）は「冷たい」とする。

2. セデック語の「寒い」

アタヤル語において「寒い」を表す形式には3つの型が見られたが、セデック語の方言間における形式は一致している。「寒い」を表す語根はセデック語パラ方言では *sekuy* である。セデック語トゥルク方言では *sakuy* である（Rakaw 他 2006 : 777-778）。これらから再建されるセデック祖語の形式は **səkuy* となりそうである。ちなみに Ochiai（2018a : 24）によると、セデック語パラ方言では、次末音節におけるセデック祖語の母音 **ə* が *e* になる変化（一種の強化）が起きた。

もう1つセデック祖語として再建されうる形式があり、それは **səkəy* となる。この形式では語末音節の二重母音における前部要素が **ə* である。落合（2022 : 116-117）はセデック祖語の母音体系として単母音 /**a, *i, *u, *ə*/ と二重母音 /**aw, *ay, *uy, *əy*/ を再建し

ているが、Ochiai（2018a : 26）によると、セデック祖語の語末音節における **ə* はセデック語パラ方言とセデック語トゥルク方言の両者において *u* に変わる。セデック祖語の語末音節における二重母音 **əy* の前部要素としての **ə* も同様の変化を経たことは落合（2016b : 302）に見て取れる。そのため語末音節における *u* は二重母音 **uy* の前部要素も含めて **u* に由来するものと二重母音 **əy* の前部要素も含めて **ə* に由来するものがある。祖形は **səkuy* と **səkəy* のどちらかということになる。

本稿ではアタヤル語群祖語の祖形として再建されうる「寒い」の祖形は、語末音節二重母音の前部要素が **ə* である **səkəy* だと考える。その根拠となるのがアタヤル語において「寒い」を表す1つの型として挙げられる *mesəkinut* 型であり、アタヤル語のこの型において子音 *k* の直後の母音 *i* が **ə* に由来する可能性が高いことであるが、これについては6節で詳述する。セデック祖語のある段階において **səkəy* の語末音節の二重母音 **əy* の前部要素が *u* に変わり、**səkuy* となった。表1にセデック語のそれぞれの方言における「寒い」の形式とその再建形をまとめた。

また、セデック語パラ方言とセデック語トゥルク方言の形式はともに語根の形式を示している。実際に「寒い」と言うときは、静態動詞を表す接頭辞 **mə-* を付加する。そのためセデック語パラ方言では *mu-sekuy* となる（パラ方言では次末音節より前の音節における母音は *u* に変化する）。セデック語トゥルク方言では *ma-sakuy* となる。

表1 セデック祖語の「寒い」の再建

セデック語パラ方言	セデック語トゥルク方言	セデック祖語
<i>sekuy</i>	<i>sakuy</i>	<i>*səkəy</i> > <i>*səkuy</i>

3. 宜蘭縣におけるアタヤル語の「寒い」

李（1996 : 211）は宜蘭縣における15のアタヤル集落において収集した基礎語彙を挙げているが、その中に「寒

い」も含まれる。15の集落は8つがアタヤル語スコレック方言系の集落であり、残りの7つがアタヤル語ツォレ方言系の集落である。そこに挙げられたデータを表2に示した。表2中の表記には、子音連続間に曖昧母音を明

記するなど本稿筆者が形式の表記に多少変更を加えた。また集落順も分析しやすいように並べ替えてある。左列が集落名、右列が「寒い」を表す形式である。図2は李(1996)に付録の地図を参照に作成した宜蘭縣におけるアタヤル集落の分布を示す地図である。図2のデータから「寒い」を表す語には3つの系統があることがわかる。

ここではそれら系統を型と呼ぶことにする。それぞれの型に含まれる実際の語形の現れには若干の違いが見られる。議論を進める上で型を指し示す統一した形式が必要となるため、それぞれの型について *gəhiraq*、*məsəkinut*、*talətu* という形式を代表とし、*gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*talətu* 型と呼ぶことにする。

表2 宜蘭縣のアタヤル族集落における「寒い」

スコレック方言 集落名	「寒い」	ツオレ方言 集落名	「寒い」
Pyanan	<i>gəhiraq</i>	Skikun	<i>hiyaq</i>
Lmuan	<i>gəhiraq</i>	Mnawyan	<i>hiyaq</i>
Habun Bazinuq	<i>həzaq</i>	Mkgugut	<i>məsəkinut</i>
Syanuh	<i>hiyaq</i>	Pyahaw	<i>məsəkinut</i>
Rghayung	<i>hiyaq</i>	Ryuhing	<i>məsəkinut</i>
Kubaboo	<i>hiyaq</i>	Mtlangan	<i>məsəkinut</i>
Kulu	<i>kələtu</i>	Knngiyan	<i>səkinuc</i>
Haga-Paris	<i>talətu</i>		

図2 宜蘭縣におけるアタヤル集落の分布



3.1 *gəhiraq* 型

アタヤル語スコレック方言の集落では2つの型が見られる。1つが *gəhiraq* である。これと同一の形式は Pyanan 集落と Lmuan 集落に見られる。この型はほかに

も前次末音節が脱落した *hiyaq* という形式も含まれる (Syanuh 集落、Rghayung 集落、Kubaboo 集落)。アタヤル語の本来のアクセント位置は、小川・浅井 (1935 : 22) に「普通語末より第二音節に高低揚音を有す。当該音節

に中間母音ある時、又は語末に長音或は声門密閉音ある時は語末揚音を存す」という記述がある。そして、アクセント位置より前の音節は音声的に弱くなり、母音が曖昧母音に弱化する変化が起きると述べる。また、この *hiyaq* の例のように前次末音節やそれより前の弱い音節はそれ自体が脱落することもあることは落合 (2020a) などで述べられている。

また *gəhiraq* 型には語中の *y* が *z* で現れる形式 *həzraq* も含まれる (Habun Bazinuq 集落)。この子音はアタヤル祖語の **r* に遡り、アタヤル語の方言または方言内の下位方言によって反映形が異なる。Li (1981 : 264 -265) によれば、**r* が *r* として保存されている (下位) 方言は少なく、ほとんどの場合において *y* に変わったが、*r* から *y* への変化の中間段階である *z* で現れることもある。

また *həzraq* では次末音節の *i* が *ə* で現れている。歴史的に考えると、アタヤル祖語のアクセントは次末音節に置かれていたと考えられる。そのため、本来なら次末音節より前の音節において母音の弱化 (曖昧母音化) が起こるのだが、ここでは次末音節に過度な母音弱화가適応されていると考えられる。Li (1981 : 239) によると現代のアタヤル語では次末音節または語末音節にアクセントが置かれ、個人によって差が見られるとする。この例では語末音節にアクセントがあるのだろう。そのため次末音節が音声的に弱いと考えられ母音弱화를引きおこしたと考えられる (4 節も参照)。以上をまとめると、この型のより早期の形式は **gəhiraq* となる。

3.2 *məsəkinut* 型

表 2 におけるアタヤル語ツオレ方言の集落の形式について 2 つの型が見られる。1 つはアタヤル語スコレック方言の集落にも見られた *gəhiraq* 型 (早期の形式は **gəhiraq*) であり、前次末音節の脱落した *hiyaq* という形式が Skikun 集落と Mnawyan 集落に見られる。もう 1 つは *məsəkinut* 型である。Knngiyan 集落ではこの形式とほぼ同一の形式で現れる。ただ語末子音が *c* [tʰ] として現れている。筆者のスコレック方言のフィールドワークでは語末の *t* が音声的に *c* [tʰ] として現れる傾向がみら

れた。Knngiyan 集落の語末の *c* はそのような音変化を経たのだろう。それ以外の集落 (Mkgugut 集落、Pyahaw 集落、Ryuhing 集落、*məsəkinut* 集落) では語末子音は *t* である。また Knngiyan 集落以外の集落では接頭辞 *mə-* を伴った形式である *mə-səkinut* として現れる。この接頭辞は 1 節において述べたように、例えばセデック語トゥルク方言で「寒い」を表す形式 *mə-səkuɣ* についている接頭辞と同一のものである。

3.3 *tələtu* 型

アタヤル語スコレック方言の集落に見られるもう 1 つの型が *lətu* である。この形式は Kulu 集落の *kə-lətu* と Haga-Paris 集落の *tə-lətu* の語根として含まれる。語根 *lətu* の前部にある *kə-* と *tə-* はともに静態的な意味を表す接頭辞である。この形式はセデック語に同源語があり、セデック語パラン方言では *tu-leetu* と言う。セデック語トゥルク方言は Rakaw 他 (2006 : 423) において *tə-lətu* である。セデック語におけるこの語の意味は「寒い」ではない。この語は「冷たい」を意味する。例えば水が「冷たい」と言う場合に用いる。

セデック語の 2 つの方言における同源形式を基に、セデック祖語は **tə-lətu* と再建されそうである。ただし、落合 (2022 : 118-119) によると語末音節における母音 *u* はセデック祖語において **u* に遡る場合と、**ə* に遡る場合の 2 つがある。つまり、セデック祖語における語末音節の *ə* は、パラン方言とトゥルク方言の両方において *u* に変わった。パラン方言とトゥルク方言における語末音節の *u* が、**u* か **ə* のどちらに遡るかを判断できるのは接尾辞の付いた形式であり、この場合は歴史的に古い音素で現れる。パラン方言において接尾辞の付いた形式は *tulute-i* 「冷たくしろ」となる。ここでは語根末母音の *u* が、接尾辞の付いた形式では次末音節に移動し、さらに *e* に変わっている。Ochiai (2018a:24) に述べられるように、パラン方言において次末音節の *ə* が *e* に変わるという一種の強化が見られる。この変化を経たと考えられる。そのため語根末母音は **ə* に遡ると判断でき、セデック祖語は **tə-lətu* へと修正される。ここから語根末母音の

*ə が *u に変わり、セデック祖語後期では *tə-ləətu に なったと推察される³。

上述のようにセデック語では「寒い」(セデック祖語 *səkəy) と「(物体が) 冷たい」(セデック祖語 *tə-ləətə (> *tə-ləətu)) を形式的に区別する。アタヤル語でも本来 *tələtu* は「冷たい」を意味していたが、それが次第に Kulu 集落と Haga-Paris 集落では「寒い」の意味としても用いられるようになったのではないか。この点に関して 7 節で再度取り上げる。

ちなみに、これらの集落の形式に見られた接頭辞は *kə-* (Kulu 集落) と *tə-* (Haga-Paris 集落) だが、セデック語と共通して用いられるのは *tə-* のほうである。しかも Egerod (1980 : 729) においても、小川 (1931 : 241) においてもこの形式に相当する語はそれぞれ *tru?* と *tələto?* と表記されており接頭辞が *tə-* である⁴。そのため本来語根に付いた接頭辞は *tə-* と考えられる。

Kulu 集落ではそれを *kə-* に変える改新が起きたのだろう。この接頭辞は静態動詞を表す接頭辞 *mə-* と対を成し、同じ静態動詞を表す接頭辞の *kə-* であると考えられる。前者が已然相を表すのに対し後者は未然相 (命令形や否定辞の後に用いる形式) を表すという違いがあるが、

Kulu 集落の *kələtu* では接頭辞 *kə-* が已然相として用いられている。

3.4 小結

ここまで宜蘭縣のアタヤル集落では *gəhiraq* 型 (早期の形式 **gəhiraq*)、*tələtu* 型、*məsəkinut* 型の 3 つの型が見られることが分かった。スコレック方言の集落では *gəhiraq* 型と *tələtu* 型が見られた。ツオレ方言の集落では *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型が見られた。どちらの方言にも見られるのが *gəhiraq* 型である。これら 3 つの型とそれぞれの型を持つ方言の対応を表 3 にまとめた。スコレック方言の集落で見られた *tələtu* 型はセデック語の同源形式との比較から、本来「寒い」ではなくて「冷たい」を意味する形式であったと予想される。その他の *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型についてはそれぞれ 4 節と 5 節で考察する。

本節は宜蘭縣におけるアタヤル集落に限って「寒い」の形式を議論したが、次節では 20 世紀初頭に収集されたアタヤル集落の分布域全体における「寒い」の形式を取り上げ、それが宜蘭縣で見られた状況とほぼ同じであることを確認する。

表 3 宜蘭縣のアタヤル語における「寒い」の方言による形式の違い

宜蘭縣スコレック方言集落		宜蘭縣ツオレ方言集落	
<i>gəhiraq</i> 型	<i>tələtu</i> 型	<i>gəhiraq</i> 型	<i>məsəkinut</i> 型

³ただし、セデック語トゥルク方言において接尾辞の付いた形式は Rakaw (2006 : 423) に *pəsətəlu-i* 「冷やせ」として挙げられている。期待される形式は *pəsətəla-i* であり、これでは語根末母音 *u* が *ə* で現れるのだが、実際の形式において語根末母音 *u* は、接尾辞がついても *u* のままで現れている。これはこの語において、語根末の母音が歴史的な *ə から *u* に変わった後で、トゥルク方言では *u* に変化した形式が、基底形式として定着し、そのため語根末の *u* に直接接尾辞を付しているのだろう。類似の現象は Ochiai (2018a : 25-26) にも見られる。

⁴小川 (1931) も Egerod (1980) もアタヤル語スコレック方言を収集した語彙集である。両方の形式において語末に声門閉鎖音が表記されているが、これは本稿では音声的な現れで音韻的なものではないと考えた。Egerod (1980 : 729) では何故か語根の語頭子音 *l* が *r* で表記されている。また小川 (1931 : 241) では何故か次末音節の母音 *ə* が何故か *a* で表記されている。意味に関して述べると、Egerod (1980 : 729) では「寒い」と「冷たい」の両方の意味を指し示す例文が挙げられているが、小川 (1931 : 241) では「冷たい」のみの意味が挙げられている。

4. 二十世紀初頭のアタヤル語の「寒い」

佐山 (1983a, 1983b) にはアタヤル族の分布域全体において各集落から収集した語彙集が含まれるが、その中に「寒い」の項目がある。表4はそのデータを示すが、順番や表記に修正や追加がある。本稿ではまずスコレック方言かつオレ方言かに分けた。因みに Mb'alā 集落と Mesaulay 集落はスコレック方言とツオレ方言が混合した集落である。表中で☆を付けた集落は表2の宜蘭縣のデータと重複して現れている集落である。集落名の右隣の列は佐山 (1983a, 1983b) における実際の表記 (カタカナ表記) を示した。左列ではカタカナ表記を基に本稿筆者が音韻的解釈を加えた音韻的表記を示した。例えばアタヤル語では母音の長短は弁別的ではないのでカタカナ表記において長音で表されている音声は長母音ではなく単母音で示した。またカタカナ表記の多くで語末子音の *q* が「ク」で表記されるが、カも見られる。「カ」の場合は直前の母音 *a* が子音 *q* の後でもエコーのように

音声的に聞こえたためだろう。アタヤル語には子音 *h* の直後の母音 *i* が音声的に低めに発音され *e* として聞こえる場合もある。そのため *hi* に相当する部分が「ヒ」と表記されたりへと表記されたりしている。母音弱化を受ける前次末音節について音韻的表記ではすべて曖昧母音で表記している。ただしツオレ方言では前次末音節の曖昧母音が *a* に変わる傾向が見られるため (Huang 2018 : 273)、ツオレ方言集落のいくつかではこの母音が *a* であったかもしれない。 *məsəkinut* 型に関しては前次末音節がシで表記されている。直前の子音 *s* は母音 *i* を後続させやすい傾向があるのだろうか⁵。曖昧母音が *i* として聞こえているようである。また *məsəkinut* 型の語末は全てツで表記されているため *c* [tʃ] を表すだろうが、これは語末子音の *t* が音声的に *c* になっているためと考え、音声的表記は *t* とした。また図3は森 (1917) や移川他 (1935) を参照に作成したアタヤル集落の分布を示す地図である (薄いグレーの線は太さ多少に違いがあるがすべて河川を示す)⁶。

表4 20世紀初期のアタヤル集落における「寒い」

スコレック方言		ツオレ方言	
集落名	「寒い」	集落名	「寒い」
Sbtunux	ガヘヤ <i>gəhiya?</i>	Klapay	ラヘヤッカ <i>rəhiyaq</i>
Sqoyaw	ガヒヤク <i>gəhiyaq</i>	Qsya	ラハヤック <i>rəhayaq</i>
South Qsya	カヘヂャク <i>gəhiɕaq</i>	Pelungawan	ガヘラ <i>gəhira?</i>
Hakul	ガヒジャック <i>gəhiɕaq</i>	☆Skikun	ヒーヤク <i>hiyaq</i>
Gawgan	ヒジャック <i>hiɕaq</i>	☆Mnawyan	ヒーヤク <i>hiyaq</i>
Tranan	ヒジャック <i>hiɕaq</i>	Pskwalan	ヒーヤック <i>hiyaq</i>
Slamaw	ヒヤク <i>hiyaq</i>	Knazi	ヒジャク <i>hiɕaq</i>
☆Pyanan	ヒーヤク <i>hiyaq</i>	Rinax	ヤハッカ <i>yahaq</i>
Banun	ハエツヤク <i>hiyaq</i>	Mepainux	ガヘヤック、シキノツツ <i>gəhiyaq, səkinut</i>
Skaru	ヒーヤック <i>hiyaq</i>	Gawng Maaw	シキヌツ <i>səkinut</i>
		☆Pyahan	ヒキノツ <i>həkinut</i>
		Cyubus	タラット <i>tələtu</i>
スコレック方言・ツオレ方言混合			
集落名	「寒い」	集落名	「寒い」
Mb'alā	シキノツ <i>səkinut</i>	Mesaulay	シキノツ <i>səkinut</i>

⁵Ochiai (2018b: 136) は鳥居龍蔵が1900年頃に収集したセデック語資料 (鳥居1900a, 1900b) を音韻的に表記し直したが、そこにも同様の現象が見られる。つまり前次末音節またはそれより前の音節において、本来曖昧母音で現れることが期待される母音の子音 *s* の直後で *i* として記録されている。

⁶Mnawyan 集落は図3 (1910年代) では上流側に位置するが、図2 (1990年代) では下流に移住した。

図3 アタヤル集落の分布

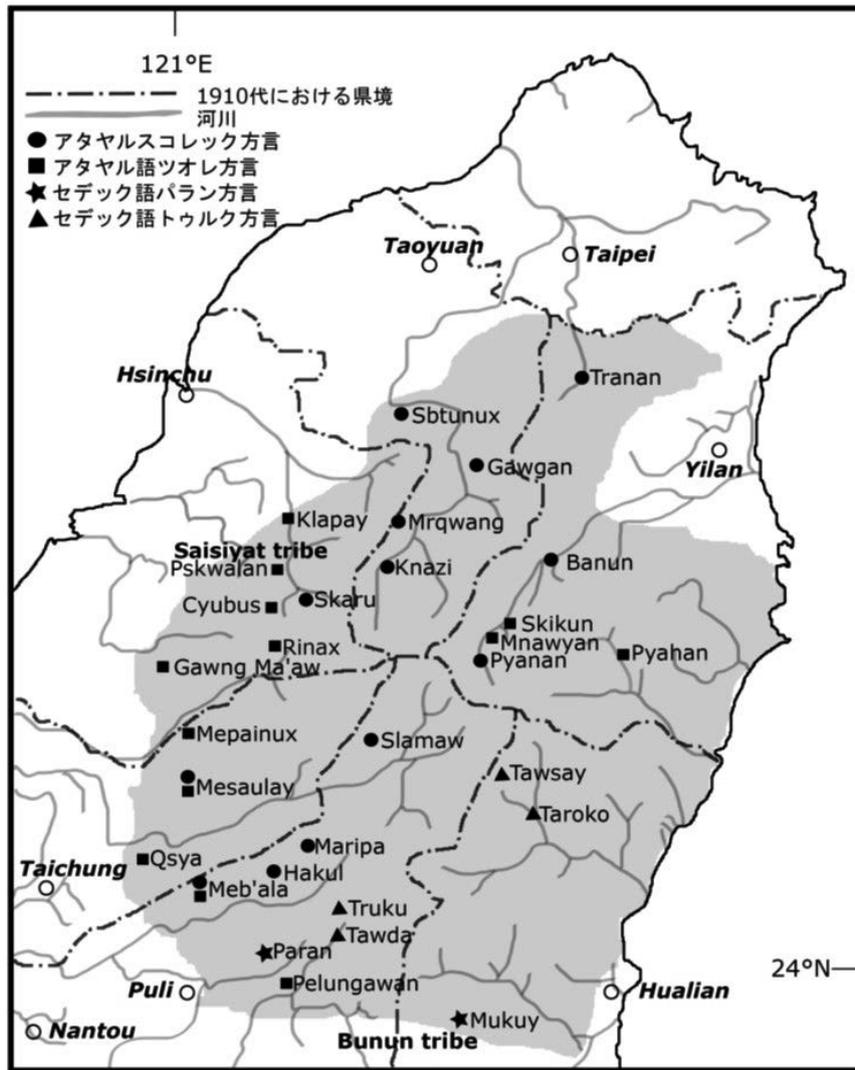


表2と表4において見られる3つの型とそれぞれの型が用いられる方言について表5にまとめた。表4によるとスコレック方言集落に見られるのは *gəhiraq* 型のみである。この形式と同一の形式は Sqoyaw 集落に見られる。Slamaw 集落、Pyanan 集落、Banun 集落、Skaru 集落では *gəhiyaq* から前次末音節が脱落した *hiyaq* として現れる。Sbtunux 集落の形式はカタカナ表記では語末子音が見られないが、語末子音の *q* が失われたというよりも *ʔ* に

変化したと考えた。Li (1981: 248-249) によると *q* から *ʔ* への変化はツオレ方言に一般的に見られる。South Qsya 集落と Hakul 集落では語中の *y* が *ɟ* で現れる。これは2節で述べたようにアタヤル祖語 **r* に遡る子音であり、早期の形式は **gəhiraq* と再建される。Gawgan 集落と Tranan 集落では *gəhiɟaq* から前次末音節が脱落した形式 *hiɟaq* として現れる。

表5 表4 (佐山 1983a、1983b) と表2 (李 1996) のまとめ

	佐山 (1983a、1983b)	李 (1996)
スコレック方言	<i>gəhiraq</i> 型	<i>gəhiraq</i> 型、 <i>tələtu</i> 型
ツオレ方言	<i>gəhiraq</i> 型、 <i>məsəkinut</i> 型、 <i>tələtu</i> 型	<i>gəhiraq</i> 型、 <i>məsəkinut</i> 型

ツオレ方言集落には *gəhiraq* 型と *tələtu* 型と *məsəkinut* 型の3つが見られる。*tələtu* 型は Cyubus 集落で使われる。*tələtu* 型は表2ではスコレック方言集落の側に見られたが、表4でツオレ方言集落にも見られることが分かったため、方言に関わらず *tələtu* 型は見られることになる。2節で述べたように *tələtu* 型は本来「(物体が) 冷たい」を意味する語であり、それがいくつかの集落では「(天候が) 寒い」の意味にも使われるようになったと考えられる。このような意味的拡張はスコレック方言とツオレ方言の両方において起きた。

ツオレ方言集落における *gəhiraq* 型はそのままの形式が Mepainux 集落に見られる。ただし Mepainux 集落には *məsəkinut* 型もある。Skikun 集落、Mnawyan 集落、Pskwalan 集落ではそこから前次末音節が脱落した *hiyaq* が見られる。Knazi 集落では語中子音の *y* が *ɣ* として現れる。Klapay 集落では語頭子音が *r* になった *gəhiyaq* が現れる。これは Qsya 集落の形式である *rəhayaq* でも同様であるが、この形式はカタカナ表記に従えば何故か *h* の直後の母音が *i* はでもなく *a* で現れるようである。落合 (2020a : 64-66) によるとこのように *r* と *g* で揺れる子音はセデック語にも見られ、この子音はアタヤル語群祖語 **R* に遡る。そのため *gəhiraq* 型の早期の形式として再建された **gəhiraq* はさらに **Rəhiraq* に遡ることになる。Rinax 集落の *yahaq* は、*y* と *h* の音位転換が起きているのではないだろうか。本来は *hayaq* であったと考えられる。そうだとすると次末音節の母音が Qsya 集落の形式と同様に何故か *i* から *a* に変わっている。この *i* から *a* への変化は表2の Habun Bazinuq 集落 (スコレック方言) に見られた次末音節における過度な曖昧母音化と関連しているかもしれない。アタヤル語において弱化し

た音節は曖昧母音で現れるが、Huang (2018 : 273) によるとツオレ方言ではこの弱化音節の曖昧母音が *a* として現れる傾向がある。そのため過度の母音弱化を受けた (*rə*) *həyaq* の次末音節の *a* が、Qsya 集落と Rinax 集落では *a* になったのだろう。

ツオレ方言集落において *məsəkinut* 型は Gawng Maaw 集落にそのままの形式が見られる。Pyahan 集落では語頭の *s* が *h* に変わっている。スコレック方言・ツオレ方言混合集落の Mb'ala 集落と Mesaulay 集落においても *səkinut* が見られる。表2において *məsəkinut* 型はツオレ方言集落にのみ見られることから、Mb'ala 集落と Mesaulay 集落はツオレ方言系の *məsəkinut* 型を採用していると考えられる。

表5から分かるのはスコレック方言では *gəhiraq* 型を用いていること、ツオレ方言では *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型の両方を用いていること、*tələtu* 型はスコレック方言とツオレ方言の両者に見られることである。

落合 (2021 : 147) はツオレ方言集落にはスコレック方言の形式が借用されている場合があることを述べている。「寒い」の例でそれを示しているのが Mepainux 集落であり *məsəkinut* 型と *gəhiraq* 型が併存している。多くのツオレ方言集落では本来の *məsəkinut* 型を失いスコレック方言の *gəhiraq* 型に取り換えたと考えられる。表6にアタヤル語の方言において「寒い」を表す3つの型がどのように分布するかまとめた。

5節ではアタヤル語スコレック方言に見られる *gəhiraq* 型 (早期の形式 **Rəhiraq*) の由来について、6節はアタヤル語ツオレ方言に見られる *məsəkinut* 型の由来について、7節ではスコレック方言とツオレ方言の両方に見られる *tələtu* 型の由来について考察する。

表6 アタヤル語の方言別と「寒い」の形式

	<i>gəhiraq</i> 型	<i>məsəkinut</i> 型	<i>tələtu</i> 型
スコレック方言	✓	✗	✓
ツオレ方言	✓	✓	✓

5. アタヤル語の *gəhiraq* 型の由来

この型の由来を探る上で手がかりとなるのが、原住民族委員会 (2012) にアタヤル語ツオレ方言の Rinax 集落の形式として挙げられた「北」を表す語である *gihaq* である。そして同集落にはそれに形式上よく似た形式 *kagihaaq* も原住民族委員会 (2012) に見られ、意味は「寒い」である。「寒い」の形式は *ka-* が接頭辞であると考えられる。語根は *gihaaq* になり、これは *gəhiraq* 型に属する。この接頭辞は 2 節において Kulu 集落の「寒い」の形式 *kə-lətu* に付いている接頭辞と同じものであり、静態動詞を表す。上述のようにツオレ方言では音声的に弱い音節に当たる前次末音節より前の母音が *a* ではなくて *a* で現れることもあるため、Rinax 集落の当該形式では前々次末音節に当たる位置に現れる接頭辞 *ka-* の母音が *a* になっているのだろう。ただ不思議な点は、前次末音節の母音は *i* であり、弱化を受けていない形式で現れていることである。この母音 *i* は本来の母音、つまり歴史的により古い形式の母音を保存していると考えられる。

もう 1 つ不思議な点は、表 4 において 20 世紀初頭に収集された Rinax 集落の「寒い」は *yahaq* (*hayaq* からの *h* と *y* の音位転換) であるのに対し、原住民族委員会 (2012) では語根が *gihaaq* である。前者では前次末音節が落ちているのに対し、後者では保存されている。また前者では音位転換前の形式において語中に *y* を持つが、後者では *y* が見られない。なぜこのような形式上の違いが生じたのかは不明だが以下のようなことがあったのかもしれない。20 世紀初頭の時代に両方の形式を持っていたが片方だけ (*yahaq*) が記録され、その後 *yahaq* は使われなくなり *gihaaq* が残った。

Rinax 集落における *gihaq* 「北」と *gihaaq* 「寒い」は形式的にも意味的にも共通点が見られる。形式上、

gihaaq は *gihaq* の語末音節に対し母音 *a* をひとつ余計に持っている。意味上、「北」に行くほど「寒い」という関連もある。これらから、*gihaaq* 「寒い」は *gihaq* 「北」を語根として派生されたのではないかと考えられるのである。ただここで疑問になるのは落合 (2016a) がセデック語において「東」「西」「南」「北」を表す語は本来存在しなかったと述べていることであり、アタヤル語においてもそうであるはずである。だとすればアタヤル語の *gihaq* 「北」は何を意味していたのだろうか。その手がかりになるのがセデック語の同源語である。セデック語パラン方言に *rihaq* 「山の裏側」という語があり、これが *gihaq* の同源語だと考えられる。この語は落合 (2016a: 32) においても、セデック族によって北の方角を表す語の 1 つとして援用されていると述べられている。アタヤル語の *gihaq* とセデック語の *rihaq* は語頭子音が *g* か *r* かで異なるが、上述のようにこのような子音はアタヤル語群祖語の *R に遡る。そのためアタヤル語群祖語の形式は *Rihaq または *Ribaq と再建される。意味は「山の裏側」である。2 つの形式を建てなければいけないのは語中子音がアタヤル語では *h*、セデック語では *b* でありどちらかに決められないためである。アタヤル祖語は *Rihaq、セデック祖語は *Ribaq となる。

ここまでアタヤル語の *gihaq* 「北」の由来について本来は「山の裏側」を意味していたことを述べた。次に Rinax 集落に見られる形式 *gihaaq* 「寒い」が、*gihaq* を語根として接中辞の挿入により派生されていることを述べる。Li (1985) によればアタヤル語群は意味の不明な特殊な接中辞を持ち、そのアタヤル語群祖語における形式は *⟨ra⟩ である。この接中辞は語末音節における母音の直後に挿入される。Rinax 集落の場合、この接中辞の反映形は *r が脱落して ⟨a⟩ として現れる⁷。Rinax 集落において、語根である *gihaq* に接中辞 ⟨a⟩ が挿入されたなら、*giha⟨a⟩q* として現れるはずであり、この形式は

⁷Li (1981: 265) によると、Rinax 集落では同一母音間で *r に遡る子音が脱落するとある。この場合は古い形式である *giha⟨ra⟩q において、子音 *r が同一母音 *a に挟まれているので、Li (1981) の述べる音韻変化により *r が脱落したと考えられる。

gihaaq「寒い」に一致する。このような接中辞 *⟨ra⟩ の挿入が *gəhiraq* 型を持つ他の集落でも起きたとすれば、*r はほとんどのアタル集落において *y* に変わったため接中辞は ⟨*ya*⟩ として現れるはずである。そして実際 *gəhi⟨ya⟩q* 型には語末音節の前に ⟨*ya*⟩ が挿入されていると考えられるのである。

ただし多くのアタル集落で見られる「寒い」の形式である *gəhi⟨ya⟩q* に至るまでにはその他の音変化も起きていることになる。語根は *gihaq*「北」(古くは「山の裏側」)であり、そこに *⟨ra⟩ が挿入されると **giha⟨ra⟩q* になる。ここから前次末音節の母音弱化が起きて *gəha⟨ra⟩q* になるはずであるが、実際に得られた形式 *gəhi⟨ya⟩q* では次末音節の母音が、期待される母音である *a* ではなくて *i* になっている。ここには上でも述べた過度の曖昧母音化が関連していると考えられる。恐らく早期の形式は *gəha⟨ra⟩q* であっただろうが、アクセントが次末音節から語末音節に移るに従って、次末の *ha* が弱い音節と捉えられるようになり、母音 *a* が *a* に弱体化して *gəhə⟨ra⟩q* になったのではないか。この母音弱化が起きた段階を留めていると考えられるのが表2の Habun Bazinuq 集落の形式 *hə⟨za⟩q* である。そして *gəhə⟨ra⟩q* において *r* の直前の *a* が *i* に変わったと考えられるのだが、これは *r* が *z* へと変化し *gəhə⟨za⟩q* となった後で、またはさらに *y* へと変化し *gəhə⟨ya⟩q* となった後で起きたのだろう。子

音 *y* の前において *a* が *i* に変わるのと同化の一種と考えられる。実際にアタル語に類似の音変化が見られる。例えばアタル語の *hii*「体、実」という形式がある。セデック語パラソ方言での同源語は *hei* であり、次末音節の *e* は *a* に遡ることから早期の形式は *hai* である⁸。そのためアタル語の *hii* では語末母音 *i* の前で直前の *a* が *i* に同化したと考えられる⁹。このような類例があるため *gəhə⟨ya⟩q* から *gəhi⟨ya⟩q* へと *y* の直前の *a* が同化して *i* になったと言えそうである¹⁰。しかし、表4における South Qsya 集落と Hakul 集落の *gəhi⟨za⟩q*、Gawgan 集落と Tranan 集落の *hi⟨za⟩q* では子音 *z* の前でも *i* で現れている。これは子音 *z* が音的に *y* に類似していることを示唆しているだろう。そのため *y* と同様に直前の *a* を *i* に変える働きを持っているのだろう。ただし Habun Bazinuq 集落の形式 *hə⟨za⟩q* のように *i* への変化の見られない形式もある。

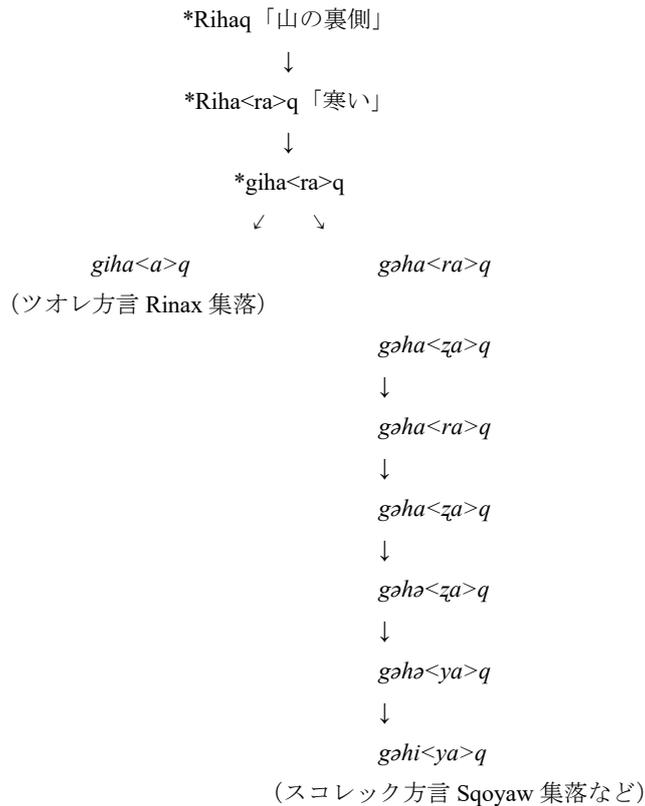
ここまで *gəhəyaq* 型の由来と、関連する音変化について説明した。アタル祖語の *Rihaq「山の裏側」(転じて「北」)が基となっている。これに対し、接中辞 *⟨ra⟩ を挿入した *Riha⟨ra⟩q という形式が派生され「寒い」を意味する語となった。この形式は様々な音変化を経て *gəhəyaq* 型に代表される形式を持つに至った。*Rihaq「山の裏側」から *gəhəyaq* 型に至るまでの変化を図4にまとめた。

⁸Egerod (1980 : 165) では *hi?* だが語末の *?* は音声的な現れと考えた。またセデック語パラソ方言の形式 *hei* から考えて母音は単母音ではなく複母音であると分かるため、*hii* のように同質の母音が並んでいると考えた。因みに小川 (1931 : 89) ではアタル語の同形式が *hei* と表記されている。これは *h* の直後の *i* が音声的な母音の低下を受けて *e* に変わったものである。

⁹1920年代に収集された小川・浅井 (1935 : 578) のセデック語パラソ方言語彙では当該形式が *he:di* として挙げられていることから、母音間に子音が存在していたことがわかるが、セデック語においてもアタル語においてもこの子音は消失した。

¹⁰アタル語の *hii*「体、実」も *gəhi⟨ya⟩q*「寒い」も次末音節における *a* が後続の *i* または *y* に同化している。類例はセデック語トゥルク方言にも見られる。落合 (2016b:304) は語末音節がセデック祖語の二重母音 *əy に由来する語の場合、セデック語トゥルク方言において接尾辞が付き二重母音の前部要素 *ə が次末音節に移動するとこの母音が *i* に変わると述べる。これは後続する *y* への同化と考えられる。アタル語、セデック語トゥルク方言ともに、次末音節において曖昧母音の後続の *y* (または *i*) への同化が起きている点が共通している。

図4 アタヤル祖語 *Rihaq 「山の裏側」から *gəhəyaq* 型「寒い」に至るまで



6. アタヤル語の *məsəkinut* 型の由来

前節で *gəhəyaq* 型は本来アタヤル語群祖語で「山の裏側」を意味した語である *Rihaq (アタヤル祖語の形式) からの派生であることを述べた。だとすればアタヤル祖語において本来「寒い」を表す語は上記の2つ以外の形式ということになる。その候補として挙げられるのが *məsəkinut* 型である。

アタヤル祖語で *məsəkinut* 型が本来「寒い」を表す形式だとしたら、この形式はセデック祖語で「寒い」を表す語根形式である *səkuy または *səkəy と関係があるのだろうか。少なくとも *məsəkinut* の語根である *məsəkinut* において、語頭の音配列 *sək* まで是一致的だがそれより後の音配列は一致していない。

ここで考えられるのが接尾辞の付加の可能性である。4節では機能の不明な接中辞 *<ra> について議論したが、Li (1985) によるとアタヤル語群には接中辞の他に機能

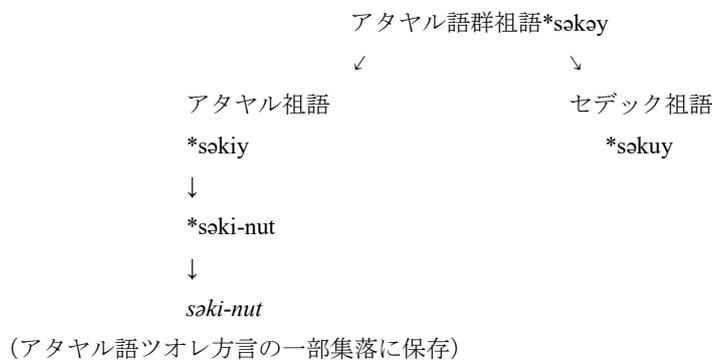
の不明な接尾辞も見られる。そのような接尾辞には多様な形式が見られ、小川・浅井 (1935 : 25 -26) では *-niq* や *-gal* など 10 以上の形式が挙げられている。これらの接尾辞は音節構造としては 1 音節であり、CVC または CV という構成である。その中に *-nux* という形式がある。例えばオーストロネシア祖語 *batu は「石」を意味する語だが (Wolff 2000 : 759)、Li (1981 : 294) によるとアタヤル語群祖語では **-nux* を付加し **batu-nux* となる。この *-nux* と形式上よく似ているのが *məsəkinut* 型の語尾に見られる *-nut* である。*məsəkinut* 型から *-nut* を除けば *səki* が残るが、これが「寒い」の語根だろうか。だとしてもセデック祖語の *səkuy または *səkəy とは語尾が異なる。まずセデック祖語の形式に見られる語末子音の *y がアタヤル語の語根と考えられる *səki* には見られない。これには接尾辞の付加に伴う語根末の消失が関わると考えられる。例えばオーストロネシア祖語に **kaSiv* という形式があり意味は「木」であるが (Blust and

Trussel 2010)、これはアタヤル語群祖語の早期において *kahuy と反映される (Li 1981 : 248)。その後この形式に対し *-niq という接尾辞が付くのだが、その際に語末子音の *y* が削除されて *kahu になった形式に対して *-niq が付き、Li (1981 : 248) によるともう 1 つのアタヤル語群祖語では *kahu-niq となる。そして例えばアタヤル語スコレック方言では *kəhuniq* となる (小川 1931 : 96)。このような語末子音の *y* の消失がアタヤル語の *məsəkinut* 型に対し *-nut* が付加する過程で起きたのではないだろうか。語根はアタヤル祖語においてもセデック祖語と同一形式だったとすれば *səkuy に対し *-nut* が付加する際、語末子音の *y* が脱落した *səku- に付加したら、*səku-nux という形式が生じる。もう 1 つのセデック祖語の形式である *səkəy に対し *-nut* が付加する際、語末子音の *y* が脱落した *səkə- に付加したら、*səkə-nux という形式が生じる。このようにして生じた *səku-nux と *səkə-nux のどちらの形式も、実際に得られる形式であ

る *məsəkinut* 型と比べると次末音節の母音が一致しない。実際の形式では *i* であるのに対し、仮定上の形式では *u* または *ə* である。

ここで考えられる可能性が 4 節で議論した *y* の直前における *a* の *i* への変化である。セデック祖語の形式はこれまでのデータにより *səkuy または *səkəy が建てられたが、アタヤル語の形式 *səkinut* を考え合わせると、後者の方が祖形として正しい形式だと判断されそうである。後者の形式 *səkəy では語末子音 *y* の直前が *a* である。アタヤル祖語もこの形式を「寒い」を表す語として持っていたが、*y* が直前の *a* に同化を引き起こし *səkəy から *səkiy になったのではないか。そして *səkiy から語末子音の *y* を取り除いた形式 *səki に対し接尾辞の *-nut* が付き、*səki-nut が生じたのだろう。まとめるとアタヤル語群祖語において本来「寒い」を意味していた語は *səkəy ということになる。この祖形からセデック語、アタヤル語に至るまでの変化を図 5 にまとめた。

図 5 アタヤル語群祖語 *səkəy 「寒い」から *səkinut* に至るまで



7. アタヤル語の *təlatu* 型の由来

təlatu 型の由来と変遷を考える材料として、小川 (2006) を取り上げたい。小川 (2006) では、小川自身が 1920 年代から 1930 年代にかけて台湾において収集した台湾オーストロネシア諸語の基礎語彙をまとめた資料であり、その頃の時代に、小川以外の人物が台湾において収集した語彙や、台湾オーストロネシア諸語の資料もその時代以前に出版された資料からの語彙も含まれる。小川

(2006 : 488-489) 語彙項目の 1 つに「寒 cold」が挙げられている。そこに挙げられた形式と注釈などを表 7 に示す。「寒 cold」については 20 の資料からの形式が挙げられている。アクセントなどを示すと考えられる符号が付いている場合は小川 (2006) の表記のままに表示した。各形式の左列に 1a から始まり 18 で終わる番号が振られているが、これは小川 (2006) が用いた資料番号である¹¹。

表7 小川 (2006 : 488-489) に見られるアタヤル語の「寒い」関連の語

1a	gahíyaq, maháyaq; taratu (ツメタイ)	8	hayak, kaiya, muhaiyak; tereto ツメタイ
1b	hijak; telito (冷)	9	hayak
1c	haiyak 寒冷, telato 涼, telat ksha 冷水 (液)	10	heyak
1d	mahíjak, sāgun 涼ム, bassao 冷す, basāgun 冷す, telit 冷カイ	13a	rehak ¹²
1e	gahiak, gahíjak, massao 冷イ, bassui 冷 セ	13b	makisinot; 寒冷, telato 涼, telat ksha 冷水 (液)
3	hejak, hajak	14	sekinut; terato (ツメタイ)
4	hai-ak	15	sikinut
5a	hahyack, haiyak	16	hayak
5b	masikinot 寒冷, telato 涼, lahaeya; haiyak 冷	17	hayakun
6	hāyák	18	maskenut

まず表7において最も多く見られる語は *gəhiraq* 型である。資料番号 15 と 18 を除く全ての資料で見られる。これらの資料はスコレック方言を話す集落で収集されたと推察される。または、本来はツオレ方言の集落だが、スコレック方言化を受けて *gəhiraq* 型を取り入れた集落で収集されたと推察される。次に、*gəhiraq* 型よりも少ないが *masəkinut* 型も見られる。この型を示す形式は太字で示している。資料番号 5b、13b、14、15、18 で見られる。これらの集落はツオレ方言を話す集落だと推察されるが、これら資料の中 5b では *masəkinut* 型の他に

gəhiraq 型も見られることから、5b はツオレ方言とスコレック方言の混合集落の可能性がある。

さらに、表7には本節の主眼である *təlatu* 型も見られる。*təlatu* 型が現れる際には必ず注釈が付け加えられている。このように注釈を必要としたのは、*təlatu* 型が「寒い cold」の意味と関連しながらも、異なる意味を持つことを示そうとしたためと見受けられる。*təlatu* 型を示す箇所は影を付けた。資料番号 1a、1b、1c、1d、5b、8、13b、14 で見られる。注釈を見ると、5b と 13b における「涼」を除き、全て「冷(たい)」を表していることがわかる。

¹¹ 資料番号の出典は小川 (2006:ix) を基にすると以下であると思われるが、不明な資料も少なくない。伊能 (1998) は資料として複数回現れるが、これらは語彙を採取した集落が異なっていることを示す。1a (小川 1931)、1b (丸井 1915)、1c (「飯島」とあるが資料は不明、著者は飯島幹太郎氏だと思われる)、1d (「渡辺」とあるが資料は不明、著者は渡辺栄次郎氏だと思われる)、1e 佐佐木 (1918)、3 (「緒方」とあるが資料は不明)、4 (Guérin 1868)、5a (Dodd 1882)、5b (「飯島」とあるが資料は不明、著者は飯島幹太郎氏だと思われる)、6 (Schetelig 1868)、8 (伊能 1998 [調査は 1897 年]) 9 (伊能 1998)、10 (伊能 1998)、13a (伊能 1998)、13b (「飯島」とあるが資料は不明、著者は飯島幹太郎氏だと思われる)、14 (中西 1900) 15 (「中西」か「森(丑之助)」とあるがどちらかは不明。資料も不明。中西は中西潔氏だと思われる)、16 (伊能 1998)、17 (伊能 1998)、18 (伊能 (1998) または「杉山(文悟)」とあるが、どちらかは不明。杉山氏の資料も不明。)

¹² 伊能 (1998 : 163) によるとこの形式は Watoan 集落で収集されたものであるが、佐山 (1983b : 199) に挙げられた Rinax 集落の形式「ヤハッカ」(表 4) に酷似している。これは Watoan 集落と Rinax 集落の密接な関係を裏付ける 1 つの証拠を示している。

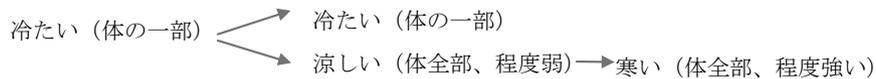
1c と 13b には *tələtu* 型を含む名詞句 *tələtu qəsiya* (音韻的表記への変換は本稿筆者による) が見られ、「冷たい水」を表しているという¹³。このように *tələtu* 型が挙げられたほとんどの資料において、「冷たい」の意味が付されている。*tələtu* 型が意味する「冷たい」は、体全体に受ける冷感を表す *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型(ともに「寒い」の意味)とは異なり、体の一部に受ける冷感を表す。

資料番号 5b と 13b では *tələtu* 型に「涼」(「涼しい」を表すと考えられる)の意味が付されている。「涼しい」という意味であれば、体全体に受ける冷感を表すと言えるだろう。*tələtu* 型は上記のように体の一部で感じる「冷たい」のほかに、体全体で感じる「涼しい」の意味もあるようだ。資料番号 13b については、*tələtu* 型に対し「冷たい」と「涼しい」のどちらの意味も挙げられている。「涼しい」は、体全体で感じるもう 1 つの冷感を表す語「寒い」よりも、冷感の程度が弱いと言える。

セデック祖語の同源語 *tə-ləətə (> *tə-ləətu) が「冷たい」の意味として再建されることから、アタル

語においても本来 *tələtu* 型は「冷たい」を意味していたと考えられる。表 7 でも「冷たい」の意味で用いられている場合が多い。アタル語において本来この語は体の一部で受ける冷感「冷たい」を表していたが、それが後に体全体で受ける冷感「涼しい」をも表すようになったのではないか。アタル語において「寒い」を表すには *gəhiraq* 型と *məsəkinut* 型が用いられるが、冷感の程度が低い「涼しい」を表す語は存在していなかったのかもしれない。*tələtu* 型が本来の意味である「冷たい」から意味的をさらに拡張して、「涼しい」を表すようになったのではないか。実際、セデック語パラン方言において「涼しい」を表す語は見られず、日本語の借用語 *suzusi* を用いているほどである。しかも、その後さらに *tələtu* 型が「涼しい」から「寒い」へ冷感の強度を上げたと考えられる。3 節における李 (1996) の記録と 4 節における佐山 (1883b) の記録では *tələtu* 型が「寒い」の意味で挙げられているからである。アタル語における *tələtu* 型の意味的変遷を図 6 にまとめる。

図 6 アタル語における *tələtu* 型の意味的変遷



アタル語の *tələtu* 型について、アタル祖語の形式を考えてみる。セデック祖語は *tə-ləətə (> *tə-ləətu) であった。前次末音節と次末音節において *əə という母音連続が見られる。アタル語における *tələtu* の語例を見渡すかぎり、セデック語に見られるような母音連続は見られない。同一母音の母音連続 *əə から同音脱

落が起きて *a* が 1 つだけになった可能性がある。アタル語群祖語の形式が *tə-ləətə だとすれば、アタル祖語では同音脱落が起き、*tə-lətə になってその後語末母音が *u* に変わって *tə-lətu を得たことになるだろう¹⁴。

さらに、表 7 において資料番号 1d と 1e に *gəhiraq* 型でも *məsəkinut* 型でも *tələtu* 型でもない形式が現れる。

¹³Huang (1993 : 16) によるとアタル語 (スコレック方言) において、静態動詞とそれによって修飾される名詞の語順は、名詞が前で静態動詞が後の場合もあれば、静態動詞が前で名詞が後の場合もあるという。表 7 の「冷たい水」の例では後者の語順を採っている。

¹⁴ただし、語根が *ləətə であるのは、アタル語群の典型的な語根としては異質である。アタル語群において典型的な語根は 2 音節から成るが、*ləətə は 3 音節である。そのため語頭 *lə- は何らかの接頭辞であったのではないかと考えられないこともないが、今のところは判断できない。

これらに下線を引いて示した。小川（1931：151）に挙げられた当該形式の語根は *basaw* である¹⁵。1d において下線を引いた語の 2 つ目の語はこの形式を表している。動作主態では *masaw* となる（本来なら接中辞 <əm> が付くが、語頭が唇音 *b* の場合は鼻音代替が起きて *b* が *m* に置き変わる）¹⁶。1e において下線を引いた語の 1 つ目はこの形式を表している。この形式の意味は小川（1931:151）によると「冷ます」（例えば湯など）である。非動作主態・場所主語では接尾辞 *-an* が付いて *bāsaw-an* となる。この形式も小川（1931：151）に挙げられている。だとすれば非動作主態・対象主語では接尾辞 *-un* が付いて *bāsaw-un* になるはずである。これに相当する形式が 1d において下線を引いた 3 つ目のもの *basāgun* と考えられる。ただし、この表記を見る限り、語根末子音に相当する接尾辞の直前の子音は *g* で現れているため、音韻的表記は *bāsag-un* になるだろう。以下本節において *basāgun* のような立体は小川（2006）における表記、*bāsag-un* のような斜体は本稿筆者による解釈を加えた音韻的表記を示す。次に、1d において下線を引いた 1 つ目のもの *sāgun* は *bāsaw-un* から前次末音節 *bə* が脱落した *sag-un* という形式を示しているのだろう¹⁷。1e において下線を引いた 2 つ目の語は *bāsaw-i* を表していると考えられる。これは非動作主態・命令法を表す接尾辞 *-i* が付加したものである。

セデック語にこの同源語が見られる。セデック語パラ

ン方言では *baso* であり、意味は「調理直後の熱い食物を常温に放置することで冷ます」である。接尾辞の付いた形式は例えば *busag-un*「冷ます」である。Rakaw 他（2006：92）によるとセデック語トゥルク方言は *basaw* であり、意味は「調理し終わったものを器に盛る」である。接尾辞の付いた形式は例えば *bāsag-i*「調理し終わったものを器に盛れ」（Rakaw 他 2006：92）である。アタヤル語の同源語との意味の共通項を鑑みれば、この語は本来「（調理したての熱い食物を）冷ます」という意味であったと思われる。

この「冷ます」を表す語の接尾辞の付いた形式について、*bāsaw-an*（小川 1931：151）では語根末子音が *w* のままであるのに対し¹⁸、1d の *basāgun* (*bāsag-un*) では語根末子音が *w* から *g* に変わっている。セデック語において接尾辞が付いた形式ではパラ方言 (*busag-un*) とトゥルク方言 (*bāsag-i*) とともに語根末子音の *w* が *g* に変わっている。接尾辞の付いた形式が歴史的に古い音素を保っているなら、アタヤル語群祖語として建てられる形式は **basag* となり、意味は「（調理したての熱い食物を）冷ます」となる。セデック語でもアタヤル語でも語根末の **g* が *w* に変わる変化が起きたと考えられる。小川（1931：151）の *bāsaw-an* のように接尾辞が付いた形式において語根末子音が *w* で現れる場合、母音間において *g* が *w* へ変化する一種の弱化が起きたのかもしれない¹⁹。表 8 にアタヤル語群祖語において「（調理したての熱

¹⁵ この語根に対し静態動詞を表す接頭辞 *mə-* の付いた形式 *mə-basaw* が小川（1931：152）に「冷める」の意味として挙げられている。

¹⁶ アタヤル語において唇音 *p* や *b* が動作主態を表す接辞として働く *m* に置き換わる語例は Li（1980：363-364、366）にも見られるが、これらを Li（1980）が鼻音代替と見なしているかどうかは明確に述べられていない。

¹⁷ 1e の *sāgun* (*sag-un*) は「涼む」と注釈が付されている。「冷やす」は熱を帯びた物体を対象とする行為であるが、「涼む」は動作主自身が涼感を求める行為である。これに関し、小川（1931:190）のアタヤル語の語彙集には *tsəs-basaw*「涼む」が挙げられている。語根はやはり *basaw* であり、これに接頭辞 *tsəs-* が付いている。1e の形式ではこの接頭辞も語根の第一音節も脱落していることになる。

¹⁸ 表 7 の 1e における *bassui* (*bāsaw-i*) においても、語根末子音 *w* が接尾辞付加後も *w* で現れていると考えられる。

¹⁹ あるいは語根末が *w* に変わった *basaw* において、語根末が歴史的に **g* に遡ることが忘れ去られた結果、語根 *basaw* に直接接尾辞を付けているのかもしれない。

い食物を) 冷ます」を表す語の再建形とそれを導く形式をまとめる。

表8 アタヤル語群祖語 *basaw 「(調理したての熱い食物を) 冷ます」の再建

	語根	接尾辞が付く場合
セデック祖語	*basaw	*basag-
アタヤル語	basaw ²⁰	*basag-, *basaw-
アタヤル語群祖語	*basag ²¹	*basag-

8. おわりに

アタヤル語において「寒い」を表す語には *gəhiraq* 型、*məsəkinut* 型、*tələtu* 型の3つの型が見られた。*tələtu* 型はアタヤル語スコレック方言とアタヤル語ツオレ方言の両方の集落に見られた。*gəhiraq* 型はアタヤル語スコレック方言集落に見られる形式だが、アタヤル語ツオレ方言集落にも見られる。*gəhiraq* 型がアタヤル語ツオレ方言集落に見られる場合は、アタヤル語スコレック方言を取り入れたためだと考えられる。*məsəkinut* 型はアタヤル語ツオレ方言にのみ見られる。

セデック語との比較によりこれらの由来を探った結果、*tələtu* 型は本来「冷たい」を意味する語であることが分かった。*gəhiraq* 型は本来「山の裏側」を意味した

語 *Rihaq (アタヤル祖語の形式) から、接中辞 *⟨ra⟩ の挿入によって派生された。そのため本来アタヤル語において「寒い」を意味する語は *məsəkinut* 型である。そしてこの型はセデック祖語において「寒い」を表す形式 *səkəy との同源語である。*məsəkinut* 型は語根 *səkəy に対し接尾辞 *-nut を付加することで作られている。現在、アタヤル語の *məsəkinut* 型はアタヤル語ツオレ方言集落の一部に残されているのみである。アタヤル語スコレック方言集落では改新された形式である *gəhiraq* 型を用い、また多くのアタヤル語ツオレ方言集落では「寒い」を表す本来の形式である *məsəkinut* 型をアタヤル語スコレック方言で改新された形式である *gəhiraq* 型に取り換えた。以上からアタヤル語群祖語において「寒い」と「冷たい」を表す語を再建すると表9のようになる。

表9 アタヤル語群祖語における「寒い」と「冷たい」の再建

	「寒い」	「冷たい」
アタヤル祖語	*səkiy	*tə-lətə > *tə-lətu
セデック祖語	*səkuy	*tə-ləətə > *tə-ləətu
アタヤル語群祖語	*səkəy	*tə-ləətə

²⁰ この形式が見られた表7の資料番号 1e と 1d はアタヤル語スコレック方言を記録した可能性が高い。またこの形式を挙げている小川 (1931) はスコレック方言の語彙集である。このことから、表8のアタヤル語の形式はスコレック方言を示すものとして挙げた。ツオレ方言における同一形式を探してみたが、管見の限り見つけれなかった。

²¹ 語末 *g は *R に由来するので *basaR と表記できる。

参考文献

- 安部清哉 (1985) 「温度形容語彙の歴史-意味構造からみた語彙史の試み-」『文芸研究』108 : 39-51.
- Blust, Robert and Stephen Trussell (2010) *Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition*. <<http://www.trussell2.com/ACD/>> (最終閲覧日 2021年1月)
- Dodd, John (1882) A few ideas of the probable origin of the hill tribes of Formosa. *Journal of the Straits Branch, Royal Asiatic Society* 10: 195-211.
- Egerod, Søren (1980) *Atayal-English dictionary, vols. I-II*. London: Curzon.
- 原住民族委員會 (2013) 『原住民族語 E 樂園』 <<http://web.kloka.tw/>> (最終閲覧日 2022年1月) .
- Guérin, M. (1868) *Du dialecte Tayal ou aborigène de l'île Formose*. Bulletin de la Société de Géographie 16: 466-495.
- Huang, Hui-chuan J. (2018) The Nature of Pretonic Weak Vowels in Squiliq Atayal, *Oceanic Linguistics* 57.2: 265-288.
- Huang, Lillian M. (1993) *A Study of Atayal Syntax*. Taipei: Crane.
- Huang, Lillian M. (1995) *A Study of Mayrinax Syntax*. Taipei: Crane.
- 伊能嘉矩 (1998) 『伊能嘉矩：蕃語調査ノート』東京：日本順益台湾原住民研究会 .
- Li Paul Jen-kuei (1980) The phonological rules of Atayal dialects. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 51: 439-405.
- Li, Paul J. (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica*, 52.2: 235-301.
- Li, Paul J. (1985) The position of Atayal in the Austronesian family, In Pawley, A. and Carrington, L. eds., *Austronesian linguistics at the 15th pacific science congress*, pp. 257-280. Canberra: Pacific Linguistics.
- 李壬癸 [Li, Paul J.] (1996) 『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭：宜蘭縣政府.
- 丸井圭次郎 (1915) 『タイヤル蕃語集』台北：台湾総督府警察本署.
- 森丑之助 (1917) 『臺灣蕃族志-第1巻』台北：臨時臺灣舊慣調査會.
- 中西潔 (1900) 「太湖蕃語集」手稿.
- 落合いずみ (2016a) 「傾斜を軸とするセデック語パラソ方言の民俗方位」『神戸市外国語大学外国学研究』92 : 25-47.
- 落合いずみ (2016b) 「セデック語パラソ方言における語末 uy の交替」日本言語学会 (編) 『日本言語学会第152 回大会予稿集』京都：日本言語学会.
- Ochiai, Izumi (2018a) Historical reduplication in Seediq, *Kyoto University Linguistic Research* 37 : 23-40.
- Ochiai, Izumi (2018b) Ryuzo Torii's Paran Seediq Glossary (1900): Annotation and observation, *UST Working Papers in Linguistics* 10 : 113-143.
- 落合いずみ (2020a) 「アタヤル語群の「上り」と「下り」の起源」『京都大学言語学研究』39 : 137-148.
- 落合いずみ (2020) 「アタヤル語群の文化的語彙 *Ratəd を再建するまで」『島嶼地域科学』1 : 59-73.
- 落合いずみ (2021) 「アタヤル語群における「家」と「屋内」の関連」『島嶼地域科学』2 : 139-162.
- 落合いずみ (2022) 「セデック語トゥルク方言の次末音節における曖昧母音の後続母音への同化」『言語記述論集』14 : 115-130.
- 小川尚義 (1931) 『アタヤル語集』台北：台湾総督府.
- 小川尚義 (2006) 『臺灣蕃語蒐録』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 小川尚義・浅井恵倫 (1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』台北：台北帝国大学言語学研究室.
- Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編 (2006) 『太魯閣族語簡易字典』秀林郷：秀林郷公所.

- 佐佐木達三郎 (1918) 『国語ひき蕃語辞典前篇』台北：台湾総督府。
- 佐山融吉 (1983a) 『蕃族調査報告書：大々族前編』台北：南天書局。(初出は1918年)
- 佐山融吉 (1983b) 『蕃族調査報告書：大々族後編』台北：南天書局。(初出は1920年)
- Schtelig, A. (1868) Mittheilungen über die Sprache der Ureinwohner Formosa' s. *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft* 5: 435-464.
- 鳥居龍蔵 (1900a) 「台湾埔里社霧社蕃の言語 (東部有黥面蕃語)」『東京人類学会雑誌』176: 71-74.
- 鳥居龍蔵 (1900b) 「台湾埔里社霧社蕃の言語 (東部有黥面蕃語)」『東京人類学会雑誌』177: 100-104.
- 月田尚美 (2009) 「セデック語 (台湾) の文法」東京大学博士論文。
- 移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 (1935) 『台湾高砂族系統所属の研究』台北：台北帝国大学土俗人種学教室。
- Wolff, John (2010) *Proto-Austronesian Phonology with Glossary, vols. I-II*. Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Cornell University.

a thing.” For *məsəkinut* in C’uli’ Atayal, this paper argues that it is a cognate of the Proto-Seediq *səkəy. This C’uli’ form *məsəkinut* can be separated into two parts: *səki* and *nut*. The former element shows the reflex of *səkəy but the schwa in the final syllable underwent assimilation to the following *y* and became *i* in Proto-Atayal, i.e., *səkiy. The latter element *nut* could be a fossilized suffix. The final consonant *y* is deleted, and the suffix is added, resulting in *səki-nut*. The Proto-Atayalic form is constructed as *səkəy “cold of environment.” The Squliq Atayal form *gəhiraq* is derived from an Atayal form *Rihaq “the back side of the mountain.” An C’uli’ Atayal form for “cold” is *giha<a>q*, which is analyzed to include a fossilized infix <a>. This infix is known to date back to *<ra>. The Squliq Atayal form *gəhiyaq* underwent several phonological changes from the earlier form *giha<ra>q*. Finally, the Proto-Atayalic has *səkəy and *tələ(ʔ)ətə/*tələʔtə, which means “cold of an environment” and “cold of a thing,” respectively.

Keywords : Atayal Seediq cold (environment) cold (thing) backside of the mountain

Abstract

Atayalic languages (Austronesian) include two languages Atayal and Seediq. This paper reconstructs Proto-Atayalic form expressing coldness: “cold of an environment” and “cold of a thing.” Atayal has two dialects, Squliq Atayal and C’uli’ Atayal, and each dialect has a different form for “cold of an environment.” Squliq Atayal has *gəhiraq* and C’uli’ Atayal has *məsəkinut*, although some villages of C’uli’ Atayal have adopted Squliq Atayal form. In addition, both Atayal dialects have another form *tələtu* as the word for “cold of environment.” However, the original meaning of *tələtu* is “cold of a things” as this is supported by the cognates in Proto-Seediq, *tələətə (> *tələətu), and its meaning “cold of

6ヶ月間の「ちくだい KIP 体操プログラム」が コロナ禍の児童の身体形態と体力に及ぼす影響

村田浩一郎¹・川口亜佑子²・高橋克磨³・田中義朗³

(受付：2022年4月28日，受理：2022年7月25日)

Effect of the 6-month "Chikudai KIP exercise Program" on children's physical morphology
and fitness with the COVID-19 pandemic.

Koichiro MURATA¹, Ayuko KAWAGUCHI², Katsuma TAKAHASHI³, Yoshiro TANAKA³

摘 要

本研究は一般社団法人ちくだいKIPによる6ヶ月間(週1回程度、全22回)の体操プログラムが上士幌町在住の小学1年生から3年生(18名)の身体形態と体力に及ぼす影響について調査することを目的とした。介入前後で身長、体重、大腿長の値は有意に増加したが($p < 0.01$)、大腿周囲径と大腿前部筋厚には統計的な変化は認められなかった。しかしながら、筋厚は参加者18名中11名~12名において介入前後で増加した。新体力テストにおいて全ての項目で介入後に平均値が増加、握力以外の項目で有意に増加した($p < 0.05$, $p < 0.01$)。体力測定値は全ての項目において、介入前では同年齢期の令和元年度の全国平均値を下回っていたものの、介入後には上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳びにおいて全国平均値を上回った。当該プログラムの実施は、新型コロナウイルス感染症(以下、コロナ)の影響下においても明確に体力を向上させた。子どもが運動に対してポジティブな感情を抱き、日常の行動が変容することで効果が高まった。運動プログラムの内容は、子どもの夢を引き出すために遊びの要素を強めたものであり、それによって走運動と全身筋力に焦点を当てたプログラムであることが重要であると考えられる。

キーワード：子ども、体力、器械運動

¹帯広畜産大学人間科学研究部門

²一般社団法人ちくだいKIP

³上士幌町教育委員会生涯学習課

連絡先：村田浩一郎，murata@obihiro.ac.jp

1. 目的

本研究は2021年度に上士幌町教育委員会の依頼により一般社団法人ちくだいKIPとの協働で開講された「令和3年度上士幌町教育委員会主催事業『子どもの体力向上プロジェクト』かみしほろのびのびキッズ!」における効果測定報告を取りまとめたものである。

例年、スポーツ庁が指摘する子どもの体力低下問題について、北海道は48都道府県の中でも常に下位に位置している。道内の各自治体や学校が子どもの体力低下に抗おうと尽力なされているのとは裏腹に、それはコロナ禍によってさらに加速してしまっていると予測される。中でも上士幌町は近隣市町村よりもさらに低い体力を示している（上士幌町未発表データ）。スポーツ庁（2021）によると、子どもの体力が低下している要因は①運動時間の減少、②学習以外のスクリーンタイムの増加、③肥満である児童生徒の増加が主であり、そこにコロナの影響で拍車がかかったと考えられている。また、コロナの感染拡大防止に伴い、学校の活動が制限されたことで体育の授業以外での体力向上の取組が減少したことも要因として挙げられている。

そこで本研究は、子どもの体力低下が加速することを見越して、それに対抗すべく敢えてコロナ禍での子どもの運動教室とそれに伴う体力測定に踏み切った。このタイミングでの子どもの体力向上が持つ意義はアフターコロナの時代においても有用性が高い。これらのことから、本研究の目的はコロナ禍における6ヶ月間の体操プログラムが上士幌町在住の小学1年生から3年生の身体形態と体力に及ぼす影響について調査することとした。

2. 方法

被験者は上士幌町教育委員会が募集し、当該プロジェクトに同意した小学1年生から3年生までの19名であった。そのうち18名が事前事後測定に参加した（平均出席率87.7%）。体力向上プログラムは2021年5月12日に開始され、2022年1月12日まで全22回にわたり継続さ

れた。介入前後に形態データとして身長、体重、大腿長、大腿周囲径、大腿前部筋厚を測定し、体力データとして新体力テスト（握力・上体起こし・長座体前屈・反復横跳び・20mシャトルラン・50m走・立ち幅跳び・ソフトボール投げ）を実施した。大腿前部筋厚は超音波画像診断装置（HS-2000, 本多電子社製）を使用し、装置内のスケールツールを用いて計測した（図1）。

運動プログラムは一般社団法人ちくだいKIPで実施されている体操教室マニュアルに沿って実施された。主に使用した器具はマット、とび箱、低鉄棒およびトランポリンであり、全て上士幌町の備品として準備された。また、器械運動の前に大腿部や股関節のストレッチ、上体起こしや腕立て伏せなどの基礎的な筋力トレーニング、走・跳・投運動の段階練習を取り入れた。特にスプリントのためのトレーニングは毎回欠かさず実施した。

全ての測定値は平均値±標準偏差で示した。分析にはMicrosoft Excel for Mac version 16.60を使用し、介入前後の差は対応のあるt検定を用いた。有意水準は5%未満とした。

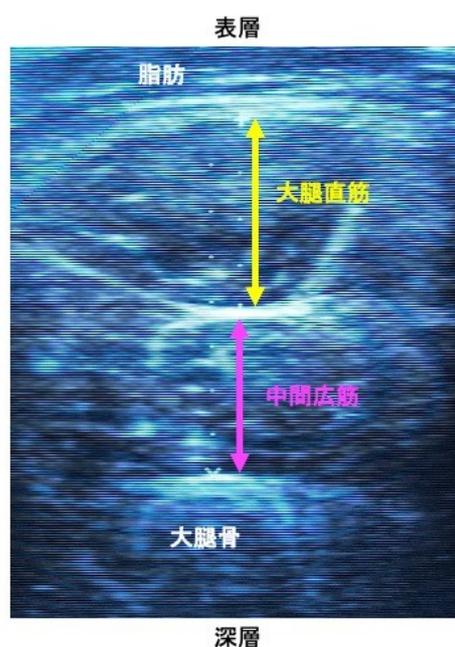


図1 超音波診断装置による大腿前部筋厚測定

3. 結果

介入前後の形態データを表1に、体力データを表2に示した。

形態データの身長、体重、大腿長は有意に増加し ($p<0.01$)、大腿周囲径と筋厚に統計的な変化は認められなかった。

体力データとして測定された新体力テストは、全ての項目で介入後に平均値が向上、握力以外の項目で有意に

向上した ($p<0.05$, $p<0.01$)。体力データは全ての項目において、介入前では同年齢期の令和元年度の全国平均値 (スポーツ庁 2020) を下回っていたものの、介入後には上体起こし、長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳びにおいて全国平均値を上回った。上回らなかった握力、シャトルラン、ソフトボール投げにおいては概ね全国平均値と同程度であり、50m走はやや劣っているという結果であった。

表1 介入前後の身体形態測定値 (平均値±標準偏差)

(n=18)

測定項目	介入前	介入後	統計的差
身長(cm)	121.9 ± 9.9	126.5 ± 9.6	**
体重(kg)	25.1 ± 9.0	27.8 ± 10.2	**
大腿長(cm)	27.6 ± 2.8	28.7 ± 2.6	**
大腿周囲径(cm)	36.1 ± 5.2	36.7 ± 5.6	n.s.
大腿直筋厚(mm)	15.0 ± 2.8	15.5 ± 3.2	n.s.
大腿直筋+中間広筋厚(mm)	30.0 ± 5.5	31.0 ± 5.9	n.s.
中間広筋厚(mm)	15.0 ± 3.7	15.5 ± 3.3	n.s.

(* $p<0.05$, ** $p<0.01$)

表2 介入前後の体力測定値 (平均値±標準偏差、太字は全国平均値を上回った項目)

(n=18)

測定項目	介入前	介入後	統計的差	6歳から9歳男女の全国平均値
握力(kg)	10.4 ± 2.4	11.0 ± 2.9	n.s.	11.5
上体起こし(回)	11.4 ± 5.3	16.3 ± 6.2	**	15.1
長座体前屈(cm)	26.8 ± 5.1	35.5 ± 5.7	**	30.1
反復横跳び(回)	31.9 ± 8.1	34.5 ± 5.7	*	32.8
シャトルラン(回)	16.7 ± 8.5	25.9 ± 12.9	**	29.5
50m走(秒)	12.4 ± 2.0	11.1 ± 1.3	**	10.6
立ち幅跳び(cm)	117.8 ± 27.2	130.3 ± 21.4	**	126.5
ソフトボール投げ(m)	8.1 ± 4.8	11.0 ± 6.7	**	11.1

(* $p<0.05$, ** $p<0.01$)

4. 考察

半年間の介入によって体力データは明確に向上した。同年齢期の全国平均値（令和元年度に測定された6歳から9歳の記録をさらに平均化したもの）と比較して、介入前はそれ以下であったものが介入後に上回るか同程度にまで増加した。コロナ禍で全国的に子どもの体力が大幅に低下していることを加味すると、コロナ禍以前の測定記録を上回ったという結果は想定以上の結果であったと言えよう。介入前測定時に50m走が特に低値を示した上、50m走の記録と総合点に高い負の相関関係（ $r=-0.88$, $p<0.01$ ）が確認されたことから、50m走の記録向上が新体力テストの記録全体に影響している可能性を見込んで、50m走の記録向上のためにスプリントの動作改善とそれに必要な筋力強化に取り組んだ。全国平均値に唯一届かなかったのが50m走であったのは皮肉であったが、他のあらゆる種目において記録が向上したのはスプリントトレーニングが間接的に他の種目にも好影響を及ぼした可能性が考えられる。あらゆる集団においても同様のことが言えるかは定かではないが、その点については今後も着目しておくべきであろう。一方、これでは走り方教室でもよさそうなものではあるが、神経系が特に発達するプレゴールデンエイジ（5～9歳）では走運動への特化よりも多様な運動実施が望ましい。その点、非日常的な回転運動や倒立など上肢で体重を支える体操は体幹の強化や怪我の予防にもつながるため、さらにプラスの効果を生み出していると考えられる。

本研究の開始前、最も懸念された事項は「たかだか週1回みのトレーニングでは体力や筋力に影響を与えないのではないか」ということであった。通常の成人を対象とした筋力トレーニング実験では、ターゲットの骨格筋を決め、至適負荷で週3回程度実施される。その際、被験者は筋力トレーニング以外の運動をしないことなどの制約を受ける。また筋力トレーニングを実施してはいけないコントロール群も設定される。子どもを対象とした本研究では、人道的に運動条件を制限する事がそもそも難しく、同理由でコントロール群の設定が難しい。そ

のため、本研究では被験者は教室以外でも大いに運動に取り組むことを前提とし、介入によって運動に対してよりポジティブな感情を持てるよう以下の点に配慮した。

- **できるだけ経験したことのない運動を多く取り入れて、できないことが普通であることを意識させる。**（開始当初、子どもたちはできないことをやりたがらない傾向にあり、すぐに弱音を吐いていた。帯広市に比べて周辺町村では子どもの頃の出会いが固定化されており、全体が「顔見知り」であるように推察される。馴れ合いが同世代での集合体に緊張感を欠如させ、全体で「無理、できない」と声を上げればやらなくてもよいという状況に陥っているのではないだろうか。これについての改善策として上記について意識した。緊張感を出すということではなく、好奇心を刺激し失敗に対するハードルをできるだけ下げることが重要であると考えた。）
 - **他人と比較しづらい運動を実施する。**（個人によって課題が即座にフィットされるものを実施した。具体例として、垂直跳びで手にタッチさせる運動などは個人によって高さ（課題）を即座に変化させることができる。助走から垂直跳びなども小学校低学年にとっては難しい運動である。）
 - **劣等感を感じる暇がないくらいの運動量を与える。**（サーキットトレーニングの要領で、休憩なしで一気に多種の運動に取り組むようにした。一気にほぼ全員が動くことになるので、自分に目が集まることがなく、失敗へのハードルが下がる。）
 - **チャレンジして失敗することが「普通」である雰囲気づくりや声かけをおこなう。**（とにかく指導者はポジティブな言葉をかけ続けた。手を抜く者も散見されたが、いちいち咎めず、気が向くように指導者が努力することを重要視した。子どもにとっても指導者にとってもその日だけが全てではないので、時間をかけて子どもの成長を追うことを意識した。そして、頑張れた日や変化が見られた時にはすかさず称賛した。）
- これらの結果、器械運動にもポジティブに取り組むこ

とができ、できなかったことができるようになる経験から自己肯定感を高め、頻度としては少ない週1回の教室がきっかけとなって子どもの行動変容が生じたと考えてもよい。事実、アンケートからは「多様な運動が体験できた」「自宅で運動をする姿が見られた」「運動に関する話題が増えた」といった声を聞くことができた。スポーツ庁による調査でも家庭内で運動・スポーツに関する話題が出る家庭ほど体力レベルが高いことがわかっており、習慣の改善がなされたことは非常に大きな成果である。

一方、身体形態測定値は単純な成長による変化は認められたものの、大腿直筋と中間広筋の筋厚増加を統計的には確認できなかった。このことは、体力の向上が形態的な変化よりも運動習慣や運動経験の増加による神経系の改善（運動の理解が進むことによって測定値が向上）が影響した可能性を表している。しかしながら、18名中大腿直筋で12名、中間広筋で11名が筋厚増加を示しており、統計的な変化が認められなかっただけで、変化の初期段階であったとも考えられる。さらに、大腿長が増加して筋厚に変化がないということは、3次元的に筋量は増加している可能性もある。このことから、当該プログラムの実施は神経系の改善を促し、大腿前部筋厚を増加させるほどではなかったものの、筋量は増加傾向となり、形態的にも効果を与えている可能性がある。単純な成長による筋量増加が当該年代においてどの程度生じているかについては、今後も検討していく必要がある。またFukunagaら(1993)は、農村住民と東京近郊生活者で大腿前部の筋厚を比較しているが、30代～60代のどの年代においても東京近郊生活者の方が高い値を示したことを報告している。30年前の成人で見られたこの現象が、現代でも幼少期から継続して起こっていることだとするならば、農村地域での子どもの体力向上について、これまでの取り組みや方法論を見直し、実践されていかなければならない。

これらのことから、体力向上プログラムの実施にあたっては以下に留意することが望ましいと考えられる。

●【からだ能力最大化】神経系が特に発達するプレグー

ルデンエイジ(5～9歳)では、普通に生活しているだけでは体験できない「倒立・回転・上肢支持」などによって、運動経験や習慣、筋力を向上させる。神経系が特に発達する時期に必要なことは2つ、「夢中」と「基礎体力」である。子どもが楽しくて夢中になることには、ゲーム性・課題性・笑い・競争・時間制限などといったいくつかの共通点がある。さほど楽しいことでなくても、わずかな工夫で一気楽しいものに変化する。そこで夢中になって運動することで基礎体力や筋力が向上し、結果的にさらに動けるようになっていくという正のループを生み出す。したがって、遊びの要素が強くそれでいて考えられた運動が効果的である。

●【こころ能力最大化】遊びの中での仲間との関わり、体操教室で技に取り組む段階練習の多様性、できないことができるようになる、できない自分を客観視してできるように努力する、などといった作業によってIQ以外の能力である非認知能力(自尊心・自制心・自信・協調性・共感性など)を高める。この能力は測定できるものではないが、長時間かけて熟成させていくべきものである。また、運動に対するポジティブイメージを育てることに留意しなければならない。そのために、できることを求める運動とできなくても構わない運動の多種を用意することが望ましい。失敗してもチャレンジすることが次の楽しさを引き出すということを体感できるような環境でなければならない。自己を知り、制御することは運動のみならず、成長してもなお多くの現場で必要とされる能力である。

5. 結論

ちくだいKIPによる週1回の定期的な体力向上プログラムの実施は、コロナ禍においても明確に体力を向上させた。子どもが運動に対してポジティブイメージを持ち、日常の行動が変容することで効果が高まったと考えられる。運動プログラムの内容は、子どもの夢中を引き出す

ために遊びの要素を強め、それでいて走運動と全身筋力に焦点を当てたプログラムであることが望ましい。

6. 今後の展望

今回、小学1年生から3年生までを対象としたが、ブレゴールデンエイジである5～9歳に該当した年代を対象としたのは妥当であった。運動の習慣化についてはどの年代にとっても必要ではあるが、低年齢では有能感の有無が運動の好き嫌いを誘発させ、年齢が上がるにつれてそれ以外の楽しみにも気づくようになる。したがって、高学年への介入というよりは、より低年齢児童への介入によって運動習慣が継続するかどうかについて、複数年で検討していく必要がある。

また、今回提供したプログラムを上士幌町民が主体となって推進できる仕組みを考えなければならない。例えば、複数年で指導者およびコミュニティビジネスとして持続可能なものに成熟させるような取り組み（上士幌町とちくだいKIPのクロスアポイントメント制度の導入、移住キャンペーン対象事業とする、地域おこし協力隊のヘルスケア専門担当を採用するなど）を同時に展開していく必要がある。

7. 参考文献

- スポーツ庁，2021，令和3年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査 結果のポイント
- スポーツ庁，2021，令和3年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果（概要）について
- スポーツ庁，2020，令和元年度 体力・運動能力調査報告書
- Fukunaga T, Abe T, Ishida Y, Kondo M. 1993. Subcutaneous fat and muscle distribution patterns in middle and old aged Japanese. J. Therm. Biol. 18: 303-306.

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effectiveness of a 6-months (about once a week, 22 times in total) special exercise program in modifying the physical morphology and fitness of children who were living in Kamishihoro Town. The subjects included 18 children aged 6~9years. Height, weight, and thigh length increased significantly before and after the intervention ($p < 0.01$), but there were no statistical changes in thigh circumference and anterior thigh muscle thickness. However, muscle thickness increased in 11-12 out of 18 subjects. In the results of “New physical fitness test”, the mean value increased in all tests after the intervention, and significantly increased except grip strength ($p < 0.05$, $p < 0.01$). Before the intervention, all test values were below the national average in the same age period, but after the intervention, the Abdominal exercise, the Bending forward flexibility, the Repeated side jumps, and the Standing long jumps were above the national average. This program clearly made improvements of physical fitness even during the COVID-19 pandemic. The contents of several exercise programs are to emphasize playing to pull out children’s engrossment, and it is important to have programs that focus on running exercise and whole-body strength.

Keywords: children, physical fitness, gymnastics

20% Time Project in a First-Year University English Language Class

Maki TERAUCHI Ho

(Received:28 APRIL, 2022) (Accepted:25 JULY, 2022)

大学1年の英語のクラスでの20%タイムプロジェクト

寺内 麻紀

Abstract

There are many teachers who complain they have so much material to teach, but there has never been enough time. English teachers are one of them. Often teachers overwhelm the students with vast amounts of information which the teachers desperately hope to share with them (Canagarajah 2006). However, how much information do the students actually wish to acquire? Not many of them are willing to accept all the information presented in front of them. If students are unwilling, it might be difficult to expect true learning. Therefore the student's willingness to learn would be crucial for their learning as well as the quality, not quantity, of the information. Accordingly, when people are working on something they like, they naturally put more effort and work hard (Dörnyei 2001; Ryan & Deci 2000; Vansteenkiste, Niemiec & Soenens 2006). The 20% Time Project originated from Google's management philosophy, which encourages the employees to spend 20% of their work time engaging their chosen pet project that their job description did not cover (Juliani 2015). As a result of the 20% Time Project at Google, some innovative products were created such as Gmail, AdSense, and Google News (Juliani 2015). This idea can be incorporated into education in order to reinforce intrinsic motivation, such as curiosity or enjoyment. In this study, the implementation of the 20% Time Project in an English class at a Japanese university was conducted following the examples of the classrooms in the United States, and the observation of students' responses are discussed as well as the application. Also, this study suggests possible modifications for the future implementation in the language classrooms.

Keywords: 20% Time Project, presentation, autonomy, motivation

Department of Human Sciences, Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

Address correspondence: HO TERAUCHI Maki, hoobihiro@gmail.com

帯広畜産大学人間科学科

連絡先: 寺内麻紀, hoobihiro@gmail.com

Literature Review

20% Time Project, or also known as Genius Hour, has gained some attention from the educators who were always looking out for a new way to stimulate their learning environment (Krebs & Zvi 2020). 20% Time Project is designed to allow students time to engage in a topic they are truly interested in. Therefore, the students would gain personalized learning by following their own intrinsic motivation to learn. This might be a key to achieving students' autonomy. Rather than trying to give extrinsic motivation, such as raising a value of the exam in order to create more reward for getting a better grade or instilling fear of failing an exam, giving intrinsic motivation of natural curiosity to try to solve an authentic problem enhances their creativity and deeper learning (Ryan & Deci 2000). Instead of completing tasks given from the textbook by the teacher, students' motivation can be enhanced by 20% Time Project, in turn resulting in higher quality learning.

Furthermore, working on a project which the students have chosen can promote autonomy and self-regulation (Dörnyei 2001). It is up to the learners how to research, how to find a solution and how to work together with their peers. There are many possible answers they can reach. However, no matter what conclusion they reach, they still could learn many things during the process. In 20% Time Project, the teacher acts as a facilitator rather than an authoritative figure (Rebekah & Marina 2001). Being a facilitator to scaffold students enhances their autonomy (Dörnyei 2001). This intrinsic motivation is very important in learning because it leads to higher quality understanding and creativity (Ryan & Deci 2000).

However, there are some obstacles for implementing the 20% Time Project in English classrooms. One of them is the time constraint from the rigid curriculum of the institution. Many teachers are often complaining about how

many language items they have to teach in a term, and they do not have enough time. However, if all the students can absorb everything they are exposed to in every single class, our English teaching field would not have to argue which methodology is more effective. Unfortunately, in spite of the teachers' efforts, the students are not acquiring everything they are taught (Allwright 1981). Therefore, teachers should not focus on providing as much information as possible, but rather, they should consider how much information students can realistically absorb.

What would be the best way to implement 20% Time Project in English language class has not been discussed widely at this point. The students are not workers who are getting paid to fulfill a task. Therefore, there are some strategies to implement 20% Time Project in education. This has been conducted in Library class, Math, English classes in United States, but not English language classes.

There are 5 steps for the 20% Time Project in education: 1. Ideas, 2. Proposal, 3. Blog, 4. Elevator Pitch, 5. The Final Presentation.

Step 1: Ideas for 20% Time Project

The first step of the 20% Time Project is deciding a topic which students like to work on their own. Students are allowed to choose their own topic as long as the topic can be showcased in presentation format. Students' active participation is the most essential criterion. Therefore, the teachers might need to provide examples of what they could choose for their topic because they might not be used to create their own projects. The teacher's support to make students achieve a successful experience is essential for their motivation to work and learn (Dörnyei 2001). As a teacher, it may be a good idea to prepare a number of examples to prevent students from spending too much time choosing an idea. Also, they do not feel failure in creating their idea. This could be an individual work, as well as a group of three or four students. There are several benefits to encouraging the

students to work together in a group. Children could develop beyond their own ability by receiving scaffolding from their peers (Winne & Nesbit 2010). Furthermore, working in a group can create a less threatening and more relaxed learning environment (Dörnyei 2001).

Step 2: Proposal

After students have some ideas of what they are going to be working on, they make a proposal of their idea in front of the class. This will give some pressure to make the project serious and interesting. By giving some pressure to make the project interesting, students can be motivated to work hard.

After the student's proposal, the rest of the class gives their feedback. The students can benefit from receiving feedback from other students other than their own group (Lyster & Mori 2006; Lyster & Saito 2010). They can also gauge what a larger audience might say about their project. Consequently, groups can listen to what other groups are working and reflect on their own projects.

When the students are making proposals, it is important to make them set a clear deadline for the project, so that the students can work toward a clear goal (Locke & Latham 2019). The project itself might be very difficult and complex that the students might feel overwhelmed and think it is impossible to accomplish. However, when the project is broken down into steps and a series of small tasks, it becomes an attainable goal and is no longer a source of anxiety for the students. By making a proposal, they will have a clear plan and help them schedule their own project.

Step 3: Blog

Students are expected to write a blog about their projects. Every week or every few classes, depending on how often the class meets, they have to report what they have done up to then, what they are doing right now and what they will do next. This would help students stay focused on their projects as well as the teacher monitoring them. By

monitoring them, the teacher can provide more scaffolding as the student requires.

The teacher should monitor the students using computer tools, such as a blog on the website. If the class size is fairly large, it would be difficult to monitor individual students. By monitoring students using online tools, the teacher can scaffold by assigning tasks or sending some resources they might require. They can even remind the students if they forget to do the task. Although the students are expected to work on their own, they are not fully abandoned by the teacher to complete their projects.

Step 4. Elevator Pitch

Before the final presentation, the students need to make a one minute short clip video to explain how great their project is and share it with the rest of the class. This is also called the Elevator Pitch. Making this short clip has some additional benefits in the students' learning, besides explaining clearly what their project is. First, they can visualize their project, and by visualizing, they can access different parts of the cognitive process while working on the project. According to Dual Coding Theory, both verbal and visual processing are essential for learning (Paivio 1971). By accessing both processes, the students can make more associations to different information that they have. Hence, they could have a deeper understanding of the materials that they learn.

Step 5. The Final Presentation

This is the final product of the project, and the students present in front of the class. Also, ideally they should present in front of the public, such as the whole school, community, or on YouTube to receive feedback from other people.

While they are conducting presentations, the teacher can provide a rubric to evaluate their presentation. The students are encouraged to practice their presentations and evaluate themselves as well as receiving from other students. They can

suggest to each other what their presentation is lacking and make necessary changes for improvement.

Methods

One of the difficulties of implementing the 20% Time Project is the time constraint. Often the teachers are complaining about the limited amount of time for so many items to teach. However, 20% Time Project only takes 20% of the class time. It is unrealistic to think that most students are fully focused on class materials the entire 90 minutes in a university class. We can consider using the time that the students' minds wander elsewhere for the project. Furthermore, 80% of time can be spent on focusing on linguistic features and explicit instruction or any other regular class time. Thus, the 20% Time Project can be implemented in class without reducing the time for instruction.

In this study, 20% Time Project was implemented in 106 university first-year students from 3 classes (class A; 37, class B; 34, class C; 35) from April to July 2019. During once-a-week English Grammar and Composition class, 18 to 20 minutes of 90 minutes lesson was used for the 20 % Time Project for over 12 weeks. After 12 weeks, they presented their work in the class.

Step 1: Ideas for 20% Time Project

Students were given two choices of subjects and asked to think of their own topic to fit in the subject. The subjects were Gardening Project and Dream Pet Project. In the Gardening Project, they needed to choose at least ten different kinds of plants to grow in a garden. They are required to fit in Hokkaido weather and have some kind of theme in their garden, instead of randomly choosing the plants. They needed to explain how they would grow and care for those plants and why they chose them. In the Dream Pet Project, they were to choose any animal to have as a pet. Then they needed to

explain how they would care for the animal and why they chose them.

The students were made clear that after they needed to make a presentation in English after 12 weeks in front of the class. The presentation should be 3 minutes long. Students were also given the choice on how to present their topic as long as each person's portion was at least 3 minutes. Whether they could be individual or group presentations as long as each person conducted a 3 minute presentation. Therefore, for example if it was a group of 3 people, the presentation should be 9 minutes. They were allowed to make slides, using PowerPoint or equivalent, but not required.

The teacher discovered it would be too constraining for the students to choose a completely free topic on their own. When the task is viewed as too difficult and impossible, the students are unmotivated to work hard (Dörnyei 2001). Students in Japan are often very passively sitting at the desk listening to the lecture and waiting for the instruction (Burrows 2008; Kotaka 2013). Therefore, there is a possibility that the majority of the students have trouble coming up with their ideas.

In the previous year to this study, the instructor assigned the presentation with the same subjects. However, initially, some students just chose one or very few plants for the Gardening Project, so that they did not have to spend time researching. Therefore, the instructor added the minimum 10 plants rule in this study to enforce the students needed to spend some time researching. Also, just giving the subjects was not narrow enough, and many students did not know what to do. Therefore, in this study, the students were given minimum expectations of the presentation.

Students were then asked if 20 minutes of the class would be the time for them to work on their presentation and they did not have to complete it all at once, but they would have 12 weeks to do so. For 20 minutes, they could stand and walk around to talk to their peers or their group. Students were free to use their computers, cell phone or any resources

for their research.

Step 2: Proposal

Students were supposed to make a proposal for their tentative topic in front of the class, but the teacher felt this process might take too much of the class time and was not necessary. The structure of the presentation was previously given clearly, and instead of getting feedback from the whole class, the students could have feedback from the teacher through Blogging, which is the next step. Therefore, in this study, the Proposal was omitted.

Step 3: Blog

The students were told to blog using Moodle's Forum function in the initial 20% Time Project's explanation. They needed to report what they did and what they were going to do next in Forum comments. They were assured that this did not have to be long nor productive. If they did not do much work, they should honestly write it because they did not have to finish in that week. The freedom of working at their own pace was emphasized as well as their choice of topic in order to promote greater autonomy. They were also told that they did not have to be concerned about their grammar mistakes while blogging because this was more for their own notes rather than reporting to the teacher.

Step 4. Elevator Pitch

In the 4th week, the students were informed that they had to make Elevator Pitch in front of the class during the 8th and 9th weeks. The notion of Elevator Pitch was completely unfamiliar to most students, the teacher explained the concept of Elevator Pitch and showed some example video clips from YouTube. For instance, one of the videos was about the Elevator Pitch contest winners in American universities. Those were presented to the students and some key points of the speech were pointed out. The students were given about 3 weeks to prepare for 1-minute speech and presented in the

8th and 9th weeks. After the Elevator Pitch, the teacher gave several positive and short feedback points to the students.

Step 5. The Final Presentation

After 12 weeks, the students presented their work in front of the class. Most of them used PowerPoint or Google Slides while presenting. A few students used their own hand-drawn posters or printed pictures while they were talking. The ones who had computer slides used the classroom projector to show to the other students. The other students listened to the presentation and were asked to fill out the evaluation form on Google Forms. Points of evaluation were: the volume of the voice, the degree of the enthusiasm, the level of understandability were evaluated on 5 point Likert scale. This evaluation was required to encourage the audience to watch presentations critically.

Discussion

In this study, the students were not completely free to choose their own topic because the teacher feared that the complete freedom might put too much of a strain on the students, which might demotivate students to complete the task. The teacher chose two subjects that might interest the students most because the students are majoring in fields related to agriculture or veterinary medicine. Therefore, either animals or plants as a topic base would be suitable for these students. The teacher informed them that if they did not want to choose the given subjects, they could consult with the teacher. However, there was no student who desired to choose a different topic. As the teacher expected, most students were eager to choose their own topic related to the subject of animals or plants. The teacher then assumed that the subjects were appropriate for the participants.

In the first few weeks, most students were blogging about their decision on their topic. Having a blog using

Moodle Forum was an excellent method to monitor the students progress. However, there were many students who did not blog or misunderstood that they should only write once or twice. Therefore, it was essential to keep reminding them about the blog criteria. Blogging might be unfamiliar for many students in Japan, so this needs to be instructed clearly and also reminded weekly.

Elevator Pitch was another unfamiliar task for the students, however, they completed it without too many problems. When the teacher first explained it, many students were confused and unsure of what they needed to do. However, they understood clearly after watching some example videos, and many students spoke confidently and successfully. Some of them just made a summary of their presentation, while others were putting in efforts to make their presentation attractive. Despite the teacher's initial concern about the unfamiliarity of the task, all students adjusted well and accomplished the task successfully.

Every week, they had about 20 minutes to work on the preparation of the presentation, but this confused most students. They were not accustomed to getting free time during the class. When the teacher told them that they could walk around or talk to other students, the students just quietly sat and still waited for the instruction. After being encouraged to move, some of them quietly moved to their group who were intending to work together, but they still talked very quietly so that they did not bother the rest of the class. Therefore, the teacher decided to show them examples of what they could do for their presentation during that time. They were mostly videos that they could ignore if they did not wish to watch. In the beginning when most students were deciding their topics, the teacher played videos of different animals or plants that might interest them. There were also examples of Elevator Pitch and presentations when most students were preparing. Many students watched the video instead of working on their own.

None of the students had a problem making the

presentation in front of the class. Most of them seemed to have experience presenting in English. Also, the topic was something they were interested in, although they were looking at their notes, most of them spoke very confidently.

Conclusion

One of the difficulties in learning English in Japan, the students do not have the opportunity to use English outside of their classroom, however, the 20% Time Project can provide one of the few opportunities that the students can use authentic English. They were encouraged to use English materials for research as well as to make their presentation in English. However, most students used the internet for their research. Although there are many English materials available, some students used Japanese sites, which they could not benefit from receiving authentic input (Robinson 1996). However, they still need to produce in English, therefore, the students had ample opportunity to use the target language (Swain 2005).

Although the teacher encouraged group work, many students decided to work alone. Collaborative group work provides the opportunity for use of authentic language and deeper learning. By having interaction, the students can engage in real communication using the target language (Ellis, Tanaka, & Yamazaki 1994; Gass 2010; Long & Porter 1985). There are a number of studies that show how effective collaborative work is in learning (Dunlosky, Rawson, Marsh, Nathan, & Willingham 2013; Winne & Nesbit 2010), as well as in second language learning (González-lloret 2003; P. Nation 2007; Reinders 2009). However, in order to promote as much freedom for their choice, it was their choice to work alone or in a group. In a future study, the effect of group work should be compared with working alone.

For most students 20% Time Project was very different from the regular language classroom which they have

experienced, and providing examples for the project was one of the keys to success for the project. By explaining their expected steps, they can ease their anxiety of unfamiliarity, as well as give inspiration for the idea (Dörnyei 2001). Although the initial intention was to give a full 20 minutes of their free work time, the teacher decided to show video clips of examples. They seemed to be more comfortable having something to watch instead of the time most students did not know what to do. Therefore, providing examples in a manner of not disrupting the students who want to work on their own was quite successful and possibly necessary.

Although there are still a few precautions to implementing 20% Time Project in a language classroom, most students worked hard and enjoyed the experience. However, the effectiveness of language development in English class cannot be measured in this study only. Therefore, future studies are needed to compare the effect on their language development.

References

- Allwright, R. L. (1981). What do we want teaching materials for? *ELT Journal*, 36(1), 5–18. <https://doi.org/10.1093/elt/36.1.5>
- Burrows, C. (2008). An evaluation of task-based learning (TBL) in the Japanese classroom. *English Today*, 24(4), 11–16. <http://doi.org/10.1017/S0266078408000345>
- Canagarajah, A. S. (2006). TESOL at forty: What are the issues? *TESOL Quarterly*, 40(1), 9–34. <http://doi.org/10.2307/40264509>
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dunlosky, J., Rawson, K. A., Marsh, E. J., Nathan, M. J., & Willingham, D. T. (2013). Improving students' learning with effective learning techniques: Promising directions from cognitive and educational psychology. *Psychological Science in the Public Interest, Supplement*, 14(1), 4–58. <http://doi.org/10.1177/1529100612453266>
- Ellis, R., Tanaka, Y., & Yamazaki, A. (1994). Classroom Interaction, Comprehension, and the Acquisition of L2 Word Meanings. *Language Learning*, 44(3), 449–491. <http://doi.org/10.1111/j.1467-1770.1994.tb01114.x>
- Gass, S. M. (2010). Input and interaction. In C. J. Doughty & M. H. Long (Eds.), *The Handbook of Second Language Acquisition* (pp. 224–255). Victoria, Australia: Blackwell Publishing.
- González-lloret, M. (2003). Designing task-based CALL to promote interaction: En Busca de Esmeraldas. *Language Learning & Technology*, 7(1), 86–104. <http://doi.org/January 2003>
- Juliani, A. J. (2015). Inquiry and innovation in the classroom. In *Inquiry and innovation in the classroom*. New York, NY: Routledge.
- Krebs, D., & Zvi, G. (2020). The Genius Hour Guidebook: Fostering Passion, Wonder, and Inquiry in the Classroom (2nd ed.). Eye on Education. <https://doi.org/10.4324/9780429275722>
- Kotaka, M. (2013). Task-based language teaching (TBLT) and the Japanese English classroom. 都留文科大学大学院紀要, 17, 47–70.
- Locke, E. A., & Latham, G. P. (2019). The development of goal setting theory: A half century retrospective. *Motivation Science*, 5(2), 93–105. <https://doi.org/10.1037/mot0000127>
- Long, M. H., & Porter, P. A. (1985). Group work, interlanguage talk, and second language acquisition. *TESOL Quarterly*, 19(2), 207–228. <http://doi.org/10.2307/3586827>
- Lyster, R., & Mori, H. (2006). Interactional feedback and instructional counterbalance. *Studies in Second Language Acquisition*, 28(2), 269–300. <http://doi.org/10.1017/S0272263106060128>
- Lyster, R., & Saito, K. (2010). Oral feedback in classroom SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 32, 265–302.

<http://doi.org/10.1017/S0272263109990520>

- Nation, P. (2007). The four strands. *Innovation in Language Learning and Teaching, 1*(1), 2–13. <http://doi.org/10.2167/illt039.0>
- Paivio, A. (1971). *Imagery and verbal processes*. New York, NY: Holt, Rinehart, and Winston.
- Rebekah, S.-T., & Marina, M.-B. (2001). Constructivist inspiration: A project-based model for L2 learning in virtual worlds. *Texas Papers in Foreign Language Education, 6*(1), 63–82.
- Reinders, H. (2009). Learner uptake and acquisition in three grammar-oriented production activities. *Language Teaching Research, 13*(2), 201–222. <http://doi.org/10.1177/1362168809103449>
- Robinson, P. (1996). Learning simple and complex second language rules under implicit, incidental, rule-search, and instructed conditions. *Studies in Second Language Acquisition, 18*, 27–67.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology, 25*, 54–67. <http://doi.org/10.1006/ceps.1999.1020>
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning* (pp. 471–483). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Vansteenkiste, M., Niemiec, C. P., & Soenens, B. (2006). Intrinsic versus extrinsic goal contents in self-determination theory: Another look at the quality of academic education. *Educational Psychologist, 41*(1), 19–31. <http://doi.org/10.1207/s15326985ep4101>
- Winne, P. H., & Nesbit, J. C. (2010). The psychology of academic achievement. *Annual Review of Psychology, 61*, 653–678. <http://doi.org/10.1146/annurev.psych.093008.100348>

摘要

教育者の多くは、指導材料が多すぎて時間が足りないと不平を漏らしている。英語の指導者もそのうちの一人である。英語講師はしばしば生徒に学んでもらいたいと切望する情報の量の多さで生徒たちを圧倒している。対照的に学生は実際、どれぐらい情報を習得したいと思っているのだろうか？多くの学生は提示された全ての情報を喜んで受け入れてないだろう。自ら受け入れていない場合、真の学習を期待するのは難しいであろう。したがって、学生の学習意欲は情報の量ではなく、質とともに重要である。人は好きなことに取り組んでいるとき、自然にもっと努力する。20%タイムプロジェクトはGoogleの経営哲学に発しており、社員が規約にない自分で選択したプロジェクトに労働時間内の20%を費やすことを奨励した。この結果、Gmail、AdSense、Google ニュースなどの革新的な製品が開発された。このアイデアは好奇心や楽しみなどの本質的な動機付けを強化するために教育現場に取り入れることができる。本研究では、米国の教室の例をもとに、日本の大学の英語授業における20%タイムプロジェクトを実施し、その方法、学生の反応の観察について論じる。また、語学学習現場での改善点などについても論じる。

キーワード: 20%タイムプロジェクト、プレゼンテーション、自律性、動機づけ

令和3年度
帯広畜産大学大学院畜産学研究科
修士学位論文題目

The 2021 Academic Year
Index of Master's Theses for
the Graduate School of Obihiro
University of Agriculture and
Veterinary Medicine

畜産科学専攻（博士前期課程）

Master's Program

- | | |
|--|---|
| 1. チャド産ゴマのアフラトキシン汚染の経済分析
（アハマト ハシム ハルーン, 農業経済学） | 1. Economic analysis of aflatoxins contamination on
Chadian sesame
(Ahamat HACHIM Haroun, Agricultural Economics) |
| 2. ドローンの空撮画像を利用したカボチャの花の認識
と位置推定
（アドナン モハマド ソヘレ, 農業環境工学） | 2. Pumpkin flower recognition and position estimation
using aerial images of drone
(ADNAN Muhammad Sohel, Engineering for
Agriculture) |
| 3. 分娩前後の乳牛へのジャガイモタンパク質発酵物給
与が血中インスリン様成長因子-1濃度および分娩
後の初回排卵に及ぼす影響
（遅 雪健, 家畜生産科学） | 3. Effect of potato protein fermented feed supplementa-
tion during peripartum period on plasma insulin-like growth
factor I concentrations and first ovulation after calving
in dairy cows
(Xuejian Chi, Plant Production Science) |
| 4. ヒドロキシチロソールを豊富に含有するオリーブ果
肉水性抽出エキス (HIDROX) の <i>in vitro</i> におけるA型イ
ンフルエンザウイルス不活化活性の解析
（モハマド マヤール イエサーゼインエラビディー
ン, 動物医科学） | 4. <i>In vitro</i> virucidal activity of hydroxytyrosol-rich aqueous
olive pulp extract (HIDROX) against influenza A virus
(MOHAMED Mayar Yasser Zeinelabideen, Veterinary
Life Science) |
| 5. 構造の異なる食餌性スフィンゴ脂質が腸管傷害に与
える影響について
（湯谷 わかば, 食品科学） | 5. The effects of dietary Sphingo lipids with different
structures on intestinal impairments
(Wakaba Yutani, Animal Food Science) |
| 6. <i>Oxytropis lanata</i> 由来化合物およびオキサゾール誘導
体のA型インフルエンザウイルス不活化活性評価試
験
（伊藤 悠, 動物医科学） | 6. Evaluation of influenza A virus inactivation activity
of compounds from <i>Oxytropis lanata</i> and oxazole
derivatives
(Haruka Ito, Veterinary Life Science) |
| 7. ツシマヤマネコの個体群変化に影響する各要因の相
対的評価
（菊池 しゅき, 環境生態学） | 7. Relative evaluation to quantify the effects of some
factors on population of Tsushima leopard cat
(Shuki Kikuchi, Ecology and Environmental Science) |
| 8. オオセンチコガネ (<i>Phelotrupes auratus</i>) の育児と
オスの配偶者選択
（戸田 萌子, 環境生態学） | 8. Biparental care and male mate choice of the earth-
boring dung beetle, <i>Phelotrupes auratus</i> (Coleoptera:
Geotrupidae)
(Moeko Toda, Ecology and Environmental Science) |

9. 農業大学校に求められる農業教育と就農支援に関する研究－北海道立農業大学校の卒業生アンケート調査の分析から－
(萩原 淳史, 農業経済学)
9. Study on agricultural education and farming support required of college of agriculture -Analysis of the graduate questionnaire survey of Hokkaido college of agriculture-
(Atsushi Hagiwara, Agricultural Economics)
10. 十勝における黒毛和種の繁殖形質の遺伝的パラメーター推定
(阿部 紗奈, 家畜生産科学)
10. Estimation of genetic parameters for reproductive traits in Japanese Black cattle at Tokachi
(Sana Abe, Animal Production Science)
11. ゼブラフィッシュを用いたネオニコチノイド系農薬の体内動態と発達神経毒性の解明
(池本 秀樹, 動物医科学)
11. Toxicokinetics and developmental neurotoxicity of neonicotinoid pesticides in zebrafish
(Hideki Ikemoto, Veterinary Life Science)
12. 担子菌（きのこ）の脂溶性画分の消化管への機能に関する研究
(石川 愛理, 食品科学)
12. Lipid fraction of basidiomycete (mushroom) study on function in the digestive tract
(Airi Ishikawa, Animal Food Science)
13. 国内ホルスタイン種の暑熱ストレス耐性改良のためのメッシュ農業気象データ応用に関する研究
(石田 恵香, 家畜生産科学)
13. Study on Application of the Agro-Meteorological grid Square Data for genetic evaluation of heat tolerance of Holstein cows in Japan
(Satoka Ishida, Animal Production Science)
14. 生態系サービスおよびディスサービスをもたらす生物間の生息地連結性ギャップの解明
(井上 晴香, 環境生態学)
14. Elucidation of habitat connectivity gaps between animals that provide ecosystem services and disservices
(Haruka Inoue, Ecology and Environmental Science)
15. 十勝地域における工房製ナチュラルチーズのブランド化の取り組みの評価
(大石 富美子, 農業経済学)
15. Evaluation of natural cheese branding by small-scale manufacturer in Tokachi area
(Fumiko Oishi, Agricultural Economics)
16. 随意的な奴隷狩りのアリの宿主クロヤマアリ *Formica japonica* Motschoulski の, 寄生者アカヤマアリ *Formica sanguinea* Latreille に対する防衛行動
(太田 征希, 環境生態学)
16. Defensive behavior of the host of facultative slave-maker, *Formica Japonica* Motschoulski, against their parasite, *Formica sanguinea* Latreille
(Masaki Ota, Ecology and Environmental Science)
17. アリは死体をどこに除去するのか?
(大鷹 翔, 環境生態学)
17. Where do ants remove the corpses?
(Sho Otaka, Ecology and Environmental Science)
18. 小型日本鶏品種における形態および行動形質の表現型解析
(大野 涼子, 家畜生産科学)
18. Phenotypic analysis of morphological and behavioral traits in miniature breeds of Japanese indigenous chickens
(Ryoko Ono, Animal Production Science)
19. 簡易発酵種や大麦湯種を用いた新規のパンの製パン適性に関する研究
(嘉屋 知里, 食品科学)
19. Study on bread making quality of new breads made with simplified fermented dough and barely Yudane
(Chisato Kaya, Food Science)

20. 北海道十勝地域の孤立化した落葉広葉樹林の樹木の幹上で見られた地衣類種構成の特徴
(唐沢 友裕, 環境生態学)
20. Dominance of crustose lichens in fragmented deciduous broad-leaved forests in Tokachi region of Hokkaido
(Tomohiro Karasawa, Ecology and Environmental Science)
21. 塩ストレス下のマメ科植物—*Bradyrhizobium*共生系における*Variovorax* sp. HRRK170共接種の影響
(北川 航大, 食品科学)
21. Effect of *Variovorax* sp. HRRK 170 co- inoculation on the legume-*Bradyrhizobium* symbiosis system under salt stress
(Kohta Kitagawa, Food Science)
22. 住民の報告に基づく北海道十勝地域におけるヒグマの出没環境
(熊谷 美音, 環境生態学)
22. Environmental characteristics of appeared brown bear based on sighting information in Tokachi district, Hokkaido
(Mio Kumagai, Ecology and Environmental Science)
23. 乗馬クラブと引退競走馬の活用に関する研究 北海道の乗馬クラブを事例として
(黒田 葉月, 農業経済学)
23. A study on riding horse clubs and the use of retired racehorses: Focusing on riding horse clubs in Hokkaido
(Hazuki Kuroda, Agricultural Economics)
24. ブタ脂肪初代培養の樹立に関する研究
(小出 明里, 家畜生産科学)
24. A study on the establishment of primary culture of porcine adipocyte
(Akari Koide, Animal Production Science)
25. 河川ネットワークを考慮した自然再生の効果の検討—魚類多様性をケーススタディとして—
(後藤 颯太, 環境生態学)
25. Stream restorations increase α diversity, but decrease β diversity? -network based approaches-
(Hayata Goto, Ecology and Environmental Science)
26. 農用トラクタタイヤの制動性能向上のための最適ラグ形状の解析
(坂田 遼太, 農業環境工学)
26. Analysis of lug designing factors for improving braking performance of agricultural tractor tire
(Ryota Sakata, Engineering for Agriculture)
27. 北海道の農業圏におけるエキノコックス感染症予防に関する基礎研究—媒介動物アカギツネ (*Vulpes vulpes*) への対策の検討—
(櫻井 祐奈, 環境生態学)
27. Study on the prevention of echinococcosis infection in agricultural areas of Hokkaido, Japan: a countermeasure against the vector, red fox (*Vulpes vulpes*)
(Yuna Sakurai, Ecology and Environmental Science)
28. 交雑種1産取りメス牛の血中ビタミンA濃度と枝肉格付成績および画像解析形質との関連性調査
(佐藤 翔子, 家畜生産科学)
28. Relationship between blood vitamin A levels and carcass grading performance and image analysis traits in once-calved crossbred (Japanese Black \times Holstein) beef cattle
(Shoko Sato, Animal Production Science)
29. 新しい牛枝肉カメラによる枝肉横断面の画像解析精度の検証
(島袋 大空, 家畜生産科学)
29. Verification of image analysis accuracy for cross section image of rib eye with new beef carcass camera
(Masataka Shimabukuro, Animal Production Science)
30. 冷凍パンの再加熱技術およびアミロペクチン変異米を使用したパンの老化改善に関する研究
(竹村 和泉, 食品科学)
30. Study on reheating technology of frozen bread and staling of bread substituted with amylopectin mutant rice.
(Izumi Takemura, Food Science)

31. 植物スフィンゴ脂質の生体利用性に関する研究—*in vitro*消化モデル系での検討—
(田中 駿, 食品科学)
31. Study on bioavailability of plant sphingolipids. Examination in *in vitro* digestion model experimental system
(Shun Tanaka, Food Science)
32. 人工初乳へのDifructose Anhydride III添加が初乳給与の遅れた新生子牛の免疫グロブリンGの吸収に及ぼす影響
(田村 朗, 家畜生産科学)
32. Effect of Difructose Anhydride III addition to colostrum replacer on absorption of immunoglobulin G in newborn calves with delayed first milk feeding
(Akira Tamura, Animal Production Science)
33. スフィンゴ脂質, 特に遊離セラミドが腸管傷害に与える影響
(鶴間 智也, 食品科学)
33. Effects of sphingolipids including free ceramide on intestinal impairments
(Tomoya Tsuruma, Food Science)
34. アスタキサンチン製剤がソーセージの加熱・保存過程の脂質酸化安定性に与える影響とその動態に関する研究
(渡嘉敷 柚, 食品科学)
34. Study on the effect of astaxanthin preparation on the lipid oxidative stability in the sausage during cooking and storage process and its kinetics
(Yuzu Tokashiki, Food Science)
35. 北海道西別湿原で同所的に生息する4種の広葉樹の葉に定着する内生菌の種構成の比較
(仲川 翼, 環境生態学)
35. Diversity and species composition of endophytic fungi associated with leaves of four broad-leaved tree species growing close together
(Tsubasa Nakagawa, Ecology and Environmental Science)
36. 飼養形態を考慮したホルスタイン種の体型の改良方向に関する研究
(長坂 侑里, 家畜生産科学)
36. Studies on the direction of type traits improvement considering in different dairy housing types
(Yuri Nagasaka, Animal Production Science)
37. アマミノクロウサギ腸内細菌叢の生態・生理に関する研究
(沼澤 佳明奈, 家畜生産科学)
37. Ecological and physiological studies on gut microbiome of Amami rabbit
(Kaana Numazawa, Animal Production Science)
38. 国産野菜抽出物の凝乳特性およびその利用に関する研究
(野尻 滉太郎, 食品科学)
38. Study on the milk-clotting properties and the utilization of the extracts from Japanese vegetables
(Koutarou Nojiri, Food Science)
39. ウマの唾液中コルチゾール濃度によるストレス評価—北海道和種及び日本輓系種等を対象とした輸送時及び馬耕時における調査—
(野谷 夏海, 家畜生産科学)
39. Physiological stress assessment for horses by salivary cortisol concentration -Research on Hokkaido horses and Japanese draft horses and on horses during transport and plowing-
(Natsumi Notani, Animal Production Science)
40. *Bacillus thuringiensis*芽胞の産生する物質がダイズシストセンチュウ二期幼虫を不活性化させる
(林 裕樹, 植物生産科学)
40. A substance produced by *Bacillus thuringiensis* spores inactivates the second-stage juvenile of soybean cyst nematodes
(Yuki Hayashi, Plant Production Science)

41. 野菜類からの有用細菌の単離と微生物資材化への利用
(松尾 幸周, 食品科学)
42. 十勝管内忠類の河川型乳用水牛への低繁殖季節におけるホルモン処置の有効性に関する研究
(村上 和徳, 家畜生産科学)
43. *In vitro*消化試験によるウマにおけるユーグレナ粉末の飼料としての有用性
(杳屋 長良, 家畜生産科学)
44. リン施肥量とバレイショデンプンの物理化学的性質との関係
(森下 仰, 食品科学)
45. ジャガイモ植物体中のリンとカリウム含量が*Aphis gossypii*の行動に及ぼす影響
(森本 春暢, 植物生産科学)
46. マンガリツツアの早期精巣発達における組織学的評価およびトランスクリプトーム解析
(山根 慧悟, 家畜生産科学)
47. 植物生育促進細菌*Azospirillum*属と*Phytobacter*属の混合接種がタマネギの初期相互作用に与える影響
(崔 瑩, 食品科学)
48. 穀物契約農業の参加要因—マダガスカルにおける社会経済パネルデータ分析—
(スルマンピュンナ マミリニフ, 農業経済学)
49. 食肉処理場由来の馬の卵細胞の体外成熟および卵細胞質内精子注入法
(李 燦波, 動物医科学)
41. Isolation of useful bacteria from vegetables and their use as microbial materials
(Yukichika Matsuo, Food Science)
42. Study on the effectiveness of hormonal treatment in river-type dairy buffaloes during low breeding season in Chuurui, Tokachi
(Kazunori Murakami, Animal Production Science)
43. Evaluation of Euglena powder as a feed for horses *in vitro* digestion test by a two-stage technique
(Nagara Mokuya, Animal Production Science)
44. Relationship between phosphorus fertilization levels and physicochemical properties of potato starch
(Ao Morishita, Food Science)
45. Effect of phosphorus and potassium content on potato plant for behavior of cotton aphid, *Aphis gossypii*
(Harunobu Morimoto, Plant Production Science)
46. Histological and transcriptome analysis of early testis development in Mangalica boars
(Keigo Yamane, Animal Production Science)
47. Effects of co-inoculation of plant growth promoters, *Azospirillum* and *Phytobacter* strains on initial interactions with *Allium cepa* L.
(Cui Ying, Food Science)
48. Factors impacting participation in cereal contract farming -A socio-economic panel data study from Madagascar-
(Solomampionona Maminirivo Finaritra, Agricultural Economics)
49. In vitro maturation of abattoir-derived equine oocytes and subjected to intracytoplasmic sperm injection
(Li Canbo, Veterinary Life Science)

令和3年度
帯広畜産大学大学院畜産学研究科
博士学位論文題目

1. 北海道における飼料用トウモロコシの合理的施肥法に関する研究
(八木 哲生)
2. 安定同位体比分析に基づく農作物を採食する大型哺乳類の生態学的特性に関する研究
(秦 彩夏)
3. 北海道のホルスタイン集団における泌乳曲線の推定ならびに体細胞スコアの遺伝的能力評価に関する研究
(山口 諭)
4. 山幸ブドウから分離した酵母*Hanseniaspora vineae*を利用した食品開発に関する研究
(高谷 政宏)
5. 反芻動物用の新規天然飼料添加物がメタン排出量、行動、ルーメン発酵、胃内微生物叢へ及ぼす影響
(イスラム ハリファ ハッサン アーマッド)
6. スリランカにおける口蹄疫コントロールの社会経済疫学的研究
(アタンバワ モハメド ジェフリー)
7. 重種馬における子宮内細胞診および細菌学的調査
(新倉 匡賢)

令和3年度
岐阜大学大学院連合獣医学研究科
博士学位論文題目

1. 黒毛和種経産牛における発情同期化プロトコル期間中の卵胞サイズが受胎性に及ぼす影響に関する研究
(上野 大作)
2. (顆粒膜細胞腫罹患馬における抗ミュラー管ホルモンおよび潜在精巣馬におけるインシュリン様ペプチド3に関する研究)
(ムンクトゥール)

The 2021 Academic Year, Index of
Dissertation for the Graduate School of
Obihiro University of Agriculture and
Veterinary Medicine

1. Studies on the rational fertilizer application method based on soil and dairy cattle manures for maize
(Tatsuo Yagi)
2. Studies on the ecological characteristics of agricultural crop-foraging large mammals using stable isotope analyses
(Ayaka Hata)
3. Study to estimate lactation curve and genetic evaluation for somatic cell score in Holstein population of Hokkaido
(Satoshi Yamaguchi)
4. Research on Food Development Using Yeast *Hanseniaspora vineae* Isolated from Wine Grape “Yamasachi”
(Masahiro Takaya)
5. Novel and natural feed additive for ruminants the impacts on behavior, rumen fermentation and microbiome with special reference to Methane emissions
(Eslam Khalifa Hassan Ahmed)
6. Socio-economic and epidemiological study on foot and mouth disease control in Sri Lanka
(Athambawa Mohamed Jiffry)
7. Study on the uterine cytology and bacteriology in heavy draft horses
(Tadamasa Niikura)

The 2021 Academic Year, Index of
Dissertation for the United Graduate
School of
Veterinary Science, Gifu University

2. Studies on Anti-Müllerian Hormone in Granulosa Cell Tumor-Affected Mares and Insulin-Like Peptide 3 in Normal and Cryptorchid Male Horses
(TSOGTGEREL Munkhtuul)

帯 大 研 報
RES. BULL. OBIHIRO UNIV.

編 集 委 員(※委員長)

秋 本 正 博 上 村 暁 子 大 坪 秀 典
大 平 依 理 子 橋 本 直 人 ※マーシャルスミス
(五十音順)

令和5年3月 発行

編 集 国立大学法人 帯広畜産大学
発 行 〒080-8555 北海道帯広市稲田町西2線11番地
 TEL : 0155-49-5336
 E-mail : libsoumu@obihiro.ac.jp
